朝日村

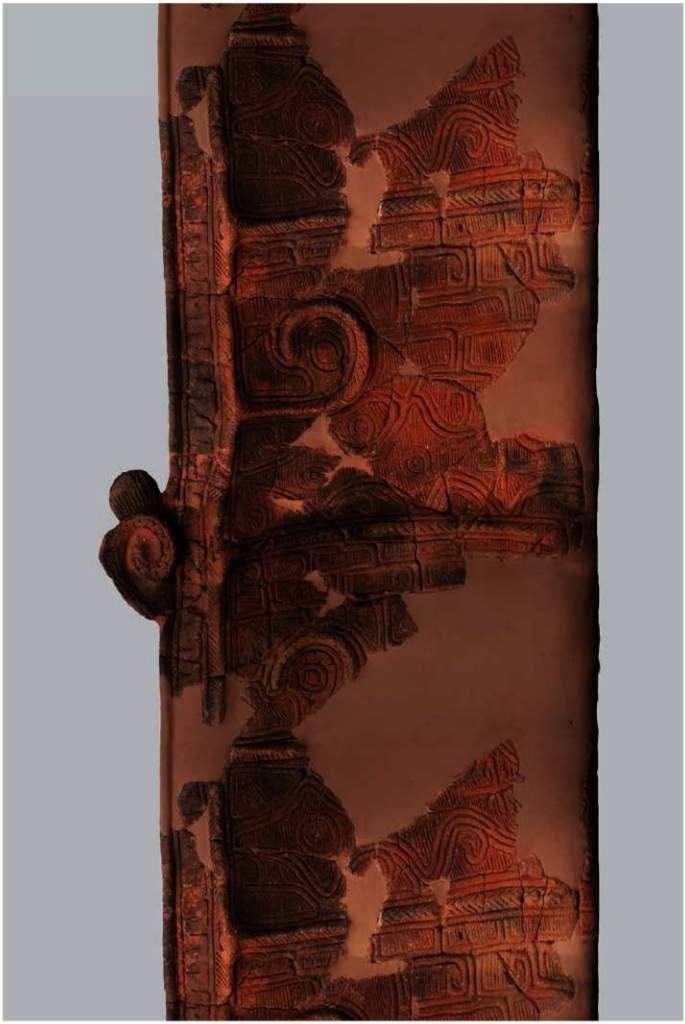
氏神遺跡
UJIGAMI

朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022. 3

朝日村
長野県埋蔵文化財センター

氏神遺跡調査範囲　全景（南西より）



S B 1001 出土縄文土器（No 8）展開写真

例　言

1　本書は、長野県東筑摩郡朝日村西洗馬向原 1845-1 ほかに所在する氏神遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、朝日村向原地域道路等整備事業に伴う記録保存調査として、朝日村から委託を受けた一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査期間は、発掘作業が 2020 年４月１日～８月３日、基礎整理作業が 2020 年８月４日～９月 30 日、整理等作業が 2021 年４月１日～ 2022 年３月 31 日である。

4　発掘調査の受委託契約等については第１章第１節を参照願いたい。

5　発掘調査の担当者は第１章第１節４に記載した。

6　本報告書の編集は、村井大海が行った。執筆分担は以下のとおりである。
第１章、第２章第２節、第５章第２節２・第４節２　平林　彰
上記以外　村井大海
校閲は、調査部長川崎　保、調査第二課長西　香子、課長補佐河西克造が実施した。

7　発掘調査に当たって、以下の機関、諸氏に業務委託または指導を得た。
出　土　骨　鑑　定：京都大学名誉教授　茂原信生氏（2021 年度）
測量・空中写真撮影：株式会社　ＡＢ．ｄｏ（2020 年度）
放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ　株式会社（2020 年度）
株式会社　パレオ・ラボ（2021 年度）
黒 曜 石 産 地 同 定：株式会社　パレオ・ラボ（2020 年度）
遺　物　実　測：株式会社　アルカ（2021 年度年度）
遺 物 写 真 撮 影：株式会社　信毎書籍印刷（2021 年度）
報　告　書　印　刷：蔦友印刷　株式会社（2021 年度）

8　本書で報告した氏神遺跡の諸記録・出土品は朝日村に移管される予定である。

9　発掘調査および報告書作成に当たり、以下の諸機関・諸氏に御指導・御協力を賜った。御芳名を記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略）。
朝日村教育委員会、朝日村公民館、朝日村土地開公社、朝日村美術館、朝日村文化財保護審議会、
朝日村役場、安曇野市教育委員会、清沢土建株式会社、塩尻市教育委員会、塩尻市立平出博物館、
長野県文化財保護審議会史跡・考古資料部会、長野県立歴史館、松本市教育委員会、
松本市立考古博物館、山形村教育委員会
一ノ瀬幸治、上條一美、上條兼一、上條靖尚、久保沢実、小池貴浩、小林司、小林弘幸、小松学、

斉藤正志、塩原厚三郎、塩原康視、曽根範枝、曽根原富夫、土屋和章、直井雅尚、中村文映、原敏二、前田和也、牧野令、丸山真由美、三村直、村田幸子、百瀬司郎、山中秀樹、和田和哉

10　遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』37 などで紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

11　本書に添付したＤＶＤには、以下の内容を収録した。
本文ＰＤＦ、遺構一覧表、遺物一覧表、遺物集計表、自然科学分析報告書

凡　　例

1　本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準としている。座標値は世界測地系による。

2　本書で掲載した地図は、国土地理院発行の電子地形図（1:25,000、1:50,000）をもとに作成した。

3　掲載した実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構実測図　SB・ST　1：60
SK・SF　1：40
ただし、調査区全体図・遺構配置図・挿図などは任意である。

遺物実測図　土　器　1：3、1：4
石　器　2：3、1：3、1：6

遺物写真　遺物実測図と共通である。

4　遺物番号は、遺構種類ごとに付けたが、発掘調査の過程で遺構と認定しなかったため、欠番としたものがある。

5　遺物番号は時代別に1から付けた。個別遺構図に添付した遺物図は、番号が重複する場合があるため、種類名も明記したものがある。

6　土層および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』（2010年度版）を基準とした。

7　遺構・遺物図中のスクリーントーンは以下のように用いた。これ以外の場合は図中に凡例を示した。

（1）遺構図

被熱面・焼土　火床　炭化物・灰
地山　柱痕

（2）遺物図

黒色処理　古代施釉陶器断面　←→　磨り面

8　土坑の平面形及び断面形は以下の基準で分類した。

平面形

円形：長径／短径が1.1未満で角がない弧線

楕円形：長径／短径が1.1以上で角がない弧線
長径線の弧線が相似ではないもの

卵形：長径／短径が1.1以上で角がない弧線
長径線の弧線が相似ではないもの

方形：長径／短径が1.1未満

長方形：長径／短径が1.1以上

不整形：基本形が定まらない形
※　基本の平面形がゆがんでいる
場合は，「不整」を付ける

断面形

A：台形　平底
上端長／底面長が1.5以上

B：箱形　平底
上端長／底面長が1.5未満
上端長／深さが1.0以上

C：筒形　平底
上端長／底面長が1.5未満
上端長／深さが1.0未満

D：皿形　丸底
上端長／深さが3.0以上

E：壺形　丸底
上端長／深さが2.0以上3.0未満

F：砲弾形　丸底
上端長／深さが2.0未満

G：袋形　平底・丸底
最大径が堀方下部にある

H：ロート形
中段を境に，上位は台形
下位は筒形

※底面の一部に落ち込みがある場合は「段差有」を付ける

目　次

口絵 i
例言 iii
凡例 v
目次 vii
図版目次 ix
挿表目次 x
写真図版目次 xi

第１章　発掘調査の経過
第１節　発掘調査に至る経過…… 1
１ 事業計画の概要　２ 過去の調査と保護措置の調整　３ 行政的な手続　４ 調査体制
第２節　発掘調査の経過…… 7
１ 発掘作業　２ 整理作業　３ 普及啓発　４ 作業日誌抄録

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境…… 12
１ 遺跡の位置　２ 遺跡周辺の地形環境
第２節　歴史的環境…… 14
１ 朝日村周辺の遺跡　２ 西洗馬地区の変遷

第３章　調査の方法
第１節　発掘作業の方法…… 25
１ 遺跡記号と調査区の設定　２ 表土掘削と遺構の検出　３ 遺構の認定と精査　４ 記録作成
第２節　整理作業の方法…… 28
１ 整理等作業　２ 報告書作成と資料収納

第４章　朝日村氏神遺跡の調査概要
第１節　氏神遺跡の位置と環境…… 32
第２節　縄文時代…… 33
第３節　平安時代…… 35

第５章　調査の成果
第１節　遺跡の概要と基本層序
１ 遺跡の概要 …… 36
２ 基本層序 …… 36
第２節　縄文時代
１ 概要 …… 39
２ 遺構 …… 43

（1）竪穴建物跡　（2）土坑　焼土跡
3 遺物 …… 74
（1）竪穴建物跡出土遺物　（2）土坑出土遺物　（3）遺構外出土遺物
4 科学分析 …… 126
（1）放射性炭素年代測定　（2）黒曜石産地推定
第3節　弥生時代…… 132
第4節　平安時代
1 概要 …… 133
2 遺構 …… 133
（1）竪穴建物跡　（2）掘立柱建物跡　（3）杭列
3 遺物 …… 145
4 科学分析 …… 148
（1）放射性炭素年代測定

第6章　調査の総括
第1節　氏神遺跡及び周辺遺跡における縄文時代前期末から中期の動向
1 縄文時代前期末から中期中葉の土器変遷 …… 149
2 縄文時代における氏神遺跡の石器群 …… 155
第2節　氏神遺跡の平安時代における墓坑と集落…… 165
第3節　まとめ…… 168

参考文献…… 169

図版目次

第１図　試掘グリッド配置図
第２図　トレンチ及びグリッド配置図
第３図　遺跡位置図
第４図　遺跡周辺の段丘面
第５図　松本盆地南西部の遺跡地図
第６図　調査範囲及びトレンチ、グリッドの配置図
第７図　基本層序図
第８図　遺構全体図
第９図　遺構分布拡大図（１）　１トレンチ
第10図　遺構分布拡大図（２）　３トレンチ
第11図　遺構分布拡大図（３）　４・５トレンチ
第12図　縄文時代の遺構図（１）　SB1001A・B、1002（１）
第13図　縄文時代の遺構図（２）　SB1001A・B、1002（２）
第14図　縄文時代の遺構図（３）　SB3002（１）
第15図　縄文時代の遺構図（４）　SB3002（２）
第16図　縄文時代の遺構図（５）　SB3003・3004（１）
第17図　縄文時代の遺構図（６）　SB3003・3004（２）
第18図　縄文時代の遺構図（７）　SB4001
第19図　縄文時代の遺構図（８）　１トレンチ SK（１）
第20図　縄文時代の遺構図（９）　１トレンチ SK（２）
第21図　縄文時代の遺構図（10）　３トレンチ SK（１）
第22図　縄文時代の遺構図（11）　３トレンチ SK（２）
第23図　縄文時代の遺構図（12）　３トレンチ SK（３）
第24図　縄文時代の遺構図（13）　４トレンチ SK（１）
第25図　縄文時代の遺構図（14）　４トレンチ SK（２）
第26図　縄文時代の遺構図（15）　５トレンチSK
第27図　縄文時代の遺物図（１）　SB1001A・B、1002（１）
第28図　縄文時代の遺物図（２）　SB1001A・B、1002（２）
第29図　縄文時代の遺物図（３）　SB1001A・B、1002（３）
第30図　縄文時代の遺物図（４）　SB1001A・B、1002（４）
第31図　縄文時代の遺物図（５）　SB1001A・B、1002（５）
第32図　縄文時代の遺物図（６）　SB1001A・B、1002（６）
第33図　縄文時代の遺物図（７）　SB1001A・B、1002（７）
第34図　縄文時代の遺物図（８）　SB1001A・B、1002（８）
第35図　縄文時代の遺物図（９）　SB3002（１）
第36図　縄文時代の遺物図（10）　SB3002（２）
第37図　縄文時代の遺物図（11）　SB3002（３）
第38図　縄文時代の遺物図（12）　SB3003・3004（１）
第39図　縄文時代の遺物図（13）　SB3003・3004（２）
第40図　縄文時代の遺物図（14）　SB3003・3004（３）
第41図　縄文時代の遺物図（15）　SB3003・3004（４）
第42図　縄文時代の遺物図（16）　SB4001（１）
第43図　縄文時代の遺物図（17）　SB4001（２）
第44図　縄文時代の遺物図（18）　SB4001（３）
第45図　縄文時代の遺物図（19）　SB4001（４）
第46図　縄文時代の遺物図（20）　SB4001（５）
第47図　縄文時代の遺物図（21）　SB4001（６）
第48図　縄文時代の遺物図（22）　SB4001（７）
第49図　縄文時代の遺物図（23）　SB4001（８）
第50図　縄文時代の遺物図（24）　１トレンチ SK（１）

第51図　縄文時代の遺物図（25）　1トレンチSK（2）
第52図　縄文時代の遺物図（26）　3トレンチSK（1）
第53図　縄文時代の遺物図（27）　3トレンチSK（2）
第54図　縄文時代の遺物図（28）　3トレンチSK（3）
第55図　縄文時代の遺物図（29）　4トレンチSK（1）
第56図　縄文時代の遺物図（30）　4トレンチSK（2）
第57図　縄文時代の遺物図（31）　4トレンチSK（3）
第58図　縄文時代の遺物図（32）　4トレンチSK（4）、5トレンチSK（1）
第59図　縄文時代の遺物図（33）　5トレンチSK（2）
第60図　縄文時代の遺物図（34）　5トレンチSK（3）、遺構外出土遺物
第61図　IntCal20による暦年較正結果（1）
第62図　黒曜石製石器産地別判別図
第63図　弥生時代の遺物図
第64図　平安時代の遺構分布拡大図　3トレンチ
第65図　平安時代の遺構図（1）　SB3001（1）
第66図　平安時代の遺構図（2）　SB3001（2）
第67図　平安時代の遺構図（3）　ST3001
第68図　平安時代の遺構図（4）　ST3002、SA3001、SK3017・3018
第69図　平安時代の遺構図（5）　4トレンチ墓坑、SK
第70図　平安時代の遺物図（1）　SB3001（1）
第71図　平安時代の遺物図（2）　SB3001（2）、墓坑
第72図　IntCal20による暦年較正結果（2）
第73図　松本盆地における縄文時代前期末葉土器群
第74図　松本盆地における縄文時代中期初頭土器群
第75図　松本盆地における縄文時代中期中葉土器群
第76図　石鏃完形品長幅比
第77図　ピエス・エスキーユ完形品長幅比
第78図　打製石斧完形品長幅比
第79図　打製石斧完形品長厚比
第80図　敲石完形品長幅比
第81図　敲石完形品長厚比
第82図　敲石完形品幅厚比
第83図　石材数比率
第84図　石材重量比率
第85図　石器組成
第86図　氏神遺跡の石器群（1）
第87図　氏神遺跡の石器群（2）
第88図　10世紀中葉から後葉の墓坑長短比
第89図　10世紀中葉から後葉における松本盆地出土の墓坑

挿表目次

第1表　2020年度発掘作業工程
第2表　2021年度整理作業工程
第3表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（1）
第4表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（2）
第5表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（3）
第6表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（4）
第7表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（5）
第8表　縄文時代竪穴建物跡一覧表
第9表　縄文時代土坑一覧表
第10表　SB1001A・B、SB1002出土石器組成表
第11表　SB3002出土石器組成表
第12表　SB3003・3004出土石器組成表
第13表　SB4001出土石器組成表
第14表　SK出土石器組成表
第15表　掲載石器一覧表

第16表　掲載石製品一覧表
第17表　放射性炭素年代測定結果（1）
第18表　黒曜石産地分析試料一覧
第19表　測定値、指数値及び産地推定結果（1）
第20表　測定値、指数値及び産地推定結果（2）
第21表　遺構及び時期別の産地
第22表　平安時代竪穴建物跡一覧表
第23表　平安時代掘立柱建物跡　杭列一覧表
第24表　平安時代土坑一覧表
第25表　放射性炭素年代測定結果（2）
第26表　型式・土器群と系統の組み合わせ
第27表　10世紀中葉から後葉の墓坑一覧表

写真図版目次

PL 1　氏神遺跡全景
PL 2　SB1001A・B、1002
PL 3　SB3002
PL 4　SB3003・3004
PL 5　SB4001
PL 6　1・3トレンチSK、SF
PL 7　4・5トレンチSK
PL 8　SB3001
PL 9　ST3001、SA3001
PL10　ST3002、SK4007
PL11　縄文時代中期中葉の遺物（1）
PL12　縄文時代中期中葉の遺物（2）
PL13　縄文時代中期中葉の遺物（3）
PL14　縄文時代中期中葉の遺物（4）
PL15　縄文時代中期中葉の遺物（5）
PL16　縄文時代中期中葉の遺物（6）
PL17　縄文時代中期中葉の遺物（7）
PL18　縄文時代中期中葉の遺物（8）
PL19　縄文時代中期初頭の遺物（1）
PL20　縄文時代中期初頭の遺物（2）
PL21　縄文時代中期初頭の遺物（3）
PL22　縄文時代中期初頭の遺物（4）
PL23　縄文時代中期初頭の遺物（5）
PL24　縄文時代中期初頭の遺物（6）
PL25　縄文時代中期初頭の遺物（7）
PL26　縄文時代中期初頭の遺物（8）
PL27　縄文時代中期初頭の遺物（9）
PL28　縄文時代中期初頭の遺物（10）
PL29　縄文時代中期初頭の遺物（11）
PL30　縄文時代中期初頭の遺物（12）
PL31　縄文時代中期初頭の遺物（13）
PL32　縄文時代中期初頭の遺物（14）
PL33　縄文時代中期初頭の遺物（15）
PL34　縄文時代中期初頭の遺物（16）
PL35　縄文時代中期初頭・後期後葉の遺物
PL36　縄文時代中期初頭の遺物（17）
PL37　縄文時代中期初頭の遺物（18）
PL38　縄文時代中期初頭の遺物（19）
PL39　縄文時代中期初頭の遺物（20）
PL40　縄文時代中期初頭の遺物（21）
PL41　縄文時代中期初頭の遺物（22）
PL42　縄文時代中期初頭の遺物（23）
PL43　縄文時代中期初頭・弥生時代の遺物
PL44　平安時代の遺物（1）
PL45　平安時代の遺物（2）

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過

１　事業計画の概要

「福祉あふれる元気で明るい朝日村」[1]は、村内定住の促進と地域の活性化を図るため、1993（平成５）年度の古見住宅団地以降４か所の住宅団地を分譲し、2014 年に第１期（向陽台住宅団地）、2017 年に第２期分譲を経て、2018 年度に第３期の造成事業を計画した。これは、9,574.03㎡の開発区域に 25 区画の宅地を分譲するもので、朝日村（以下「村」という。）は 2019 年 11 月に着工し、2021 年４月に分譲を開始した。

２　過去の調査と保護措置の調整

過去の調査　氏神遺跡は、1951（昭和 26）年に國學院大学教授大場磐雄氏を招いて行われた東筑摩郡誌編纂委員会の踏査で発見された[2]。氏が作成した地名表には、縄文時代と古墳時代以降の集落遺跡として掲載されている。1952 年には、藤沢宗平氏が本遺跡から表採された磨製石鏃を紹介している（藤沢 1952）。これらの調査結果を受けて、『信濃史料』では本遺跡を、縄文前期末・勝坂式土器、土偶、打製石斧、石皿、石棒、磨製石鏃、土師器・須恵器片、灰釉陶器が出土する集落遺跡と記載する（信濃史料刊行会 1956）。その後の『東筑摩郡･松本市･塩尻市誌』及び『長野県史』は、『信濃史料』の内容をほぼ踏襲する[3]が、『朝日村誌』は、西洗馬在住の柳澤勝己氏が採集した有舌尖頭器を口絵写真と実測図を使って丁寧に紹介し、『村最古の石器」と特筆する（朝日村村誌刊行会 1991）。

保護措置の調整　2018 年度、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）が市町村の教育委員会等に向けて行った公共事業照会に対して、村教委は、当該事業を回答したため、県教委は村教委に対して事前の試掘確認調査の実施を指示した。

2019 年９月に実施した村教委の試掘調査では、対象地に９か所のグリッドを設定し、それぞれ重機によって耕作土の掘削を行った。遺物が出土した時点で手掘り作業に変え、遺物包含層や遺構検出面を確認した。その結果、調査範囲の東側のグリッド４～８では、地表下 20 ～ 40㎝の黒色土から縄文時代前期末葉から中期初頭の土器が出土し、地表下 50 ～ 90㎝のローム層直上で茶褐色土を埋土とした土坑を検出した。一方、西側のグリッド１～３、９は、畑地造成等により遺物包含層がすでに削平されており、地表下 30 ～ 45㎝でローム層を把握するまでの間、遺構・遺物は確認されなかった（第１図）。

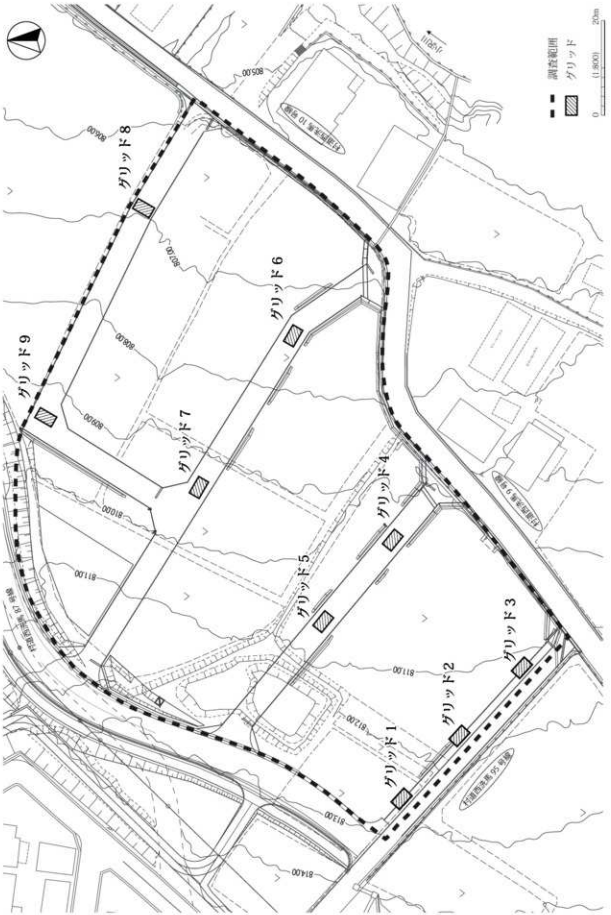
試掘結果を受けて村教委は、同建設環境課、同土地開発公社及び県教委と保護措置の協議を行い、造成工事計画地内の道路部分を記録保存、宅地部分は盛土保存、排水路部分は工事立会とした。また、村教委は専門職員が不在で記録保存調査ができないため、（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）への委託が検討された。

こうした経過を受け、同年 10 月 18 日、県、村、埋文センターによる調整会議が開かれ、村は記録保存調査を埋文センターへ委託して実施すること、記録保存調査に伴い村は県教委及び埋文センターと協定を締結すること

註1　朝日村のキャッチフレーズ（朝日村　2020）

註2　大場磐雄氏の講演記録（東筑摩郡郷土資料編纂会 1951）に記載されている。

註3　『東筑摩郡･松本市･塩尻市誌』には縄文時代の磨製石斧、石鏃、石匙、石製装身具、弥生時代の石庖丁も図面を掲載して紹介している。



第１図　試掘グリッド配置図

となった。記録保存調査の対象面積は 2,000㎡で、発掘作業は 2020 年４月から９月までとした。また、整理作業及び報告書刊行は 2021 年度とし、報告書刊行後は、出土品及び記録類を村へ移管することで合意した。

３　行政的な手続

工事通知と協定書　村教委は県教委に、2019（令和元）年 10 月 21 日付け元朝建第 218 号で、文化財保護法第 94 条第１項に基づいて、周知の埋蔵文化財包蔵地である氏神遺跡において向畑地域道路等整備事業に伴う発掘を行う旨、通知を発出した。これに対して県教委は村教委に、同年 10 月 31 日付け元教文第 8-217 号で、当該事業に先立ち、記録保存のための発掘調査を埋文センターへ委託することを勧告した。また、村は、県教委および埋文センターと当該事業に伴う埋蔵文化財発掘調査について協定を締結した。その内容は以下のとおりである。

朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書

朝日村長（以下「甲」という。）と、長野県教育委員会教育長（以下「乙」という。）と、一般財団法人長野県文化振興事業団理事長（以下「丙」という。）の三者により、朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査（以下「発掘調査」という。）の実施について、協定を交わすものである。

（目的）

第１条　この協定は、甲が文化財保護法第 93 条に基づく緊急調査として実施する甲の事業施行地区内に所在する埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の実施方法等について定めることを目的とする。

（発掘調査の対象範囲）

第２条　この協定を適用する発掘調査の対象範囲は、別添図面に示す通りとする。

２　前項の発掘調査の対象範囲外から新たに埋蔵文化財が発見された場合は、甲、乙、丙が協議の上、その保護措置及び発掘調査の対象範囲について決定するものとする。

（発掘調査の体制）

第３条　甲は丙に、前条の対象範囲の発掘調査を委託するものとする。

２　丙は、発掘調査を実施する組織を速やかに編成し、別添実施計画書に基づき発掘調査を実施するものとする。

（発掘調査の指導）

第４条　乙は、丙が行う発掘調査の内容・方法に対し、検査、指導、監督にあたるものとし、問題があった場合は、改善を求めることができる。

（発掘調査の期間）

第５条　丙は、この協定に基づく発掘調査を、協定締結の日から令和４年３月３１日までに完了させるものとする。ただし、やむを得ない理由により期間を延長する場合には、朝日村教育委員会立会いのもと甲、乙、丙で協議して決定するものとする。

（発掘調査の費用）

第６条　この発掘調査に要する費用は、別添年度別計画書のとおり概算総額 50,000,000 円とし、甲が負担する。

２　前項の費用は、第２条第２項により発掘調査の対象範囲を変更した場合及び物価賃金の変動等により増減が生じた場合には、甲、乙、丙で協議して変更するものとする。

（発掘調査の契約及び経費の支払方法）

第７条　甲と丙は、前条第１項に定めた概算額の範囲内において、別途年度ごとに委託受契約を締結した上で実施するものとする。

２　甲は、必要な経費を前項の契約に基づいて丙に支払う。

（業務実績報告書等の提出）

第８条　丙は、業務が完了した時は、業務実績報告書及び費用の精算書を朝日村教育委員会立会いのもと甲に提出する。

（出土品及び記録類の取り扱い）

第９条　発掘された出土品に係る処置については、丙が法令の定めるところにより行う。

２　丙は、出土品についての権利を放棄する。

３　甲は、乙に譲与申請をした上で、報告書刊行後、出土品及び記録類を保管する。

（著作権の帰属及び譲渡）

第 10 条　発掘調査に係る図面・写真等の記録類及び調査報告書の著作権は、丙に帰属するものとし、著作権法上、

甲に著作権が生じた場合でも、甲は著作権を丙に無償で譲渡する。
(朝日村教育委員会の位置付け)
第11条　朝日村教育委員会は、域内の埋蔵文化財の保護、行政目的調査の実施及び埋蔵文化財の周知を担う部署であることから、丙が行う発掘調査について、必要に応じて助言を行う。
(協定の変更)
第12条　この協定を変更する必要が生じたときは、甲、乙、丙が協議して協定の内容を変更するものとする。
(協定の有効期間)
第13条　この協定の有効期間は、協定締結の日から第５条の発掘調査が完了し、委託金の精算が完了した日までとする。
(その他)
第14条　この協定に定めのない事項又は疑義を生じた事項については、その都度、甲、乙、丙が協議して処理する。
この協定締結の証として本書３通を作成し、甲、乙、丙記名押印のうえ、各々１通を保有する。

令和元年12月26日

甲	朝日村長	小林弘幸
乙	長野県教育委員会教育長	原山隆一
丙	一般財団法人長野県文化振興事業団理事長	近藤誠一

発掘届と委託契約　協定の締結を受けて、埋文センターは県教委に、文化財保護法第92条第１項に基づいて、2020（令和２）年３月４日付け元長埋第１－４号で、氏神遺跡における発掘調査の実施について、届出を発出した。これに対して、県教委は埋文センターに同年３月20日付け元教文第６－８号で、発掘調査を慎重に実施するよう通知した。また、埋文センターは、県教委および村教委に発掘調査実施計画書を提出するとともに、村と埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結した。その内容は以下のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査契約書

朝日村長　小林弘幸を委託者とし、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター所長　原田秀一を受託者として、次のとおり委託契約を締結する。
(委託業務)
第1条　委託業務は、次のとおりとする。
(1) 委託業務名　令和２年度朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託
(2) 業務箇所　東筑摩郡朝日村西洗馬向原1845-1ほか13筆
(3) 委託内容　埋蔵文化財発掘調査　A＝2,000㎡
(4) 委託期間　令和２年４月１日から令和２年９月30日まで
(処理方法)
第２条　受託者は、発掘調査計画書（以下「計画書」という。）を作成し、委託者に協議の上、委託業務を開始するものとする。
２　受託者は、前項の計画書に定めのない細部の事項については、委託者と協議するものとする。
(委託料)
第３条　委託料は、金25,740,000円（取引に係る消費税2,340,000円を含む。）とする。
(契約保証金)
第４条　契約保証金は、金2,574,000円とし、朝日村財務規則第124条第３項第８号の規定により、その納付は免除する。ただし、受託者画工の契約を履行しなかったときは、契約保証金に相当する金額を違約金として委託者に納付しなければならない。
(委託業務の調査等)
第５条　委託者は、この委託業務の処理状況について、随時に調査し、必要な報告を求めることができるとともに、業務の実施について必要な指示をすることができる。
(業務の変更等)
第６条　委託者または受託者は、この契約後の事情により、委託内容の全部または一部を変更することができる。この場合において、委託料または委託期間を変更する必要があるときは、委託者及び受託者が協議して変更契約を締結するものとする。

（完了報告書）
第７条　受託者は、委託業務が完了したときは、遅滞なく完了報告書及び成果物を提出しなければならない。
２　委託者は、前項の報告書及び成果物の提出があったときは、受理した日から 10 日以内に受託者の立ち合いの上で検査を行い、合格したときは引渡しを受けるものとする。
３　受託者は、前項の検査の結果、不合格となったときは、委託者の指定する日までに補正して提出し、再度検査を受けなければならない。
４　前２項の検査に要する費用は、受託者の負担とする。
（委託料の支払い）
第８条　受託者は、前項の規定による検査に合格したときは、委託者に対して委託料を請求することができる。
この場合において、委託者は、適法な請求書を受理した日から 30 日以内に委託料を支払うものとする。
２　受託者は、前条の規定にかかわらず、委託料の範囲内において概算払いの請求をすることができる。
３　受託者は、前項の規定に基づく概算払を請求しようとするときは、資金計画書を委託者に提出するものとする。
（秘密の保持）
第９条　受託者は、委託業務の処理上知りえた秘密を他人に漏らしてはならない。
（契約の解除）
第 10 条　委託者は、次の各号の一に該当するときは、この契約を解除することができる。
(1) 受託者が、その責めに帰すべき事由により、第１条の期間内に委託業務を完了しないとき又は完了することができないことが明らかと認められるとき。
(2) 前号の場合のほか、受託者がこの契約に違反したとき。
（不履行の損害賠償）
第 11 条　受託者は、その責めに帰すべき事由により第１条に規定する委託期間内に業務を完了しないときは、当該期限の翌日から委託業務を完了した日までの日数に応じ、委託料に対し年 2.6 パーセントの割合で計算した額の遅延損害金を委託者に支払わなければならない。
２　委託者は、その責めに帰すべき事由により第８条第１項に規定する期限までに委託料を支払わないときは、当該期限の翌日から支払った日までの日数に応じ、委託料に対し年 2.6 パーセントの割合で計算した額の遅延利息を支払わなければならない。
（暴力団からの不当介入に対する報告書及び届出の義務）
第 12 条　受託者は、当該契約に係る業務に当たり、暴力団等から不当な要求を受けたときは、遅滞なく委託者に報告するとともに、所轄の警察署に届け出なければならない。
（文化財保護法等に関する諸手続き）
第 13 条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続きについては、受託者が代行するものとする。
（その他）
第 14 条　本業務に関し、埋蔵文化財発掘調査委託費用の透明性の確保に努めるものとし、委託者及び受託者が協議の上、委託経費の根拠資料を業務完了報告書に添付又は完了検査時に提示するものとする。
２　整理作業及び発掘調査報告書の観光に関しては、別途協議するものとする。
（疑義の解決等）
第 15 条　この契約書及び発掘調査業務委託仕様書に定めのない事項に関して疑義が生じたときは、委託者及び受託者が協議して定めるものとする。

この契約の成立を証するため、本契約書２通を作成し、委託者受託者記名押印の上、各自その１通を保有するものとする。
令和２年３月 18 日　委託者　住所　長野県東筑摩郡朝日村大字古見 1555 番１
氏名　朝日村長　小林弘幸
受託者　住所　長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
氏名　一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター所長　原田秀一

令和２年度　朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務計画書
長野県埋蔵文化財センター

１　調査機関
１）実施主体

所在地　長野市篠ノ井布施高田 963 － 4
名　称　一般財団法人長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所　長　原田　秀一

2）事 務 局
所在地　長野市大字若里１－１－３　長野県県民文化会館内
名　称　一般財団法人長野県文化振興事業団
理事長　近藤　誠一

2　調査目的及び期間・内容

1）目　的　朝日村向原地域道路等整備事業に伴い、用地内の埋蔵文化財包蔵地について、工事着手前に発掘調査を実施する。

2）期　間　令和２年４月１日～令和２年９月30日

3）内　容

遺跡名　　氏神遺跡
所在地　　東筑摩郡朝日村西洗馬
調査面積　2,000㎡
時　代　　縄文時代（推定）
調査内容　令和２年度に発掘作業を行い、令和３年度に整理作業を行って発掘調査報告書を刊行する。

3　調査工程

作業内容	4	5	6	7	8	9	備考
発掘作業							
基礎整理作業							
実績報告書作成							

4　調査範囲　略

発掘終了報告と発見届　埋文センターは県教委に、令和２年３月 20 日付け元教文第６- ８号県教委教育長通知の別紙記載事項に基づいて、2020（令和２）年８月５日付け２長埋第４- ２号で、氏神遺跡の発掘調査終了報告を行った。また、同年８月６日付け２長埋第２- ２号で所轄の塩尻警察署に、埋蔵物の発見届及び埋蔵文化財保管証を提出した。これに対して県教委は、同年８月 11 日に文化財認定を行った。

4　調査体制

氏神遺跡の発掘調査にかかわる体制は、以下のとおりである。

2020 年度　発掘作業

所　　長：原田秀一　副 所 長：山田秀樹　調査部長：川崎　保　担当課長：櫻井秀雄
調査担当：村井大海　平林　彰
作 業 員：青木重雄　高橋和彦　竹入修二　中村　誠　南波秀武　西原達雄　村澤宏美
柳澤令一

2021 年度　整理作業

所　　長：原田秀一　副 所 長：山田秀樹　調査部長（担当課長兼務）：川崎　保
課長補佐：河西克造
調査担当：村井大海
作 業 員：大澤紅美　塩野入奈菜美　中島英子

第２節　発掘調査の経過

１　発掘作業

2020（令和２）年度　村教委による試掘調査の結果を受け、氏神遺跡は比較的遺構密度の低い縄文時代前期末から中期初頭の集落で、調査範囲西側が大きく削平されていると予想した。当初計画では、記録保存の対象となる道路部分すべてを調査対象として、トレンチを設定した。表土掘削を行ったところ、予想通り調査範囲西側は削平により遺物包含層及び遺構検出面は滅失していた。３トレンチ及び４トレンチ（第２図）の西側道路部分は、面的調査を実施せず、層序等を記録して終了とした。

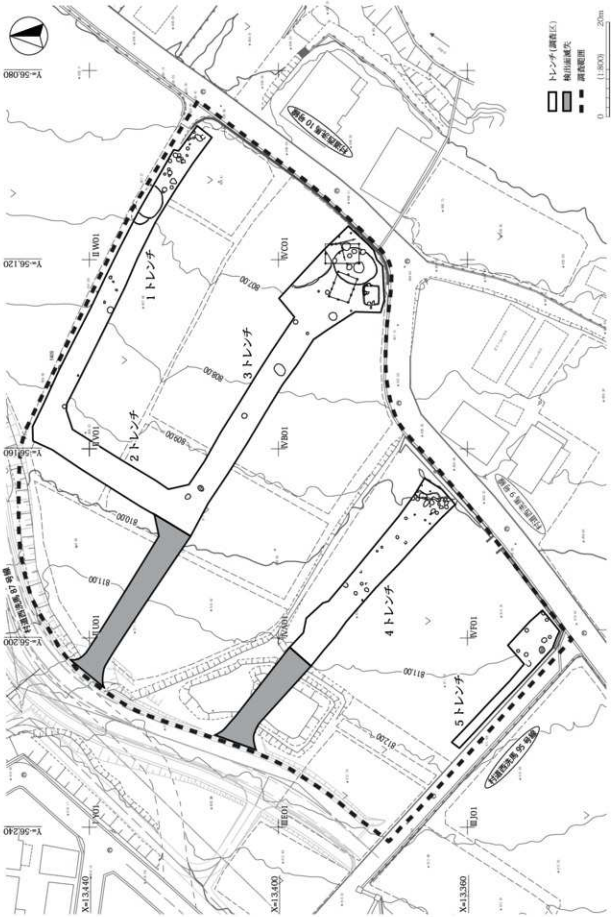
その他の１、２、５トレンチは、削平が遺構検出面まで及んでおらず、面的調査を行うために、表土剥ぎを行った。土層の堆積状況が良好な調査範囲東側では、遺構検出面の上層に縄文時代と平安時代の遺物包含層を確認したが、遺物包含層から遺構に伴う明確な落ち込みを見つけることは困難だった。そこで、黄褐色ローム層上面を遺構検出面とした。

表土剥ぎ後に２トレンチは南から北に、その他のトレンチは西から東に向けて遺構検出作業を行った。遺構番号は、原則として検出順に付けた。検出作業の結果、２トレンチでは遺構が確認できず、その他のトレンチでは縄文時代の竪穴建物跡や貯蔵穴、陥し穴、土坑等、平安時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、墓坑、土坑を確認した。その際、３トレンチ東部ではトレンチ外北側に竪穴建物跡が延びることが判明したため、トレンチの一部を拡張した。遺構調査は、各トレンチごとに時代の新しい平安時代の遺構と規模の小さい縄文時代の土坑を先行して調査し、その後、縄文時代の竪穴建物跡を調査した。トレンチ掘削箇所は、道路工事との関係で埋戻しは実施していない。

基礎整理作業は、発掘作業と並行して出土遺物の洗浄ならびに注記作業を行い、８月以降は遺構、遺物、写真台帳の整理、遺構図の点検・修正、遺構所見の作成・整理、出土遺物の計測、接合を行った。これらの作業は９月に終了した。基礎整理作業と並行し、放射性炭素年代測定および黒曜石産地推定等、科学分析試料の抽出を行い、８月後半に科学分析業者に業務委託した。12 月に成果品が納品され、2020 年度の業務は終了した。

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
発掘作業	準　備	■									
	表土掘削	■									
	遺構検出	■	■								
	遺構精査	■	■	■	■						
	記　録	■	■	■	■						
	現場片づけ				■						
基礎整理作業			■	■	■	■	■				
科学分析業務委託の執行管理						■	■	■	■	■	放射性炭素年代測定 黒曜石産地同定

第１表　2020 年度発掘作業工程


トレンチ(調査区)
検出遺構等
調査範囲
(1:800)
0
20m
Y=-56,080
Y=-56,120
Y=-56,160
Y=-56,200
Y=-56,240
X=13,440
X=13,400
X=13,360
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5トレンチ
W001
W002
W003
W004
W005
W006
W007
W008
W009
W010
W011
W012
W013
W014
W015
W016
W017
W018
W019
W020
W021
W022
W023
W024
W025
W026
W027
W028
W029
W030
W031
W032
W033
W034
W035
W036
W037
W038
W039
W040

２　整理作業

2021（令和３）年度　氏神遺跡は、出土遺構と遺物から、縄文時代中期及び平安時代中期の集落跡であることを確認した。縄文時代中期の集落は、近隣の熊久保遺跡（中期中葉）と山鳥場遺跡（中期後葉）に先行する中期初頭及び中葉に属する。松本盆地において、この時期に属する集落跡の調査例は僅かで、出土土器は当地の縄文時代中期における土器編年を検討する上で重要な資料となる。また、広汎な地域との交流をうかがわせる関西系や北陸系、東海系の土器と下呂石が出土した。氏神遺跡及び周辺遺跡出土の土器群を比較検討し、土器群の編年的位置、当期の石器群の特徴、交流圏を検討した。

平安時代中期の集落は、朝日村内において初の調査例となる。竪穴建物跡及び掘立柱建物跡、墓坑の規模と構造、出土遺物を分析し、集落景観を考究した。

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備　考
遺構	トレース	■	■	■										
	編集	■	■	■										
	版組	■	■	■	■	■								
遺物	土器復元・実測・トレース	■	■	■	■	■	■							一部委託
	石器実測・トレース	■	■	■	■	■	■							
	版組				■	■	■							
	保存処理	■	■	■	■	■	■	■	■	■				鉄製刀子
	出土骨の整理	■	■	■	■	■	■							鑑定及び年代測定を含む
写真	写真撮影						■							
	写真データ現像	■												
	版組					■	■							
記録	原稿執筆	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
	入稿									■				
印刷・製本・発送											■	■	■	
収納													■	

第２表　2021 年度整理作業工程

３　普及啓発

（１）遺跡説明会

2020.6.20	現地説明会	参加者（31 名）

（２）展示会

2020.3.1 ～	埋文センター速報展	埋文センター
2020.3.13 ～ 5.9	埋文センター速報展 「ほるしん 2020」	長野県立歴史館

（３）調査情報誌等の発行

2020.4.13	「うじがみ遺跡ニュース」vol.1
2020.4.27	「うじがみ遺跡ニュース」vol.2
2020.5.25	「うじがみ遺跡ニュース」vol.3
2020.6.15	「うじがみ遺跡ニュース」vol.4

2020.7.15　「うじがみ遺跡ニュース」vol.5
2020.7.30　「うじがみ遺跡ニュース」vol.6
2021.2.16　「縄文時代と平安時代の集落跡－朝日村氏神遺跡－」『信州の遺跡』第16号
2021.3.23　「発掘作業の概要　氏神遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』37
2022.3.18　「整理作業の概要　氏神遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』38

（４）マスコミ等対応

2020.5.1　「朝日・氏神遺跡の発掘進む」 市民タイムス
2020.7.25　「考古学界ニュース　縄文・平安時代の集落跡、氏神遺跡」『季刊考古学』152 雄山閣
2021.2.1　「各地の動向　長野・朝日村・氏神遺跡」『文化財発掘出土情報』通巻477号（株）ジャパン通信情報センター

（５）その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

４　作業日誌抄録

2020（令和２）年度

３月18日　村と受委託契約を締結
４月６日　発掘作業開始
４月13日　２トレンチには遺構・遺物がないことを確認
４月15日　１トレンチで縄文時代中期の竪穴建物跡（ＳＢ1001・1002）を検出
４月17日　市民タイムスの取材
測量業務委託契約
４月22日　３トレンチで縄文時代中期初頭の竪穴建物跡３軒（ＳＢ3002～3004）、古代の竪穴建物跡１軒（ＳＢ3001）、掘立柱建物跡１棟（ＳＴ3001）検出
松本市教委直井雅尚氏来跡
４月23日　１トレンチのかく乱（トレンチャーによる掘削跡）から磨製石斧出土
４月27日　ＳＢ1001理土から多量の土器が出土し始める
４月29日　朝日村小林弘幸村長ほか来跡
４月30日　朝日村百瀬司郎村教育長、上條靖尚同教育次長ほか来跡
５月７日　４トレンチの土坑（ＳＫ4007）検出面から頭骨出土
テレビ松本取材
５月８日　ＳＢ1001が拡張された竪穴建物跡であることを確認
５トレンチで縄文時代の陥し穴（ＳＫ5002）を確認
小林弘幸村長、百瀬司郎教育長ほか来跡
５月11日　村、村教委、村土地開発公社と第１回工程会議
５月12日　古代の竪穴建物跡ＳＢ3001床面から刀子出土
朝日村小池貴浩副村長来跡
５月15日　１トレンチのSK1016に廃棄された縄文中期土器の大破片が出土
ＳＢ3001は一部拡張したことが判明
５月19日　遺物洗浄作業開始
本日から雨天・暑熱時に遺物洗浄実施
５月21日　ＳＫ5002の底面で逆茂木跡を検出
５月25日　ＳＫ4007出土頭骨を発泡ウレタンで梱包し取上げ
５月26日　３トレンチで古代の掘立柱建物跡（ＳＴ3002）１棟、４トレンチで縄文時代中期初頭の竪穴建物跡（ＳＢ4001）検出　同トレンチの土坑から縄文中期初頭のほぼ完形の土器出土
５月27日　３トレンチで古代の杭列（ＳＡ3001）を検出
６月２日　４トレンチＳＢ4001理土中で検出した土坑からほぼ完形の縄文中期初頭土器が２個体出土
６月９日　平出博物館小松学館長、牧野舎学芸員ほか来跡
６月６日　４トレンチの土坑（ＳＫ4045）から小形磨製石斧出土
６月12日　ＳＢ3002を切る土坑（ＳＫ3025）から複数個体の土器片が多量に出土
６月16日　県教委谷和隆氏来跡
６月20日　村教委と共催で遺跡説明会開催
６月22日　遺構図の点検・修正、土器接合開始
下諏訪町教委前田一也氏来跡
６月23日　村、村教委、村土地開発公社と第２回工程会議
６月24日　炉内理土の土壌フローテーション開始
７月１日　遺物注記開始
７月14日　遺物台帳等の作成開始
７月16日　元山形村教委和田和哉氏来跡
７月21日　村、村教委、村土地開発公社と第３回工程会議
７月30日　村教委が現場終了状況を確認
８月３日　遺物台帳等の作成終了
１トレンチ北側の工事立会でＳＢ1001・1002の続きを確認、記録しすべての発掘作業終了
８月４日　基礎整理作業開始
８月７日　遺物洗浄終了

８月11日　遺物の分類・選別開始
８月18日　炉内埋土の土壌フローテーション終了
８月21日　遺物注記終了
９月１日　遺構所見カードの作成開始
９月３日　遺構二次原図作成開始
９月８日　村元文化財保護委員会委員長塩原厚三郎氏から西洗馬の歴史を聴取し、三ヶ組遺跡採集の磨製石斧を実見
　　科学分析業務委託締結（放射性炭素年代測定）
９月９日　御馬越区八幡神社氏子総代斉藤正志氏立合いの下、神社に奉納された双雀蓬莱鏡を実見
９月11日　科学分析業務委託締結（黒曜石産地推定）

2021（令和３）年度

４月１日　村と受委託契約を締結
　　本格整理作業開始，土器接合、復元、石器観察・分類、写真データ現像、遺構図のトレース
４月28日　第１回報告書編集会議
６月２日　遺物実測業務委託契約締結
６月９日　遺物実測業務委託に伴う遺物搬出（縄文土器）
６月29日　科学分析業務委託（年代測定・火山灰分析）契約締結
７月６日　第２回報告書編集会議
８月２日　科学分析業務委託（年代測定）契約変更
８月31日　遺物実測業務委託完了
９月３日　科学分析業務委託（火山灰分析）完了
10月22日　科学分析業務委託（年代測定）完了
10月26日　遺物写真撮影業務委託締結
11月８日　第３回報告書編集会議
12月13日　遺物写真撮影業務委託完了
12月24日　報告書印刷製本業務委託締結
３月11日　報告書印刷製本業務委託完了
３月31日　2021年度受委託契約終了

９月15日　西洗馬区五社神社宮司小林司氏らから西洗馬の歴史を聴取し、神社に奉納された鉄鉾、鉄鐸等を実見
９月16日　遺構二次原図作成終了
　　測量業務委託完了
９月18日　科学分析業務委託に伴いバリノ・サーヴェイが年代測定試料を発掘調査現場事務所にて採取
９月15日　西洗馬区三村直氏宅で氏神遺跡既出資料を実見
９月29日　遺物接合、分類・選別、遺物台帳等の作成終了
９月30日　遺構所見カードの作成終了　基礎整理作業終了
12月３日　科学分析業務委託（黒曜石産地推定・年代測定）完了
12月５日　2020年度委託契約終了

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

１　遺跡の位置

氏神遺跡は、長野県東筑摩郡朝日村西洗馬 1845 －１ほかに所在する。鎖川の支流である内山沢左岸の段丘上に立地する（第３図）。

２　遺跡周辺の地形環境

朝日村は、松本盆地の南西部に位置する。村内には、鉢盛山を源とする鎖川が南西から北東方向に流れ、地形的には北アルプスに属する山地と、鎖川及びその支流である大小の沢により発達する平坦地で構成されている。

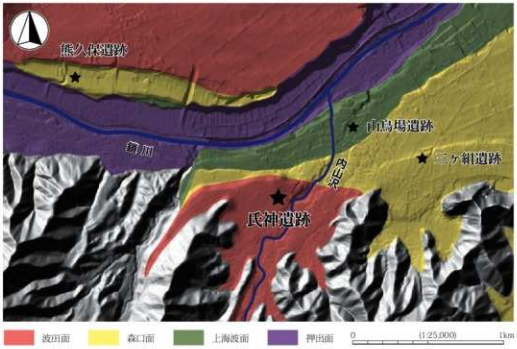
山地は、珪質粘板岩、チャート、凝灰質シルト岩、珪質泥岩、泥岩、砂岩、礫岩及び、それらが破断された混在岩によって構成される美濃帯中生界によって形成される。これらの岩石は、地質体全体が海洋プレートの沈み込みの結果形成された付加体であると解釈されており、岩相及び地質構造によって、沢渡、島々、味噌川、藪原の各コンプレックス（集合体）に区分される。鎖川流域は、砂岩及び泥岩を主体とする味噌川コンプレックスが主として露出している（下田・大塚　2008）。

平坦地は、鎖川沿いに発達する河成段丘や扇状地からなるものと、大小の沢沿いに発達する高原状の扇状地からなるものとがある。鎖川の形成する河成段丘は高位の面から順に、波田面、森口面、上海渡面、押出面に分かれる（第４図）。波田面は、乗鞍岳および御岳山が供給源と推定される波田ロームと、一部に小坂田ロームをわずかにのせる礫層の厚い堆積面である。形成年代は約 60,000 年～ 40,000 年前とされる。森口面は、約 40,000 年前以降で晩氷期より前に形成された。波田ロームは上半部しかない（小林国夫 1961・1963）。上海渡面は晩氷期以降に形成された。波田ロームが二次的に堆積する。押出面は現成の面

第３図　遺跡位置図

である。扇状地は針尾付近を扇頂とし、中央は松本市神林・笹賀まで達し、朝日村内では左岸の古見原、右岸の西洗馬地区の平坦地がそれに当たる。松本盆地の扇状地は一般に、堆積域が波田面形成期に拡大、森口面形成期に縮小、上海渡面形成期～現在に拡大したと判断されるが、鎖川流域では上海渡面形成期以降は扇状地の発達は不活発であったと考える（小口　1988）。

氏神遺跡の調査では堆積状況の良好なローム層及びロームと腐食土の漸移層を掘り込んで遺構が形成されていることを確認した。ローム層の特徴は、上部のソフトローム（Ⅴ層）が褐色で層厚は約 35 ～ 45cm、下部のハードロームは、暗色帯と思われる色調が僅かに暗くなる層を１層確認した（Ⅶ層）。これは小林の指摘する波田ロームの岩相（小林 1960）に類似している。したがって氏神遺跡の基盤となるローム層は波田ロームと推定され、遺跡が立地する段丘面は波田面であると推定する。このことは火山灰分析の結果からも確認できた（第５章第１節２）。



第４図　遺跡周辺の段丘面

第２節　歴史的環境

氏神遺跡の「地域」の歴史的環境を語る上で、本書では、大小二つの地域に着目した。一つは、朝日村とその周辺（鎖川を始めとした奈良井川に注ぐ松本盆地南西部の小河川水系群）というやや大きい地域であり、もう一つは、前者の中の小地域としての朝日村内の地区「西洗馬」（鎖川の支流である内山沢水系とその周辺）である。

１　朝日村周辺の遺跡

朝日村内に分布する遺跡については、山鳥場遺跡と三ヶ組遺跡の発掘調査報告書で報告した（埋文センター 2018）ほか、『朝日村誌』でも詳細に解説されている（朝日村誌刊行会 1991）。本書では、氏神遺跡で確認した縄文時代前期末葉から中期中葉及び平安時代の遺跡を中心に見ていくこととするが、松本盆地の奈良井川と梓川の間を北東方向に流れる河川に視点を置き、本遺跡も含む朝日村の中央部を流れる鎖川を中心に、さらに関連する山形村の三間沢川、松本市境の唐沢川、塩尻市洗馬地区の小曽部川の３つの河川流域に分布する遺跡も概観する。

鎖川流域　鎖川は、鉢盛山と烏帽子岳から流れる野俣沢、中俣沢、樫俣沢を源流とし、松本市島立南栗で奈良井川と合流する延長約 17㎞の一級河川である。村内を北東方向に下りながら段丘地形を形成し、東方向に流れを変える針尾辺りから左岸に古見原の、再び北東方向に曲流する西洗馬辺りから右岸に岩垂原の、それぞれ広大な扇状地をつくっている。この流域には、朝日村駒込遺跡（１）上流の３か所と松本市南荒井遺跡（32）、二階道遺跡（33）より下流の下神遺跡等を加えて 40 か所程度の遺跡がある[1]。

旧石器時代の調査例はないが、朝日村芦ノ久保遺跡（７）、氏神遺跡（14）では有舌尖頭器、今井矢はぎの西原（23）では尖頭器とナイフ形石器が採集されているという[2]。

縄文時代は、ほとんどの遺跡で遺物を採集している。前期末葉から中期中葉の遺跡は少ないが、朝日村熊久保遺跡（６）では、10 次にわたる調査で、中期初頭８軒、中期中葉 25 軒を含む中期後葉までの竪穴建物跡 120 軒と土坑 145 基以上を発掘した。そのほかは、向原遺跡（13）や氏神遺跡で前期の土器が、三ヶ組遺跡（18）では中期中葉の土器や磨製石斧が採集されている程度である。

弥生時代は、朝日村芦ノ久保遺跡、氏神遺跡、中村遺跡（16）で磨製石鏃が採集されているほか、熊久保遺跡や東電南遺跡（９）では前期ないし中期初頭の条痕文土器がみつかっている。また、下流域では、松本市こぶし畑遺跡（30）で岩滑式・貝田町式土器を伴う炉跡が、二階堂遺跡では竪穴建物跡２軒が、それぞれ検出されている。また、今井北耕地遺跡（31）には縄文時代晩期終末の土器片を伴う土坑もあり、流域に縄文時代最終末から弥生時代初頭の遺跡が点在する。

古墳時代の遺跡はこの流域にはないが、古代に入ると、氏神遺跡をはじめ熊久保遺跡、本郷遺跡（12）、向原遺跡、大日遺跡（15）、中村遺跡、三ヶ組北西遺跡（19）と、灰釉陶器を含む平安時代の遺物を採集した遺跡が朝日村内にいくつか存在する。三ヶ組北西遺跡では、試掘調査で竪穴建物跡のカマド周辺部のみ確認している。下流域では、こぶし畑遺跡で竪穴建物跡３軒、今井北耕地遺跡で竪穴建物跡２軒と掘立柱建物跡１棟を発掘したほか、今井南耕地遺跡（29）から「松本平で唯一」（松本市教委 1998）の双面硯

註1　朝日村教委は埋蔵文化財包蔵地として登録していないが、朝日村誌によると、鎖川流域には城館跡や社寺跡など中世の遺跡がある。また、松本市誌には、今井地区の小段原、南原開拓、野尻、平林、東耕地の合戦場、東耕地の東で遺物を採集したという記載があるが、いずれも松本市教委の埋蔵文化財包蔵地と一致しないため省いた。なお、市誌の遺物採集地点と埋蔵文化財包蔵地との照合について、松本市教委百瀬耕司氏にご協力いただいた。

註2　朝日村教委からの情報で、朝日小学校の東側にある畑地で採集したという黒曜石製の尖頭器を実見する機会を得た（上條悦男氏蔵）。

が出土している。また、最下流部には、下神遺跡や南栗遺跡のように８世紀以降の大集落が広がっている。

中世は、朝日村犬ヶ原遺跡（５）で常滑系の甕の破片と共に炭化米が出土したほか、背後に旭城跡（111）を控える芦ノ久保遺跡で鎌倉時代制作という鉄製内耳鍋と土製内耳鍋が発見され、三ヶ組遺跡に隣接する下洗馬郷尻かいと（110）からは埋納銭が出土している。また、鎖川上流域では八幡神社改築時に双雀蓬莱鏡が出土した宮前遺跡がある。下流域には、こぶし畑遺跡で土坑墓２基と黒釉天目茶碗や石臼が発掘されている。

三間沢川流域　三間沢川は、山形村清水寺近傍の山中を源流とし、松本市神林で鎖川と合流する間、山形村の中央部を流下する延長約14kmの河川である。山形村上大池の諏訪神社辺りから右岸側に扇状地を形成し、鎖川の古見原扇状地と複合する。左岸側には南から大池川や鳴音川などの小河川が合流し、西山麓部にはこれら小河川が形成する小扇状地や崖錐地がある。微視的にみれば、この地域の遺跡の多くはこの小扇状地上あるいは崖錐上に立地しているが、ここでは広く三間沢川流域という視点でまとめておく。流域には26か所以上の遺跡がある。

旧石器時代の遺物は採集されていないが、縄文時代の遺物はすべての遺跡で出土している。上流域の山形村淀の内遺跡（38）は、６次にわたる調査で、中期初頭３軒、同中葉22軒を含む、前期初頭から中期後葉の竪穴建物跡62軒と多数の土坑・ピットを発掘した。近隣の洞遺跡（36）にも中期中葉２軒を含む後葉までの竪穴建物跡が21軒ある。名篭遺跡（49）では、早期押型文土器が出土しているほか、前期末葉から中期初頭５軒を含む中期後葉までの竪穴建物跡９軒、袋状を含む土坑100基以上があった。中流域では、ヨシバタ遺跡（51）で前期後葉から末葉４軒を含む竪穴建物跡６軒、鳴音川対岸の殿村遺跡（52）では、中期中葉10軒を含む後葉までの竪穴建物跡29軒が発掘され、前期末葉から中期初頭の土器も出土している[3]。また、中島遺跡（47）でも中期前葉の竪穴建物跡を２軒発掘している。さらに、下流域の松本市川西開田遺跡（56）の下層では、中期初頭から中期中葉の竪穴建物跡が30軒みつかっており、この流域は、前期から中期後葉まで、断続的ながらも比較的長期間利用された集落遺跡が一定数存在する。

弥生時代は、中期前半の竪穴建物跡10軒、平地建物跡２軒、掘立柱建物跡９棟などが発見された境窪遺跡（54・55）や、後期後半の方形周溝墓がみつかった殿村遺跡、同時期の竪穴建物跡３軒を発掘したヨシバタ遺跡が代表例となる。続く古墳時代には殿村古墳があるが、これは後で述べる。

古代は、上流域の洞遺跡で竪穴建物跡４軒、下耕地遺跡（37）で１軒、淀ノ内遺跡で２軒と、いずれも小規模な集落遺跡がある。中流域には、ヨシバタ遺跡で竪穴建物跡18軒、掘立柱建物跡１棟と鍛冶遺構が、殿村遺跡からは竪穴建物跡13軒と掘立柱建物跡１棟、土坑墓１基などがみつかっており、９世紀前半から11世紀後半までの比較的中規模の集落遺跡がある。さらに下流では、川西開田遺跡では竪穴建物跡95軒と掘立柱建物跡15棟、松本市三間沢川左岸遺跡（59）では竪穴建物跡291軒と掘立柱建物跡15棟が確認されており、松本盆地南西部を開発した拠点的な大集落が存在する。

中世に入ると、一転して、集落遺跡の状況は不明瞭になるが、名篭遺跡や山形村中町立道西遺跡（50）、殿村遺跡、川西開田遺跡で多くの土坑墓や火葬墓がみつかっているほか、三間沢川左岸遺跡と神林川西遺跡（60）の境界付近から、重要文化財に指定された孔雀文馨と瀬戸美濃産鉄釉茶入れが出土している（松本市教委2017）。

唐沢川流域　唐沢川は山形村と松本市（旧波田町）境の山間部を源流とし、同村下竹田で三間沢川と合流する[4]。同村上竹田の唐沢集落辺りを境にして、上・中流は山間部を北東へ流れ、下流は東側に広大な扇状

註3　殿村遺跡は、当初、唐沢川扇状地上の遺跡と認識していたが、直井雅尚氏のご教示により、殿村遺跡やヨシバタ遺跡の発掘調査報告書を確認し、三間沢川支流の鳴音川流域と判断した。

註4　山形村には唐沢川の源流や流域距離等の公式データがないため、元山形村教育委員会和田和哉氏からご教示いただいた。

地を形成している。この地域の遺跡は、ほとんどこの扇状地上に立地するが、三夜塚遺跡（70）を貫く「旧唐沢川」（山形村教委 1981）を含むいくつかの埋没谷に依拠した遺跡が分布していると考えられ[5]、流域には 22 か所以上の遺跡がある。

旧石器時代は、三夜塚遺跡で採集したという局部磨製石斧が紹介されているだけである。縄文時代の遺物は、松本市和田太子堂遺跡（73）、古神遺跡（79）を除き、ほぼすべての遺跡で出土している。唐沢扇状地の扇頂部に近い、山形村美野里ヶ丘遺跡（61）や唐沢遺跡（62）、北唐沢遺跡（65）、神明遺跡（66）、松本市鼠海渡遺跡（80）、唐沢遺跡（83）では、前期後半から中期の遺物が出土している。前期末葉から中期初頭の竪穴建物跡はまだみつかっていないが、一帯を当該期の広大な集落遺跡群として注視しておきたい。扇央の三夜塚遺跡では、５次にわたる調査で、前期末葉から中期中葉４軒を含む後葉までの竪穴建物跡 26 軒が、多くの土坑や集石などとともに発掘されている。また、松本市麻神遺跡（76）でも、前期末葉１軒、中期中葉２軒を含む後葉までの竪穴建物跡 25 軒がみつかっている。さらに、山形村下原遺跡（71）や波田下原遺跡（72）には、中期中葉から後葉にかけての竪穴建物跡があり、時期が下るにつれ、集落遺跡の分布域が扇頂から扇央へ動いているようである[6]。

弥生時代は、唐沢遺跡、北竹原遺跡（68）、麻神遺跡、古神遺跡などで、土器や石器が出土しているが、遺構はみつかっていない。

古墳時代も集落遺跡はみつかっていないが、唐沢川の扇頂には、大久保１号古墳（84）、同２号古墳（85）、大久保古墳（86）、八幡大門古墳（87）があり、殿村古墳（88）を加えて終末期の古墳が集中している。殿村古墳からは「錦織部」の墨書土器が出土したことで注目されたが、この地域に、８世紀前半代の開発集団が一時期占拠していたであろうことが想像できる。

古代は、三間沢川流域ほど大規模な集落遺跡はみつかっていないが、山形村本郷遺跡（67）、和田太子堂遺跡で建物跡が数軒程度発掘されているほか、最上流部の清水寺遺跡（113）にも 10 世紀末葉の竪穴建物跡がある。

小曽部川流域　小曽部川は、奥寺山を源流とし、塩尻市広丘で奈良井川と合流する、延長約 15㎞の河川である。全体に狭隘な谷地形を形成し、流域に平坦部は少ない。この流域は、塩尻市中村遺跡（89）より南の小曽部谷上流部にある３か所の散布地を加えて、15 か所程度と遺跡数は少ない。

旧石器時代は、塩尻市岩垂原遺跡（100）で槍先形尖頭器が採集されている。

縄文時代は、入花見遺跡（90）や芦ノ田遺跡（94）などを除く、ほとんどの遺跡で遺物が採集されているが、小段遺跡（96）、権現堂遺跡（97）、山ノ神遺跡（98）以外は、いずれも散布地である。小段遺跡は３次にわたる調査で中期中葉３軒を含む後期前葉までの建物跡 16 軒のほか、前期末葉の土器も出土している。山ノ神遺跡は、前期の竪穴住居址５軒や前期末葉の土器を発掘した。

弥生・古墳時代の遺跡はこの流域にはなく、中村遺跡や芦ノ田遺跡、藤塚遺跡で古代の遺物が採集されているだけで、集落遺跡はみつかっていない。中世は小曽部館跡（93）と妙義山城跡（132）がある。

２　西洗馬地区の変遷

氏神遺跡は、朝日村内の地区としては「西洗馬」に含まれるので、同地区の歴史については、遺跡周辺の歴史的環境を整理するために必要である。よって、詳しく記述されている『朝日村誌』を参照しながら、

註5　中央自動車道長野線の発掘調査報告書（『総論編』）は、梓川と奈良井川の間に、いくつかの小凸地と谷地形が複合していることや、それらの形成過程について解説している。それによると、唐沢扇状地には縄文時代中期に離水したと推定する小凸地Ⅰが発達していたことがわかる（長野県埋文センター 1990）。

註6　唐沢扇状地の扇端でも、三間沢川流域の川西開田遺跡のような深層の縄文集落が、今後見つかる可能性は捨てきれない。

旧石器時代以来の変遷を辿ってみる[7]。

西洗馬地区は、村の東から南東を占め、西側は同村小野沢地区、北は古見地区、北東は松本市今井地区、東は塩尻市洗馬地区と境をなしている。地区内には、上組、中組、三ヶ組、下洗馬、原新田地籍があり、氏神遺跡は上組地籍に属する。地区の西側には天狗山（標高 1,698 m）方面を源流とする外山沢が、ほぼ中央部には大矢倉方面を源流とする内山沢が、北北東へ流れている。外山沢は峡谷を形成し、小野沢地区との境で鎖川右岸の段丘を削りながら合流している。一方、内山沢は上組付近で両岸に狭い段丘地形をなし、中組付近から鎖川が形成した岩垂原の扇状地上に小扇状地を形成して、鎖川に達している。

旧石器・縄文時代　縄文時代前期以前については、向原遺跡（13）で早・前期の土器片、本遺跡（14）で有舌尖頭器や前期末葉の土器が採集されており、遺跡は内山沢の狭い段丘上に立地している。中期になると、これらに加えて、大日遺跡（15）、中村遺跡（16）、山鳥場遺跡（17）、三ヶ組遺跡（18）など、内山沢の小扇状地上に集落遺跡が展開する。なかでも三ヶ組遺跡は「広い範囲より縄文時代中期中葉を中心にした土器や石器が多数採集されてきており、熊久保遺跡に匹敵する集落が営まれていたことは確実」［12 頁１行］と評価されているが、残念ながら、2006 年と 2017 年の発掘地点は集落の中心部を外れていたらしい（朝日村教委 2006、長野県埋文センター 2019）。大日遺跡では後期の土器、山鳥場遺跡では後・晩期の遺構・遺物が出土しており、時期が下るにつれて、内山沢の下流域に遺跡が残る。

弥生時代から奈良時代　弥生時代は、本遺跡と中村遺跡から磨製石鏃が採集されているが、朝日村全体でも５か所しか遺跡がない[8]。また、古墳時代は遺構・遺物が皆無で、奈良時代に入ってもほとんど変化がないと思われる。前項で示した通り、三間沢川や唐沢川の流域の一部を除いて、松本盆地南西部には弥生時代から古墳時代の遺跡はほとんどない。なお、奈良井川以西の大規模開発は８世紀の後半段階であると、多くの発掘事例が物語っている（長野県埋蔵文化財センター 1990　松本市教委 2017）。

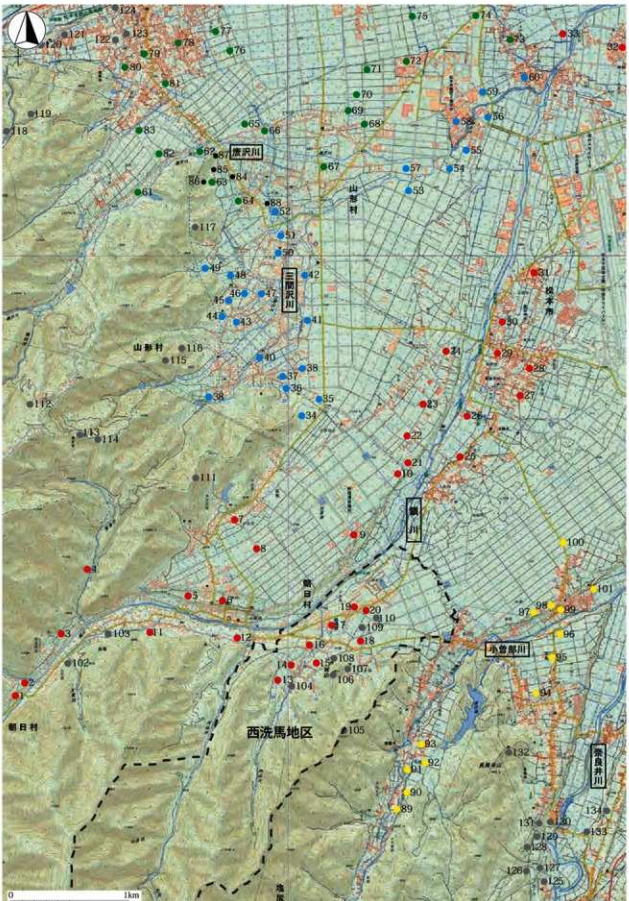
平安時代　平安時代に入ると、向原遺跡[9]、氏神遺跡、大日遺跡、中村遺跡で灰釉陶器を含む遺物が採集されているほか、三ヶ組北西遺跡（19）からは竪穴建物跡のカマドが検出されている。朝日村全体を見ても、駒込遺跡、熊久保遺跡、本郷遺跡など計 10 遺跡から平安時代の遺物が出土しており、当該期の遺跡数の増加をみると、この時代に、朝日村での人々

向陽台団地第３期造成竣工写真（北東より）

註7　本項中「 」で括った文言は『朝日村誌下巻』から抜粋したものである。抜粋した箇所を［ ］内に示した。

註8　『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上の第 160 図 35 の石包丁は、朝日村氏神としている。

註9　三村直氏が所蔵する氏神遺跡等採集の遺物を実見する機会を得た。その中に、向原遺跡より南の内山沢最奥部にあたる西洗馬 1991 番地周辺の畑地（『朝日村誌』下巻 地区誌編にいう「切野」に該当すると思われる）から採集した灰釉陶器等が含まれていた。



第５図　松本盆地南西部の遺跡地図

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
鏡川	1	こまごめ 駒込	朝日村	古見	集落跡		○			○	○	平安の甕を採集	
鏡川	2	あなざわはら 穴沢原	朝日村	古見	集落跡		○						
鏡川	3	みどうがいと 御道開渡	朝日村	古見	散布地								
鏡川	4	そくらさわ 曽倉沢	朝日村	古見	散布地		○						
鏡川	5	いぬがはら 犬が原	朝日村	古見	散布地		○				○		
鏡川	6	こまくぼ 熊久保	朝日村	古見	集落跡		○	○		○		10次の調査で、縄文中期初頭8、中期中葉25を含む竪穴120軒と土坑145基以上を発掘 ３次では、灰釉陶器を伴う土坑を発掘	樋口昇一・小松虔・横山正1964 朝日村教委2003
鏡川	7	あしのくぼ 芦ノ久保	朝日村	古見	集落跡		○	○			○		
鏡川	8	きょうづか 経塚	朝日村	古見	散布地		○						
鏡川	9	とうでんみなみ 東垂南	朝日村	古見	散布地		○	○					
鏡川	10	じょうさい 城西	朝日村	古見	散布地		○						
鏡川	11	いちのさわ 一ノ沢	朝日村	針尾	散布地		○						
鏡川	12	ほんごう 本郷	朝日村	小野沢	散布地					○		平安の灰釉陶器を採集	
鏡川	13	むかいはら 向原	朝日村	西洗馬	集落跡		○			○		1985年の試掘調査で縄文前期を含む早・中期の土器・石器と土師器・灰釉陶器を発掘	
鏡川	14	うじがみ 氏神	朝日村	西洗馬	集落跡		○	○		○		2020年以前に、有舌尖頭器、縄文前期末葉・中期中葉土器、土偶、石鏃・打製石斧・石皿・石棒、弥生の磨製石鏃、土師器・須恵器・灰釉陶器を採集	
鏡川	15	だいにち 大日	朝日村	西洗馬	散布地		○			○		大場磐雄氏は「大日、氏神等から釉薬がついた灰釉陶器が出土」と講演	東筑摩郡郷土史料編纂会1952
鏡川	16	なかわら 中村	朝日村	西洗馬	集落跡		○	○		○		土師器を採集	
鏡川	17	やまどりば 山鳥場	朝日村	西洗馬	集落跡		○						長野県埋文センター2019
鏡川	18	さんがくみ 三ヶ組	朝日村	西洗馬	集落跡		○				○	縄文中期中葉の土器を採集。村誌は、西洗馬最大の遺跡で「熊久保遺跡に隣接する集落が営まれていたことは確実」と評価	朝日村教委2006 長野県埋文センター2019
鏡川	19	さんがくみはくせい 三ヶ組北西	朝日村	西洗馬	集落跡					○		1998年の試掘調査で　平安の竪穴のカマド周辺部のみ発掘	朝日村教委2003
鏡川	20	しゃぐうじ 社宮司	朝日村	西洗馬	散布地		○						
鏡川	21	いまいやよいさかうえ 今井弥生坂上	松本市	今井	集落跡		○			○			
鏡川	22	こいはら 古池原	松本市	今井	集落跡		○						
鏡川	23	いまいやはぎ 今井矢はぎ にしほりなかこうち 西堀、中耕地を含む	松本市	今井	集落跡	○	○			○		西原で尖頭器とナイフ、中耕地で縄文土器を採集	
鏡川	24	のぐちしんでん 野口新田	松本市	今井	集落跡		○			○			
鏡川	25	いまいかみしんでん 今井上新田 どうむら 堂村を含む	松本市	今井	集落跡		○			○		堂村で縄文中期の土器と石器および古代の遺物を採集	

第３表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（1）

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
鎖川	26	かみいまい 上今井 なかざと 中村を含む	松本市	今井	集落跡		○			○		中村で縄文中期の土器・石器を採集	
鎖川	27	いまいしんでんはら 今井新田原 なかざわ 中沢を含む	松本市	今井	集落跡		○					中沢で縄文中期の土器・石器を採集	
鎖川	28	いまいしもしんでん 今井下新田	松本市	今井	集落跡		○						
鎖川	29	いまいみなみこうち 今井南耕地	松本市	今井	集落跡					○		平安初期の双面硯が出土	
鎖川	30	こぶし畑	松本市	今井	集落跡		○	○		○	○	縄文中期初頭の遺物と古代の竪穴３軒を発掘	松本市教委1974
鎖川	31	いまいきたこうち 今井北耕地	松本市	今井	集落跡		○			○	○	平安の竪穴２軒と掘立１棟を発掘	松本市教委1998
鎖川	32	あなみあらい 南荒井	松本市	神林	集落跡		○						
鎖川	33	にかいどう 二階道	松本市	和田	集落跡			○		○		平安の竪穴６軒と掘立４棟、柱列４が所ほかを発掘	松本市教委2017
三間沢川	34	むぎがくば 麦ヶ窪	朝日村	古見	散布地		○						
三間沢川	35	よこぶがすま 横手ヶ崎	山形村	上大池	散布地		○						
三間沢川	36	ほら 洞	山形村	上大池	集落跡		○	○		○		縄文中期中葉２を含む竪穴21軒と平安の竪穴４軒を発掘	山形村教委1971
三間沢川	37	しもこうち 下耕地	山形村	上大池	集落跡		○			○		縄文中期と平安の竪穴各１軒を発掘	山形村教委1998a
三間沢川	38	よどのうち 淀ノ内	山形村	上大池	集落跡		○	○		○		６次の調査で、縄文中期初頭３、中期中葉22を含む前期初頭から中期中葉の竪穴62軒と前期末葉から中期中葉の土坑多数、平安の竪穴２軒を発掘	山形村教委1997 1998a 1999 2001a 2010a
三間沢川	39	まめさわ 豆沢	山形村	上大池	散布地		○						
三間沢川	40	くば 窪	山形村	上大池	散布地		○						
三間沢川	41	のざわ 野原	山形村	中大池	集落跡		○			○		須恵器を採集	
三間沢川	42	なかはら 中原	山形村	小坂	散布地		○						
三間沢川	43	しみず 清水	山形村	小坂	散布地		○						
三間沢川	44	てらばやし 寺林	山形村	小坂	散布地		○			○		土師器を採集	
三間沢川	45	どうむら 堂村	山形村	小坂	散布地		○					縄文中期初頭土器を採集	
三間沢川	46	いしはらだ 石原田	山形村	小坂	散布地		○						
三間沢川	47	なかじま 中島	山形村	小坂	集落跡		○			○		縄文中期前葉の竪穴２軒、土坑17基を発掘　土師器・須恵器を採集	山形村教委2008
三間沢川	48	みやむら 宮村	山形村	小坂	散布地		○						
三間沢川	49	なろう 名電	山形村	下大池	集落跡		○				○	縄文前期末葉から中期初頭５を含む中期後葉までの竪穴９軒と袋状を含む土坑100基弱を発掘	山形村教委2007
三間沢川	50	なかまちたてみちにし 中町立道西	山形村	下大池	集落跡		○	○		○	○	縄文前期末葉から中期前葉の土坑３基、平安（11Ｃ）の竪穴１軒を発掘	山形村教委1998b
三間沢川	51	ヨシバタ	山形村	下大池	集落跡		○	○		○		縄文前期後葉から末葉４を含む竪穴６軒と前期後葉から末葉50を含む土坑60基弱、平安の竪穴18軒（９Ｃ前半２・９Ｃ後半６・11Ｃ前半６・11Ｃ後半３・時期不明１）と掘立１棟（９Ｃ、鍛冶遺構を発掘	山形村教委2012

第４表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（2）

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
三間沢川	52	とのむら 殿村	山形村	上竹田	集落跡		○	○		○	○	縄文中期中葉10(路沢３・藤内Ⅱ～井戸尻Ⅱ７)を含む中期後葉までの竪穴29軒と前期末葉から中期初頭までの土器、平安の竪穴13軒(９C前半４、９C後半５、10C末～11C初１、不明３)、掘立１棟と土坑墓１基須恵器を採集	山形村教委1987
三間沢川	53	みまどわがわうがん 三間沢川右岸	山形村	下竹田	散布地		○				○		
三間沢川	54	さかいべ 境窪	山形村	下竹田	集落跡			○			○	平安２(９C初１・９C中頃１)の竪穴を発掘	山形村教委1999 2001b
三間沢川	55	さかいべ 境窪	松本市	神林	集落跡			○			○	弥生中期前半の竪穴10軒、平地２軒、掘立９棟、土坑墓２基等を発掘。当該期の集落・遺物研究の基準資料	松本市教委1998
三間沢川	56	かわにしかいでん 川西開田	松本市	神林	集落跡		○			○	○	５次の調査で、縄文中期初頭～中葉の竪穴30軒と平安の竪穴95軒、掘立15棟ほかを発掘。導水目的の区画溝と大型住居を中心とした集落	松本市教委1998 2001 2002 2003
三間沢川	57	みまどわがわさがん 三間沢川左岸	山形村	下竹田	集落跡						○	古代の土器が出土	
三間沢川	58	わだにしほうみなみ 和田西原南	松本市	和田	集落跡		○	○			○	縄文中期中葉の竪穴１軒を発掘　西原地籍で灰釉陶器や緑釉陶器を採集	
三間沢川	59	みまどわがわさがん 三間沢川左岸	松本市	和田 神林	集落跡		○				○	８次の調査で、平安の竪穴291軒、掘立15棟、道路状遺構８本、土坑墓５基ほかを発掘　遺構群の中央部を貫く長大な水路や、集落の北縁を画す溝とそれを渡る通路状遺構、大型の金床石を側えた鍛冶遺構らしきものなども確認	松本市教委2001 2017
三間沢川	60	かんぼやしかわにし 神林川西	松本市	神林	集落跡		○	○		○	○	縄文中期初頭の土器と平安の灰釉陶器や須恵器、土師器を採集　孔雀文馨（重文）が古瀬戸の茶入と伴出	松本市教委1987
唐沢川	61	みのりがおか 美野里ヶ丘	山形村	下竹田	散布地		○						
唐沢川	62	からさわ 唐沢	山形村	下竹田	集落跡		○	○				縄文前期末葉の土器が出土	山形村教委1971
唐沢川	63	あなかんのん 穴観音	山形村	上竹田	散布地		○						
唐沢川	64	よつや 四ツ谷	山形村	上竹田	散布地		○						
唐沢川	65	きたからさわ 北唐沢	山形村	下竹田	散布地		○					縄文中期初頭の土器と集石炉２か所を発掘	山形村教委1983
唐沢川	66	しんめい 神明	山形村	下竹田	散布地		○	○				縄文前期末葉の土器が出土	山形村教委1982
唐沢川	67	ほんごう 本郷	山形村	上竹田	散布地		○				○	縄文中期初頭の集石と平安の掘立１棟を発掘	山形村教委1999 2000
唐沢川	68	きたたけほら 北竹原	山形村	下竹田	散布地		○	○					
唐沢川	69	ほりのうち 堀ノ内	山形村	下竹田	散布地		○				○	平安の灰釉陶器が出土	山形村教委1983
唐沢川	70	さんやつか 三夜塚	山形村	下竹田	集落跡	○	○	○	○		○	５次にわたる調査で、縄文中期中葉の竪穴３軒や前期末葉から中期中葉の土坑多数を発掘	山形村教委1981 1982 2002 2009b 2010b
唐沢川	71	しもほら 下原	山形村	下竹田	集落跡		○				○	縄文中期中葉２を含む中期後葉までの竪穴22軒を発掘　平安時代の灰釉陶器が出土	山形村教委2009b
唐沢川	72	はたしもほら 波田下原	松本市	和田 波田	集落跡		○				○	３次の調査で、縄文中期中葉から後葉の竪穴25軒と平安の溝を発掘	松本市教委2015
唐沢川	73	わだたいしどう 和田太子堂	松本市	和田	集落跡			○		○		２次の調査で、平安の竪穴３軒ほかを発掘	松本市教委2017

第５表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（3）

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
唐沢川	74	わだしもにしはら 和田下西原	松本市	和田	集落跡		○						
唐沢川	75	わだなかにしはら 和田中西原	松本市	和田	集落跡		○						松本市教委2015
唐沢川	76	おがみ 麻神	松本市	下波田	集落跡		○	○				３次の調査で、縄文前期末葉１、中期中葉２を含む中期後葉までの竪穴25軒を発掘	波田村教委1972 1973 松本市教委2020
唐沢川	77	ごんげん 権現	松本市	下波田	散布地		○					縄文中期初頭の土器を採集	
唐沢川	78	ごじゅううね 五十畝	松本市	下波田	散布地		○						
唐沢川	79	こがみ 古神	松本市	中波田	集落跡			○					
唐沢川	80	ねずみがいと 鼠海渡	松本市	中波田	散布地		○					波田町誌は「縄文時代中期初頭の単純遺跡か」と評価	
唐沢川	81	ひらばやし 平林	松本市	下波田	散布地		○	○			○	平安の土師器を採集	
唐沢川	82	ちゅうばら 中下原	松本市	中波田	集落跡		○						波田町教委1984
唐沢川	83	からさわ 唐沢	松本市	中波田	散布地		○					縄文前期末葉の土器を多量に採集	
その他	84	おおくぼ１ごうこふん 大久保１号古墳 ぎょうたこふん (行人塚古墳)	山形村	上竹田	古墳				○			終末期古墳	山形村教委1971
その他	85	おおくぼ２ごうこふん 大久保２号古墳	山形村	上竹田	古墳				○			終末期古墳	山形村教委1971
その他	86	たけだあなかんのこふん 竹田穴観音古墳	山形村	上竹田	古墳				○			終末期古墳	山形村教委1971
その他	87	はちまんだいもんづかこふん 八幡大門塚古墳	山形村	上竹田	古墳				○			伝承	
その他	88	とのむたこふん 殿村古墳	山形村	上竹田	古墳				○			終末期古墳　「鍛織部」墨書土器が出土	
小曽部川	89	なかむら 中村	塩尻市	下小曽部	散布地		○				○	土師器を採集	
小曽部川	90	いりけみ 入花見	塩尻市	下小曽部	散布地		○						
小曽部川	91	こそおほいくえん 小曽部保育園	塩尻市	下小曽部	散布地		○					縄文中期初頭の土器を採集	
小曽部川	92	ながさき 長崎	塩尻市	下小曽部	散布地		○						
小曽部川	93	こそおかたあと 小曽部館跡	塩尻市	下小曽部	館跡						○		
小曽部川	94	あしのた 芦ノ田	塩尻市	芦ノ田	散布地					○		須恵器の壺を採集	
小曽部川	95	よどづか 藤塚	塩尻市	芦ノ田	散布地		○			○		縄文中期中葉の土器と古代の土師器・灰釉陶器を採集	
小曽部川	96	こだん 小段	塩尻市	芦ノ田	集落跡		○					縄文中期中葉３を含む後期前葉までの竪穴16軒や前期末葉の土器も出土	塩尻市教委1979 1993 2008
小曽部川	97	ごんげんどう 権現堂	塩尻市	岩垂	集落跡		○						
小曽部川	98	やまのおみ 山ノ神	塩尻市	岩垂	集落跡		○					縄文前期の竪穴５軒を発掘。前期末葉の土器も出土	
小曽部川	99	わでむら 上手村	塩尻市	岩垂	散布地		○						
小曽部川	100	いわだれはら 岩垂原	塩尻市	岩垂	散布地	○							
小曽部川	101	とうだいら 堂平	塩尻市	岩垂	散布地		○						
その他	102	とりであと 砦跡	朝日村	針尾	城館跡						○		
その他	103	こうだいてらあと 広大寺跡	朝日村	針尾	社寺跡						○		
その他	104	よるいやたあと 古い館跡	朝日村	西洗馬	城館跡						○	朝日村誌は地形と地字「古屋敷」「横道」「立小路」から考証	
その他	105	かさねじょうあと 重ね城跡	朝日村	西洗馬	城館跡						○	武居城の詰め城か	
その他	106	たけいじょうせき 武居城跡	朝日村	西洗馬	城館跡						○	長野県史跡	三島正之2013
その他	107	やくしどう 薬師堂	朝日村	西洗馬	社寺跡						○	薬師如来や日光・月光菩薩を所蔵。伝世の経緯は不明	長野県教委1977

第６表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（4）

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
その他	108	ふるいやしろあと 古い社跡 （現 五社神社）	朝日村	西洗馬	社寺跡						○	鉄鉢と鉄鐸を所蔵。伝世の経緯は不明	三村邦雄1966
その他	109	しもむらのやかたあと 下村の館跡	朝日村	西洗馬	城館跡						○	朝日村誌は地形と地字「古屋敷」「屋敷添」「そり畑」等から考証	三村邦雄1975
その他	110	ごうじか 郷尻かいと	朝日村	西洗馬	その他						○	埋蔵銭が出土	三村邦雄1975
その他	111	あさひじょうあと 旭城跡	朝日村 山形村	古見 上大池	城館跡						○	朝日村史跡	
その他	112	かんこうぎょうりん 官行造林	山形村	清水高原	散布地		○	○					
その他	113	きよみずでら 清水寺	山形村	清水高原	社寺跡		○				○	平安（10世紀末）の竪穴1軒を発掘	山形村教委2009
その他	114	おおじょうあと 大城址	山形村	清水高原	城館跡						○		
その他	115	おさかじょうあと 小坂城址	山形村	小坂	城館跡						○		
その他	116	いのかいりじょうあと 池ノ入城址	山形村	小坂	城館跡						○		
その他	117	あきぼじょうあと 秋葉城址	山形村	下大池	城館跡						○		
その他	118	にゅうたくじあと 若澤寺跡	松本市	波田水沢	寺社跡						○		波田町教委2005 2007
その他	119	はたやまじょうあと 波多山城跡	松本市	波田水沢	城館跡						○		
その他	120	てらやま 寺山	松本市	上波田	散布地		○			○		縄文中期中葉の土器、平安の土師器・須恵器・灰釉陶器を採集	
その他	121	さいこうじ 西光寺	松本市	上波田	集落跡		○						
その他	122	なかはたほり うち 中波田堀の内	松本市	中波田	散布地		○						
その他	123	ふるじょう 古城	松本市	中波田	散布地		○	○		○	○	縄文中期中葉の土器、平安の土師器・須恵器を採集	
その他	124	あわじじょうあと 淡路城跡	松本市	波田浅路	城館跡						○		
その他	125	はちまんぐうきた 八幡宮北	塩尻市	洗馬上組	散布地					○			
その他	126	やくしめん 薬師免	塩尻市	洗馬上組	散布地		○						
その他	127	なしのき 梨ノ木	塩尻市	洗馬上組	散布地		○		○			縄文中期中葉の土器を採集	
その他	128	からさわ 漆沢	塩尻市	洗馬上組	散布地		○					縄文前期末葉の土器を採集	
その他	129	かみたけ 上竹	塩尻市	洗馬上組	集落跡		○				○	縄文前期末葉から中期初頭の竪穴3軒と平安の竪穴3軒を発掘	塩尻市教委1992
その他	130	でんこう 云光	塩尻市	洗馬上組	散布地		○				○	縄文中期中葉の土器と平安の土師器・灰釉陶器が出土	塩尻市教委1992
その他	131	しもだいら 下平	塩尻市	洗馬上組	散布地						○	須恵器を採集	
その他	132	みょうぎさんじょうせき 妙義山城跡	塩尻市	洗馬元町	城館跡						○		
その他	133	ひかげし 琵琶橋	塩尻市	洗馬上組	散布地		○	○					
その他	134	なかはら 中原	塩尻市	洗馬上組	散布地		○						塩尻市教委1999

第７表　松本盆地南西部の遺跡一覧表（5）

の動きが再び活発になったといえる。こうしたなかで、西洗馬には10か所中５か所の遺跡が集中している。『朝日村誌』は、『小右記』の記事を典拠に「洗馬の牧に関係した人々の集落であった可能性」［47頁10行］を指摘している。

鎌倉・室町時代　西洗馬地区には、城山の武居城跡（106長野県史跡）があり、三ヶ組遺跡内の郷尻かいと（110）からは1964（昭和39）年に古銭が870枚余出土している[10]。また、『朝日村誌』には、重ね城跡（105）や天ヶ城、古い館跡（104）、下村の館跡（109）といった城館跡についての記載がある[11]。さらに、1323（元亨３）年に妙海によって造像された日光月光菩薩像（長野県宝）と鎌倉時代末期の作という薬師如来（村有形文化財）を本尊として祀っている薬師堂（107）や、鉄鉾や鉄鐸（村有形文化財）を所蔵する「五社または、その前身の社が11世紀ころにはあった」［109頁10行］とみている（108）。城館跡については地名と伝承によって考証しており、仏像や鉄製品は伝世の由来が定かではないが、城山山麓に中世の匂いが漂っている点に留意しながら、今後の考古学的な調査を待ちたい。

江戸時代以降　西洗馬の地名は1578（天正６）年に書写した「春秋之宮造宮之次第」が初出で、行政区画として成立したのも、同時期の天正検地による[12]。1690（元禄３）年の検地帳に掲載されている地名は、「今日まで使われているものも数多い」［641頁14行］とのことから、江戸時代前期には、現在の集落の原形がつくられていたと考える。元禄検地の結果、西洗馬は田が1078畝に対して畑が922畝で、田の面積が畑地を上回っているが、所得評価は田が121石に対して畑が446石で、畑作による所得の方が高かったという［181頁表13］。新田の開発にあたり、外山堰や内山堰が開削され、小和田堤などのため池が作られるまでは、雑穀を主体とする畑作や山林を利用した生業が、平安時代以来連綿と営まれてきたと考える。現代でこそ林業の衰退は著しいが、幕末から昭和初期にかけて養蚕のための桑栽培が行われ、戦後は西洋野菜の生産へと変化するなど、西洗馬地区では畑作を中心とした生業が現代も続いている。一方で、昭和時代後期の大規模な土地区画整理事業や平成時代の住宅団地造成事業などによって、在来の景観は変貌しつつある。

註10　三村邦雄氏によると、最新の古銭は、初鋳年代が1240～1245年の「景定元宝」という（三村1975）。長野県埋文センターが発刊した山鳥場遺跡・三ヶ組遺跡の発掘調査報告書は、『朝日村誌下巻』51頁を引用して「38種282枚の銅銭が出土したとの記録が残る」としているが、三村氏は「破損品２枚を加えて総計870であった。（中略）なお発見者の話によると、発見の際鍬に当って飛び散って拾わなかったのがあったが後にそれを探して拾った者があった由であるから、実際に埋蔵されていた数は、前記した数よりもう少し多かったはずである」と記している。雑誌『中信史学』の探索にあたり、小林康男、小松芳郎、直井雅尚、原田健司の各氏にお世話になった。

註11　三村邦雄氏は、前掲書の中で、「下村の屋敷跡」とする辺りに、「郷尻かいと」「将監屋敷」「古屋敷」などの屋敷群が「太子堂」「市道」「蓮台場＝墓地」などとともにあったと考証している（三村1975）。

註12　朝日村誌によると、「春秋之宮造宮之次第」は、1488（長享２）年の写しを、1578年、再び写した文書であるという。「写し」の内容が正確ならば、遅くとも15世紀末までには「西洗馬」という地名が使用されていたということになる。村誌は「戦国時代の中頃には中心が芦ノ田（今の本洗馬）に移っていった。西はずれの洗馬という意味で、（中略）西洗馬の名が起こったと考えられる」としている。

第３章　調査の方法

第１節　発掘作業の方法

１　遺跡記号と調査区の設定

調査は、県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則して実施している。

（１）遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称は、村教委によって登録されている埋蔵文化財包蔵地名で、遺跡記号は、氏神遺跡（ＵＪＩＧＡＭＩ）：「ＥＪＧ」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット３文字で表したもので、１文字目の「Ｅ」は長野県内を10地区に区分し、東筑摩郡・塩尻市・松本市・安曇野市に付与した名称、２文字目と３文字目は遺跡名のローマ字表記２文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いた。

（２）調査区（グリッド）の設定と呼称（第２・６図）

氏神遺跡における調査範囲の内、発掘調査区は、宅地造成に伴い敷設される５本の道路部分が対象となるため、対象地を、北東から南西に１～５トレンチと呼称した。

測量基準点は、世界測地系を用い、国家座標がわかる３級基準点Ａ１等から４級基準点測量を行い、発掘調査区の周辺に６点（Ｕ－１～６）を設定したほか、測量水準点も３点（ＵＨ－１～３）設けた。

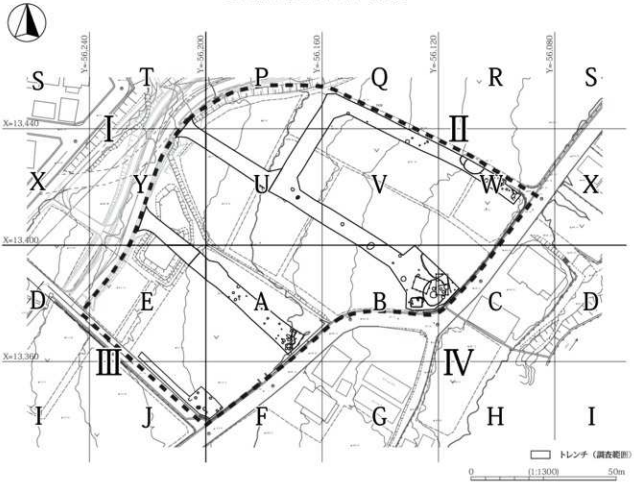
調査範囲は、国土地理院の平面直角座標第Ⅷ系の原点（東経＝138°30′0″、北緯＝36°0′0″）を基点に、200の倍数値を選んで測量基準線を設け大々地区としたほか、第７図のとおり大地区から小地区を設定した。氏神遺跡の調査位置は東経137°52′34″、北緯36°07′08″、調査範囲南隅の３級基準点Ａ１の標高は810.849ｍである。

次章以降では、検出した遺構のうち、土坑や焼土跡はトレンチごとに記述し、一覧表では小地区で位置を示したが、それ以外の遺構は中地区単位に位置を記述している。

２　表土の掘削と遺構の検出

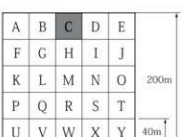
発掘調査区内を重機により、基本層序Ⅳ層下部まで掘削し、手作業により遺構検出を行った。遺構検出は、３トレンチの一部を除き、基本層序Ⅴ層上面で実施した。縄文時代の遺構は黒褐色土が、平安時代の遺構は黒色土が落ち込む状況で確認した。調査範囲東側ほど地層の堆積状況は良好で、西側に向かうほど削平を大きく受け、２トレンチ及びそのほかのトレンチの西端は現耕作土（基本層序Ⅰ層）直下がⅤ層であった。また、検出面には、耕作に伴うトレンチャーによるかく乱が２トレンチを除くすべてのトレンチにおいて認められた。出土遺物は、遺構が明確となった場所では遺構ごとに、かく乱から出土した遺物はトレンチごとに一括し、その他はトレンチごとに一括して取り上げた。

基準線と地区（グリッド）の設定



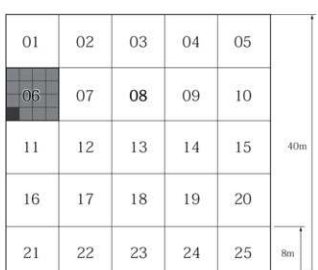
大々地区（200×200m グリッド）：Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

例：IVC06-13 グリッドの座標位置



大地区（40×40m グリッド）：IVA…IVY

小地区（2×2m グリッド）：
IVC06-01…IVC06-13…IVC06-16



中地区（8×8m グリッド）：IVC01・IVC02…IVC06…IVC25

第６図　調査範囲及びトレンチ、グリッドの配置図

３　遺構の認定と精査

（１）遺構の認定

氏神遺跡では、Ⅴ層上面の遺構検出で確認した落込みをすべて遺構と認め、埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。アラビア数字は４桁とし、千の位に検出したトレンチ番号を、それ以下の位は、各トレンチにおける遺構の種類ごとの通し番号を付けた。

ＳＢ：２ｍを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘込み。

ＳＫ：単独、もしくは他の掘込みとの関係が認められないＳＢより小さな掘込み。

ＳＡ：ＳＢより小さな掘込みが列として配置するもの。

ＳＴ：ＳＢより小さな掘込みが一定間隔で方形に配置しているもの。

ＳＦ：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの及び、炭化物の集中範囲。

竪穴建物跡は、整理作業の結果、新たに遺構の切り合いや拡張が認められたものは、遺構番号の次に小文字のアルファベットを付けた。また、土坑と認定して調査を進めたものの、段下げや半裁による観察によって人為的な掘り込みと認めがたいとしたものや、掘立柱建物跡の柱穴に組み込まれたものは欠番とした。詳細については、個別遺構の調査経過に記してある。

（２）遺構の精査

竪穴建物跡は、検出面で遺構の形状を確認後に埋土の堆積状況、床面の状況及び深度を確認するため、トレンチの断面やセクションベルトを利用し、その脇に先行トレンチを設定して掘削した。埋土の堆積状況及び床面を観察後、遺構全体をセクションベルトの区割単位に層位ごと床面まで掘削し、埋土の堆積状況を記録した。遺構埋土の掘削は移植ゴテ及び両刃鎌を用いた。埋土の堆積状況を記録後にセクションベルトを外し、壁面及び床面を精査し、炉跡、カマド、壁溝、柱穴等の施設を検出した。炉跡及び壁溝は精査でプランを確認後に完掘し、柱穴は柱痕を確認するための段下げを行いで完掘記録を行った。柱穴は、半裁とセクションの記録、掘方調査を行った。なお、掘方の半裁は、断面形及び埋土の観察・記録を正確に行うため、床面ごと掘削したものもある。カマドは、焚口部と煙道部の中央を結ぶラインと、それに直交し、両袖部の中央を結ぶライン及び壁面の煙道取付け部分にセクションラインを設定し、６分割しながら精査とセクションの記録をした。燃焼部と両袖部を残し、煙道部を掘削した状態で完掘記録を採り、最終的に燃焼部と袖部も掘削しながら、セクションを追記した。なお、炉跡については、科学分析のために炭化物採取及び微細遺物の採取を目的として、すべてフルイにかけた。採取した炭化物は年代測定を行った（第５章第４節）。

掘立柱建物跡及び杭列は、柱痕の有無を確認するため段下げを行い、柱痕を確認した場合は、その個所をさらに段下げし、掘立柱建物跡及び杭列の完掘状況写真を撮影した。その後、掘立柱建物跡のピットは四分割、杭列のピットは半裁し、断面記録作成後に完掘して、完掘状況を記録した。

土坑の精査は、段下げまたはトレンチャー跡を先行して掘削し、検出面で確認した黒褐色土または黒色土が人為的な掘り込みか否か、遺構の切り合い関係、柱痕の有無を確認した。その後、遺構と認定したものは形状を確認後に半裁し、埋土の堆積状況を記録後に完掘してプラン全体を記録した。小形のものは断面形及び埋土の観察・記録をより正確に行うため、断ち割りを行った。陥し穴等の深度が深く、調査時に土砂崩落等の危険が伴う遺構は、安全に掘削できる深度まで通常の土坑と同じ手順で調査した。遺構上部のプラン及びセクションを記録した後に断ち割りを行い、遺構下部を半裁した。セクション記録後に完掘し、完掘状況写真の撮影及び底面のプランを記録した。

竪穴建物跡内の遺物は、原則として、セクションベルトを境界とした４分割単位に、出土層位別に取り上げた。SB1001 の埋土中の遺物や SB3001 のカマド周辺の遺物は、接合・復元が可能な遺物が多かったた

め、写真撮影または図化記録を作成し、出土地点の記録が必要な場合は遺構ごとの遺物番号を付けて取り上げた。人骨は検出状況を図及び写真で記録後、発泡ウレタンで保護して取り上げた。

４　記録作成

図化記録は、原則として、地形図、トレンチ配置図、遺構平面図及び遺物出土状況図は業務委託による単点測量及び３Ｄ用写真撮影を行い、基本層序図、遺構断面図は職員及びその指示のもと発掘作業員が手測量（造り方測量）で行った。

竪穴建物跡の平面図は完掘段階（掘方掘削前）に、土坑は埋土除去後に業者が単点測量し、単点図は職員が結線した。ただし、ＳＢ1001やＳＢ3001のカマド周辺遺物出土状況等は、コンパクトデジタルカメラで撮影した画像を、業者が３Ｄ画像として処理し、3D画像と遺構を照合して図面を完成させた。なお、遺構図は１/20の縮尺を基本とし、必要に応じて１/10の縮尺で測量した。また、調査範囲図、地形測量図は、業務委託で1/100を基本として作成した。

写真記録は、一眼レフデジタルカメラを使用して撮影した。データはLAW・JPEGで保存した。遺跡の全景写真は、業務委託でラジコンヘリコプターを使用して撮影した。

第２節　整理作業の方法

１　整理等作業

（１）基礎整理

基礎整理は、発掘作業中に実施する内容を含んでいるが、記述の便宜上、本節で取扱うことにする。基礎整理の内容は、出土品及び記録類の点検、整備である。

出土品について

発掘作業ではポリ袋に出土場所や層位、出土年月日を記載して、おおまかに土器類と石器類に分別して取上げたため、まず、明らかな記載ミスや分別を訂正しながら、テンパコに収納して「遺物台帳」を作成した。テンパコは、土器類が54箱、石器・金属器類23箱のほかウレタン梱包した骨類が１梱包あり、計78箱を埋蔵物発見届の「出土遺物」として届け出た。このほかに、炉跡の埋土をフルイに掛け取り出した炭化物等や土壌サンプルがある。

続いて、テンパコごとに遺物洗浄と遺物注記を行った。ただし、土器は１㎝角以下程度の微細な資料、石器は注記により観察が難しくなる資料及び１㎝角以下程度の微細な資料は、ポリ袋にまとめて収納した。注記は、遺跡記号と出土遺構記号・番号のほかに次の表記を用いた。

遺構外→Ｚ	埋土→表示しない	攪乱→カクラン	床面→床	炉跡→炉
ベルト→ベルト	１区→１区	２層→２層	ピット→ピット	トレンチ→Ｔｒ

記録類について

図面類は、記載漏れや明らかな記載ミスを補足、訂正したうえで、トレンチごとに図面番号を「遺構台帳」に登録した。続いて、コピーした平面図と断面図を使用して図面の照合を行い、修正箇所は赤字で記入した。これを第二原図とし、原図と同じ図面番号を付けて収納した。断面図の土層説明は、図面編集の便を図るため、すべてエクセル表に転記した。

発掘作業中に撮影した写真は、「撮影記録簿」に撮影日、撮影番号、撮影内容を記載した。「撮影記録簿」をもとに、「写真台帳」を作成した。写真は、LAWデータ・JPEGデータを記録し、ハードディスクに保

管した。

発掘作業中に記録した遺構調査に関わる記録類は、第二原図や写真と照合しながら「遺構所見整理カード」にまとめた。カードには、調査経過、遺構の構造、遺物等の所見を記載した。記載に当たっては、精査の目的や発掘作業中に試行錯誤した過程、結論を導くに至った事象に留意するよう心掛けた。併せて、「遺構台帳」に竪穴建物跡と掘立柱建物跡、杭列、土坑の主軸方位、規模、平面形と断面形、出土品のコンテナ番号を記入した。

（２）出土品整理

遺物の数量把握と管理台帳へ登録

土器類については、テンバコ単位、ポリ袋単位に破片数と重量を計測し、「遺物台帳」へ記載した。計測後、遺構あるいはトレンチ単位に土器接合を行い、接合可能な土器のメモ写真を撮影した。この段階で遺構の時期と性格を決定した。資料化が必要と判断した遺物を選別（一次選別）し、トレンチごとに通し番号を付して「遺物管理台帳」に登録した。台帳には出土場所、器種や部位、形態や文様などを記載した。登録遺物数は 448 個体である。

土製品も土器類と同様に「遺物管理台帳」に登録した。登録遺物数は 11 個体である。

石器類については、加工が認められるすべての石器、黒曜石産地推定試料全点について、トレンチ単位に通し番号を付し「遺物管理台帳」に登録した。台帳には出土地点、器種、遺物の属性などを記載した。登録遺物数は 242 個体である。さらに、器種分類を行い、管理番号を付けた石器類は法量と重量、それ以外の石器は器種及び石材別に点数及び重量を計測した。

科学分析

発掘調査当初から、放射性炭素年代測定と黒曜石産地推定を計画し、分析試料のサンプリングを行った。分析業務委託は令和２年度の基礎整理と令和３年度の本格整理で実施した。

年代測定は、遺構の埋没時期や土器型式と整合を見極めるため、土器付着炭化物を対象に行う予定であった。しかし、良好な土器付着炭化物が採取できなかったため、縄文時代の竪穴建物跡ＳＢ 3002 は炉跡出土炭化物を、平安時代の竪穴建物跡ＳＢ 3001 はカマド石に付着した炭化物を試料として用いた。

黒曜石原産地推定は、縄文時代中期初頭の竪穴建物跡及び、中期中葉の竪穴建物跡から出土した黒曜石製石器のうち、石鏃等の器種を目安にそれぞれ 50 点、計 100 点の試料を抽出して行った。

発掘調査において、氏神遺跡は火山灰の堆積が良好であることが判明した。火山灰の供給源や堆積年代を把握し、遺跡の立地する地形形成過程をより精緻に理解するために、火山灰層（基本層序Ⅴ～Ⅸ層）を層単位にサンプリングし、火山灰分析を行った。

土器の接着・補強と遺物の拓本・実測

遺物の実測作業と写真撮影の際に、接着が必要なものは接着した。その際に補強が必要なものは石膏等を用いて補強を行った。接着の結果、完形とほぼ完形に復元できた 29 個体の遺物は、業務委託による実測を行った。破片資料は拓本及び断面実測を基本としたが、拓本では土器の特徴が表現できないものは実測を行った。実測、拓本作業では土器の外形や断面を正確に測ることはもちろん、施文具や施文の切り合い、輪積痕が残るものはそれがわかるよう図化することに留意した。

（３）図面整理

遺構図の整理は、セクションポイントやセクション名、水準線、炉跡、かく乱、その他を青書補足した第二原図をもとにイラストレーターを用いてデジタルトレースを行った。デジタルトレース図と業者に委託した地形図や基準線図を合成して、遺構全体図と割付図を作成した。第二原図以外、整理作業の過程で作成した遺構図等は保管対象としていない。

遺物図はトレンチ単位に図面番号を付け、遺物図作成台帳に記録した。原図をもとにデジタルトレースを行った。

（４）遺物写真撮影・整理

遺物写真は、委託によりデジタル写真撮影を行った。土器の特徴を最も反映する面を正面として撮影したが、正面だけでは土器の特徴を表現できないものは展開写真を撮影した。この時、石膏で補強した箇所は補彩した。撮影 No. をファイル名とした撮影台帳を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。デジタル写真データは JPEG・TIFF・LAW のデータ単位で撮影番号順にハードディスクと DVD に記録した。

２　報告書作成と資料収納

（１）報告書作成

原稿と図版の作成

第１章「発掘調査の経過」は、県教委や村教委等の協力を得ながら、調査前の調整や手続について触れたのち、作業別に発掘調査の経過を記載した。

第２章「遺跡の位置と環境」は、氏神遺跡が立地する鎮川左岸の地形を理解するために、段丘面の形成過程と年代、火山灰の供給源を概観した。また、調査成果を地域史の中に位置づける作業を補助する意味で、遺跡が位置する朝日村西洗馬地区の歴史的変遷を辿るとともに、松本盆地南西部の遺跡を概観した。

第３章「調査の方法」は、基本的に県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に沿って行った調査の方法と、氏神遺跡で採用した調査方法については、あえてそれらとの重複を厭わずに記述した。

第５章「調査の成果」は、原則として、発掘作業や整理作業を通じて確認した事実関係を中心に記載することを心掛けた。

遺構のうち、竪穴建物跡や掘立柱建物跡、杭列については個別図版を作成し、原稿は「遺構所見整理カード」に記載した内容を中心に記述した。とくに調査目的や方法に力点を置き、「調査経過」の中で詳細に記載した。また、本文中にスナップ写真を入れ、読者の理解に供するよう努めた。土坑は、トレンチごとの割付図で位置関係を示すとともに、平面と断面の形状や出土遺物等で特徴的なものを抽出して個別図を掲載し、説明を付けた。なお、遺構一覧表に規模等を記載した。

遺物のうち、土器は拓本・実測を行ったものを分類し、完形もしくは完形に近いものや形態・文様等に特徴のあるものを選別（第二選別）して図版を作成し、遺構ごとに記述した。人骨については、京都大学名誉教授茂原信生氏による鑑定内容を編集者が記した。また、自然科学分析については、委託業者の報告書を参照しながら、分析目的や方法、結果の要点を記述するとともに、考古学的な調査所見との整合性等について簡潔にまとめた。なお、業務委託を行った測量と科学分析の成果は、光ディスクに収録した。

報告書の編集と刊行

報告書の本格的な編集作業は、2021 年度から着手した。報告書作成に当たり、2021 年４月 28 日と６月 30 日、11 月８日に編集会議を行った。会議で指摘を受けて遺構図・遺物図の表現方法や章立てについて検討を行い、報告書の内容を練り上げていった。

縄文時代と平安時代は別の章立てとし、それぞれの時代の特徴が理解しやすいように工夫し、要点が把握しやすいよう章始に概要を設けた。また、カラー写真を挿入した「発掘調査の概要」を設け、専門的な報告書の内容を広く地元住民に理解してもらえるよう試みた。

報告書は県内外の埋蔵文化財関係機関、大学、地域の図書館等に配布するほか、奈良文化財研究所の「全国遺跡報告総覧」に登録する予定である。

（２）資料収納

土器・石器等の人工遺物は、材質、種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構、グリッド等の地点別にテンバコに収納し、「遺物収納台帳」を作成した。

実測図類は、遺構実測図、遺物実測図別に、通し番号（図面番号）を付けて「図面収納台帳」に登録し、図面ファイルに収納した。

遺構・遺物写真は整理段階でアルバムに収納し、台帳を作成した。写真のデジタルデータは、整理等作業時から使用しているハードディスクに収納した。

第４章　朝日村氏神遺跡の調査概要

氏神遺跡は長野県東筑摩郡朝日村西洗馬 1845 － 1 ほかに所在する。朝日村向原地域道路等整備事業に伴い、令和２年４月から８月にかけて発掘調査が実施され、2,000㎡の範囲を調査した。その結果、縄文時代中期初頭と中期中葉の竪穴建物跡や陥し穴、土坑等、後期後葉の陥し穴、また平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、墓坑、土坑等の遺構を調査した。これらの遺構に伴い、縄文時代草創期の石器、前期末葉の土器、中期初頭、中期中葉の土器と石器、後期後葉の土器、また平安時代の灰釉陶器や土器、鉄製品が出土した。

第１節　氏神遺跡の位置と環境

氏神遺跡は、鎖川の支流である内山沢左岸の標高約 810 m の段丘上（波田面）に立地する。内山沢流域には、この遺跡の他に、山鳥場遺跡や中村遺跡、大日遺跡、向原遺跡、また鎖川流域には熊久保遺跡等、多数の縄文時代の遺跡が分布する。

写真１　遺跡から松本盆地を望む（南西から）

写真２　遺跡から向陽台第１・２期住宅団地と熊久保遺跡を望む（南東から）

第２節　縄文時代

縄文時代でも、約 5500 年前の中期初頭と、約 5000 年前の中期中葉の時期の遺構と遺物が出土した。

中期初頭の遺構は、竪穴建物跡３軒、陥し穴１基、貯蔵穴や墓坑の可能性がある土坑 32 基を検出した。竪穴建物跡は、いずれも楕円形を呈し、最大径が９ｍを越える大形のものと推定する。これらの遺構から、長野県のみならず、南関東や山梨県、北陸まで分布が広がる五領ヶ台Ⅱａ式と呼ばれる土器の他、長野県の在地の土器である踊場系、関西地方の土器や岐阜県下呂市が原産地の下呂石でできた石器が出土した。これらの遺構と遺物は、縄文時代中期初頭における人の移動や物の流通を研究するために非常に重要なもので

写真３　縄文時代中期初頭の竪穴建物跡（SB3002）（西から）

写真４　竪穴建物跡（SB3002）出土遺物

写真５　縄文時代中期初頭の竪穴建物跡（SB3003）（南東から）

写真６　竪穴建物跡（SB3003）出土遺物

写真７　縄文時代中期初頭の竪穴建物跡（SB4001）（北西から）

写真８　竪穴建物跡（SB4001）出土遺物

写真９　縄文時代中期初頭の土坑（SK4032）遺物出土状況（南西から）

写真10　縄文時代中期初頭の土坑（SK3025）遺物出土状況（南から）

写真11　縄文時代中期初頭の土坑から出土した遺物

中期中葉の遺構は、竪穴建物跡２軒、貯蔵穴の可能性がある土坑３基を検出した。ＳＢ1001の竪穴建物跡は楕円形を呈し、最大径６ｍ45cmを測る。遺物の出土状況が特徴的で、「吹上パターン」と呼ばれる、完形の土器や石器が投げ捨てられたような状況で出土している。土器は藤内Ｉ式を主体とし、平出第Ⅲ類Ａと呼ばれる土器を伴っている。これらの土器は長野県の在地の土器で、遠隔地のものはみいだせない。中期初頭とは人や物の動きが異なっていたことが予測できる。

写真12　竪穴建物跡（SB1001）（北西から）

写真13　竪穴建物跡（SB1001）遺物出土状況　（南から）

写真14　竪穴建物跡（SB1001）出土遺物

第３節　平安時代

平安時代は、今から1000年ほど前の10世紀中葉から後葉の時期の遺構と遺物が出土した。竪穴建物跡１軒、掘立柱建物跡２棟、墓坑１基、土坑14基を検出した。ＳＢ3001の竪穴建物跡は方形を呈し、最大長は４ｍである。東に出入口、西にカマドが作られる。この竪穴建物跡は、人為的に埋められ、カマドは壊されたものと推定する。カマドからは多量の土器が出土した。掘立柱建物跡は竪穴建物跡の周囲に作られており、竪穴建物跡と共に集落を構成していたと推定する。この集落から40ｍほど離れて、墓坑を発見した。松本盆地において、この時期の墓坑の調査例は少なく、氏神遺跡は、集落と墓坑の関係を研究するための希少な例である。

写真15　平安時代の掘立柱建物跡(ST3001)（南東から）

写真16　平安時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡（北西から）

写真17　平安時代の竪穴建物跡（SB3001）（東から）

写真18　SB3001のカマド　（東から）

写真19　SB3001の遺物出土状況（東から）

写真20　竪穴建物跡（SB3001）出土遺物

第５章　調査の成果

第１節　遺跡の概要と基本層序

１　遺跡の概要（口絵１、第８図）

氏神遺跡は、内山沢川左岸の北東向き緩斜面の段丘上にあり、遺跡の範囲は、北東と南東側が段丘端部、北西側が、向陽台団地の造成に伴って新設した村道西洗馬 87 号線の東側に展開する。遺跡範囲の南西側には、向原遺跡が隣接しているものの、境界は不明瞭である。村道西洗馬７号線を境界とすると、遺跡全体の面積はおよそ 47,000㎡となる。今回の調査地点は、遺跡範囲の中央部よりやや北側にあり、向陽台住宅団地３期造成工事によって敷設される村道部分（2,000㎡）が対象になる。

氏神遺跡の発見は昭和 20 年代に遡り、縄文時代草創期の有舌尖頭器、縄文時代前・中期の土器、土偶及び石器、弥生時代の磨製石鏃、平安時代の灰釉陶器や土師器などが採集されている（朝日村村誌刊行会 1991）。今回の氏神遺跡における初の発掘調査によって、縄文時代前・中・後期の遺物と縄文時代中・後期の遺構、弥生時代の遺物、平安時代の遺構・遺物を確認することができた。

２　基本層序（第７図）

氏神遺跡は、砂岩及び泥岩を主体とする混在岩を基盤として、御嶽乗鞍火山帯を供給源とするロームが厚く堆積し、表層を腐植土が覆っているとみられる。

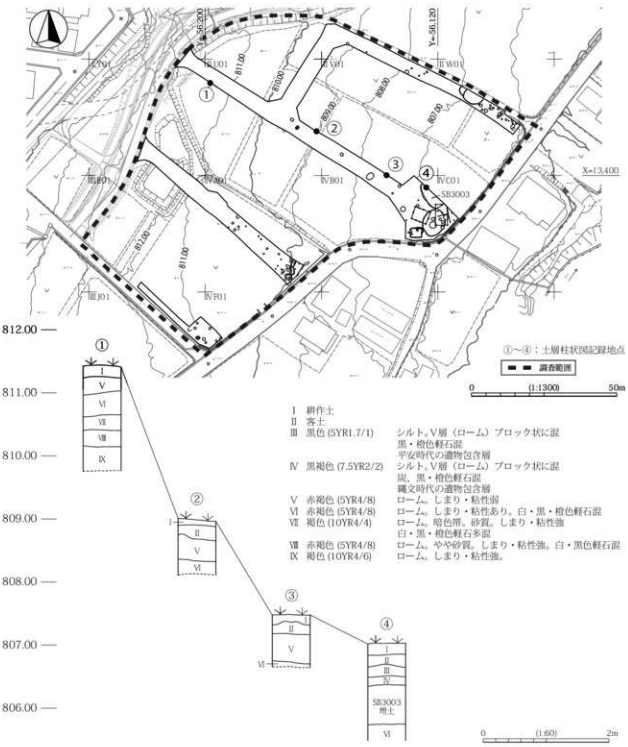
１及び３トレンチの層序断面を観察したところ、腐植土を１層（Ⅲ層）、ロームを５層（Ⅴ～Ⅸ層）、腐植土とロームの漸移層を１層（Ⅳ層）を確認することができた。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ及びⅡ′層は現代のゴミ等が混入する客土である。Ⅲ層には平安時代の遺物が包含され、同時期の遺構はⅣ層上面で確認することができるが、その面では遺構のプランが不明瞭であったため、今回は、３トレンチの一部を除いて、Ⅴ層上面で検出した。また、縄文時代の遺物が包含されているのはⅣ層で、同時代の遺構はⅤ層上面で検出できる。

パリノ・サーヴェイ株式会社による火山灰分析（詳細は添付 DVD を参照）によれば、Ⅴ層には姶良 Tn テフラに対比される、Ｔ－Ｔｆ（把ノ沢火山灰層）に由来するバブル型火山ガラスが含まれるとの分析結果を得た。Ⅴ層は漸移層を挟んで腐食土のⅢ層に移行するため、遺跡が立地する河成段丘に降下した最終のロームと考えられる。したがって、この層は約 30,000 年前からロームの降下が終了するまでの、長期間に形成されたと推定できる。Ⅵ層はⅤ層とⅦ層の漸移層と考えられる。Ⅶ層には、木曽御岳火山を供給源とする、Ｕｐ．ＳＬ（ニセスコ

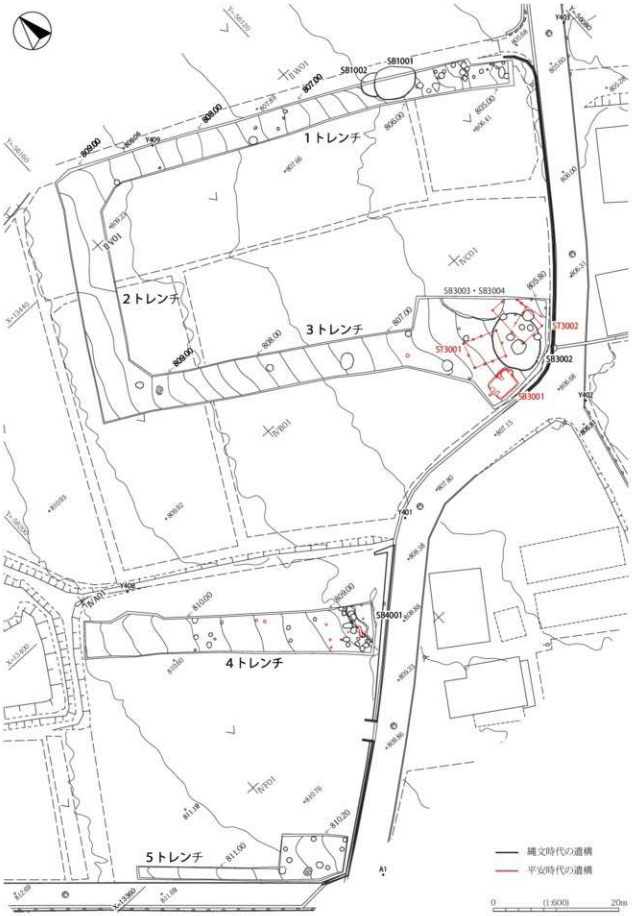
１トレンチ北西土層断面

３トレンチ④土層断面

ラビ）の降下堆積物に対比されるブロック状堆積物が認められる。噴出年代は約 40,000 年前と推定する。Ⅷ層はⅦ層とⅨ層の漸移層である。Ⅸ層では DKP（大山倉吉テフラ）に由来する砕屑物が含まれていると推定する。DKP の噴出年代は 55,000 年以上前とされる。波田面の形成は DKP 等の軽石層の降下前後（60,000 ～ 40,000 年前）であり、森口面は DKP 等の軽石層に覆われないと指摘されている（小口 1988）。遺跡周辺の段丘面については第５図を参照されたい。火山灰分析の結果と、小口氏の先行研究を総合すれば、氏神遺跡が立地する段丘面は、波田面であることが確認され、波田面はⅨ層が堆積した前後に形成された段丘面であることも明らかとなった。



第７図　基本層序図


1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5トレンチ
SB1001
SB1002
SB3003・SB3004
SB3001
SB3002
ST3001
ST3002
SB4001
縄文時代の遺構
平安時代の遺構
0
(1:600)
20m

第８図　遺構全体図

第２節　縄文時代

１　概要

氏神遺跡で確認した縄文時代の遺構は、竪穴建物跡５軒、土坑 81 基、焼土跡１基で、縄文時代中期初頭、中期中葉、後期後葉に属すると推定する。１トレンチで２軒、３トレンチで２軒、４トレンチで１軒の竪穴建物跡を確認した。標高 808.8 m付近にある竪穴建物跡ＳＢ 4001 が最も高く、806.0 m付近のＳＢ 1001 が最も低い。いずれも、各トレンチの中では標高の低い東側に偏在する。土坑は、２トレンチを除くすべてのトレンチで確認した。標高 810.6 m付近のＳＫ 5001 が最も高く、805.0 m辺りのＳＫ 1030 が最も低い。竪穴建物跡と同様に、各トレンチの東側に集中する傾向があるものの、西側へも広がる。焼土跡は１トレンチで確認した。なお、土坑は、平面や断面の形状や埋まり方等によって用途を類推できるものがあり、それによって分布範囲は異なるが、詳細は２項で後述する。

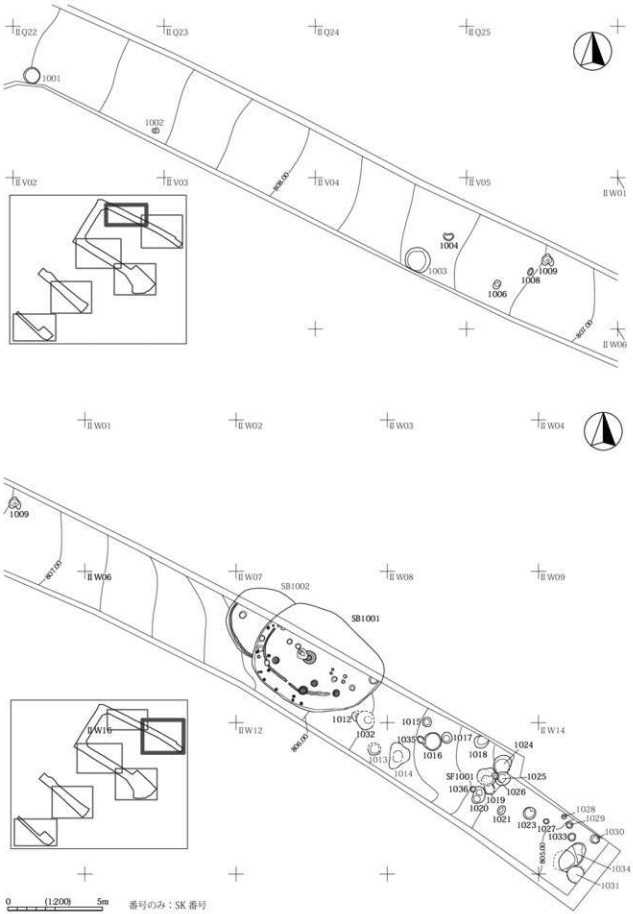
縄文時代の遺物として草創期と推定する有舌尖頭器、中期の土器片、詳細な時期が不明な石器や、装身具、土偶の採集が報告されている（朝日村村誌刊行会 1991）。今回の発掘調査により、草創期、前期末、中期初頭、中期中葉、後期後葉の土器片 11,260 片（総重量約 146kg）、石器 1,423 点（総重量約 134kg）、土製品 12 点の遺物を確認した。

草創期の遺構は検出されなかったが、SK4025 から出土した尖頭器（427）の破片が、当該期の有舌尖頭器の先端部である可能性がある。

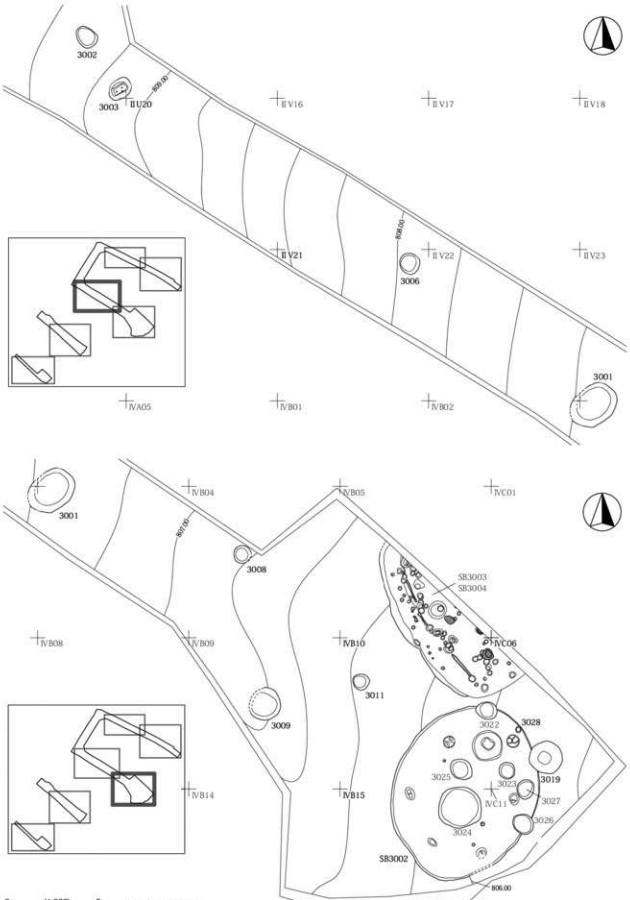
前期末の遺構は検出されなかったが、土器片が出土している。これらの土器片は、中期初頭に属する遺構（ＳＢ 3002、3003、4001、ＳＫ 3025）の埋土から出土した。十三菅提式に並行する土器（166）や三角印刻文を有する土器（164、398 等）、浮線文系の土器（167、168、169、301 等）が認められる。

中期初頭の遺構は、竪穴建物跡３軒（ＳＢ 3002、3003、4001）、陥し穴１基（ＳＫ 5002）、貯蔵穴及びその可能性がある土坑 18 基（ＳＫ 1031、1034、3022 ～ 3025、4024 ～ 4026、4028、4029、4034、4038、4039、4041、4045、5003 ～ 5005）、墓坑の可能性がある土坑３基（ＳＫ 4032、4042、4043）用途不明の土坑 11 基（ＳＫ 3001、3009、4012、、4020、4035 ～ 4037、5006 ～ 5009）を確認した。中期初頭の土坑は、同時期の竪穴建物跡の周辺及び１トレンチの南東隅に集中して分布する。したがって、これらの遺構の周囲に立地する時期不明の土坑も同時期に属する可能性が高い。これらの遺構から五領ヶ台Ⅱａ式土器及びそれに並行する時期の土器群が出土した。在地の土器の他、北陸系（102、177、178、308、309、310、311）や東海系（179）、関西系（103、104、105、180、181、182、312、313、314）と考えられる遠隔地の土器片も出土した。出土状況で特筆すべきは、墓坑の可能性があるＳＫ 4032、4042 からほぼ完形の深鉢形土器（437、461、462）が出土したことである。これらの遺構と土器群の絶対年代は、土器に付着する炭化物及び、竪穴建物跡の炉埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定により、5,584 ～ 5,051calBP という暦年較正値が得られた。これらの土器に伴い出土した石器は、中期初頭の石器群と位置付けた。器種は石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、打製石斧、敲石、凹石、石皿、台石、砥石等が認められる。石鏃、石錐、ピエス・エスキーユは黒曜石が主体的に用いられ、産地推定分析の結果 95％が諏訪エリアの星ケ台群、５％が和田エリアの鷹山群と小深沢群であることが分かった。その他の石器には遺跡近隣で採取可能なチャートや砂岩、泥岩が主体的に用いられている。また、岐阜県南部で産出する石材である、下呂石製の剥片および二次加工あるる剥片（123、124、416）が出土している。

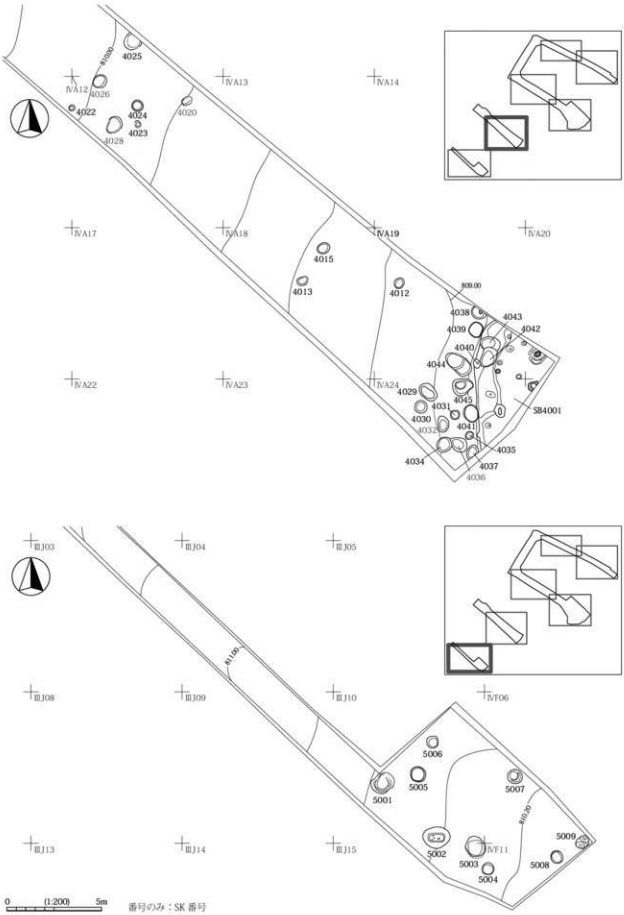
中期中葉の遺構は、竪穴建物跡２軒（ＳＢ 1001、1002）、貯蔵穴の可能性がある土坑３基（ＳＫ 1016、1024、1025）を確認した。中期中葉の遺構は１トレンチの東側（グリッドⅡＷ 07、ⅡＷ 08、ⅡＷ 17、Ⅱ



第９図　遺構分布拡大図（１）１トレンチ



第10図　遺構分布拡大図（２）３トレンチ



第 11 図　遺構分布拡大図（３）４・５トレンチ

Ｗ18）に集中して分布しており、この周囲に位置する時期不明の土坑も同時期に属する可能性が高い。これらの遺構から、藤内Ｉ式（８～12、18等）に平出第Ⅲ類Ａ土器（35）を伴う土器群が出土した。中期初頭と異なり、遠隔地の土器片が認められないことが特徴としてあげられよう。出土状況で特筆すべきは、ＳＢ 1001 Ｂの炉跡に蓋をするような状況で、完形と完形に近いの深鉢形土器（１、２）が出土したことと、同じ竪穴建物跡の埋土から、完形や完形に近いの土器及び大形の土器片（４～20、22～37）が、いわゆる「吹上パターン」[1]の様相を呈して出土したことである。これらの遺構および土器群の絶対年代は、土器に付着する炭化物の放射性炭素年代測定により、5,265～4,877calBP という暦年較正値が得られた。これらの土器に伴い出土した石器を、中期中葉の石器群と位置付けた。器種は石鏃、石錐、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、打製石斧、砥石等が認められる。石材利用形態は中期初頭と同一であるが、下呂石等の遠隔地石材が出土しないということが分かった。

後期後葉の遺構は、陥し穴１基（ＳＫ 3003）を確認した。埋土から加曽利Ｂ式土器（358）が出土した。３トレンチの北西端に位置し、中期の竪穴建物跡や土坑が集中する範囲から外れる。中期と後期では、空間利用が異なっていたと推定されよう。

註1　竪穴建物廃棄後に埋没過程で土器が一括遺棄される状況

２　遺構（第９･10･11･12図）

各トレンチから検出した遺構の種類と数は、下記のとおりである。

１トレンチ：竪穴建物跡２、土坑31、焼土跡１

３トレンチ：竪穴建物跡３、土坑15

４トレンチ：竪穴建物跡１、土坑26

５トレンチ：土坑９

（１）竪穴建物跡

ＳＢ 1001 Ａ・Ｂ、ＳＢ 1002（第９･12･13図、写真図版２）

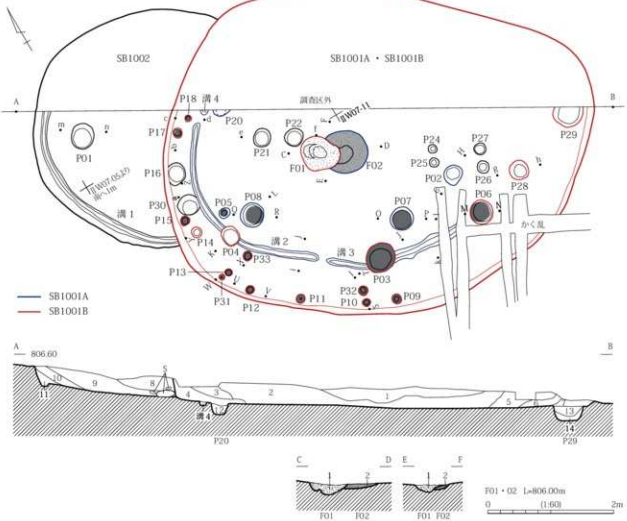
検出位置　ⅡＷ07（１トレンチ）

調査経過　１トレンチを東端から重機で掘削したところ、東端から 15ｍ付近のⅣ層下部から縄文時代中期中葉の土器片が比較的多く出土した。当該箇所付近の北壁際から中央部にかけて土器片が集中するため、竪穴建物跡の存在を推定した。Ⅴ層上面で遺構検出を行い、黒褐色及び極暗赤褐色土が半円形に重なる状態を確認できたため、２軒重複する竪穴建物跡の落ち込みと認定した。ただし、この時点で遺構番号はＳＢ 1001 だけ付けた。

ＳＢ 1001・土坑検出状況（南東より）

１トレンチの北壁沿いに幅約 45㎝の先行トレンチ１を設定して掘削に入り、Ⅴ層を基調とする床面を検出する。先行トレンチ１内を東からおおむね３分割し、出土遺物は分層せずに区画ごと一括で取り上げた。壁際に「三角堆積」[1]があることや、埋土内にブロックの混入が少ないことから、自然堆積と判断した。この時点では、重複する竪穴建

註1　竪穴建物跡の壁際に見られる堆積層



SB1001・1002
1　黒褐色（5YR2/2）締りがやや弱いシルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
2　極暗赤褐色（5YR2/4）締りが強い粘土質シルト Φ1 ～ 50mm のローム偽礫と炭混在
3　極暗赤褐色（5YR2/3）締りがやや強いシルト Φ3mm のローム偽礫と炭混在
4　極暗赤褐色（5YR2/4）締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫と炭混在
5　暗褐色（10YR3/4）締りが強い粘土質シルト
6　褐色（10YR4/4）締りが強い粘土質シルト
7　暗褐色（10YR3/3）締りがやや弱い粘土質シルト Φ3mm のローム偽礫混在
8　褐色（5YR2/2）締りがやや弱いシルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
9　暗褐色（10YR3/4）締りがやや強い粘土質シルト Φ300mm の礫と Φ3 ～ 10 mm のローム偽礫、炭混在
10　極暗赤褐色（5YR2/4）締りがやや強い粘土質シルト 炭混在
11　暗赤褐色（5YR3/6）締りがやや強い粘土質シルト 炭混在

SB1001 P20
12　極暗赤褐色（5YR2/3）締りがやや強いシルト Φ1mm のローム偽礫が混在

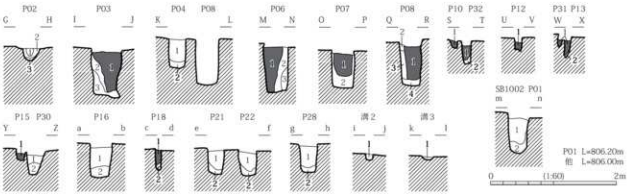
SB1001 P29
13　暗褐色（10YR3/4）締りがやや強い粘土質シルト Φ5mm のローム偽礫が混在
14　暗褐色（10YR4/4）締りが強い粘土質シルト

SB1001　F01・02
1　極暗赤褐色（5YR2/4）締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫と、遺構理土より多量の炭混在
2　暗赤色（10YR3/6）締りが非常に強いシルト Φ1 ～ 20mm のローム偽礫と、遺構理土より非常に多量の焼土・炭混在

F01・02 土器出土状況

SB1002 P01 土器出土状況

第 12 図　縄文時代の遺構図（1）　ＳＢ 1001 Ａ・Ｂ、1002（1）



P02
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りが強いシルト Φ1 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在 柱痕か
2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト
3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト Φ1 ～ 20mm のローム偽礫混在

P03　P06 と同一
1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや弱いシルト Φ3 ～ 10mm のローム偽礫混在 柱痕
2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが弱いシルト Φ3 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在
3 暗褐色 (10YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫混在

P04　P28 と同一
1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト Φ5mm のローム偽礫混在 柱痕か
2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが弱いシルト Φ3 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在
3 暗褐色 (10YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫混在

P07
1 黒褐色 (10YR2/2) 締りが非常に弱い粘土質シルト Φ60mm の中礫と Φ5 ～ 30mm のローム偽礫、炭混在 柱痕
2 黒褐色 (10YR2/2) 締りが非常に弱いシルト Φ5mm のローム偽礫混在

P08
1 黒褐色 (10YR2/3) 締りがやや弱いシルト Φ5 ～ 30mm のローム偽礫と炭混在 柱痕
2 黒褐色 (10YR2/3) 締りがやや強いシルト 炭混在
3 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ3 ～ 10mm のローム偽礫混在
4 黒褐色 (10YR2/3) 締りが強いシルト Φ50mm のローム偽礫混在

P10　杭痕　P09・11・12・15・17・31・33 と同一
1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土質シルト

P13　杭痕　P05・18・32 と同一
1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが弱いシルト Φ3 ～ 5mm のローム偽礫と炭混在
2 暗赤褐色 (5YR3/6) 締りがやや弱い粘土質シルト 炭混在

P16　P21・22 と同一
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫と炭混在
2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土質シルト

P24　P25・26・27 と同一
1 暗褐色 (10YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫混在

P30　SB1002 P01 と同一
1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強いシルト Φ1 ～ 5m のローム偽礫と炭混在
2 暗褐色 (10YR3/4) 締りが強いシルト Φ3 ～ 10mm のローム偽礫混在

溝 2・3・4
1 暗褐色 (10YR3/4) 締りが強いシルト Φ5mm のローム偽礫 混在

第 13 図　縄文時代の遺構図（２）　ＳＢ 1001 Ａ・Ｂ、1002（２）

物跡の壁の立ち上がりや床面のレベル差を明確に判別できず、新旧関係は不明であった。続いて、先行トレンチ１のほぼ中央部から直交する先行トレンチ２の掘削に入る。先行トレンチ２から出土した遺物も分層せず一括で取り上げた。なお、遺物が集中して出土する層は、床面直上ではなく、遺構埋土の１、２層である。

その後、層位別に竪穴建物跡の埋土掘削を開始する。１層と２層の上位から多量の土器片が出土し、土器片が比較的少ない２層下部を挟んで、非常に硬い床面に達する。掘削中の埋土観察では、新旧の遺構境が明確に捉えれらなかったため、出土遺物は、原則としてＳＢ 1001 の区画ごと層位別に取り上げた。なお、土器片は投棄の方向などを把握できる状況ではないため、遺物出土状態は図化せず、写真撮影に留めた。また、完形に近い土器の取り上げは、接合作業の便を考慮してメモ

ＳＢ 1001 遺物出土状況（北東より）

写真を撮影した。２層上面から出土する土器は、ほかの層から出土した土器よりも、ほぼ完形に復元できる土器が多いと思われる。

床面精査により、本遺構の南東側の半円部分の床面は、北西側より一段低い位置で検出できた。したがって、この段差より南東側の部分をＳＢ1001、北西側をＳＢ1002と認定した。ＳＢ1001の床面ほぼ中央部から炉跡を検出したほか、複数のピットと二重の壁溝がみつかる。内側の壁溝は竪穴拡張前のＳＢ1001（ＳＢ1001Ａ）と想定し、これを切るＰ03･04は、土質の違いから拡張後（ＳＢ1001Ｂ）の柱穴と判断し、Ｐ06も埋土の特徴及び配置からＰ03･04同様拡張後（ＳＢ1001Ｂ）の柱穴と判断した上で、床面施設の検出状況と遺物出土状況を撮影した。１トレンチ北壁面で改めて埋土の観察を行い、ＳＢ1001がＳＢ1002を切ることを確認できた。

ＳＢ1001･1002土層堆積状況（南西より）

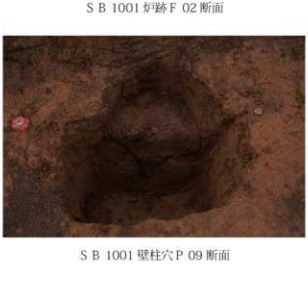
埋土の掘削後、炉跡、ピット、壁溝を調査した。炉跡の直上からは、ほぼ完形に復元できる土器が出土したため、出土状況を図化した。土器を取上げ、炉を４分割し区画ごとに埋土のサンプリングを行いながら長軸方向と短軸方向で断面写真と図面の記録を取り、完掘する。断面観察の結果、切り合いを確認し、南東側の炉跡（Ｆ02）が北西側の炉跡（Ｆ01）へ作り替えていると把握した。どちらの炉跡も底面はよく熱を受け、赤化及び硬化する。埋土には多量の炭が混じる。ピットは、段下げを行った結果、床面の凹凸と誤認したＰ01･23･34･35と、位置関係や形状から壁溝と判断したＰ19を欠番とし、32基を認定した。壁溝はベルトを２か所設定し、埋土及び断面の写真・図化記録を作成した上で完掘した。

竪穴建物跡完掘状況写真撮影後、段下げのままであったピットの掘削を再開した。大形のピットは半裁、小形のピットは床面ごと断ち割り、埋土を観察し、断面写真及び図化記録を作成した。埋土の状況とピットの切り合いや位置関係から、Ｐ07･08はＳＢ1001Ａの柱穴、Ｐ16･21･22･30はＳＢ1002の柱穴であると判断した。また、Ｐ07･08の埋土断面では柱の抜取り痕跡を確認した。

ＳＢ1001炉跡Ｆ02断面

ピットの埋土をすべて掘削した上で完掘状況写真を撮影し、オルソ画像による平面図、単点による断面図を作成した。

さらに、１トレンチ脇に側溝を設置する工事に伴い、ＳＢ1001･1002の北東側範囲を確認した。平面図に竪穴建物跡の範囲を記録し、検出状況を撮影した。出土した遺物は地表面からの深さを記録して取り上げた。なお手掘りによる遺構埋土掘削は実施できなかった。



ＳＢ1001壁柱穴Ｐ09断面

遺構の構造　ＳＢ1001Ａ・Ｂは、長軸6.45ｍ、短軸4.95ｍの規模で、北西から南東方向軸が長い楕円形を呈する。ＳＢ1002は直径3.60ｍの円形を呈す

ると推定し、東側半分はＳＢ 1001 Ａ・Ｂに切られる。竪穴建物跡全体は、西から東に向かい緩やかに傾斜する地形に構築されている。そのため、西側の壁面は遺存状況がよいが、東側に向かい掘り込みが徐々に浅くなる。壁面は全体的に垂直に近いが、わずかに外傾している。

壁溝は１条確認した。幅は 10cm程度、深さは深いところで８㎝程度、浅いところでは５㎝未満で、掘り込みが確認できない箇所もある。この壁溝はＳＢ 1001 Ａのもので、ＳＢ 1001 ＢにはＰ 09 ～ 15・17・18・31・32 の壁柱穴が穿たれている。これらは直径 15cm 以下と小さく、深さは７㎝から 35cm で、底部先端がＶ字を呈するものが多い。構造物を支える柱ではなく、壁板を支える杭の跡と推定する。

床面は全体に硬化するが、東側はわずかに軟らかくなり、凹凸が残る箇所もある。この凹凸を柱穴と誤認したものがある。

炉跡を２基検出した。Ｆ 01 はＦ 02 を切るため、ＳＢ 1001 ＡにＦ 02、同ＢにＦ 01 が伴うものと推測する。

柱穴は 32 基検出した。ＳＢ 1001 Ａの柱穴はＰ 07･08 である。いずれも、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で硬い。柱穴では柱痕を確認した（Ｐ 03・06・07・08）。位置と埋土から、Ｐ 02・05 やＰ 20 もＳＢ 1001 Ａの柱穴であった可能性がある。ＳＢ 1001 Ｂの柱穴はＰ 03･04･06･28･29 であろう。ＳＢ 1001 Ａの壁溝を切るものがあり、埋土もほぼ同じ土質である。形態や規模はＳＢ 1001 ＡのＰ 07･08 と変わらない。

床の寸法は、ＳＢ 1001 Ａが北西－南東方向で約 5.5 m、ＳＢ 1001 Ｂは北西－南東方向で約 6.9 mである。

遺物出土状況等　床面直上から出土した遺物は少ないが、Ｆ 01 直上にほぼ完形に復元できる土器（１、２）が出土したほか、床面や壁溝から石鏃が３点（39、41、43）出土した。

床面からやや浮いた埋土２層上面からは 18 個体分、１層から７個体、遺構検出面からは有孔鍔付土器（36）やミニチュア土器（37）を含む 11 個体が、いわゆる吹上パターンの様相を呈して出土した（４～20、22 ～ 37）。それぞれの土器は、ほぼ横倒しの状態で欠損部分があり、直立や倒立したものはない。また、石鏃は８点（38、40、42、44 ～ 48）、石錐は２点（49、50）、スクレイパー３点（51 ～ 53）、ピエスエスキーユ３点（内２点掲載：54、55）、打製石斧 11 点（内５点掲載：56 ～ 60）、凹石３点（内２点掲載：61 ～ 62）、石錘（64）なども出土した。

炉跡の埋土は３mm メッシュのフルイにかけ、炭化物と土器・石器片を確認した。

調査所見　平坦な床面と複数の柱穴を有し、中央に炉跡があることから判断して、ＳＢ 1001 ＡもＢも竪穴建物跡と判断できる。内側の壁溝とそれに伴う柱穴、Ｆ 02 を含むＳＢ 1001 Ａから、壁、壁柱穴とそれに伴う柱穴、Ｆ 01 を含むＳＢ 1001 Ｂへ拡張した。炉跡直上から出土した土器から判断して、ＳＢ 1001 Ｂの廃絶は縄文時代中期中葉と判断している。検出面から出土した 29 に付着した炭化物の放射性炭素年代測定により、暦年較正年代で 5054-4954cal BP（2 σ 69.6%）という結果を得ている。ほかのトレンチで検出した竪穴建物跡は、いずれも縄文時代中期初頭と想定しており、ＳＢ 1001 はそれらより新しい。埋土中の土器出土状況から、竪穴建物の廃絶後、一定期間を経て遺物の廃棄場所として再利用したことがわかる。本遺構の周辺には土坑が多く分布するが、ＳＢ 1001 ＢやＳＢ 1002 を避けるように分布するため、土坑と竪穴建物跡は同時期に機能していたものと想定する。

ＳＢ 3002（第 10･14･15 図、写真図版 3）

検出位置　Ⅳ B 10・Ｂ 15・Ｃ 06・Ｃ 11（３トレンチ）

調査経過　３トレンチの東端から重機で掘削したところ、トレンチの東寄りのⅣ層から縄文中期初頭の土器片が出土した。当該箇所近辺のⅤ層上面で黒褐色土の円形の落ち込みを確認できたため、縄文時代の竪穴建物跡の存在を想定し、遺構番号ＳＢ 3002 を付けた。なお、本竪穴建物跡の検出面において、平安時代の竪穴建物跡（ＳＢ 3001）の埋土と酷似するピットを複数検出した。これらのピットは平安時代の掘立

柱建物跡（ＳＴ 3001）の柱穴と想定した。

ＳＢ 3002を十字に切るようにセクションポイント（以下「ＳＰ」。）を設定し、ＳＰＡ-Ｂベルトと ＳＰＣ-Ｄベルトを設け、ベルト脇に先行トレンチを設定して床面まで掘削する。落ち込みの範囲が広いため２軒以上の重複を想定したが、検出段階では判断できなかったため、１軒の竪穴建物跡として掘削を行った。先行トレンチ断面および床面の精査中に、本遺構の埋土を掘り込む土坑を７基確認し、ＳＫ 3019、3022 ～ 3027 の遺構番号を付けた。また、ＳＴ 3001 のピットが本遺構の埋土を掘り込み構築されていることも確認した。

ＳＢ 3002 検出状況（北西より）

ＳＢ 3002・ＳＫ 3024 土層断面（南より）

埋土の堆積状況を記録し、埋土を掘削する。埋土は、上下２層に分かれ、１層は径 30 ～ 400㎜程度の礫と径１～ 3㎜程度のローム偽礫を含む締まりが強い黒褐色シルト土、２層は１層よりやや大きめな径５～ 10㎜のローム偽礫を含む締まりが強い暗褐色シルト土で、いずれも炭化物が混在している。

床面精査により、柱穴状の落ち込み６か所とそれより小形の落ち込み４か所、中央が被熱により赤化している大形の落ち込みを１か所確認する。それぞれＰ 01 ～ 06、Ｐ 08 ～ 10、Ｐ 07 と番号を付けた。最終的に、埋土の状況、床面の状態、柱穴の位置から、１軒の竪穴建物跡と判断した。なお、Ｐ 04 の一部は風倒木痕によりかく乱されている。

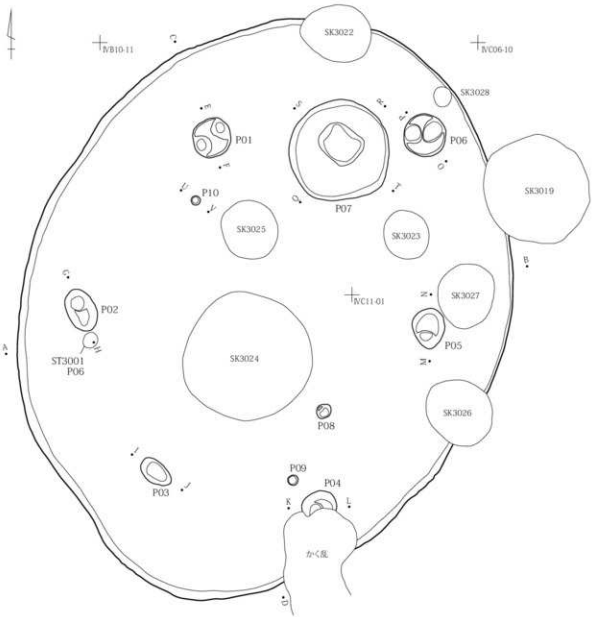
ＳＢ 3002 を切る土坑（ＳＴ 3001、ＳＫ 3019、3022 ～ 3027）とＰ 08 ～ 10 を完掘後、Ｐ 01 ～ 06 は柱痕を検出するため５㎝程度段下げした。Ｐ 07 は上面が赤化しているため、検出状態のまま清掃し、完掘状況を撮影した。Ｐ 01 ～ 06 は平面で柱痕を確認することができなかったため、埋土の状況等を観察するため半裁した。いずれも立ち上がりはほぼ垂直で、底面は二段になる特徴があり、明瞭に下端と中段を構成するものと、凹凸のように、わずかに高低差のあるものに分かれる。柱痕は確認できなかったものの、位置関係や断面形状等から判断して柱穴と考えた。断面を記録後に完掘した。Ｐ 07 はごく浅いが、上面に火床と考えられる被熱面があるため、埋土をすべてサンプリングし３㎜メッシュのフルイに掛けた。結果、炭化物や土器片を確認した。

遺構の構造　ＳＢ 3002 は長軸 9.00 m、短軸 7.25 m の規模で、南北方向に長い楕円形を呈する。壁は外湾気味に立ち上がる。検出面からの掘り込みは浅く、西側は立ち上がりが良く残るが、東側はわずかしか確認できない。検出面から床面まで深いところで 30㎝、浅いところは５㎝程度である。

本遺構はⅤ層中まで掘込まれており、あまり踏み固められていないためか硬化していない。Ｐ 07 上面の被熱箇所以外に火床がないため、これをＳＢ 3002 の炉跡と想定できる。Ｐ 07 は直径 165㎝の円形で、１層が被熱により赤化し、わずかに硬化している。全体はごく浅い掘り込みで、底面近くの３層は極暗赤褐色の締まりが強い粘土質シルトである。底面にはわずかな凹凸があるが、被熱は認められない。

柱穴はＰ 01 からＰ 06 の６か所確認した。平面は楕円形、立ち上がりはほぼ垂直で、底部が二段になる。

床の寸法は、Ｐ 07 の火床中心を通る北北東－南南西の長軸方向が 9.30 m、これに直交する短軸方向が



1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ30 ～ 400mm の礫とΦ1 ～ 3mm のローム偽礫、炭混在
2 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ400mm の礫とΦ5 ～ 10mm のローム偽礫、炭混在

0　(1:60)　2m

第 14 図　縄文時代の遺構図（3）　ＳＢ 3002（1）

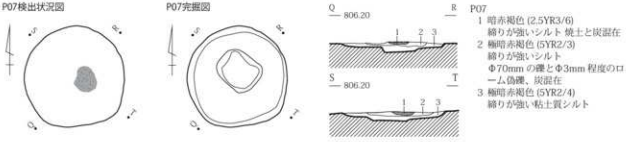
7.45 mである。

遺物出土状況　埋土から縄文時代中期初頭の土器片や石器、石英原石が出土したが、全体として出土量は少ない。土器の中には、前期末葉的な特徴や近畿方面の特徴をもつもの（101、103 ～ 105）がある。Ｐ 07 の２層出土の土器（79）やＰ 04･06 埋土出土の土器（76、91、96）により、ＳＢ 3002 の時期は縄文時代中期初頭と考える。

石器は、床面から石鏃２点（108、109）、柱穴Ｐ 03 の１層から台石（118）が出土した以外は、特徴的な出土状況を見出せなかったため、地区（北東区、北西区、南東区、南西区）及び層位ごとに一括して取り上げた。

上空からみたＳＢ 3002（北西より）

調査所見　明確な６本柱で上屋を架けた縄文時代中期初頭の竪穴建物跡である。炉跡はＰ 07 としたが、ＳＫ 3024 をはじめとした土坑に壊されているのかもしれない。柱穴の配置はＳＢ 1001 と異なるが、上屋の構築方法の違いを反映しているものと考える。本遺構とほぼ同一時期の竪穴建物跡にＳＢ 3003 とＳＢ 4001 があるが、いずれも構造が異なる。ＳＢ 3001 と 4001 に比べると本遺構は大形ではあるが、床面は比較的軟らかく、遺物の出土量は少ない。建物の機能や使用頻度に違いがあったと推定する。



P01
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りが弱いシルト Φ10mm のローム偽礫と炭混在 P 06 の１層と同じ

P02
1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強いシルト Φ30mm の中礫とΦ10mm のローム偽礫混在
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 締りが弱い粘土質シルト Φ10 ～ 50mm のローム偽礫混在
3 褐色 (10YR4/4) 締りが強い粘土質シルト Φ30mm の中礫が混在

P03
1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強いシルト Φ300mm の巨礫と 30mm の中礫が多量に混在し、Φ1 ～ 5mm のローム偽礫と炭が混在
2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強いシルト Φ100mm の大礫とΦ50 ～ 5mm のローム偽礫混在

P04
1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ300mm の巨礫とΦ5mm のローム偽礫、炭混在
2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ50mm のローム偽礫混在
3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが弱いシルト Φ1mm のローム偽礫混在

P05
1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや弱いシルト Φ50 ～ 150mm の大・中礫とΦ3 ～ 50mm のローム偽礫、炭混在
2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫混在
3 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱い粘土質シルト

P06
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りが弱いシルト Φ10mm のローム偽礫と炭混在

P10
1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3mm のローム偽礫混在

第 15 図　縄文時代の遺構図（４）　ＳＢ 3002（２）

なお、Ｐ07の埋土中から出土したクルミ属の炭化物の放射性炭素年代を測定したところ、暦年較正年代で5414-5323cal BP（2σ61.6%）の結果を得た。

ＳＢ3003・3004（第10･16･17図、写真図版４）

検出位置　ⅣＢ05･Ｂ10･Ｃ01･06（３トレンチ）

調査経過　３トレンチの東端から重機で掘削したところ、トレンチの東寄りから縄文中期初頭の土器片が出土し、後にＳＢ3002とする黒褐色土の円形の落ち込みを広範囲に確認した。この落ち込みの北側が３トレンチの外まで広がると考えられるため、朝日村と協議の上で３トレンチ北側を５ｍ拡張したところ、新たに、暗赤褐色土の半楕円形の落ち込みを捉えることができた。

落ち込み範囲内に、幅約45cmの先行トレンチ１を設定して掘削を開始した。これに直交するベルトＳＰＣ-ＤおよびＳＰＥ-Ｆを設定し、その脇の先行トレンチ２と先行トレンチ３を掘削した。先行トレンチ１内の出土遺物は、北西端からベルトＳＰＣ-Ｄまでを先行トレンチ１西、ベルトＳＰＣ-ＤからＳＰＥ-Ｆまでを先行トレンチ１中、ベルトＳＰＥ－Ｆから南東端までを先行トレンチ１東として、層位ごとに取り上げた。

検出時に確認した半楕円形の落ち込みは、北西側よりも南東側の方が暗い状況であった。北西側が南東側を切る２遺構の存在を想定し、ＳＢ3003、3004の遺構番号を付けた。しかし、先行トレンチ１～３の断面には、北西側の竪穴建物跡の壁に相当する明確な立ち上がりは確認できなかった。検出面下60cm程度でⅤ層を基調とする極めて硬い床面を検出したが、北西側と南東側は連続しており、段差等はなかった。

続いて、北西端からベルトＳＰＣ-Ｄまでを１区、ベルトＳＰＥ-Ｆから南東端までを３区、ベルト間を２区として、埋土の掘削に入った。ベルトを残して埋土全体が床面近くまで下がったため、改めて先行トレンチ１の北壁とベルトの断面を観察してみたが、遺構の重複について明確な根拠を見出すことはできず、残存長9.70ｍをはかる大型の竪穴建物跡と認定した。

ベルトを除去して床面を精査したところ、床面から炉跡３か所、円形に近い落ち込みと、西壁100cm程度内側で壁溝を検出した。検出した落ち込みは残らずピットと推定し、Ｐ90まで番号を付けた。ピットは５cm程度段下げし、その状態で完掘写真を撮影した。その後、直径15cm以上のピットは半裁、それ以下のものは床面とともに断ち割り、本遺構に関連する施設か否かを判断して断面を記録した。

３か所ある炉跡のうちＦ01とＦ03は下部にピットがあり、大小のピットは相互に重複しているものが多い。また、西壁の内側で検出した壁溝を切る柱穴状のピットもあることから、本遺構は複数の竪穴建物跡が拡張を繰り返したものと推定した。

ピットの段下げと半裁を終了した時点で、Ｐ30･36･37･39･42･44～60･63～68･70～74･84･85･87は床面の凹みを誤認したことが分かり、欠番とした。また、整理作業の中で、当初の遺構番号を以下のように変更した。

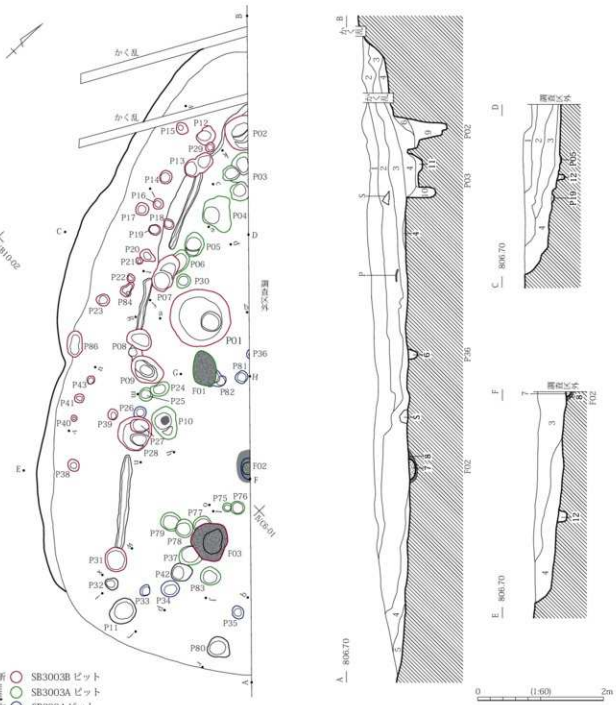
Ｐ61→Ｐ30　Ｐ62→Ｐ36　Ｐ69→Ｐ39
Ｐ86→Ｐ84　Ｐ88→Ｐ86　Ｐ89→Ｐ37　Ｐ90→Ｐ42

最後に、施設をすべて完掘した後、平面の単点測量及び３Ｄ撮影を行い、平面図を作成した。

なお、出土遺物は、調査過程で重複する竪穴建物跡を想定したことにより「ＳＢ3003」、「ＳＢ3004」あるいは「ＳＢ3003･3004」と記載したが、注記段階で「ＳＢ3003」に統一した。

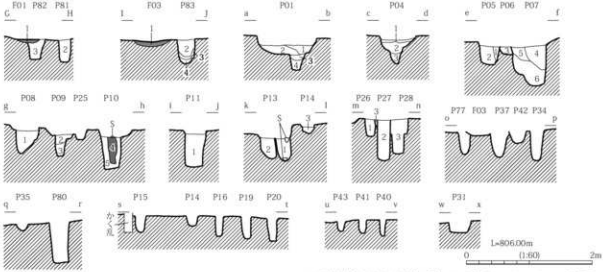
ＳＢ3003検出作業風景（南東より）

遺構の構造　長軸9.70ｍ、短軸3.25ｍの規模で、



1 暗赤褐色 (5YR3/2) 粘土質シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫と炭混在
2 にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト 粘性なし Φ5 ～ 10mm のローム偽礫少量と炭混在
3 暗褐色 (10YR3/4) シルト Φ10 ～ 30mm のローム偽礫と炭混在
4 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘土質シルト Φ5 ～ 10mm のローム偽礫と炭が多量に混在
5 黄褐色 (10YR 5/6) 粘土質シルト 暗褐色シルト質土塊と炭混在
6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト 多量のローム塊と炭混在
7 暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト F 01 埋土と Φ30mm の浮礫が多量に混在している点に特徴あり P 81 の埋土に類似している
　他にローム偽礫と炭混在
8 赤褐色 (5YR4/6) F 01 の火床 ローム (V 層) が被熱していて非常に硬い
9 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト P 02 埋土 多量のローム粒が混在
10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト 締りが強い 分級よい
11 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト Φ5 ～ 10mm のローム偽礫と炭が多量に混在し、暗褐色シルト質粘土も混在
12 壁溝の埋土

第 16 図　縄文時代の遺構図（5）　ＳＢ 3003・3004（1）



F01・P81・82
1　赤褐色 粘土質シルト F01 火床ローム（V層）が被熱し非常に硬い
2　暗褐色 粘土質シルト 円礫が多量に混在している点に特徴あり F02 の埋土7層に類似している 他にローム偽礫が混在する
3　暗褐色 シルト Φ5～20mmのローム偽礫が多量に混在

F03・P83
1　赤褐色 粘土質シルト F03 火床　ローム（V層）が被熱し非常に硬い
2　黒褐色 シルト
3　にぶい黄褐色 シルト
4　黒褐色 シルト

P01
1　極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト Φ50mmのローム偽礫と炭混在
2　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強い粘土質シルト Φ5mmのローム偽礫と炭混在
3　黒褐色 (5YR2/1) 締りがやや弱いシルト 炭混在
4　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強い粘土質シルト Φ30mmのローム偽礫が2層より多量に混在

P04
1　極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや弱いシルト Φ5mmのローム偽礫と炭混在
2　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや弱いシルト Φ3～30mmのローム偽礫と炭混在
3　未注記

P05～07
1　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト P05 埋土
2　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mのローム偽礫と炭混在　P05 埋土
3　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mmのローム偽礫と炭混在　P06 埋土
4　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mmのローム偽礫と炭混在　P07 埋土
5　暗赤褐色 (5YR3/2) 締りが強いシルト Φ1～5mmのローム偽礫と炭混在　P07 埋土
6　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強いシルト Φ50mmのローム偽礫と炭混在　P07 埋土

P08～10・25
1　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強いシルト Φ3～5mmのローム偽礫と炭混在　P08 埋土
2　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強いシルト Φ3～5mmのローム偽礫と炭混在　P09 埋土
3　暗赤褐色 (5YR3/2) 締りが強いシルト Φ10mmのローム偽礫と炭混在　P09 埋土
4　黒色 (5YR1.7/1) 締りが弱いシルト Φ100mmの大課およびΦ5mmのローム偽礫が混在　柱痕　P10 埋土
5　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mmのローム偽礫と炭混在　P10 埋土

P11
1　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mmのローム偽礫と炭混在

P13・14
1　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mmのローム偽礫と炭混在　P13 埋土
2　暗赤褐色 (5YR3/2) 締りが強いシルト Φ3mmのローム偽礫混在　P13 埋土
3　極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト Φ50mmのローム偽礫混在　P14 埋土

P26～28
1　極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト Φ50mmのローム偽礫混在　P26 埋土
2　黒色 (5YR1.7/1) 締りが弱いシルト Φ5mmのローム偽礫が混在　P27 埋土
3　極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mmのローム偽礫と炭混在　P28 埋土

第17図　縄文時代の遺構図（6）　S B 3003・3004（2）

北西から南東軸が長い楕円形と推定する。本遺構は、S B 3004→S B 3003の順番に構築されたと推定する。さらにS B 3003は、ピットに切り合うものが多く認められ、建て替えの可能性を想定できる。建て替え前をS B 3003 A、建て替え後をS B 3003 Bとする。

壁は、北西側から西側にかけての掘り込みが比較的深く60cm程度あるが、南側に向かい浅くなり、南東側では掘り込みを確認することができない。壁溝は、壁の内側約100cmのところで断続的に延びている。北西側の壁と壁溝の間にテラス状の高まりが残ること、いくつかのピットに壊されていることから、壁溝は、S B 3003 Aの施設と考える。

床面は、壁溝から中心部にかけてほぼ平坦で、踏み固められかなり硬化する。一方、壁溝の外側は、北西側のテラス状の高まり部分を含めて軟らかい。

炉跡は、F 01とF 02、F 03の3か所検出した。いずれも長径60cm内外の不整円形である。F 02は、

７層に赤褐色シルトが充満し、底面は被熱し非常に硬い。Ｆ 01 の底面でＰ 82 を、Ｆ 03 の底面でＰ 77･78 の落ち込みを検出したため、両者は新しく構築されたＳＢ 3003 の炉跡であったと推定する。配置や炉跡に切られるピットとの関係からＦ 01 はＳＢ 3003 Ａの炉跡、Ｆ 03 がＳＢ 3003 Ｂの炉跡と想定する。また、Ｆ 02 の７層には径 30mm 前後の円礫が多量に混在し、Ｐ 81 の２層と共通する。

ＳＢ 3003 台石出土状況

柱穴は、53 か所認定した。Ｐ 14 ～ 23･29･38 ～ 41･43･84･86 は、平面・断面の形状と検出位置から判断して、ＳＢ 3003 Ｂの壁柱穴と考えた。壁溝を切るＰ 02･07 ～ 09･13･27 ～ 29･31 とＰ 11･80 は、極暗赤褐色の締まりが弱いシルトが埋土である点が共通しており、ＳＢ 3003 Ｂに伴う柱穴と想定した。壁溝の内側に並ぶＰ 03 ～ 06･10･24･25･30 とＰ 75･76、Ｐ 77 ～ 79、Ｐ 37･42･83 は、ＳＢ 3003 Ｂの柱穴の埋土とも共通する要素が多いが、位置関係から判断して、一段階古い竪穴建物跡ＳＢ 3003 Ａの柱穴と考えた。さらに、Ｐ 26、Ｐ 33 ～ 36、Ｐ 81･82 は、最古段階の竪穴建物跡ＳＢ 3004 に伴うと想定した。

なお、床面の寸法は、最終段階のＳＢ 3003 Ｂの場合、北西―南東の長軸が 9.70 m（推定）である。

Ｆ 01 の北西隣で検出したＰ 01 は、直径 95㎝の円形を呈し、底面東寄りに柱穴状の落ち込みがある。埋土は、ＳＢ 3003 Ｂの柱穴に埋まる土と共通するため、同遺構の埋没とともに埋まったと考える。ピット底面から深鉢形土器の口縁部が潰れた状態で出土した。

遺物出土状況　北西部のテラス上から台石（195）、Ｆ 01 の上面から凹石（194）、Ｐ 01 から深鉢形土器口縁部（166）、Ｐ 07･11･86 や壁溝から土器片（134、136、139、150、154）が出土した。また、埋土中からは小さな焼成土塊（203）や棒状土製品２点（201、202）が出土したほか、石鏃２点（内１点掲載：183）、打製石斧６点（内４点掲載：186 ～ 189）、凹石・敲石９点（内５点掲載：190 ～ 194）等の石器が出土している。Ｆ 01 ～ 03 の埋土は３mm メッシュのフルイにかけ、炭化物と土器・石器片を確認した。

調査所見　本遺構は、検出時に竪穴建物跡が重複していると想定して調査を行ったが、埋土の断面観察や床面精査等では明確に遺構の範囲を確定することができなかった。最終的には、整理作業において、竪穴建物全体の形状、壁溝や柱穴、壁柱穴の位置から、ＳＢ 3004 →ＳＢ 3003 Ａ（ほぼ同一場所での建て替え１回）→ＳＢ 3003 Ｂ（ほぼ同一場所での建替え１回）という変遷を想定した。３か所で検出した炉跡は、Ｆ 02 が位置関係からＳＢ 3004 に伴い、Ｆ 01 がＳＢ 3003 Ａ、Ｆ 03 はＳＢ 3003 Ｂに構築されたと想定した。いずれにせよ、柱穴と炉跡を伴うことから、縄文中期初頭の竪穴建物跡と考えることができる。２区３層から出土した土器片（180）に付着した炭化物の放射性炭素年代測定により、暦年較正年代で 5584-5476cal BP（２σ 95.4%）という結果を得た。

なお、出土遺物は、調査経過でも触れたとおり、遺構調査の段階で、ＳＢ 3003 に伴うものか、あるいはＳＢ 3004 か確定できず「ＳＢ 3003･04」等として取り上げてきたが、一部の施設から出土したものを除き、最終段階のＳＢ 3003 Ｂに帰属するものとした。

ＳＢ 4001（第 11・18 図、写真図版５）

検出位置　Ⅳ A 19・Ａ 20・Ａ 24・Ａ 25（４トレンチ）

調査経過　４トレンチの東端から重機で掘削したところ、極暗赤褐色土の中から縄文中期初頭の土器片が出土した。周辺を精査したところ、Ⅳ A 24 から頭骨片が出土（のちに古代の墓坑ＳＫ 4007 と認定）した

ほか、土坑（ＳＫ 4021 ～ 4028）を検出した。これらの土坑の半裁を進める中で、土坑壁外に縄文土器片があることを確認できたため、Ⅳ A 19・A 20・A 24・A 25 辺りは縄文中期初頭の竪穴建物跡の埋土で、それを切る古代の土坑が複数存在すると判断した。ＳＫ 4007 の頭骨を取り上げて周辺を再精査し、竪穴建物跡を認定し、ＳＢ 4001 の遺構番号を付けた。

４トレンチの北壁に沿って本遺構の先行トレンチ１を、東壁に沿って先行トレンチ２を設定し、掘削を行った。先行トレンチ内の遺物は、本遺構の埋土を覆うⅣ層中からの出土が多く、埋土からの出土は比較的少ない。先行トレンチ１及び２から出土した遺物の多くは、Ⅳ層中のものと考えてよい。

続いて、本遺構内を北側から１ｍごとに１～４区と任意の区割をし、区画ごとに掘削を行ったところ、西壁側に北から南にかけてテラス状の高まりを確認できた。埋土３層にはローム偽礫が混在し、炭化物が多量に混在している。これは埋戻しかもしれないが、１層は自然堆積と推定する。南壁際の３層は三角堆積を呈する。

埋土掘削中に、１区のテラス部分から大型の土器片２個体（461･462）と石棒（458）が出土した。土器片周辺とそれ以外の埋土との比較から、不確定ながら、土器片はＳＢ 4001 内の埋土ではなく、別の遺構に伴うのではないかと想定し、周囲を再度精査した結果、ＳＢ 4001 を切る土坑２基を認定し、ＳＫ 4042 とＳＫ 4043 の遺構番号を付けた。発掘と整理作業時の検証により、大形土器片はＳＫ 4042 に、石棒はＳＫ 4043 に伴うと判断した。また、いずれも土坑底面がＳＢ 4001 のテラス床面を掘り抜いていた。

続いて床面を精査し、炉跡を１か所（Ｆ 01）検出したほか、ほぼ円形の落ち込みを 10 か所（Ｐ 01 ～ 10）確認したが、整理作業時の検証により、Ｐ 09 を炉跡（Ｆ 02）に変更した。すべての落ち込みについて、柱痕の有無を確認するため約５㎝段下げしたが、明らかに柱痕と認定できるものはなかった。

最後にＰ１～Ｐ 10 を半裁し、埋土の精査を行った上で断面撮影と断面図作成を行い完掘する。竪穴建物跡全体の単点測量を行い、平面図を作成した。

遺構構造　長軸 5.30 ｍ、短軸 3.70 ｍの規模である。楕円形を呈すると推定する。西壁はテラス床面から緩やかに立ち上がる。ＳＫ 4040 やＳＫ 4042・ＳＫ 4043 と重複する箇所の立ち上がりは緩やかである。南端（ＳＰ C-D のＤ寄り）壁面の立ち上がりは明瞭である。

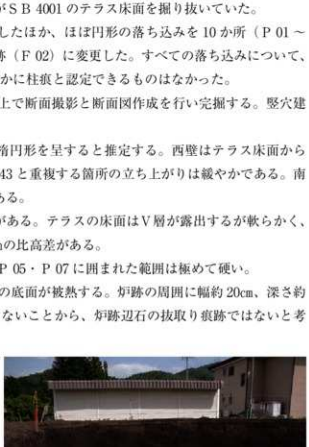
壁溝はない。西壁に沿って幅 50 ～ 100㎝のテラスがある。テラスの床面はＶ層が露出するが軟らかく、東に向けて緩やかに傾斜している。床面とは、約 10㎝の比高差がある。

床面は全体に平坦で凹凸は少ない。Ｐ 01・Ｐ 03 ～Ｐ 05・Ｐ 07 に囲まれた範囲は極めて硬い。

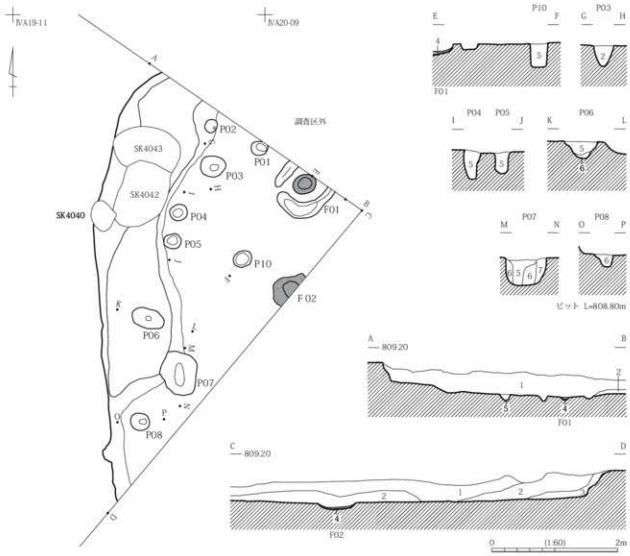
炉跡Ｆ 01 は、短径 30㎝程度の楕円形で、掘り込みの底面が被熱する。炉跡の周囲に幅約 20㎝、深さ約 10㎝の溝が巡っている。付近に該当する礫がまったくないことから、炉跡辺石の抜取り痕跡ではないと考えるし。しかし、溝の機能・用途を明らかにすることはできなかった。炉跡Ｆ 02 は長径 65㎝の不正楕円形で、深さは 10㎝程度である。

Ｐ 03 ～ 05･07･10 は、断面形状や埋土の共通性、深さから柱穴と考えるが、Ｐ 10 は位置的に不自然ではある。Ｐ 01･02･08 は、深さから柱穴には不向きであり、テラスで検出したＰ 06 も、位置や深さから柱穴とは認定できない。

遺物出土状況等　調査経過で述べたとおり、ほとんどの遺物が埋土上層の包含層から出土しており、床面直上や施設内から出土したものはない。



ＳＢ 4001 ４トレンチ東壁土層堆積状況（北西より）



1 暗赤褐色 (5YR3/2) シルト Φ1 ～ 3 のローム偽礫と炭混在
2 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト Φ1 ～ 3m のローム偽礫と多量の炭混在
3 褐色 (10YR4/6) シルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫が多量に混在
4 暗赤褐色 (5YR3/2) シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫と炭混在
5 暗褐色 シルト Φ3mm のローム偽礫混在
6 褐色 シルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫多量に混在
7 暗灰黄色シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫混在

第 18 図　縄文時代の遺構図（7）　ＳＢ 4001

埋土からは、漆付きの土器（237）や種実圧痕が付く土器片（285）が出土した。その他、ミニチュア土器２点（298･299）、スクレイパー３点（320 ～ 322）、石匙３点（317 ～ 319）、打製石斧 12 点（内８点掲載：325 ～ 332）、凹石・敲石 10 点（内２点掲載：334、335）、石皿・台石（336、337）等が出土した。

炉跡Ｆ 01 の埋土は、３mm メッシュのフルイにかけ、炭化物と極小の土器・石器片を確認した。

調査所見　柱穴や炉跡があることから、上屋を架けた縄文中期初頭の竪穴建物跡と考える。埋土から出土した土器片（257）に付着した炭化物の放射性炭素年代測定により、暦年較正年代で 5193-5051cal BP（2 σ 68.7%）という結果を得た。

西壁際でみつかった土坑のうち、ＳＫ 4040 ～ 4043 はＳＢ 4001 より新しい。

（２）土坑　焼土跡（第９表）

81 基を検出した土坑の方向は長径の向きを示し、北から東へ傾く場合はＮＥ - ＳＷ、西に傾く場合はＮＷ - ＳＥとした。長径及び短径は、それぞれ平面図上端実線の最大及び最小値である。底面の長さは、下端の最大値を記し、深さは、断面図の上端測点間を結んだ線分から底面までの垂線の最大値とした。なお、計測が困難な場合は、想定する最大・最小値をカッコ内に記した。また、平面形と断面形は、以下の基準に従って分類した。

１トレンチ　ＳＫ 1001 ～ 1004･1006･1008･1009･1012 ～ 1021･1023 ～ 1036　ＳＦ 1001

（第９･19･20 図、写真図版６）

調査経過　重機でⅣ層下部まで掘削し、Ⅴ層上面で遺構検出を行い、土坑と判断したものにＳＫ 1001 ～ 1036、焼土跡にＳＦ 1001 の遺構番号を付した。土坑については５㎝程段下げを行い、その結果ＳＫ 1005･1007･1010･1011・1022 は遺構ではないと判断して欠番とした。

各土坑の埋土を半裁し、断面観察の後撮影した。これらの断面測量が終了した順に完掘した。が、ＳＫ 1016 は土坑が埋まる過程で土器が遺棄されたと想定できたため、遺物出土状況を撮影した。

最後に、委託測量による単点図から平面図を作成し、調査を完了した。

ＳＫ 1003･1016･1020･1024･1025･1032　平面は円形、楕円形、卵形とさまざまだが、短径 60㎝以上、深さ 30㎝以上で、断面が箱形ないし台形の土坑である。ＳＫ 1020 は底面に段差がある。埋土は、ＳＫ 1025 を除き２～３層で、いずれも基本層序Ⅳ層の土を基調にしている。礫やローム偽礫が混在する点はＳＫ 1031･1034 と同様である。

ＳＫ 1031･1034　平面形はＳＫ 1031 が円形、ＳＫ 1034 は楕円形と異なるが、両者とも断面形が袋形を呈する。埋土は複層で、いずれもⅣ層の土を基調としている。礫やローム偽礫、混在する炭の大きさや量の違い、色調の違いから分層を行った。また、ほとんどの層は、混在するローム偽礫の大きさが 20㎜未満と小さく、淘汰が良いため、自然に堆積したものと想定する。

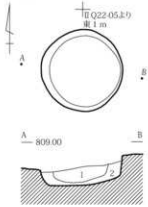
ＳＦ 1001　平面形は長径 102cm、短径 100㎝の不整形で、深さは 12㎝である。浅い土坑に、炭化物が多量に混じる極暗赤褐色土が堆積したものであろう。調査では焼土跡としたが、埋土に炭化物が混じることを除けば、ほかの断面形が台形を呈する土坑と大きな違いはない。

遺物出土状況等　遺物の多くは、埋土からの出土であり、底面から出土した遺物は少ない。土器は、ＳＫ 1016 から中期中葉の深鉢の破片（342）、ＳＫ 1031、ＳＫ 1034 から中期初頭の深鉢の破片（353、355）が出土している。ＳＫ 1024 の出土の土器片（351）は、ＳＫ 1025（352）の土器片と接合した。石器は、ＳＫ 1021 から打製石斧（349）、

ＳＫ 1031 埋土断面

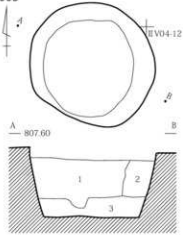
ＳＫ 1016　1 層土器出土状況

SK1001



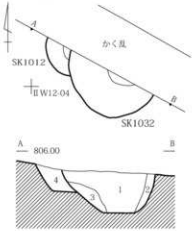
1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
2 暗赤褐色 (5YR3/2) 締りが強い粘土質シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫混在（1 層より少ない）

SK1003



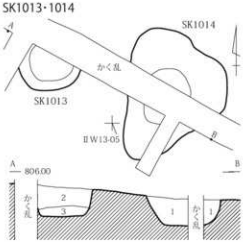
1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや弱いシルト Φ3 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在
2 黒褐色 (5YR2/2) 締りが強いシルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫混在
3 暗赤褐色 (5YR3/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5mm 程度のローム偽礫混在

SK1012・1032



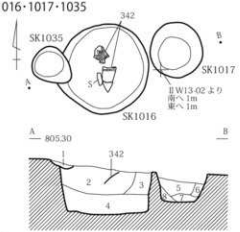
1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ5 ～ 50mm のローム偽礫と炭混在
2 褐色 (10YR4/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5 ～ 50mm のローム偽礫混在
3 褐色 (10YR4/4) 締りがやや強い粘土質シルト 炭混在
4 褐色 (10YR4/4) シルト Φ3 ～ 50mm のローム偽礫と炭混在

SK1013・1014



1 5YR2/3 極暗赤褐色 Φ3 ～ 10mm ローム偽礫を含む締りがやや強いシルト 炭混在
2 5YR2/4 極暗赤褐色 Φ1 ～ 3mm ローム偽礫を含む締りがやや弱いシルト 炭混在
3 5YR2/3 極暗赤褐色 Φ1 ～ 3mm ローム偽礫を少量含む締りが強いシルト 炭混在

SK1016・1017・1035



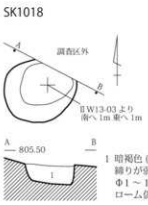
SK1035
1 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りがやや弱い粘土質シルト 1 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在

SK1016
2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ6mm の礫とΦ1 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在
3 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ6mm の礫とΦ3 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在
4 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ40mm の礫とΦ1 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在

SK1017
5 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強いシルト Φ4mm の礫、Φ1 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在
6 暗赤褐色 (5YR3/6) 締りがやや強い粘土質シルト Φ20mm の礫とΦ5mm のローム偽礫混在
7 黒褐色 (5YR2/2) 締りが強いシルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
8 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト

SK1020
1 極暗赤褐色 (5YR2/3) シルト Φ10mm の礫とΦ1 ～ 5mm のローム偽礫、炭混在
2 暗褐色 (10YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ3 ～ 30mm のローム偽礫と炭混在
3 黒褐色 (10YR2/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5mm のローム偽礫混在

SK1018

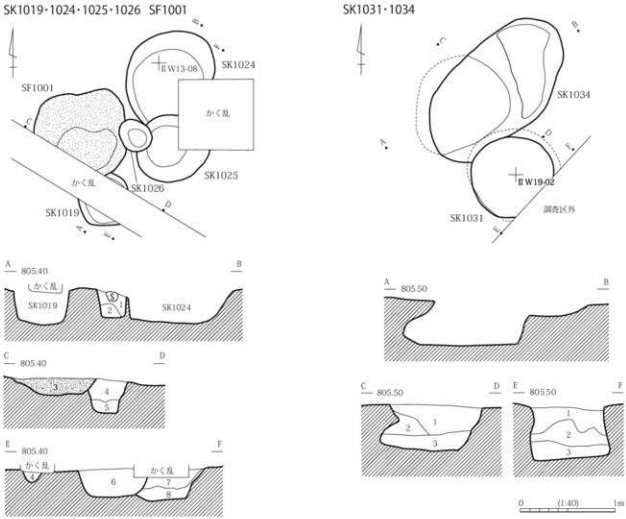


1 暗褐色 (10YR3/4) 締りが弱いシルト Φ1 ～ 15mm のローム偽礫と炭混在

SK1020・1036

0　(1:40)　1m

第 19 図　縄文時代の遺構図（8）　1 トレンチＳＫ（1）



1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強いシルト Φ140mm の大礫、Φ1 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在
2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強いシルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫と炭混在
3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強いシルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫と多量の炭混在
4 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土質シルト Φ30mm の礫、Φ1 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在
5 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが弱いシルト Φ3 ～ 5mm のローム偽礫少量と炭混在
6 暗褐色 (10YR3/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在
7 暗赤褐色 (5YR3/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 15mm のローム偽礫と炭混在
8 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ3 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在

SK1034
1 黒褐色 (5YR2/2) シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫と炭混在
2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土 Φ5 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在
3 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在

SK1031
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ10 mm の礫とΦ5 ～ 10mm のローム偽礫、炭混在
2 黒褐色 (5YR2/1) 締りがやや強いシルト Φ5 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在
3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5 ～ 20mm のローム偽礫と炭混在

第20図　縄文時代の遺構図（9）　1トレンチＳＫ（2）

ＳＫ 1019･1021 から石鏃（346、347）、ＳＫ 1031 から台石（354）が出土した。

調査所見　ＳＫ 1031･1034 は、土坑の規模や断面形が袋状を呈することから貯蔵穴と考える。ＳＫ 1003･1016･1020･1024･1025 も、土坑の規模や形状から貯蔵穴と想定する。埋土から大形の土器片が出土したＳＫ 1016 と３トレンチで検出したＳＫ 3025 は、土坑の規模と形状、遺物の出土状況が類似する。

３トレンチ　ＳＫ 3001 ～ 3003･3006･3008･3009･3011･3019･3022 ～ 3027（第 10･21 ～ 23 図､写真図版 7）

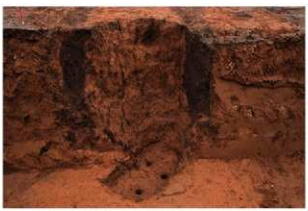
調査経過　トレンチの西側からⅣ層下部まで重機による掘削を行い、Ⅴ層上面で検出を行った。土坑状の落ち込みは、５㎝程段下げを行って確認し、土坑と認定できたものに、ＳＫ 3001 ～ 3022 の遺構番号を付けた。ただし、ＳＫ 3004･3005・3020 は、平面形が不整形で、埋土は再堆積のロームと、その間に黒色土が流れ込み､地山との境界が不明瞭であったため風倒木、ＳＫ 3010･3012･3016 は、遺構と地山との境界が不明瞭であったため土坑ではないと判断し、欠番とした。また、ＳＫ 3015･3021 はＳＴ 3002 の柱穴に組み込み、ＳＫ 3007･3013･3014･3017･3018 は埋土の特徴から古代の土坑と認定した。その後、ＳＢ 3002 の先行トレンチ断面及び床面で、ＳＢ 3002 の埋土上から掘り込まれた土坑５基を確認し、ＳＫ 3023 ～ 3027 を付けた。

続いて、大形の土坑は半裁し、半裁が難しい小形の土坑は断ち割り、埋土観察及び断面図作成と撮影を行った。ＳＫ 3003 は、掘り込みが深いため、上半部を記録後、周囲を重機で断ち割って作業スペースを確保してから、底面までの調査を行った。

ＳＫ 3001　長径 270㎝、短径 195㎝の楕円形を呈する大形の土坑だが、掘り込みは浅く、検出面からの深さは 12㎝程度である。壁は緩やかに外湾するように立ち上がる。底面はあまり硬化していない。

ＳＫ 3002･3006･3008･3011･3023　平面形は、ＳＫ 3002 が長径 120㎝、短径 90㎝の卵形、その他は直径 80 ～ 100㎝前後の円形を呈する。検出面から底面までの深さは、ＳＫ 3002 が 19㎝、その他は 35 ～ 48㎝である。壁の立ち上がりは、直線的でわずかに外に開く。底面は、平坦で硬く締まっている。ＳＫ 3002 が浅いのは、上部を削平されたためであり、これらの土坑は規模や形状がよく似る。

ＳＫ 3003　平面形は長径 133㎝、短径は推定 95㎝の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 118㎝で、底面から中端までは垂直に立ち上がり、中端から上端までは直線的に外に開くように立ち上がる。底面は平坦で硬く締まっており、直径５㎝程、深さ 15 ～ 30㎝の逆茂木痕が３か所ある。



半裁したＳＫ 3003 底面に残る逆茂木痕

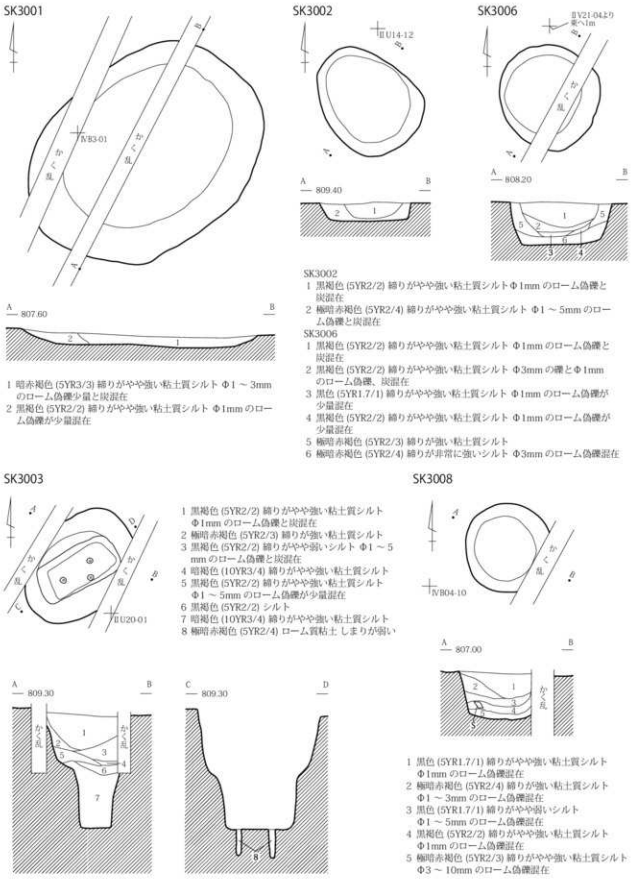
ＳＫ 3009　平面形は、直径 174㎝の円形を呈する。やや大形の土坑である。検出面からの深さは 28㎝で、壁は外湾するように立ち上がる。底面は平坦で硬く締まっている。

ＳＫ 3013　平面形は、直径 37㎝の円形を呈する。検出面からの深さは 16㎝で、壁は外湾するように立ち上がる。

ＳＫ 3019　平面形は、直径 175㎝の円形を呈する。大形の土坑である。検出面からの深さは 50㎝で、壁は外に大きく開くように立ち上がる。底面は平坦で硬く締まっている。

ＳＫ 3022･3025･3026･3027　平面形は、長径 100 ～ 120㎝前後、短径 80 ～ 100㎝前後の卵形を呈する。検出面からの深さはＳＫ 3026 が 25㎝と浅く、それ以外は 40 ～ 70㎝程である。ＳＫ 3026 がほかよりも浅いのは、上部が削平されているためと考える。壁は直線的にわずかに外に開くように立ち上がる。ＳＫ 3025 の埋土からは土器片や石器が、他の土坑に比して多量に出土しており、投棄を思わせる状況である。

ＳＫ 3025　５層土器出土状況



1 暗赤褐色 (5YR3/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫少量と炭混在
2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫が少量混在

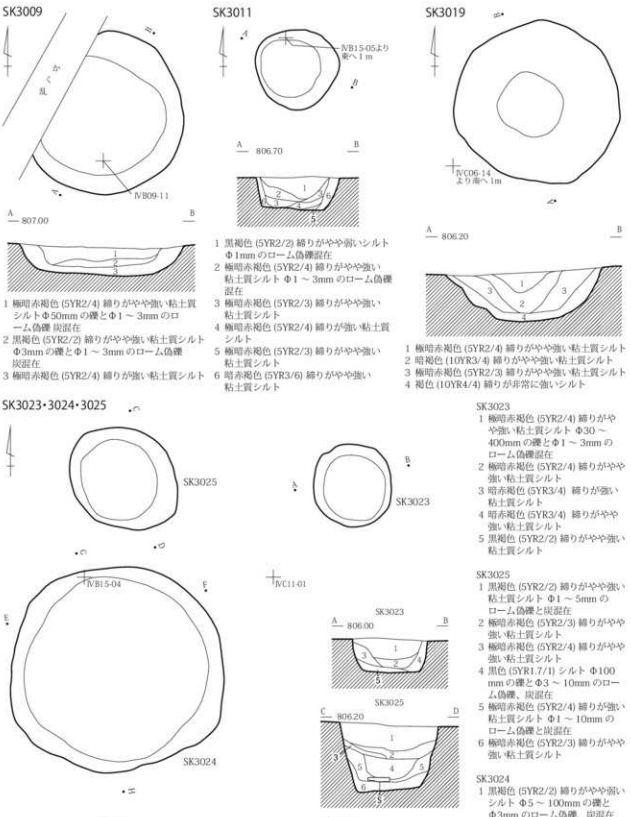
SK3002
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫と炭混在

SK3006
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ3mm の礫とΦ1mm のローム偽礫、炭混在
3 黒色 (5YR1.7/1) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫が少量混在
4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫が少量混在
5 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土質シルト
6 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが非常に強いシルト Φ3mm のローム偽礫混在

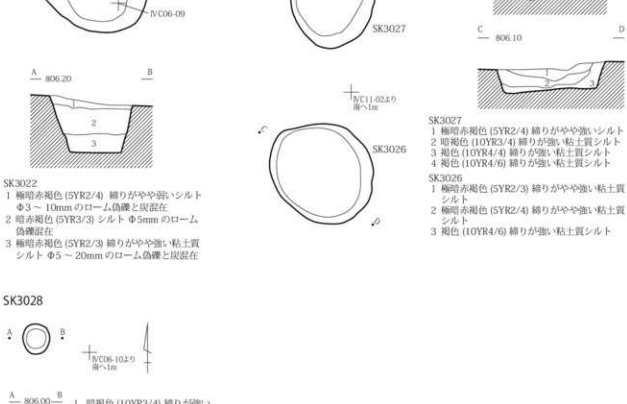
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土質シルト
3 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1 ～ 5 mm のローム偽礫と炭混在
4 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト
5 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫が少量混在
6 黒褐色 (5YR2/2) シルト
7 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト
8 極暗赤褐色 (5YR2/4) ローム質粘土 しまりが弱い

1 黒色 (5YR1.7/1) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫混在
2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強い粘土質シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫混在
3 黒色 (5YR1.7/1) 締りがやや弱いシルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫混在
4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫混在
5 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ3 ～ 10mm のローム偽礫混在

第 21 図　縄文時代の遺構図（10）　３トレンチＳＫ（１）



第 22 図　縄文時代の遺構図（11）　３トレンチＳＫ（２）



第 23 図　縄文時代の遺構図（12）　３トレンチＳＫ（３）

ＳＫ 3024　平面形は、直径 225㎝程度の円形を呈する。検出面からの深さは 42㎝、底面は平坦で硬く締まっている

ＳＫ 3028　平面形は、直径 31㎝の円形を呈する。検出面からの深さは 31㎝で、壁は外湾気味に立ち上がる。

遺物出土状況等　ＳＫ 3001 から特殊凸帯文と、底部に５か所の押圧がある鉢形土器の、胴部から底部破片が出土した（357）。ＳＫ 3024 の埋土からは、縄文時代中期初頭の深鉢形土器胴部破片（368 ～ 385）と、ＳＢ 4001 の埋土から出土したものと同様の焼成土塊８点（389 ～ 396）が出土したほか、石鏃３点（内２点掲載：386、387）が出土している。また、ＳＫ 3025 からは縄文時代中期初頭の土器を主体としながら、三角印刻文や竹管を用いた文様をもつ前期的な土器が出土した（397 ～ 413）。ほかに石皿（415）や敲石（377）も出土した。

調査所見　以上の土坑埋土はⅣ層を基調とするため、縄文時代に帰属すると判断する。縄文時代の遺構埋土にはローム偽礫や炭が混じるものが大半であるが、ローム偽礫は小さく、炭自体は基本層序にも多く混じっている。また、埋土は比較的淘汰が良く、「三角堆積」があることから、自然に埋没したものと推定する。ただし、ＳＫ 3025 のように埋土中に土器片が投棄されたようなものは、人為的に埋め戻された可能性もある。

ＳＫ 3003 は、断面形や深さ、底面の逆茂木痕により、陥し穴と判断する。加曽利Ｂ式土器が出土しており。

後期後葉に埋没したものであろう。ＳＫ 3006･3008･3011･3022 ～ 3027 は、土坑の規模や形状から貯蔵穴と想定している。平面形の大きさに対して、深さが浅いＳＫ 3001･3009･3019 の機能・用途は明らかにできなかった。

４トレンチ　ＳＫ 44024 ～ 4026･4028 ～ 4032・4034 ～ 4045（第 11･24･25 図、写真図版８）

調査経過　４トレンチの東端から重機で掘削した。これらの土坑は、のちに平安時代の土坑と判明する（第２節で詳述）。

Ｖ層上面で再検出を行い、縄文時代のＳＢ 4001 及びＳＫ 4022 ～ 4026・4028 ～ 4038 を確認した。続いて、ＳＢ 4001 の埋土掘削中にテラス部分の埋土中から大型土器片２個体分と石棒が出土し、精査によりこれらを伴うＳＫ 4040･4042･4043 を検出した。さらに、ＳＢ 4001 西壁外の検出面を精査し、ＳＢ 4001 に隣接するＳＫ 4039･4041 ～ 4045 を確認した。ＳＢ 4001 と接するＳＫ 4041 は側面が底面に向けて外側に膨らんでいるが、精査の結果、最大径の上部にあるＳＢ 4001 の床面は貼り床ではないため、ＳＢ 4001 の方が古いと判断した。

ＳＫ 4024 ～ 4026･4028･4029･4034･4038･4039･4041･4044･4045　平面形は円形、隅丸方形、楕円形、卵形と多様だが、楕円形ないし卵形が多い。断面形はＳＫ 4024･4039･4044 が袋状を呈する。また、ＳＫ 4045 は底面に段差がある。直径は最大がＳＫ 4044 の 153㎝で、最小はＳＫ 4024 の 60㎝、深さは 28 ～ 67㎝とさまざまである。埋土は底面や壁際は自然堆積と推定するが、ＳＫ 4039 の２層は、ローム偽礫や炭が多量に混在しており、埋め戻されたと考える。

ＳＫ 4032・ＳＫ 4042・ＳＫ 4043　平面形は楕円形ないし卵形を呈する。ＳＫ 4032 は南側の底面に段差がある。深さは全体に 20㎝以下と浅い。しかし、ＳＫ 4042 とＳＫ 4043 はＳＢ 4001 の埋土中で確認しており、掘り込み面は、本来もう少し高い位置にあったと考える。

遺物出土状況等　ＳＫ 4024 ～ 4026･4028･4029･4032･4034･4038･4039･4041･4042･4044･4045 から中期初頭の土器片が出土している。ＳＫ 4032 では、中期初頭深鉢形土器の完形品（437）が口縁を北向きに横倒しの状態で出土している。また、ＳＫ 4042 からは同時期の大破片（461、462）が出土したほか、砥石（463）が出土した。また、ＳＫ 4025 から石匙（428）と尖頭器の先端部（427）等、ＳＫ 4028 から敲石（434）と石錐（433）、ＳＫ 4029･4039･4041･4044 では敲石・凹石（436、460、469）、ＳＫ 4043 から敲石（467）と石棒（468）、ＳＫ 4045 から打製石斧（472）と磨製石斧（473）が出土した。

ＳＫ 4039 埋土断面

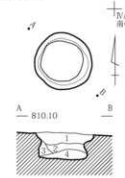
ＳＫ 4042･4043 遺物出土状況

調査所見　ＳＫ 4024・4028・4039・4041・4044 は、土坑の規模や断面形が袋状を呈することから貯蔵穴と判断する。ＳＫ 4025・4026・4029・4034・4038・4045 は、土坑の規模や形状から貯蔵穴と想定する。ＳＫ 4032・4042・4043 は、土坑の形状や深さ、遺物とその出土状況が、他の土坑に比べ特殊である。墓坑の可能性も想定する。

５トレンチ　ＳＫ 5001 ～ 5009（第 11・26 図、写真図版８）

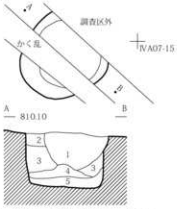
調査経過　５トレンチの東端から重機で掘削したところ、Ⅳ層中から縄文中期初頭の土器片が出土した。精査したところ、Ｖ層上面において黒褐色

SK4024



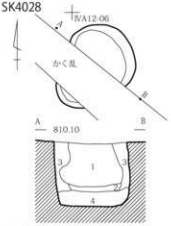
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ローム偽礫が多量に、炭が僅かに混在
2 暗褐色 (10YR3/4) ローム偽礫、炭混在
3 褐色 (10YR4/6) ローム偽礫が多量に、炭が僅かに混在
4 暗赤褐色 (5YR3/2) ローム偽礫混在

SK4025



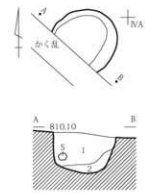
1 にぶい黄褐色土（10YR4/3）ローム偽礫・炭粒混じる
2 褐色土（10YR4/6）
3 暗褐色土（10YR3/4）ローム偽礫多量に混じる
4 暗褐色土（5YR3/2）
5 黒褐色土（5YR3/1）粘性あり

SK4028



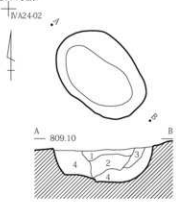
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在
2 暗褐色 (10YR3/4) シルト Φ1 ～ 10 mm のローム偽礫と炭混在
3 褐色 (10YR4/6) シルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在
4 暗赤褐色 (5YR3/2) ややや粘性のあるシルトΦ1 ～ 10mm のローム偽礫と炭混在

SK4026



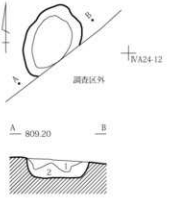
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ10 ～ 30mm のローム偽礫と大礫が混在
2 黒褐色 (5YR2/2) 粘土質シルト

SK4029



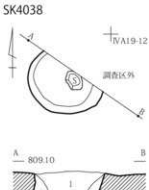
1 暗褐色 (10YR3/4) シルト 炭混在
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ10 ～ 30mm のローム偽礫混在
3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) さらさらしたシルト
4 褐色 (10YR4/6) ややや粘性のあるシルト

SK4037

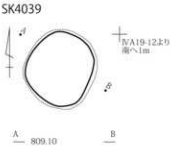


1 暗褐色 ローム粒・炭化粒混
2 暗黄褐色 ローム粒多混

SK4038



SK4039

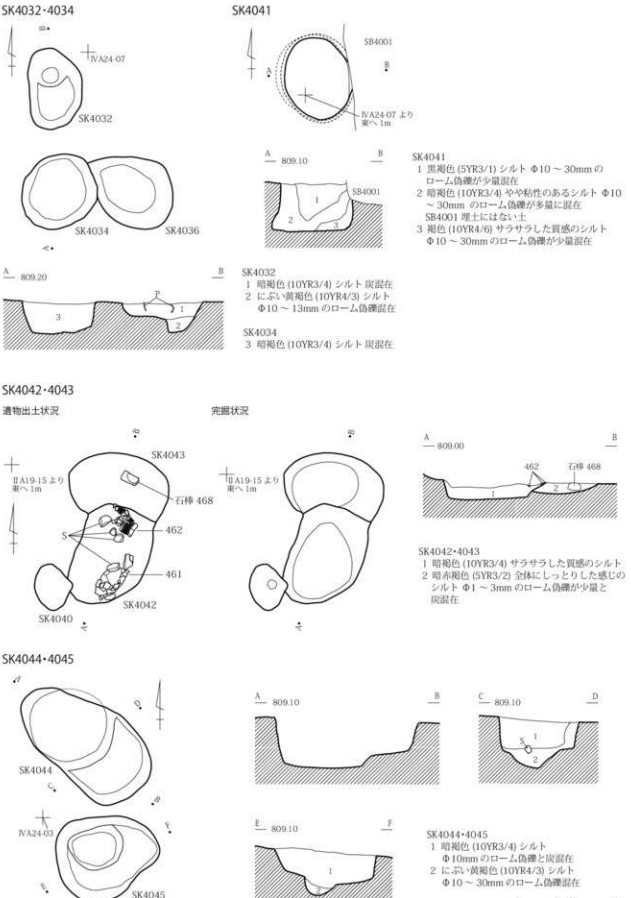


SK4038
1 暗褐色 SB4001 の２層より色調は暗いシルト ローム偽礫や炭化物が混在する
2 暗黄褐色 シルト ローム偽礫が多量に混在するが、炭化物は少ない

SK4039
1 暗褐色 (10YR3/4) シルト Φ1 ～ 10mm のローム偽礫と炭が多量に混在
2 暗赤褐色 (5YR3/2) 全体にしっとりした感じのシルト 少量の炭が混在
3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ10mm のローム偽礫が多量に混在
4 暗褐色 (10YR3/4) 3 層に似た土質だがローム偽礫が少ないため色調はやや暗い
5 明黄褐色 (10YR6/6) 4 層以上にしっとりした感じのシルト 炭が僅かに混在

0　(1:40)　1m

第 24 図　縄文時代の遺構図（13）　4 トレンチＳＫ（1）



第 25 図　縄文時代の遺構図（14）　４トレンチＳＫ（２）

の落ち込みを確認し、ＳＫ 5001 ～ 5004 の遺構番号を付けた。ＳＫ 5002 ～ 5004 を半裁し掘り下げ、ＳＫ 5002 は深さ 125cm の陥し穴であると判断した。この土坑はトレンチ外に続いていたため、平面図および断面図作成後に５トレンチ北側を５ｍ拡張し、上部を地山ごと掘削したのちに下端の検出を行った。また、拡張部のⅤ層上面で、新たに黒褐色土の落ち込みを確認した。最後に、ＳＫ 5002 の北側を、下部まで重機で断ち割り、断面及び底面を精査した。底面で逆茂木痕を５基検出した。

ＳＫ 5002　平面形は、南北 113cm、東西 146cm の楕円形を呈する。深さは 125cm である。壁は、底面から 50cm までほぼ垂直に立ち上がり、そこから上端に向けて内湾しながら広がる。底面は、平坦で非常に硬い。底面のほぼ中央に３基、短軸西壁寄りに２基の逆茂木痕がある。逆茂木痕は直径７～ 12cm で、深さは 28 cm～ 40cm あり、先端はとがっている。埋土は全体に締まりがなく、ローム偽礫や炭粒が混在しているものの大きな塊はないことから、自然堆積と考えた。

ＳＫ 5003・5004・5005　平面形は、直径 80 ～ 110cm 程度の円形を呈する。いずれの土坑も壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、ＳＫ 5003・5005 は底面付近がやや膨らみ、ＳＫ 5005 は上端がやや広がる。深さはＳＫ 5003 が 65cm、ＳＫ 5004 は 70cm、ＳＫ 5005 は 96cm で、底面は平坦でやや硬い。大礫や比較的大きなローム偽礫を含むＳＫ 5003 の３層や、ＳＫ 5005 の１・３層は人為的に埋め戻した可能性がある。

ＳＫ 5007　平面形は、直径 75cm の円形を呈する。深さは 13cm、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況等　ＳＫ 5002 ～ 5004 から縄文土器片（474 ～ 484、488 ～ 492）が出土したほか、ＳＫ 5004 から敲石・凹石（487）、打製石斧（486）、ＳＫ 5005 から打製石斧（493）、ＳＫ 5009 から石錘（508）が出土した。また、ＳＫ 5007 からは完形に近い縄文土器（501）やミニチュア土器の口縁部（503）などが出土した。

調査所見　ＳＫ 5002 は、断面形状や深さ、底面の逆茂木痕により、陥し穴と判断できる。出土した土器から中期初頭に帰属するのであろう。また、ＳＫ 5003・5005 は、土坑の断面形が袋形を呈することから貯蔵穴と考えられる。ＳＫ 5004 も規模や形状から貯蔵穴と考える。ＳＫ 5002 は、隣接する貯蔵穴（ＳＫ 5003 ～ 5005）と同時期と考えることは難しいが、遺構の切り合いがなく、遺物はほぼ同時期のものが出土しているため、新旧関係を明らかにすることはできなかった。

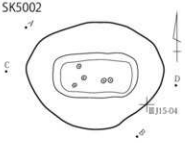
土坑のまとめ

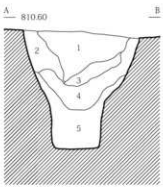
縄文時代の土坑 81 基を、形状、埋土、出土遺物等から、分類すると、陥し穴２基、貯蔵穴９基、貯蔵穴の可能性があるもの 21 基、墓坑の可能性があるもの３基である。

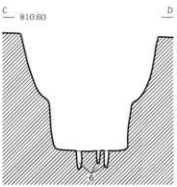
陥し穴のうちＳＫ 5002 からは縄文中期初頭の特徴を示す深鉢形土器の口縁部破片が出土しているため、同遺構はそれ以前に構築されたものと考えられる。ＳＫ 3003 は、断面形や底面の造りはＳＫ 5002 に類似するが、出土遺物は内面の口縁近くに平行沈線が巡る加曽利Ｂ式土器である。したがって２基の陥し穴は、それぞれ異なる時期に構築されたと判断した。今回の調査範囲内でみるかぎり、SK3003 は、集落が放棄された後の構築と考えられるが、中期初頭と中葉の竪穴建物跡等の遺構が集中していた領域の北端に位置する。陥し穴が罠猟に利用される遺構であると仮定すれば、獣道に設置されることが一般的である。集落が立地する平坦地ではなく、獣道として利用された緩斜面地に設置した結果であろう。ＳＫ 5002 は中期初頭と中葉の竪穴建物跡等の遺構が集中していた領域の西端に位置する。出土遺物からは中期初頭の集落と同時期に存在した可能性もあるが、常識的には、人間が生活している集落の真横に獣道があるとは考え難い。したがって、中期初頭の集落跡が造営される直前、あるいは放棄直後に設置された陥し穴だったと考える。

貯蔵穴は、その可能性があるものを含めると 30 基にのぼる。これらの分布状況をみると、１トレンチのＳＢ 1001 の南西側、３トレンチのＳＢ 3003・3004 の南側（ＳＢ 3002 の上面）、４トレンチの中ほどとＳＢ 4001 の西側、５トレンチの南東部の５つのまとまりがある。このうち、３か所は竪穴建物跡に近接した場所にある。今回は、調査範囲が限られているため、縄文時代の集落全体を把握することは困難だが、中

SK5002

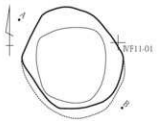


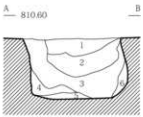




1 黒色 (7.5YR2/1) 締りが弱いシルト Φ40mm の礫、Φ1mm のローム偽礫と炭混在
2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱い粘土質シルト
3 黒色 (7.5YR2/1) 締りが弱いシルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
4 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが弱いシルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫混在
5 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱い粘土質シルト２層によく似る
6 極暗赤褐色 (5YR2/4) ローム質粘土しまりが弱い

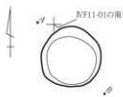
SK5003

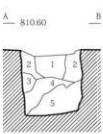




1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫と炭混在
2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫 (1 層より少ない) と炭混在
3 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りがやや弱いシルト Φ1 ～ 30mm のローム偽礫、大礫と炭混在
4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫と炭混在
5 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ5 ～ 10mm のローム偽礫混在
6 暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫混在

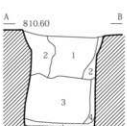
SK5004





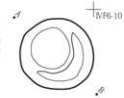
1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫と炭混在
2 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りが弱いシルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫と炭混在
3 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 30mm のローム偽礫混在
4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト
5 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1 ～ 5mm のローム偽礫混在

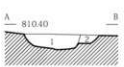
SK5005



1 暗褐色 (10YR3/4) 締りが弱いシルト Φ50mm の礫と炭混在
2 褐色 (10YR4/6) シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫が多量に混在
3 黒褐色 (5YR2/2) シルト Φ50mm のローム偽と炭ブロックが多量に混在
4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫と炭混在
5 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫 (4 層より少ない) と少量の炭混在

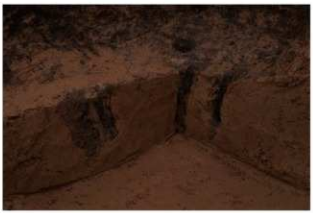
SK5007





1 暗褐色 (10YR3/4) 締りが弱いシルト Φ50mm の礫と炭混在
2 褐色 (10YR4/6) シルト Φ1 ～ 3mm のローム偽礫が多量に混在

第 26 図　縄文時代の遺構図（15）５トレンチＳＫ



ＳＫ 5002 底面に残る逆茂木痕と断面

期初頭から中葉の貯蔵穴が竪穴建物に近接して設けられたとするならば、４トレンチ中央部や５トレンチ南東部にある土坑群の近くにも、竪穴建物跡が存在する可能性はある。

墓坑の可能性がある土坑は、３基ともＳＢ 4001 辺りにある。氏神遺跡の縄文集落には、ほかに墓の可能性のある土坑はないが、ＳＫ 4042 と 4043 は、竪穴の埋土を掘り込むように構築されている点に留意しておきたい。

ＳＫ 5005 埋土断面

遺構番号	小地区	図番号 遺構	図番号 遺物	図版番号 遺構	図版番号 遺物	方向	規模 長軸 m	規模 短軸 m	規模 深さ m	形	柱穴	炉	時期	重複遺構（▼古 △新）
SB1001A・B	Ⅱ W07	9 12 13	27～34	2	11～18	NW-SE	6.45	4.95	0.32	楕円	P07・08・16・21・22・30	F01 F02	中期中葉	▼SB1002
SB1002	Ⅱ W06 Ⅱ W07					-	3.60	3.60	0.32	円	P01	-	中期中葉	△SB1001A・B
SB3002	ⅣB10 ⅣB15 ⅣC06 ⅣC11	10 14 15	35～37	3	19～21	NE-SW	9.00	7.25	0.32	楕円	P01～06	P07	中期初頭	△SK3019、3022～3027 △ST３００１
SB3003A・B・3004	ⅣB05 ⅣB10 ⅣC06	10 16 17	38～41	4	22～25	NW-SE	9.70	3.25	0.60	楕円	P02・07～09・11・13・27～29・31・80 P03～06・16・24・25・30・37・42・75～79・83 P26・33～36・81・82	F01～03	中期初頭	△ST3002
SB4001	ⅣA19 ⅣA20 ⅣA24 ⅣA25	11 18	42～49	5	26～32	NE-SW	5.30	3.70	0.38	楕円	P03～05・07・10	F01	中期初頭	△SK4040～4043

第８表　縄文時代竪穴建物跡一覧表

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径cm	短径cm	形	深さcm	底長cm	形	
SK1001	ⅡQ22-05	9 19				-	87	86	円	26	76	B	
SK1002	ⅡQ22-12	9				E-W	36	28	不整	32	0	F	
SK1003	ⅡV04-07・11・12	9 19		6		NW-SE	135	130	円	70	95	B	貯蔵穴か
SK1004	ⅡV04-08	9				E-W	55	35	不整	23	0	E	
SK1006	ⅡV05-09	9				NE-SW	50	34	不整	15	0	E	
SK1008	ⅡV05-10	9				NE-SW	41	26	卵	10	0	E	
SK1009	ⅡV05-11	9				E-W	66	65	不整	18	44	B	
SK1012	ⅡW07-16	9 19				-	(56)	(56)	円	24	0	E	
SK1013	ⅡW12-04	9 19	50		33	-	(68)	(68)	円	28	(50)	A	
SK1014	ⅡW13-01・05	9 19	50		33	NE-SW	135	116	不整	32	0	E	
SK1015	ⅡW08-13・14 ⅡW13-01・02	9				-	50	46	円	29	32	A	
SK1016	ⅡW13-01・02	9 19	50		33	-	95	94	円	48	83	B	貯蔵穴か
SK1017	ⅡW13-02	9 19				-	59	56	円	30	35	A	
SK1018	ⅡW13-03	9 19	50		33	-	77	70	円	20	42	B	
SK1019	ⅡW13-07	9 20	51		34	NW-SE	(60)	54	隅丸長方	35	47	B	
SK1020	ⅡW13-07・11	9 19				N-S	90	62	楕円	30	34	A	貯蔵穴か
SK1021	ⅡW13-11・12	9	51		34	NE-SW	50	38	楕円	30	0	F	
SK1023	ⅡW13-12	9				-	65	65	円	27	50	B	
SK1024	ⅡW13-03・04 ⅡW07-08	9 20	51		34	N-S	(100)	90	卵	32	88	B	貯蔵穴か
SK1025	ⅡW13-07・08	9 20	51		34	E-W	77	70	卵	30	50	B	貯蔵穴か
SK1026	ⅡW13-07	9 20				NW-SE	38	30	卵	28	20	A	
SK1027	ⅡW14-09	9				-	30	28	円	6	0	D	
SK1028	ⅡW14-09	9				-	27	25	円	23	0	F	
SK1029	ⅡW14-09	9				-	35	34	円	33	19	A	
SK1030	ⅡW14-10・14	9				-	45	45	円	33	0	F	
SK1031	ⅡW14-13・14 ⅡW19-01	9 20	51	6	34	-	(100)	(97)	円	55	80	G	貯蔵穴

第９表　縄文時代土坑一覧表

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径cm	短径cm	形	深さcm	底長cm	形	
SK1032	ⅡW07-16 ⅡW12-04	9 19				-	100	(95)	円	44	62	A	
SK1033	ⅡW14-09・13	9				-	44	43	円	24	34	B	
SK1034	ⅡW14-13・14	9 20	51	6	34	NE-SW	180	98	楕円	48	82	G	貯蔵穴
SK1035	ⅡW13-01	9 19				NW-SE	52	35	不整	39	25	C	
SK1036	ⅡW13-07	9 19				-	31	31	円	40	21	C	
SF1001	ⅡW13-07	9 20		6		-	102	100	不整	18	40	A	
SK3001	ⅡV22-16　ⅡV23-13	11 21	52	6	35	NE-SW	270	195	楕円	12	0	D	
SK3002	ⅡU14-11・12	11 21				NW-SE	122	90	卵	19	80	B	
SK3003	ⅡU14-16　ⅡU15-01	11 21	52	6	35	NE-SW	133	(95)	隅丸方	118	33	H	陥し穴
SK3006	ⅡV21-04	11 21				—	105	105	円	45	84	B	貯蔵穴か
SK3008	ⅣB04-06・10	11 21		6		NW-SE	100	(86)	楕円	48	67	B	貯蔵穴か
SK3009	ⅣB09-06・07・10・11	11 22	52		35	—	174	(165)	円	28	105	A	
SK3011	ⅣB10-01・05	11 22				NW-SE	87	86	卵	35	65	B	貯蔵穴か
SK3019	ⅣC06-10・14	11 22				—	175	171	円	50	65	A	
SK3022	ⅣB10-08・12 ⅣC06-05・09	11 22	52		35	E-W	123	90	卵	58	68	A	貯蔵穴か
SK3023	ⅣC06-13	11 22	52		35	—	88	83	円	36	66	B	貯蔵穴か
SK3024	ⅣB10-16 ⅣB15-03・04・08	11 22	53		36	—	224	218	円	42	190	B	貯蔵穴か
SK3025	ⅣB10-16	11 22	54		37	NW-SE	128	105	卵	70	65	A	貯蔵穴か
SK3026	ⅣC11-01・02・05・06	11 23				NW-SE	118	100	楕円	25	93	B	貯蔵穴か
SK3027	ⅣC06-13・14 ⅣC11-01・02	11 23				N-S	104	79	卵	40	73	B	貯蔵穴か
SK3028	ⅣC06	11 23				—	33	33	円	31	21	C	ⅢST3001 P05
SK4012	ⅣA19-05	11	55		38	—	54	53	円	22	0	E	
SK4013	ⅣA18-06・07	11				NE-SW	(58)	48	楕円	13	0	D 底面段差	
SK4015	ⅣA18-03	11				NE-SW	68	59	楕円	15	0	D	
SK4020	ⅣA20-03・04	11	55		38	NE-SW	(60)	44	—	23	24	A	
SK4022	ⅣA11-04 ⅣA12-01	11				—	32	31	円	28	0	F 底面段差	

第９表　縄文時代土坑一覧表

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径cm	短径cm	形	深さcm	底長cm	形	
SK4023	ⅣA12-06	11				—	(38)	30	卵	23	0	F	
SK4024	ⅣA12-02	11 24	55		38	—	60	60	円	28	48	G	貯蔵穴
SK4025	ⅣA07-10・14	11 24	55		38	NE-SW	(120)	90	楕円	56	70	B	貯蔵穴か
SK4026	ⅣA07-13 ⅣA12-01	11 24	55		38	—	(90)	70	楕円	45	50	B	貯蔵穴か
SK4028	ⅣA12-05・06	11 24	55		38	NE-SW	97	78	卵	66	66	G	貯蔵穴
SK4029	ⅣA24-02	11 24	55		38	NW-SE	110	74	楕円	35	80	B	貯蔵穴か
SK4030	ⅣA24-02	11				—	66	65	円	25	0	E	
SK4031	ⅣA24-03・07	11				—	51	50	隅丸方	25	41	B	
SK4032	ⅣA24-06	11 25	56	7	39	N-S	87	56	楕円	15	67	B 底面段差	墓か
SK4034	ⅣA24-06・07	11 25	56		39	NE-SW	85	75	楕円	32	63	B	貯蔵穴か
SK4035	ⅣA24-07	11	56		39	NW-SE	45	42	卵	28	37	B	
SK4036	ⅣA24-07	11 25	56		39	—	102	70	円	21	0	D	
SK4037	ⅣA24-07	11	56		39	—	74	(74)	不整	17	58	B	
SK4038	ⅣA19-11	11 24	56		39	—	80	(80)	円	38	62	B	貯蔵穴か
SK4039	ⅣA19-11	11 24	56		39	NE-SW	74	68	隅丸方	67	56	G	貯蔵穴
SK4040	ⅣA19-15	11				N-S	50	(37)	楕円	18	0	E	
SK4041	ⅣA24-03・07	11 25	56	7	39	N-S	105	86	楕円	50	62	B	貯蔵穴
SK4042	ⅣA19-15・16	11 25	57		40	N-S	(110)	(76)	楕円	20	82	B	墓か
SK4043	ⅣA19-11・12・15・16	11 25	57		40	E-W	(106)	(75)	卵	12	0	D	墓か
SK4044	ⅣA19-14・15	11 25	58	7	41	NW-SE	153	85	卵	45	68	G	貯蔵穴
SK4045	ⅣA24-03	11 25	58		41	E-W	110	90	不整	42	0	E 底面段差	貯蔵穴か
SK5001	ⅢJ10-10	11				NE-SW	(125)	100	楕円	28	52	A	
SK5002	ⅢJ10-15・16 ⅢJ15-03	11 26	58	7	41	E-W	146	113	楕円	125	60	H	陥し穴
SK5003	ⅢJ10-16　ⅢJ15-04 ⅣF11-01	11 26	58		41	NW-SE	112	92	楕円	65	83	G	貯蔵穴
SK5004	ⅢJ15-04 ⅣF11-01	11 26	58		41	—	64	63	円	70	52	C	貯蔵穴か
SK5005	ⅢJ10-11	11 26	59	7	42	—	83	80	円	96	71	G	貯蔵穴

第９表　縄文時代土坑一覧表

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
SK5006	Ⅲ J10-07	11	59		42	―	63	60	円	38	46	B	
SK5007	Ⅳ F06-09	11 26	59		42	―	78	75	円	13	62	D 底面段差	
SK5008	Ⅳ F11-02・03	11	60		43	NW-SE	70	63	楕円	32	0	E	
SK5009	Ⅳ F06-15 Ⅳ F11-03	11	60		43	NE-SW	73	60	不整	20	47	B	

第９表　縄文時代土坑一覧表

３　遺物

氏神遺跡から出土した縄文時代の遺物は、前期末～中期初頭及び中期中葉に属する。完形またはほぼ完形に復元できるものを含めた土器片が11,260点、総重量約146kg、石器が1423点、総重量約134kg、土塊、紐状土製品等の土製品が12点出土した。中期初頭の遺物は五領ヶ台式土器及びそれに並行する時期の土器群、星ケ台産の黒曜石を主石材とした石鏃や石錐等の小形剥片石器、遺跡近隣より採取できる砂岩や泥岩、粘板岩を石材とした打製石斧やスクレイパー等の大形剥片石器及び敲石や凹石、台石等の礫石器を中心とする石器群と理解できる。搬入品に、北陸系や東海系、関西系の鷹島式と考えられる土器、岐阜県南部に産出する石材である下呂石の二次加工がある剥片及び剥片が認められる。中期中葉の遺物は藤内Ⅰ式を主体とし、平出第Ⅲ類Ａ土器が伴う土器群と、中期初頭とほぼ同一内容の石器群と理解できる。遠隔地の土器及び下呂石製石器は認められない。これらの遺物は松本盆地において類例が少なく、中期の編年を検討する上で貴重な土器群であるほか、在地系の遺物に遠隔地の遺物が伴う中期初頭に対して、より在地色が濃くなる中期中葉という時期差を見出すことができるなどの点で、良好な資料と評価できる。

以下、出土遺物を遺構ごとに記述する。

（１）竪穴建物跡出土遺物

ＳＢ1001Ａ・Ｂ、ＳＢ1002（第27～34図、第10表、PL11～18）

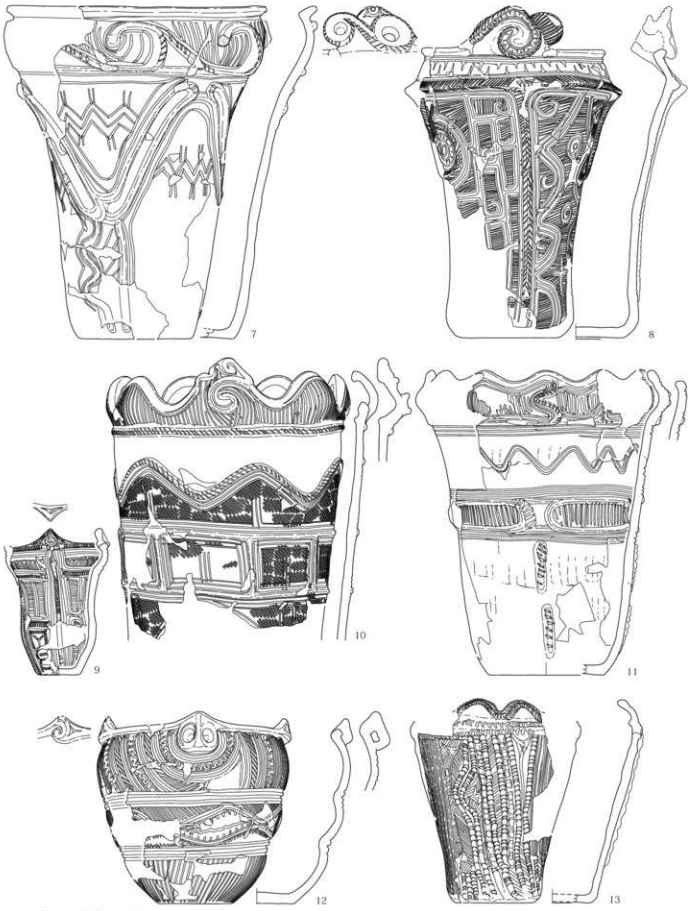
土器　ＳＢ1001Ａ・Ｂ、ＳＢ1002からは、3581点の土器（総重量66.21kg）が出土した。藤内Ⅰ式を主体とする完形及びほぼ完形の土器が19個体出土したほか、平出第Ⅲ類Ａ土器（35）と有孔鍔付土器（36）、ミニチュア土器（37）が出土した。これらの土器は１～３を除き、遺構理土から、いわゆる「吹上パターン」の様相を呈して出土した。出土土器は、藤内Ⅰ式に平出第Ⅲ類Ａ土器が伴い、櫛形文土器が認められないことから、中期中葉に属すると考えた。１と２は、炉跡に蓋をするような状態で出土した土器である。１はほぼ完形に復元できる。口縁部文様帯に隆線による方形区画と、そこから続く２個１対の突起が口唇部に４単位付く。方形区画内の一部に波状の刺突文がみられる。２は口縁部文様帯下部から胴部文様帯にかけての破片である。口縁部文様帯には横位に、刻みの入る隆線と半隆起の平行沈線による三角区画文が連続すると推定する。胴部文様帯はＲＬの縄文を地文とし、波状の沈線が巡る。３は、ＳＢ1002の柱穴（P01）の１層最上面から出土した深鉢の底部である。ＲＬの縄文を地文とし、底部側面にケズリが施され、底面は磨かれる。４～20は、完形またはほぼ完形に復元できる。12は鉢で、ほかは深鉢である。４～６は両脇に押引文が施文される隆線による模様をもつ。４は波状口縁で、波頂部に特徴的な模様が施される。口縁部文様帯は両脇に押引文をもつ隆線による連続三角区画が施され、同様の隆線により胴部文様帯上半は渦巻文が、胴部文様帯下半は連続三角区画が施される。５は口唇部に渦巻き状の突起を有し、口縁部文様帯には両脇に爪型文を付けた隆線による三角区画が横方向に連続する。胴部にも同様の隆線による三角区画文が巡る。６は口唇部及び口縁部文様帯に１と類似する隆線による２個１対の突起と方形区画が施されるほか、その直下には隆線の両側に幅広の爪形押引文が付く楕円区画文が巡る。７の器形はキャリパー状を呈し、口縁部文様帯に刻みの入る隆線で緩い連続渦巻文を描く。胴部文様帯はＹ字状の平行沈線を地文とし、２本１組の隆線でＶ字状の模様が３単位施される。底部文様帯にはＶ字の尖底部より２本の隆線が左側は波状に、右側は直線状に垂下する。８～10は特徴的な区画文を有する。８は口縁に渦巻文をもつ突起が１つ付く。口縁部文様帯は横位の交互刺突文、胴部文様帯は刻みをもつ隆線を垂下させ２単位に分けられており、それぞれ刻みをもつ隆線をしの字状に貼り付けた模様、区画内に横位の沈線を施した縦位の区画文がみられる。９は口縁に４単位の突起を有すると推定する。文様は半隆起する平行沈線による縦帯区画文を中心とする。10は７単位の波状口縁をもち、１単位に渦巻き文が付く。波状口縁には縦位の沈線が施文され、断面は内湾する。胴部文様

帯上部には横位に刻みを入れた波状隆線が１条巡り、下部には縄文を地文とする矩形の区画文が施される。11、12は半隆起線により文様帯が３単位に区画され、区画内の施文は沈線文を中心とする。11は波状口縁である。口縁部模様帯は半隆起線による横位の区画内に、縦位の沈線を施す。胴部は横位に施文される２条１組の半隆起線により３単位の文様帯に分けられ、上段は平行沈線による波状文、中段は隆線による楕円区画内に縦位の沈線が施文され、下段は刻みをもつ縦位の隆線が貼り付けられる。12は内湾する口縁部文様帯にメガネ状の把手が１対付く。口縁部文様帯、胴部文様帯、底部文様帯は半隆起線により区画され、区画を境界に器形が屈曲し、段を形成する。13～16は鎖状隆線が貼り付けられる。13は波状口縁である。口縁部文様帯には押引文が施され、胴部文様帯は鎖状隆線を縦位に貼り付けや縦位の沈線、押引文などが施される。14は４単位の波状口縁をもつ。口縁部文様帯には波状のそれぞれ頂部から鎖状の隆線が垂下し、地文に縦位の沈線文が施文される。口縁部文様帯と胴部文様帯の境界にも同様の隆線が１条巡る。15はキャリパー形の土器で、ＲＬの縄文を地文に、鎖状の隆線を貼り付ける。16は口唇部に２個１対の突起を持ち、口縁部文様帯と胴部文様帯の境界がくの字状に屈曲する。口縁部文様帯には鎖状の隆線による楕円区画文が巡る。胴部文様帯上部はＲＬの縄文を地文とし、胴部文様帯下部には鎖状の隆線が横方向に弧が連続する。17、18は口縁部文様帯に波状の隆線が貼り付けられ、地文は縄文である。17は口縁部文様帯に幅広の爪形文を施文する波状隆線を１条巡らせ、胴部文様帯はＲＬの縄文を施文する。底部文様帯には、隆線の両側に幅広の爪形押引文が付く楕円区画文が巡る。18は口縁部文様帯に隆線を波状に巡らせ、胴部文様帯から底部文様帯にかけてＬの縄文を施文する。19はキャリパー形の土器で、器面全体にＲＬの縄文を施文する。20は円筒形を呈する。無文である。21、22は深鉢の口縁である。21は口唇部に突起をもち、口縁部文様帯に縦位の隆線及び半隆起の平行沈線による方形区画が巡ると推定する。22は口唇部に刻みをもち、そこから刻みを施された鎖状の隆線が口縁部文様帯と胴部文様帯は垂下する刻みを施された鎖状の隆線で区画され、口縁部文様帯は縦位、横位、弧状の平行沈線が施文される。23～25は深鉢の口縁から胴部である。23はメガネ状把手から両脇に爪形文が押引かれた隆線が垂下し縦位に区画する。区画内には幼虫状の文様が付される。24は口縁部文様帯に縦位の沈線が施文される。25はＬＲの縄文を地文とし、口唇直下に直線と波状の２本の沈線が施される。26、27は深鉢の胴部である。26はいわゆる「山椒魚模様」をもち、内部は爪形文で充填される。隆線脇にはキャタピラ文を施文する。器面には輪積み痕が残る。27は樽形を呈すると推定する。隆線による模様が施される。28～32は深鉢の胴部下半から底部である。28は胴部文様帯に楕円区画文が横位に連続すると想定する。底部文様帯は両脇にキャタピラ文が施文される刻み入りの隆線による抽象文が施文される。29は区画内に横位の沈線を施文し、30は区画内に斜行沈線を施文した縦位の区画文が施される。31はＲＬの縄文を地文とする。半隆起の平行沈線により縦位に区画され、区画内に蛇行沈線が施文される。32は底部から胴部に向かい外側に大きく開くように立ち上る。ＲＬの縄文を地文とする。なお、29に付着した炭化物の年代測定を行い、暦年較正値（２σ）5,265～4,877calBPの結果を得た。33、34は深鉢の底部である。33は両脇に押引文をもつ隆線による模様が施される。隆線上には細い波状沈線が見られる。底部側面及び底面は磨かれる。34は底面に網代圧痕が認められる。35は深鉢である。平出第Ⅲ類Ａ土器に比定する。口縁部模様帯に口唇部直下に刻みの入る隆線の垂下と横方向に２重に巡る波状の平行沈線が施文され、その下部全体に縦位の平行沈線を施文する。36は有孔鍔付土器である。欠損部が大きく文様は確認できず、孔擦れ痕跡も認められない。器形は胴部が張り出す樽形を呈すると推定する。器面は表裏とも磨かれている。37はミニチュア土器である。口唇部に５つの突起が付き、内１つは欠損する。

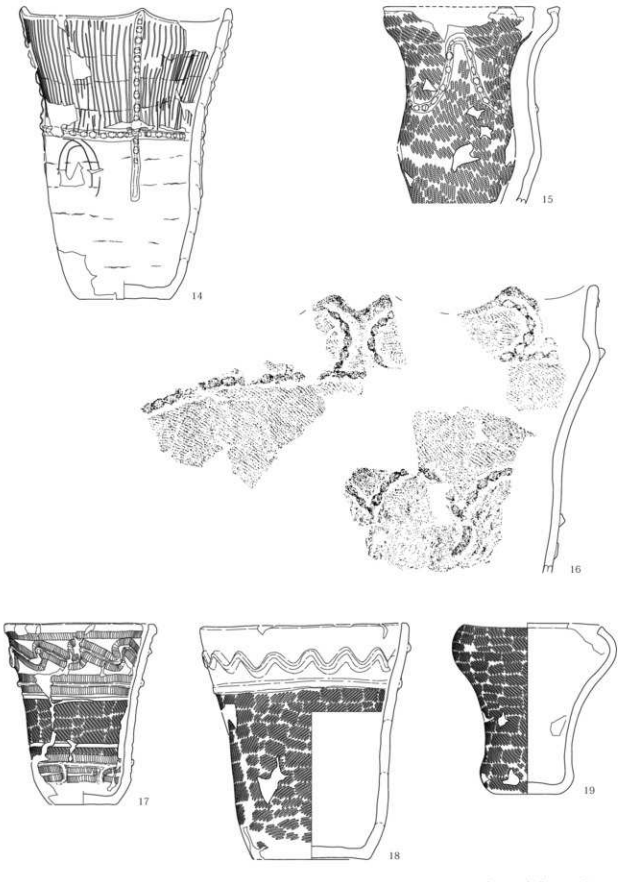
石器　石英の原石１点を含み216点（総重量14,401.0ｇ）が出土した。詳細は第10表のとおりである。

38～48は黒曜石製の石鏃である。38～44は基部から先端までの長さが基部幅の約1.5倍～２倍あり、基部の抉りが浅いもの（38～40）と深いもの（41～44）がある。45と46は基部から先端までの長さが、基部幅と

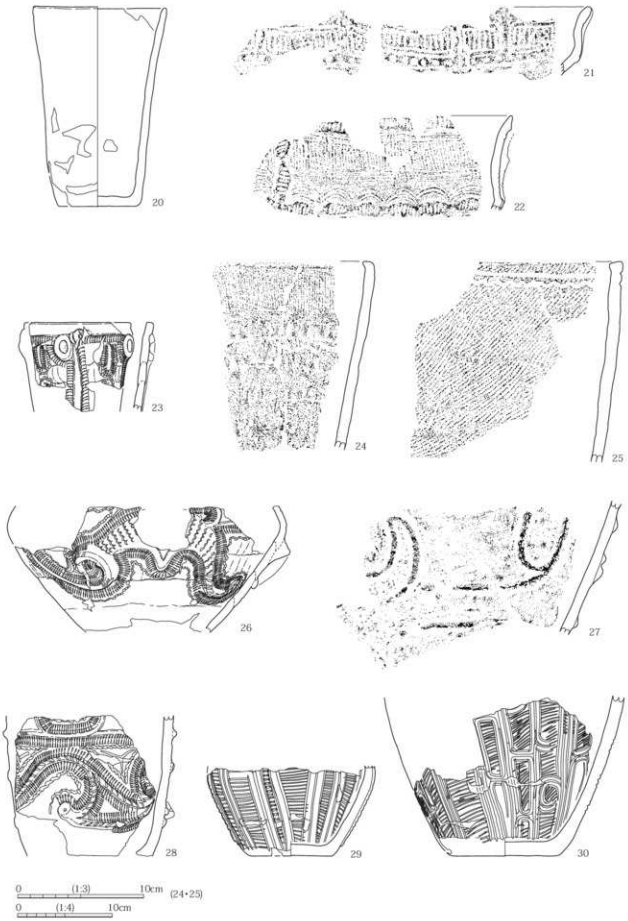
第27図　縄文時代の遺物図（1）　ＳＢ1001Ａ・Ｂ、1002（1）



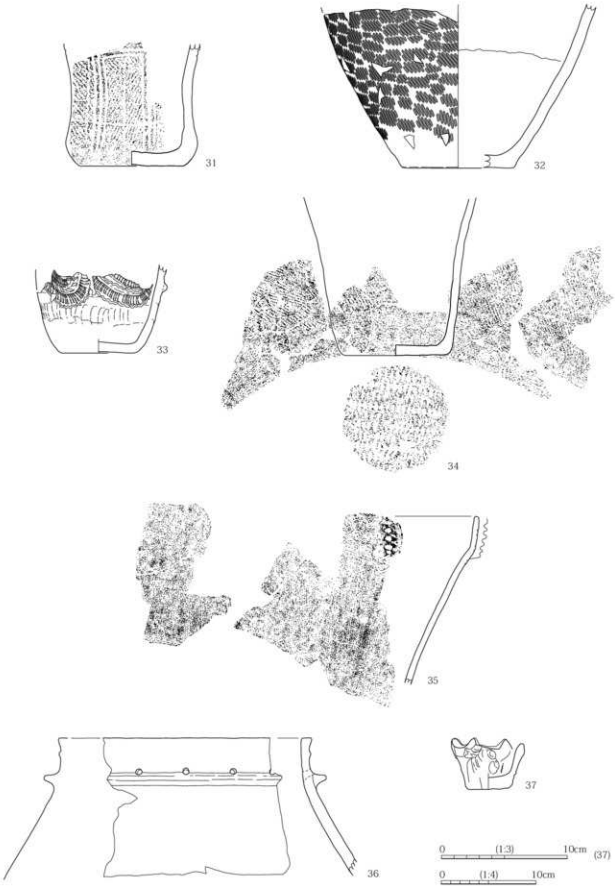
第28図　縄文時代の遺物図（２）　ＳＢ 1001　Ａ・Ｂ、1002（２）



第29図　縄文時代の遺物図（３）　ＳＢ1001Ａ・Ｂ、1002（３）



第30図　縄文時代の遺物図（４）　ＳＢ 1001　Ａ・Ｂ、1002（４）



第31図　縄文時代の遺物図（５）　ＳＢ 1001 Ａ・Ｂ、1002（５）

ほぼ等しく、正三角形状となる。こちらも基部の抉りが浅いもの（45）と深いもの（46）がある。47は基部から先端までの長さが、基部幅よりも短く、基部の抉りが深い。形状はブーメラン状を呈する。48は失敗品と考える。49、50は黒曜石製の石錐である。49はいわゆる「ズリ」[1]を素材とし、先端部に加工が施され、断面形は菱形を呈する。50は剥片を素材とし、背面側の両側辺と腹面側の一側辺に加工が施される。先端部の断面形は菱形を呈する。51～53はスクレイパーである。51は黒曜石製で、剥片の周縁を腹面側から打撃して、弧状を呈する片刃の刃部を形成する。52は安山岩製で、大形の剥片を素材とし、腹面側からの打撃により直線状の片刃の刃部が形成される。53は砂岩製で、大形の剥片を素材とする。直線状の片刃である。刃部には使用によると思われる微細な剥離と摩耗が認められる。54、55は黒曜石製のピエス・エスキーユである。54は上下方向、55は上下方向と左右方向からの剥離痕がみられる。56～60は打製石斧である。56は泥岩製で、板状の剥片を素材とする。57、59は凝灰岩製である。57は両面の刃部や背面側の器体中央に摩耗面がみられ、腹面側の器体中央に敲打痕がみられる。磨製石斧の転用品の可能性もある。59は刃部及び基部は摩滅を受けている。左側辺にツブレがみられる。58は安山岩製である。右側辺にツブレがみられる。60は砂岩製である。板状の剥片を素材とし、表裏面とも摩耗がみられる。先端、基部とも折れている。61、62は砂岩製の凹石である。61は表面に２か所以上、裏面に１か所、62は表裏面ともに２か所の敲打による凹みが認められる。63は砂岩製の砥石である。大形の砂岩で、表面１面が使用面で非常に平滑である。64は砂岩製の石錘である。上下に抉り部が形成される。65、66は黒曜石製の二次加工ある剥片である。67は黒曜石製の微細剥離ある剥片である。68は黒曜石製の削片とした。背面下部にみられる剥離により直線状の稜線を形成し削出されたものである。

	石鏃		石錐		スクレイパー		ピエス・エスキーユ		打製石斧		磨石		敲石		砥石		石錘		石核		剥片		二次加工ある剥片		微細剥離ある剥片		削片		彫片		礫石		計	
黒曜石	15	8.4	2	5.1	3	3.4	2	4.1											32	21.9	122	329.2	2	14.1	10	13.4	2	1.3	17	1.9			175	399.9
頁岩製									3	146.4																							3	146.4
安山岩					3	271.3			3	184.8																							3	456.1
チャート																							3	66.3									3	66.3
凝灰岩									3	211.3																							3	211.3
砂岩						27.4			3	273.8	2	1736.3	2	1761.8	3	6857.8	2	27.4	2	1440.8	8	854.4											24	12513.8
泥岩									3	206.9											7	210.1											10	416.9
礫岩											1	73.4																					1	73.4
結晶片岩																						36.4											1	36.4
石英																															1	176.8	1	176.8
計	15	8.4	2	5.1	3	332.1	2	4.1	12	1046.2	3	1884.1	2	1761.8	3	6857.8	2	27.4	2	1441.8	130	1456.0	5	15.5	10	13.4	2	1.3	17	1.9	1	176.8	216	14461.0

左側：個数、右側：重量（g）

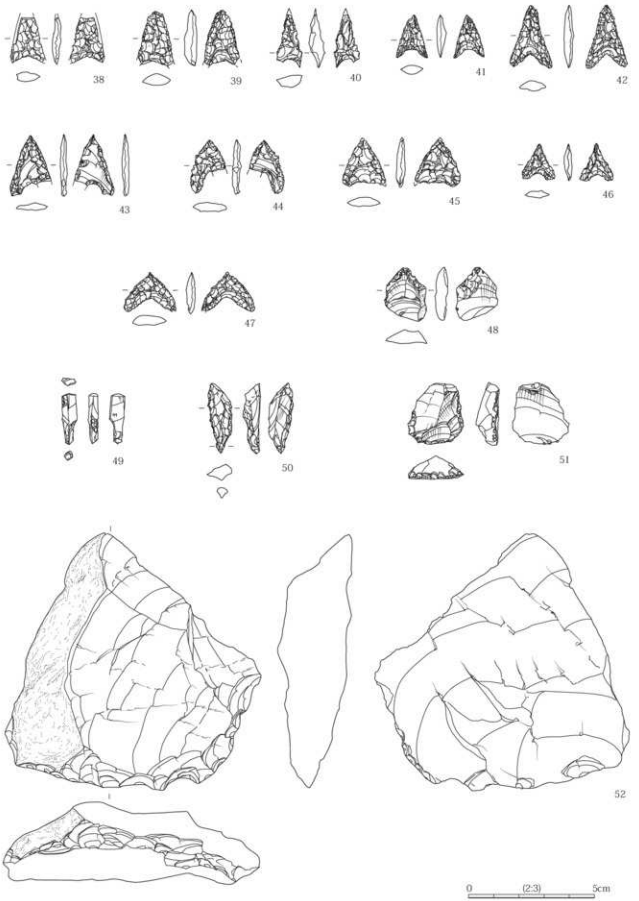
第10表　ＳＢ1001Ａ・Ｂ、ＳＢ1002出土石器組成表

ＳＢ3002（第35～37図、第11表、PL19～21）

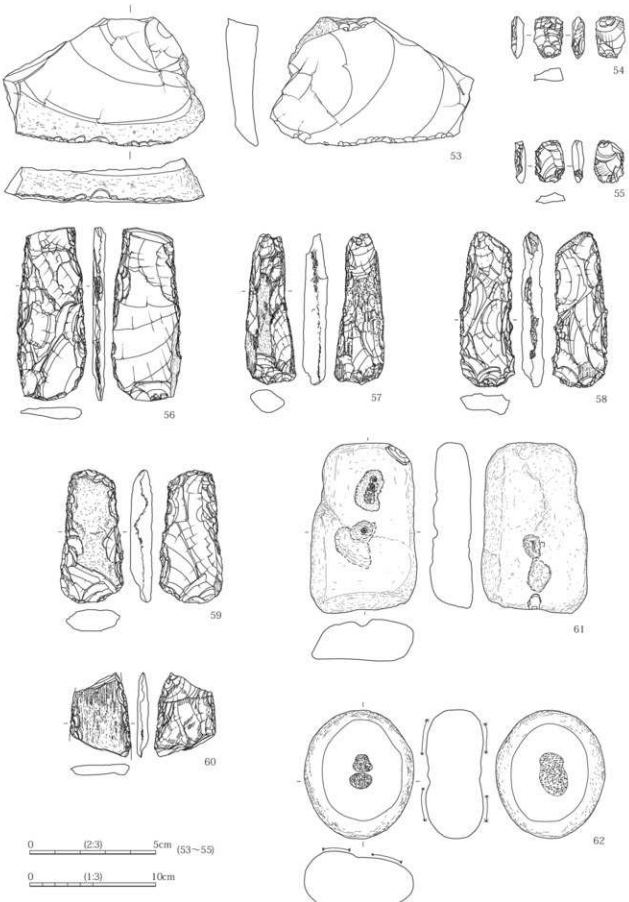
土器　ＳＢ3002からは1014点の土器片（総重量9,650g）が出土した。土器は五領ヶ台Ⅱａ式及びそれに並行する時期と考える中期初頭に比定でき、前期末の土器片がわずかにみられる。完形に復元できるものはない。在地の土器の他、北陸系や、関西系の鷹島式と思われる土器が出土した。100が浅鉢、それ以外は深鉢である。100がＳＢ3003・3004から出土した162と遺構間接合した。

中期初頭　69～87は口縁部である。69～72は把手をもつ。69、70は動物の頭を思わせる意匠の把手が、71は橋状把手が、72は耳状の突起が付く。73～77は口縁部文様帯を微隆起線により区画する。73～76は口唇部に押引文が施される。73は口唇部から垂下する隆線による２個１対の突起をもち、区画内は格子目文が施文される。74は区画内を瓦状押引文、75は格子目文、76は斜行沈線で施文し、77の区画内は無文である。78～80は口唇部に刻みをもち、口縁部文様帯は沈線文で施文される。78は等間隔垂下文、79、80は横位の

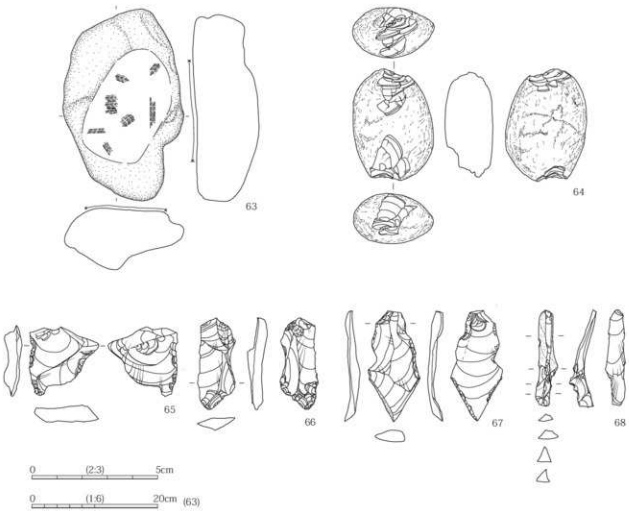
註1　板状または角柱状を呈する小形の黒曜石原石



第32図　縄文時代の遺物図（６）　ＳＢ 1001 Ａ・Ｂ、1002（６）



第 33 図　縄文時代の遺物図（７）　ＳＢ 1001 Ａ・Ｂ、1002（７）



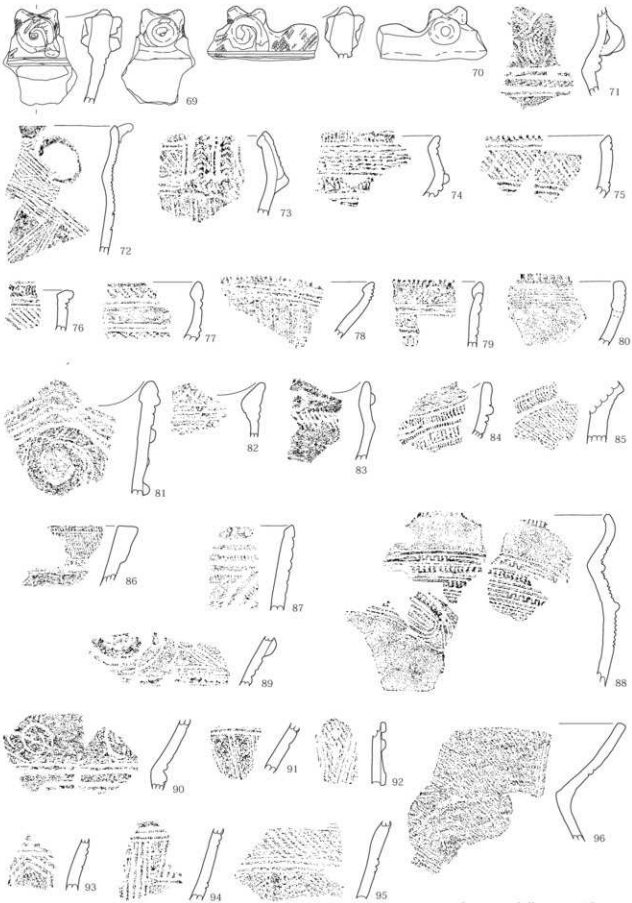
第 34 図　縄文時代の遺物図（８）　ＳＢ 1001 Ａ・Ｂ、1002（８）

沈線が施される。80 には孔がある。81 ～ 85 は波状口縁である。81 は隆線による渦巻文が施される。82 は三角形と横位の沈線、83 は斜行沈線が施文される。84、85 は押引文をもつ半隆起線による区画内を、沈線で施文する。86 は押引文をもつ半隆起線による横位の区画内に縦位の細い条線を施す。87 は半隆起線による模様が見られる。88 は口縁部から胴部である。交互刺突文や刺突文、爪形文をもつ隆線、沈線による模様で構成される。89 ～ 91 は口頸部である。89 は隆線と沈線による渦巻文、90 は沈線による渦巻文が施される。91 は縄文が地文で、等間隔垂下文が施される。92 ～ 97 は胴部である。92 は円形と三角形の印刻をもつ隆線上に斜行沈線が施文される。93 はＹ字状の沈線文が施される。94 は半隆起線が縦位と横位に施される。95 は２条１組の半隆起線により区画され、上段は格子目文、下段は結節回転縄文が施文される。96 は撚り戻しの縄文による施文の上から結節回転縄文が施文される。97 は縄文を地文に縦位の沈線が施される。98、99 は底部である。98 は刻みをもつ隆線が垂下し、99 は底部側面を沈線で区画し、区画内に縦位の沈線が施される。底面は僅かに磨かれる。100 は浅鉢の口縁である。内面に列点文と押引文が施文される。外面は無文である。

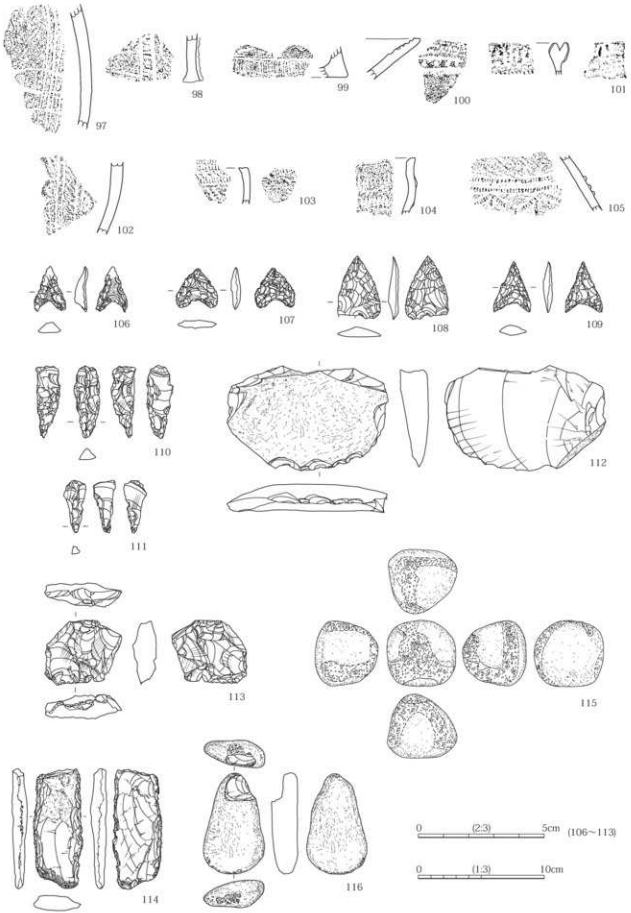
前期末　101 は口縁である。口唇部には断面Ｖ字の刻みが入り、口縁部文様帯は浮線文が貼り付けられる。

外来系土器　102 は北陸系の新保式と思われる胴部である。半隆起線による縦位の意匠が特徴的である。103 ～ 105 は関西系の鷹島式と考えられる。103、104 口縁である。微隆起の上に爪形刺突が施され、103 は口唇部にも爪形刺突が見られる。105 は縄文を地文とし、凸帯の上に爪形文が連続する。

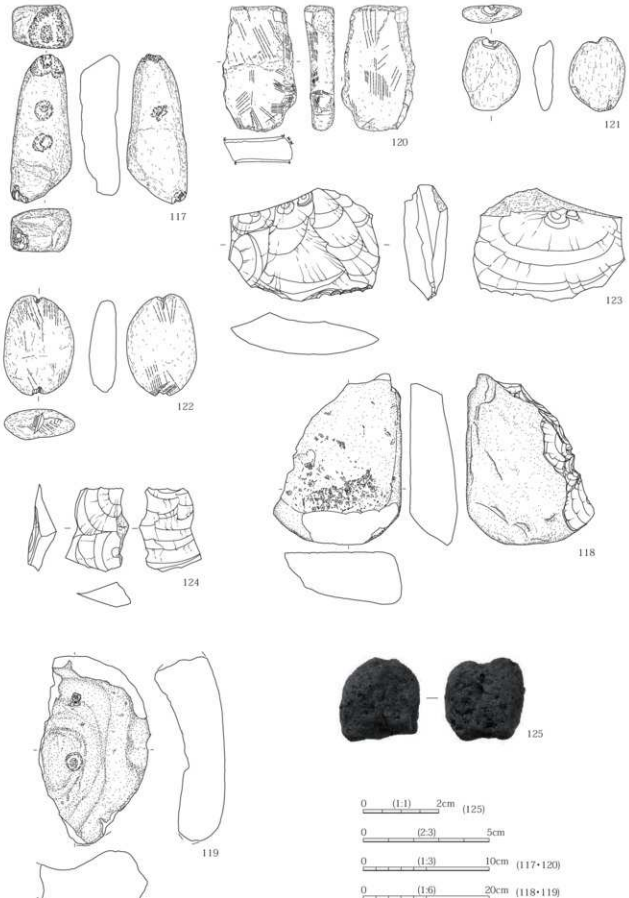
石器　石英の原石１点及び砂岩の礫片６点を含む 242 点（総重量 33,943.2 ｇ）が出土した。詳細は第 11 表のとおりである。



第 35 図　縄文時代の遺物図（9）　S B 3002（1）



第36図　縄文時代の遺物図（10）　ＳＢ3002（２）



第37図　縄文時代の遺物図（11）　S B 3002（3）

106 ～ 109 は黒曜石製の石鏃である。106 は板状の「ズリ」を、その他は剥片を素材とする。110、111 は黒曜石製の石錐である。両者とも剥片を素材とし、先端部の断面は 110 が三角形、111 が四角形を呈する。112 は砂岩製のスクレイパーである。素材剥片の側辺に腹面側から加工を施し、鋸歯状で片刃の刃部を形成する。113 は黒曜石製のピエス・エスキーユである。上下及び左右からの剥離痕がみられる。114 は泥岩製の打製石斧である。板状の剥片を素材とする。115 ～ 117 は砂岩製の敲石である。115 は自然の稜上ほぼ全周に敲打痕がみられる。116 は上下両端に敲打痕、上端に敲打による剥離がみられる。117 は上下両端に敲打痕、下端に敲打による剥離がみられる。さらに、表面に２か所、裏面に１か所の凹みが確認できる。118 は砂岩製の台石である。表面に打痕が集中し、裏面には表面からの敲打による剥離がみられる。表面下端には火はねも認められる。119 は安山岩製の石皿である。表面上端に火はねが認められる。約半分を欠損する。120 は砂岩製の砥石である。表裏面と側面に使用による摩耗が認められる。121、122 は石錘である。121 は砂岩製で、上部に抉り部が形成される。122 は凝灰岩製で、上下に磨りによる溝状の加工が施される。123 は下呂石製の剥片である。124 は下呂石製で、二次加工ある剥片である。

（c）土製品　125 は焼成粘土塊である。重量は 6.2 ｇである。不整形であるが、角柱状に近い。模様や加工の痕跡はみられない。

	石鏃		石錐		スクレイパー		ピエスエスキーユ		打製石斧		敲石		凹石		磨石		台石		石皿		砥石		石錘		石核		剥片		二次加工ある剥片		微細剥離を有する剥片		砕片		礫片		焼石		計	
黒曜石	4	3.1	2	2.8			1	6.1																	6	79.9	153	149.1	1	4.3	2	5.4	4	6.6					187	241.2
第6層																			1	4320.0					1	476.9	1	37.3											3	4837.2
下呂石																											1	5.4	1	34.3									2	39.7
チャート																											2	72.4											2	72.4
凝灰岩																							1	17.4			1	23.1											2	40.5
砂岩					1	36.3					6	1759.8	2	238.0	1	84.0	3	101600.0			2	320.8	1	5.3	10	8892.2	29	1494.1							6	2074.5			63	110845.8
泥岩									1	86.9													1	31.8			4	57.2											6	176.9
粘板岩									1	49.1															1	84.9	5	108.9											8	237.7
石英																																					1	3300.0	1	3300.0
計	4	3.1	2	2.8	1	36.3	1	6.1	2	86.9	6	1759.8	2	238.0	1	84.0	3	101600.0	1	4320.0	2	320.8	2	54.5	18	9397.1	179	1935.7	2	38.6	2	5.4	4	6.6	6	2074.5	1	3300.0	242	119843.2

左側：個数、右側：重量（ｇ）

第 11 表　ＳＢ 3002 出土石器組成表

ＳＢ 3003・3004（第 38 ～ 41 図、第 12 表、PL22 ～ 25）

土器　ＳＢ 3003・3004 からは 1065 片の土器片（総重量 11,150 ｇ）が出土した。前期末に属する土器、五領ヶ台Ⅱａ式及びそれに並行する時期と考える中期初頭の土器である。完形状態に復元できるものはない。在地の土器の他、北陸系の土器や東海系の北浦Ｃ式、関西系の鷹島式と思われる土器が出土している。162 の浅鉢を除き、いずれも深鉢である。162 がＳＢ 3002 から出土した土器（100）と遺構間接合した。前期末から中期初頭にかけての土器群である。

中期初頭　126 ～ 138 は口縁部である。126 ～ 128 は五領ヶ台式である。126、127 は橋状把手をもち、128 は細線文と沈線による模様が施される。129 の突起は爬虫類の顔面を思わせる形状を呈する。130 は交互刺突文と沈線による渦巻文がみられる。131 は口縁部文様帯と口頸部文様帯に斜行沈線を施す。132 ～ 134 は口唇部に半截竹管の押引文をもつ。132、133 は押引文を有する隆線による渦巻文をもち、後者の口縁部文様帯の地文には瓦状押引文が施文される。135 は波状口縁の頂部に円形の粘土紐を巻き付け、口唇部に刻みをもつ。口縁部文様帯には平行沈線と、その間に刺突文が施される。136 は口縁部に瘤を貼り付けその周囲に押引文を有する隆線を貼り付ける。137 は押引文を有する隆線を横方向に巡らす。138 はＲＬの縄文を地文とする。139、140 は口縁部文様帯の破片で、139 は縦位に平行沈線が施文され、140 は縦位の条線地文に横位の半隆起の平行沈線が巡る。141、142 は口頸部文様帯の破片で、等間隔垂下文が施文される。143 は口頸部文様帯から胴部である。口径部文様帯には羽状沈線、胴部文様帯上部には格子目文、下部には縦位の沈線が施文される。144 ～ 157 は胴部の破片であ

る。144 は集合沈線による格子目文が施文される。145、146 は爪形文を押引く隆線がみられる。145 は平行沈線による三角区画内に、条線の地文と円形の竹管文を施す。147 ～ 151 は半隆起の平行沈線による区画文で構成される。区画内には縄文や沈線文が施され、147 には三角印刻文が見られる。152 は交互刺突文をもつ。153 は斜行沈線文を地文とし、平行沈線を垂下する。154、155 は撚糸文が施文される。154 は木目状の撚糸文である。156 は結束羽状縄文が施文される。157 は結節回転縄文が施文される。158 ～ 161 は底部である。158 は条線が、159 と 160 は結節回転縄文が施文される。161 は無文であるが、磨かれ、僅かに光沢をもつ。162 は浅鉢の口縁である。口唇部内面に列点文と押引文が施文され、外面は無文である。ＳＢ 3002 から出土した土器（100）と遺構間接合した。

前期末　163 は口唇部に付く筒状の突起である。164 ～ 171 は口縁部である。164 は折り返され空洞となる口唇部に橋状の突起が付く。文様は斜行沈線と三角印刻文を口唇部直下に施し、その下にＹ字状の沈線を施文する。165 は折り返された口唇部である。166 は十三菩提式と推定する。縄文を地文とし、横位に押圧隆線を貼り付け、そこから口唇に向けて縦位に粘土紐を貼り付ける。167 ～ 169 は浮線文により施文される。167、168 は縄文を地文とし、169 は斜行沈線の上から粘土紐を貼り付ける。170、171 は円形竹管刺突文が施文される。170 は橋状の把手をもつ。172 ～ 176 は胴部である。172 は細い沈線地文に三角印刻文が施文される。173 ～ 176 は縄文を地文とし、浮線文が施文される。173、174 は細い粘土紐を、175、176 は押圧された粘土紐を貼り付ける。

外来系土器　177、178 は北陸系の土器と推定する。いずれも非常に細い沈線文をもつ。177 は口縁部、178 は胴部である。179 は東海系の北裏Ｃ式と推定する。爪形刺突を施す隆線が貼り付けられる。180 ～ 182 は関西系の鷹島式と考える口縁部である。いずれも胎土がほかの土器と明瞭に異なり、文様は口唇部と微隆起の上に爪形刺突を施す。180、181 は口唇部内面に縄文を施文する。なお、180 に付着した炭化物の年代測定を行い、暦年較正値（２σ）5,584 ～ 5,476calBP の結果を得た。

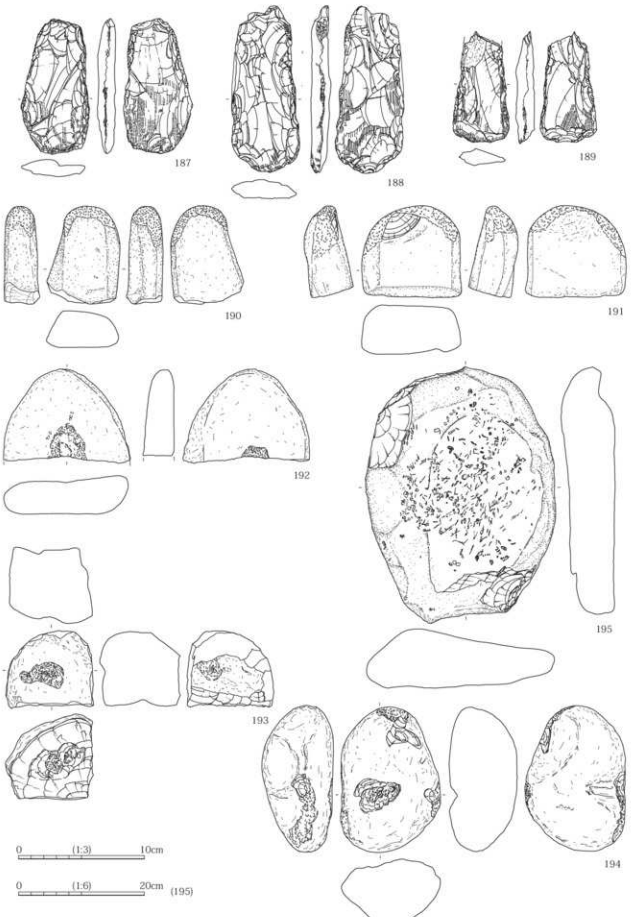
石器　277 点（総重量 26,142.1 ｇ）が出土した。詳細は第 12 表のとおりである。

183 は黒曜石製の石鏃である。断面は凸レンズ状を呈し、基部は平基である。184、185 は黒曜石製のピエス・エスキーユである。共に上下方向からの剥離痕をもつ。186 ～ 189 は打製石斧である。186、188 は凝灰岩製、187 は泥岩製、189 は砂岩製である。いずれも使用によると思われる摩耗がみられる。190、191 は砂岩製の敲石である。190 は下部を欠損する。敲打痕が上端の広い範囲にみられる。191 は上端前面に敲打痕が認められ、敲打による剥離をもつ。192 ～ 194 は砂岩製の凹石である。192 は下部を欠損する。表裏両面の中央に凹みをもつ。193 は表裏両面に凹みをもつほか、破砕後に側面を利用し、凹みが形成されている。194 は表面に１か所の凹みをもつほか、上端及び側面に敲打痕が認められる。195 は砂岩製の台石である。表面には広範囲に多数の敲打痕が確認できる。側辺には所々剥離面を有するが、これは台石として使用した結果生じたものと推定する。196、197 は黒曜石製の石核である。いずれも小形の不定形剥片を剥離したものと推定する。剥片剥離の結果、かなり小形になるまで消費されており、石鏃や石錐、ピエス・エスキーユ等の小形剥片石器の素材供給が難しくなった段階で廃棄されたものと推定する。198、199 は黒曜石製の二次加工ある剥片である。198 は背面の左上部から側辺にかけて平坦剥離がみられる。石鏃の可能性もあるが、加工が片面のみしか認められないため二次加工ある剥片とした。199 は腹面の右側辺にノッチ状の二次加工が施される。200 は黒曜石製の微細剥離ある剥片である。背面の左右両側面と腹面の右側辺、左側辺下部に微細剥離が認められる。

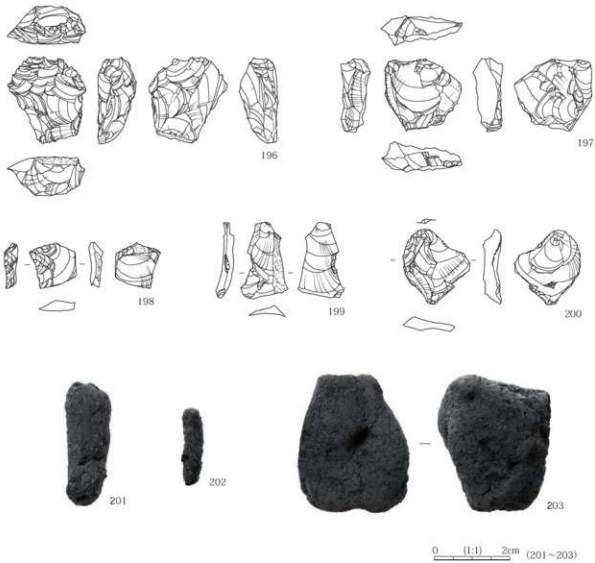
（ｃ）土製品　201、202 は紐状の焼成粘土塊である。201 が 3.8 ｇ、202 が 0.6 ｇである。いずれも前期末の浮線文に貼り付けられる粘土紐よりも太い。203 は角柱状の焼成粘土塊である。重量は 17.3 ｇである。1 面に貫通しない孔がみられる。

第38図　縄文時代の遺物図（12）　ＳＢ 3003・3004（1）

第39図　縄文時代の遺物図（13）　ＳＢ 3003・3004（２）



第40図　縄文時代の遺物図（14）　ＳＢ 3003・3004（３）



第41図　縄文時代の遺物図（15）　ＳＢ3003・3004（４）

	石鏃		石錐		ピエス・エスキーユ		打製石斧		磨石		凹石		台石		石皿		石棒		剥片		二次加工ある剥片		微細剥離ある剥片		砂片		計	
黒曜石	2	13.8	1	0.8	2	15.6											13	89.2	197	234.3	7	42.8	6	20.9	6	0.4	234	417.8
安山岩																	1	330.0	1	20.7							2	350.7
チャート																			1	7.7							1	7.7
凝灰岩							2	221.4																			2	221.4
砂岩							2	161.2	2	408.3	7	2440.9	2	14867.0	1	380.0	3	2533.8	11	3846.9							28	24638.1
泥岩							1	99.5											4	194.9							5	294.4
粘板岩							2	166.7											2	40.8							4	207.5
石英																			1	4.5							1	4.5
計	2	13.8	1	0.8	2	15.6	7	648.8	2	408.3	7	2440.9	2	14867.0	1	380.0	17	2953.0	217	4349.8	7	42.8	6	20.9	6	0.4	277	26142.1

左側：個数、右側：重量（g）

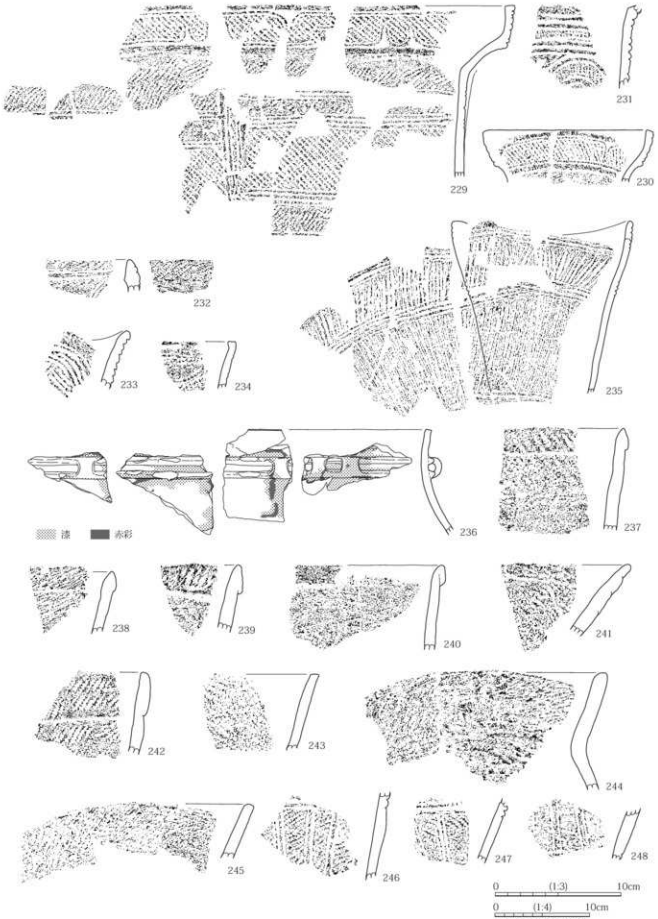
第12表　ＳＢ3003・3004出土石器組成表

ＳＢ4001（第42～49図、第13表、PL26～32）

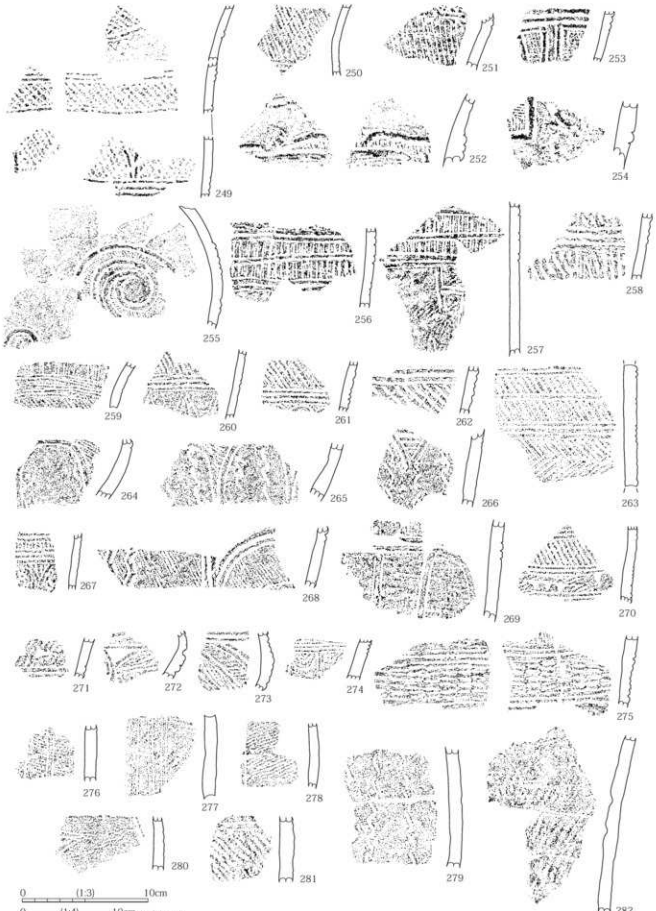
土器　ＳＢ4001からは2171点の土器片（総重量27.11kg）が出土した。五領ヶ台Ⅱａ式土器及びそれに並行する時期と考える中期初頭の土器を中心に、前期末の土器がわずかにみられる。完形状態に復元できるものはない。在地の土器の他、北陸系の土器や関西系の鷹島式と考えられる土器が出土した。204、205、272、273、216は鉢、298、299はミニチュア土器、それ以外は深鉢である。

中期初頭　204～245は口縁部である。204～208は五領ヶ台式で、橋状把手をもつ。209は五領ヶ台式土器の状口縁で、波頂部には三角形の孔が開き、口唇部には条線地に三角印刻文が施文される。210は口唇部に突起をもち、口縁部文様帯に半隆起線による区画内に細い条線による格子目文地に三角印刻文が施文される。211～223は口唇部に半截竹管による押引文が施文される。211は蛇体意匠の突起をもつ。口縁部文様帯には斜行沈線が施文される。212～217は口縁部文様帯に集合沈線による格子目文が施文され、212、213には押引文をもつ隆線の貼り付けと、頂部が平坦な突起がみられる。213、215、216は口頸部の地文に縄文を施文し、等間隔垂下文が施す。217は口頸部に斜行沈線が施される。214は口唇部から隆線が垂下する。218～221は口縁部文様帯に瓦状押引文が施文される。218は口唇部から押引文をもつ隆線が貼り付けられ、219には口頸部に斜行沈線が施される。222は波状口縁で、口唇部の内側に粘土を貼り付け肥厚する。口唇部内側の縁辺にも半截竹管による押引文がみられる。223は波状口縁で、口縁部文様帯は半隆起の沈線区画内を斜行沈線で施文する。224、225は口縁部文様帯に隆線を巡らせ、口唇と隆線の間を縦位の沈線で施文する。224は口唇部に深い沈線が施され、隆線に押引文が施される。226、227は文様と胎土がよく似ており、同一個体の可能性が高い。口縁部文様帯は横位の半隆起線間に縦位の沈線と三角印刻文が施される。226には口唇部に橋状把手が付けられる。228、229は口縁部文様帯を半隆起線で区画し、区画内に集合沈線による格子目文を施す。口頸部は縄文を地文とする。胴部は縄文及び格子目文の地文を半隆起線で方形に区画する。230は口縁部文様帯を半隆起線で区画し、斜行沈線を施文する。231、232は半隆起線による幾何学文が施文される。231は半隆起線間に格子目文が、232は縄文を地文とする。233は波状口縁で、半截竹管による半隆起線が集合する。234は口唇部内面に粘土紐を貼り付け、外面には細かな押引き文による弧状の意匠がみられる。235は縦位の沈線を施文後、多重沈線で横位に区画する。236は器形が樽形を呈する。口縁部に２条の隆線を巡らせ、隆線同士が橋状把手でつながれる。237～240は口縁部を外側に折込み肥厚させ、口唇部は尖る。237、238は口縁部および胴部に縄文を、239は撚糸文を施文する。240は無文である。241、242は縄文を地文とし、顕著な輪積痕が認められる。241の口唇部は尖る。243は縄文を地文とする。244、245は無節の撚糸文を施文する。246～248、250、251は口頸部、249は口頸部から胴部である。246～248は等間隔垂下文が施文される。246、247は縄文を地文とする。250は半截竹管による斜行沈線施文後に、ヘラ状施文具で深い沈線を斜位に施し格子目状とする。251は縦位の沈線を施文する。249は半隆起線の区画内に、集合沈線による格子目文が構成されている。口頸部の半隆起線からは三角印刻文が施される。252～286は胴部である。253～275は半隆起線による区画をもつ。252は幾何学形の区画内に、条線が縦位に施文される。253は方形区画内に格子目文、254は半隆起線に直交する方向に沈線が施文される。255は渦巻きの区画内に沈線が施される。256～258は狭い横位の区画内に縦位の沈線が施文される。259は縦位の沈線と斜行沈線、260は斜行沈線、261、262は半截竹管により斜行沈線を施文後、ヘラ状施文具で沈線を斜位に施し格子目文を施文する。263は横位に３単位の区画が認められ、上部２単位は格子目文、下部１単位は沈線が羽状に施文される。264～269は胴部上半をやや弧線化したＹ字状の半隆起線で区画する。264～266は区画内が斜行沈線で構成され、胴部下半は結節回転縄文を地文とする。268は区画内にＲＬの縄文がみられる。269の区画内は無文である。270、271は区画内に三角印刻文を施す。272、273は斜位の狭い区画内を横位の沈線で構成する。274の半隆起

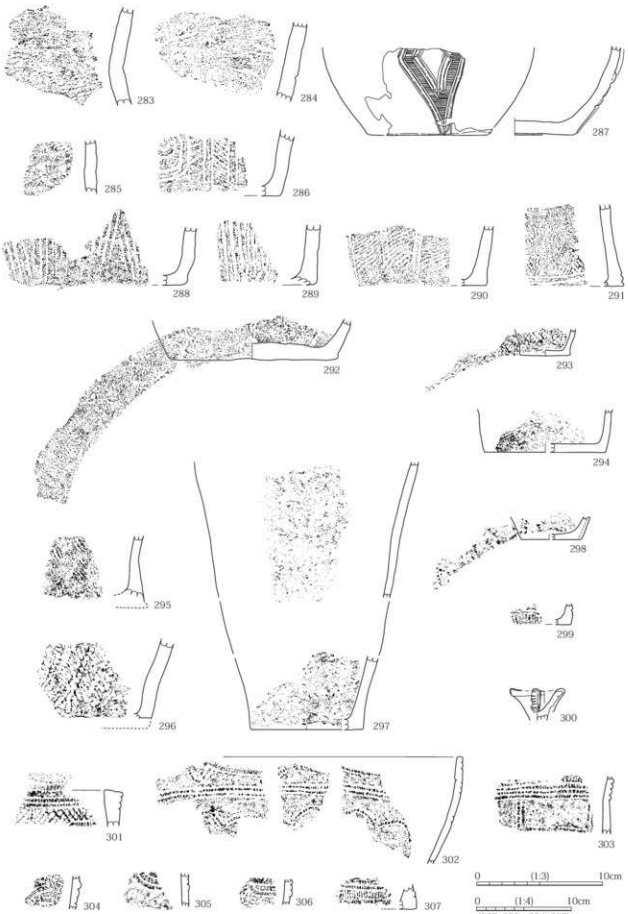
第42図　縄文時代の遺物図（16）　S B 4001（1）



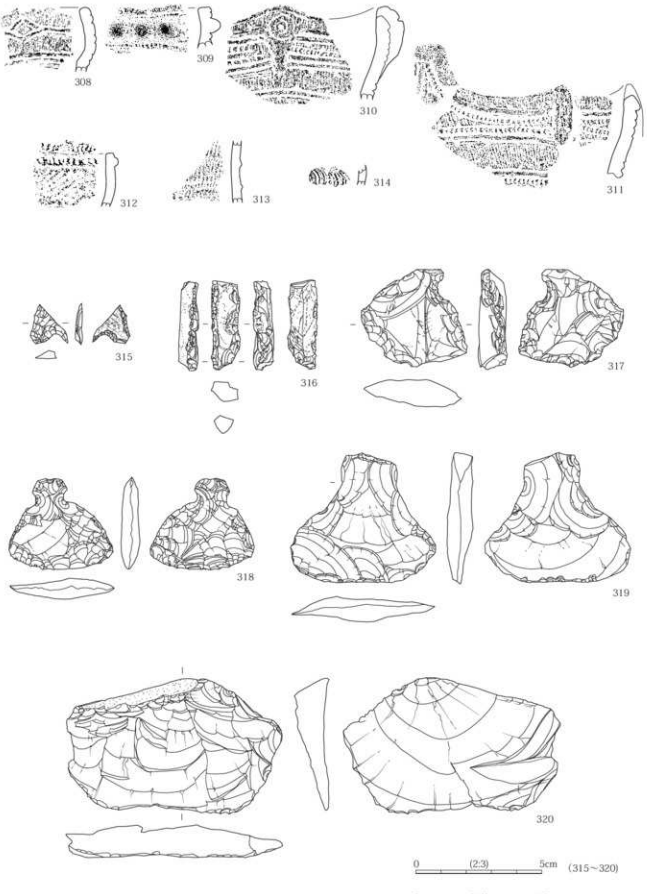
第43図　縄文時代の遺物図（17）　S B 4001（2）



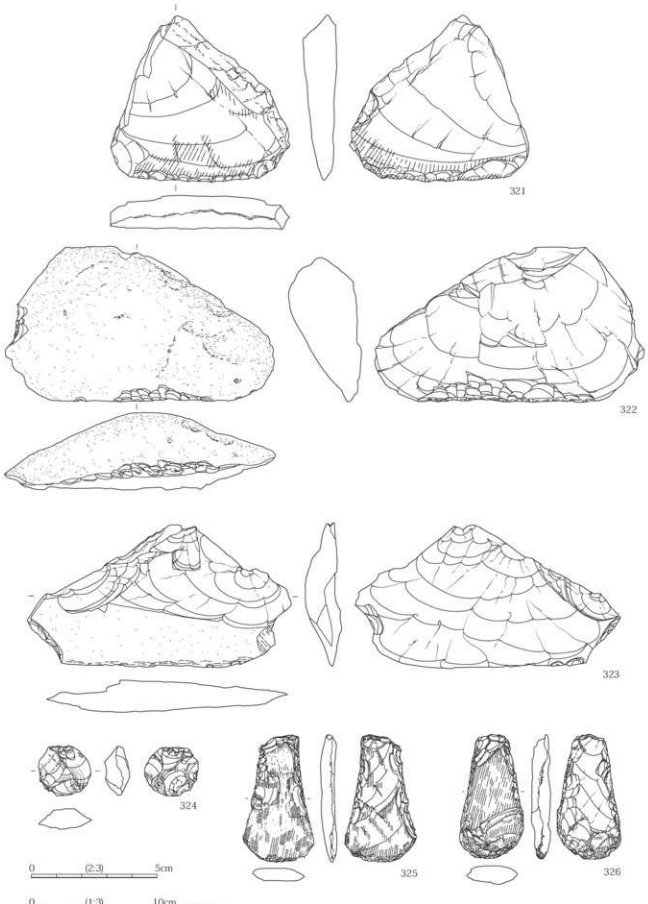
第44図　縄文時代の遺物図（18）　S B 4001（3）



第45図　縄文時代の遺物図（19）　S B 4001（4）

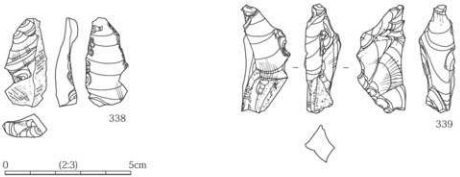


第46図　縄文時代の遺物図（20）　ＳＢ4001（５）



第 47 図　縄文時代の遺物図（21）　ＳＢ 4001（６）

第48図　縄文時代の遺物図（22）　ＳＢ4001（７）



第 49 図　縄文時代の遺物図（23）　ＳＢ 4001（８）

線は非常に細い。275 は瓦状押引文が施文される。276 は浅い沈線を格子状に施文する。277、278 は縄文地文に平行沈線が垂下する。279 は縦位、280 は横位に結節回転縄文が施文される。281 ～ 283 は縄文を地文とする。284 は無文である。285 は種実圧痕を有する。なお、257 に付着した炭化物の年代測定を行い、暦年較正値（２σ）5,306 ～ 5,051calBP の結果を得た。286 ～ 294 は底部である。286 は半隆起線により区画され、区画内は沈線で構成される。287 は半隆起線による幾何学形の区画内に横位の沈線を施文する。288、289 は縦位に集合沈線が施文される。290 は縄文を地文とし、平行沈線が等間隔に垂下する。291 は半隆起線が巡り、三角形を呈すると推測する刻みが垂下する。地文には結節回転縄文が施文される。292 は結節回転縄文が施文される。293 ～ 296 は縄文を地文とする。297 は無文である。298、299 はミニチュア土器である。298 は押引文をもつ半隆起線が施される。

前期末　300 は口縁部に付くと推定する突起である。301 は口縁部で、半隆起線による区画内に、斜行沈線と浮線文による格子目文が施文される。302 ～ 307 は押引文をもつ半隆起線による模様が施される。302 は口縁部、303 ～ 306 は胴部、307 は底部である。302 は口唇部に２個１対の突起が付き、押引文が巡る。半隆起線は弧状化したＹ字状を呈する。303 は半隆起線による方形区画をもつ。304 ～ 307 は同一個体と推定する。半隆起線により幾何学形の区画をもち、区画内は沈線が施文される。

外来系土器　308 ～ 311 は北陸系の土器と考える。いずれも口縁部である。308 は波状口縁で、波頂部には２個１対の刻みをもつ。非常に細い条線地に半隆起線による意匠がみられる。309 は波状口縁で押引文をもつ半隆起線による区画内に瘤を貼り付ける。310、311 は文様と胎土がよく似ており、同一個体の可能性がある。口唇部文様帯には縦位の条線と三角印刻文、口縁部文様帯上部には半隆起の押引沈線文間に縦位の細い沈線、下部には半隆起線間に縦位の細い沈線と三角印刻文が施文される。310 には円文が付く突起から隆線が垂下する。312 ～ 314 は関西系の鷹島式と考える。312、313 には特殊凸帯文が、314 には連続爪形文が認められる。

石器　砂岩の礫片７点を含む 242 点（総重量 13,731.0 ｇ）が出土した。詳細は第 13 表のとおりである。

315 は黒曜石製の石鏃である。板状の「ズリ」を素材とする。右上部を大きく欠損する。316 は黒曜石製の石錐である。「ズリ」を素材とし、断面形は菱形を呈する。317 ～ 319 は石匙である。317、319 はチャート製、318 は頁岩製である。317 は失敗品と考える。320 ～ 323 はスクレイパーである。320、321 は砂岩製、322 は花崗岩製、323 は泥岩製である。いずれも大形の剥片を素材とし、直線状で片刃の刃部をもつ。刃部には使用によると思われる摩耗がみられる。324 は黒曜石製のビエス・エスキーユである。上下及び左右からの剥離痕がみられる。325 ～ 332 は打製石斧である。325、326、328、329、332 は砂岩製、330 は泥岩製、327 は粘板岩製、331 は流紋岩製である。325、326、328、329、331、332 には刃部に使用によると思われる摩耗やツブレがみられる。333、334 は砂岩製の敲石である。333 は上端に敲打痕と敲打による剥離がみ

られる。下半を欠損する。334 は上端の広い範囲に敲打痕がみられる。下半を欠損するが、その剥離面には、一部摩耗が認められる。335は砂岩製の凹石である。表面に１か所凹みが確認できる。凹みがある面には、磨ったような痕跡をもつ溝が数条認められる。凹石の他、砥石として利用した可能性もある。336 は砂岩製の台石である。端部や側面に敲打痕や敲打による剥離が認められる。敲打痕が残される部位は敲石によく認められるものであるが、片手に保持して扱うには重量が重すぎるため台石と判断した。337 は砂岩製の石皿である。下半を大きく欠損する。338 は黒曜石製の微細剥離ある剥片である。腹面の左右両側辺に微細剥離が認められる。339 は黒曜石製の削片である。背面に直線状の稜線を作り出し、削出されたものである。

	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	ピエス・エスキーユ	打製石斧	敲石	凹石	台石	石皿	砥石	石核	剥片	二次加工ある剥片	微細剥離ある剥片	削片	砂片	礫片	計
黒曜石	1 4.2	1 3.7			4 11.0							94 62.7	142 214.4	1 0.8	5 15.3	1 7.6	13 1.9		177 320.7
流紋岩						2 61.4							1 2.9						3 64.3
花崗岩				1 168.2				1 411.5											2 579.8
チャート			2 46.7										2 20.7						4 61.4
真岩			104.6																1 104.6
砂岩				2 113.4		7 626.6	6 745.9	3 1735.6	3 2667.1	1 3550.0	1 116.9	1 268.9	12 1126.2					7 1338.0	43 12088.6
泥岩				1 66.6		3 209.7							6 173.9						10 450.2
粘板岩						1 29.6							1 32.4						2 62.0
計	1 4.2	1 3.7	3 144.7	4 348.2	4 11.0	13 727.3	6 745.9	4 2147.1	3 2667.1	1 3550.0	1 116.9	101 331.6	164 1570.5	1 0.8	5 15.3	1 7.6	13 1.9	7 1338.0	242 13731.6

左側：個数、右側：重量（g）

第 13 表　ＳＢ 4001 出土石器組成表

（２）土坑出土遺物

土坑からは、土器が 1,386 点（15,053g）、石器が 277 点（41,916.0g）出土した。土坑ごとの石器の種類と出土量は第 14 表のとおりである。1 トレンチの土坑からは縄文時代中期初頭と中期中葉の土器、その他のトレンチからは縄文時代中期初頭の土器が主に出土しており、石器の帰属時期も上記の時期と考える。以下、土坑ごとに出土遺物を記述する。

１トレンチ

ＳＫ 1013（第 50 図、PL33）

石器　340 は黒曜石製の削片である。背面に直線状の稜線を作り出し、削出されたものである。

ＳＫ 1014（第 50 図、PL33）

石器　341 は凝灰岩製の打製石斧である。表裏両面は中央から刃部にかけて摩耗しており、裏面の右側辺中央の稜線はややツブレている。

ＳＫ 1016（第 50 図、PL33）

土器　342 はほぼ完形の深鉢である。波状口縁で、隆線の貼り付けによる意匠もみられる、口縁部文様帯は平行沈線を垂下し、胴部文様帯上半は押引文をもつ隆線による区画内に三角区画文が巡る。胴部文様帯下半はＲＬの縄文が施文される。

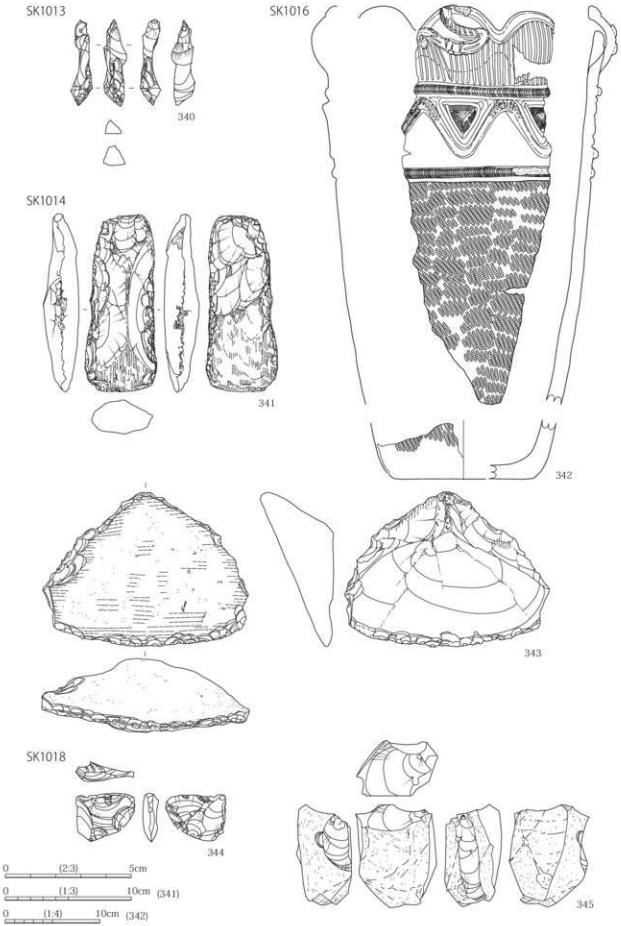
石器　343 は安山岩製のスクレイパーである。大形の剥片を素材とし、背面は自然面で構成される。背腹両面からの加工により、両刃で直線状の刃部を形成する。刃部は摩耗しており、基部にはツブレが認められる。

ＳＫ 1018（第 50 図、PL33）

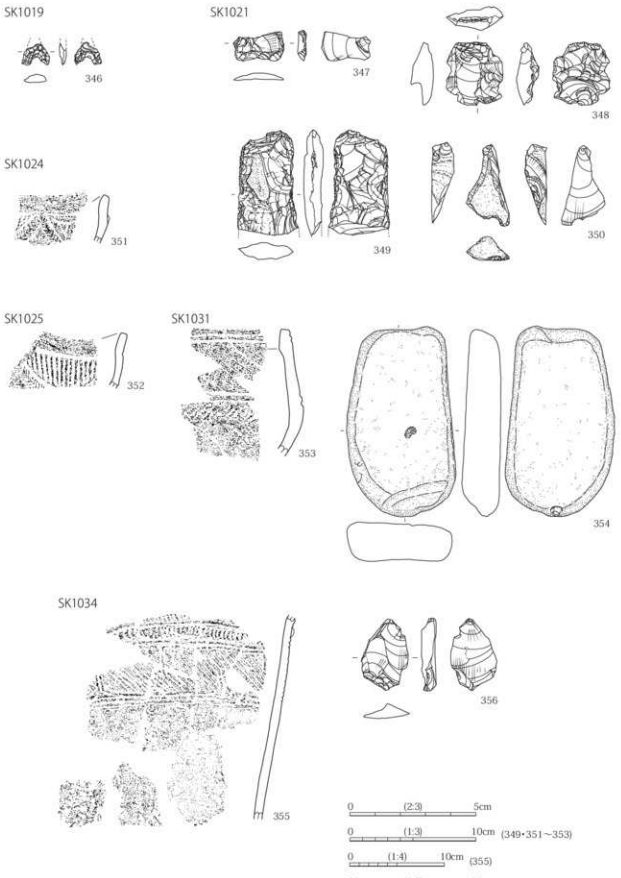
石器　344 は黒曜石製のピエス・エスキーユである。上下方向からの剥離痕をもつ。345 は黒曜石製の石核である。単設の剥離面を打面とし、左右両側面に１面ずつ剥離面が認められる。

ＳＫ 1019（第 51 図、PL34）

石器　346 は黒曜石製の石鏃である。先端を欠損する。



第50図　縄文時代の遺物図（24）　Ｉトレンチ ＳＫ（1）



第 51 図　縄文時代の遺物図（25）　１トレンチＳＫ（２）

ＳＫ 1021（第 51 図、PL34）

石器　347 は黒曜石製の石鏃である。失敗品と考える。背面周縁を調整中に折れたため、製作作業を中断したものと推定する。348 は黒曜石製のピエス･エスキーユである。上下及び左右方向からの剥離痕をもつ。349 は砂岩製の打製石斧である。器体中央から刃部を欠損する。350 は黒曜石製の微細剥離ある剥片である。剥片の末端にノッチ状に微細剥離が入る。

ＳＫ 1024（第 51 図、PL34）

土器　351 は深鉢の波状口縁である。弧状の区画が連続し、区画内に縦位の沈線がみられる。ＳＫ 1025 から出土した 352 と遺構間接合する。

ＳＫ 1025（第 51 図、PL34）

土器　352 はＳＫ 1024 から出土した 351 と遺構間接合する。

ＳＫ 1031（第 51 図、PL34）

土器　353 は深鉢の口縁から口頸部である。口唇部は平行沈線を巡らせ、口縁部文様帯はヘラ状施文具により格子目文が施される。

石器　354 は砂岩製の台石である。表面器体中央に敲打痕がみられる。

ＳＫ 1034（第 51 図、PL34）

土器　355 は深鉢の胴部である。半隆起線による方形区画内に斜行沈線が施文される。

石器　356 は黒曜石製のピエス・エスキーユである。上下方向からの剥離痕をもつ。

３トレンチ

ＳＫ 3001（第 52 図、PL35）

土器　357 は深鉢の胴部と底部である。地文は縄文で、特殊凸帯文が施される。関西系の鷹島式と考える。

ＳＫ 3003（第 52 図、PL35）

土器　358 は深鉢の口縁から胴部である。口唇部には突起が付き、口縁は角口縁状となる。断面は薄手である。外面は無文であるが、内面は口縁近くに平行沈線が巡る。加曽利Ｂ式の粗製土器と推定する。

ＳＫ 3009（第 52 図、PL36）

土器　359 は深鉢の胴部である。矢羽状の沈線と斜行沈線が施文される。360 は深鉢の胴部である。地文は縄文である。

石器　361 は黒曜石製で二次加工ある剥片である。背面右側辺と腹面両側辺に二次加工が施される。

ＳＫ 3022（第 52 図、PL35）

土器　362 ～ 364 は深鉢の胴部である。362 は縦位の沈線が施される。363 は２条の半隆起線で横位に区画され、上半は斜行沈線で、下半は縄文が施文される。364 は地文は縄文で、平行沈線を垂下させる。

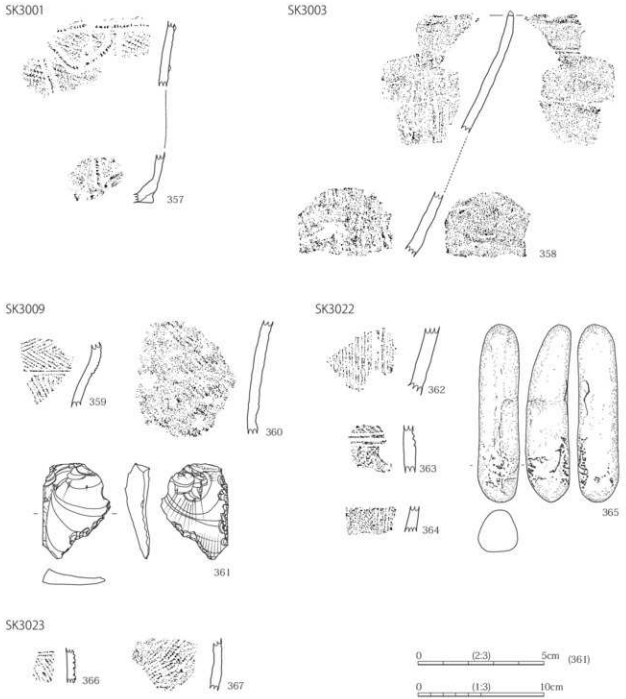
石器　365 は砂岩製の敲石である。側辺の一部に敲打痕が認められる。

ＳＫ 3023（第 52 図、PL35）

土器　366 は深鉢の胴部である。横位の半隆起線の下に斜行沈線が施文される。367 は縄文を地文とする深鉢の胴部である。

ＳＫ 3024（第 53 図、PL36）

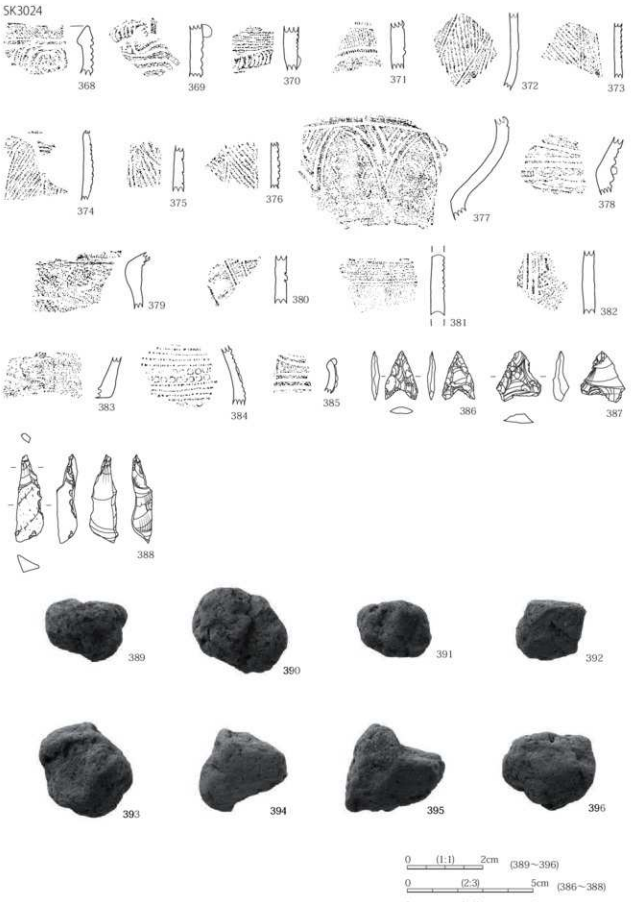
土器　368 は深鉢の口縁である。口唇部外面は細い条線が施文され、内側を削り断面はとがる。口縁部文様帯には半隆起線よる渦巻文がみられる。369 ～ 382 は深鉢の胴部である。369 ～ 371 は押引文をもつ隆線または半隆起線が認められる。369 は隆線下に押引の平行沈線による意匠が、370 は隆線の上に横位の沈線が、371 は半隆起線による区画内に縦位の沈線が施文される。372 ～ 377 は半隆起線による区画をもつ。372 ～ 374 は三角形と推定する区画内を斜行沈線で構成する。375 は区画内に斜行沈線、376 は区画内に斜行沈線を



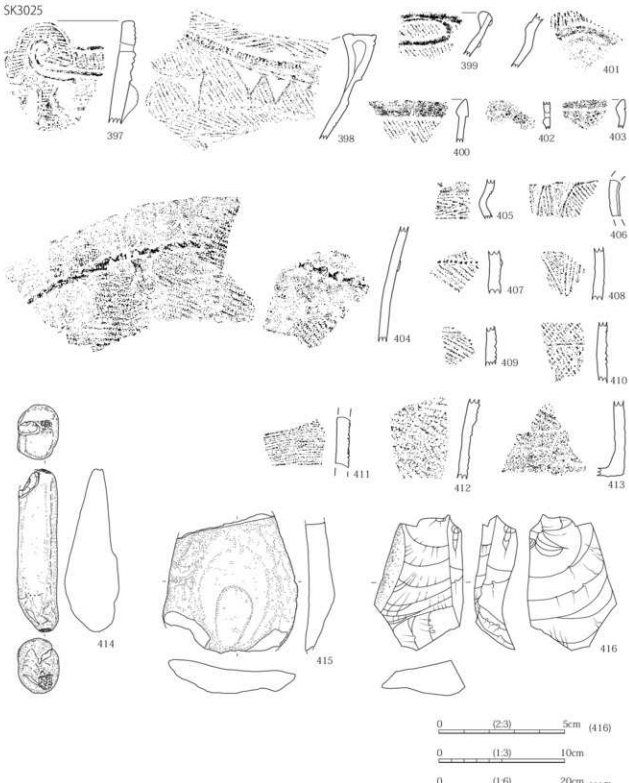
第 52 図　縄文時代の遺物図（26）　３トレンチＳＫ（１）

施文し、外は縄文を地文とする。377 は僅かに弧線化したＹ字状を呈する半隆起線による三角形区画が連続し、胴部下半は結節回転縄文を施文する。378、379 は横位の半隆起線が施文される。378 の半隆起線の下部には竹管の腹側により施文された沈線がみられる。379 は縄文を地文とする。380 は等間隔に平行沈線が垂下する。381 は平行沈線を横位に施文する。382 は竹管の腹側により施文された沈線が３条垂下する。地文は縄文である。383 は深鉢の底部である。文様は確認できない。384、385 は北陸系土器の胴部である。384 は４条１組の押引文をもつ浮線が上下に認められ、その間を小円貼付文が充填する。北陸地方の縄文前期末に見られる朝日下層系統のものと推定する。385 は半隆起線による区画内を非常に細い沈線で施文して格子目とする。

石器　386、387 は黒曜石製の石鏃である。387 は失敗品と考える。388 は黒曜石製の微細剥離ある剥片である。背面右側辺に微細剥離が認められる。



第53図　縄文時代の遺物図（27）３トレンチＳＫ（２）



第 54 図　縄文時代の遺物図（28）　３トレンチＳＫ（３）

土製品　焼成粘土塊が８点出土した。いずれも不整形で明瞭な加工の痕跡はみいだせない。

ＳＫ 3025（第 54 図、PL37）

土器　397 ～ 404 は深鉢の口縁である。397 は橋状把手をもつ五領ヶ台式土器である。口縁部文様帯は沈線を地文とし三角印刻文が施される。398 は波状口縁で、口唇部を内側に折返し中空とする。斜行沈線を地文とし、三角印刻文が施文される。399 ～ 401 は沈線を地文とする。399 は粘土紐が貼り付けられる。401 は口唇部に沈

線がみられる。口唇部を内側に折返すと推定する。402、403 は円形竹管刺突文が施される。402 は口唇部に付く突起である。404 は縄文を地文とし、刻みをもつ粘土紐を巡らせる。405 は深鉢の口頸部である。矢羽状沈線文が施文される。406 ～ 412 は深鉢の胴部である。406 ～ 409 は斜行、または縦位の沈線を地文とする。406 は三角印刻文が施される。407 は押引文をもつ粘土紐が貼り付けられる。410 は沈線による格子目文が施文される。411 は平行沈線を横位に施文する。412 はＲＬの縄文を地文とする。413 は深鉢の底部である。縄文を地文とする。

石器　414 は砂岩製の敲石である。上下両端に敲打痕が認められ、上端には敲打による剥離もみられる。415 は砂岩製の石皿である。使用面の凹みは浅い。416 は下呂石製の剥片である。

４トレンチ

ＳＫ 4012（第 55 図、PL38）

土器　417 は深鉢の胴部である。半隆起線による方形区画内に横位の沈線が施される。

ＳＫ 4020（第 55 図、PL38）

土器　418 は深鉢の底部である。縄文を地文とする。

ＳＫ 4024（第 55 図、PL38）

土器　419 ～ 421 は深鉢の口縁である。、419 は平行沈線が、420 は竹管の腹側により施文した沈線が施文される。421 は波状口縁で縄文を地文とし、地文が口唇部内側にも施される。422 ～ 424 は深鉢の胴部である。422、423 は半隆起線による三角区画文が横位に連続する。424 は深鉢の底部である。半隆起線による方形区画をもつ。

ＳＫ 4025（第 55 図、PL38）

土器　425 は深鉢の胴部である。横位の平行沈線下に縦位の平行沈線が施文される。426 は深鉢の底部である。平行沈線を地文とする。

石器　427 は黒曜石製の尖頭器である。剥離面が細長く、斜行するように入る。押圧剥離によるものと思われ、有舌尖頭器の先端部の可能性がある。下半を欠損する。428 はチャート製の石匙である。

ＳＫ 4026（第 55 図、PL38）

土器　429 は縄文を地文とする深鉢の胴部である。

ＳＫ 4028（第 55 図、PL38）

土器　430、431 は深鉢の口縁である。430 は口唇部直下に刻みをもつ隆線が２条巡る。431 は半隆起線下に細い沈線による格子目文と垂下する平行沈線がみられる。北陸系土器の可能性がある。432 は深鉢の口頸部である。等間隔垂下文が施文される。

石器　433 は黒曜石製の石錐である。剥片を素材とする。先端部の断面は四角形を呈する。434 は砂岩製の敲石である。自然の稜上に敲打痕が集中してみられる。表面にみられる剥離面は敲打によるものと推定する。

ＳＫ 4029（第 55 図、PL38）

土器　435 は深鉢の胴部である。地文に結節回転縄文が施文され、平行沈線が垂下する。

石器　436 は砂岩製の敲石である。上下両端と側辺に敲打痕、上端に敲打による剥離がみられる。

ＳＫ 4032（第 56 図、PL39）

土器　437 は口縁に４つの突起をもつ。口唇部は押引文が施文され、口縁部文様帯は突起から垂下する押引文が施された隆線により４単位に区画され、各区画を交互に瓦状押引文と斜行沈線により施文する。口頸部文様帯は等間隔垂下文、胴部文様帯上半は斜行沈線、胴部文様帯下半は縦位の沈線により施文する。ＳＫ 4035 より出土した口縁部４片と遺構間接合した。438 は３条の半隆起線下に沈線による格子目文が施される。

ＳＫ 4034（第 56 図、PL39）

土器　439 は半隆起線により横位に区画され、上の区画に三角印刻文、下の区画に細い沈線による格子目文が施される。北陸系の土器と推定する。440 は縄文を地文とする深鉢の胴部である。441 は深鉢の底部

第 55 図　縄文時代の遺物図（29）　４トレンチＳＫ（１）

である。縦位の半隆起線間に横位の沈線が施文される。

ＳＫ 4035（第 56 図、PL39）

土器　442 は深鉢の胴部である。半隆起線間に格子目文が施文される。443 は縄文を地文とする深鉢の胴部である。

ＳＫ 4036（第 56 図、PL39）

土器　444 は結節回転縄文が施文される、深鉢の胴部である。

ＳＫ 4037（第 57 図、PL40）

土器　445 は深鉢の胴部である。垂下する平行沈線と結節回転縄文が施文される。

ＳＫ 4038（第 56 図、PL39）

土器　446 は深鉢の波状口縁である。口唇部には太い沈線が施され、口唇部直下には縦位の細線文に三叉文が施文される。

ＳＫ 4039（第 56 図、PL39）

土器　447、448 は深鉢の口縁部である。447 は口唇部に縄文を施文し、口縁部文様帯は半隆起線により区画され、格子目文が施される。448 は波状口縁で押引き文をもつ半隆起線による区画内に瘤が貼り付けられる。北陸系の土器と推定する。449 は深鉢の口頸部である。半隆起線による区画内に斜行沈線が施文される。450 ～ 455 は深鉢の胴部である。450 は半隆起線間に細い条線、451 は半隆起線上に縦位の平行沈線、452 は細い沈線による格子目文、453 は縦位の平行沈線、454 は１条の垂下する平行沈線が施文される。455 は縄文を地文とする。

ＳＫ 4041（第 56 図、PL39）

土器　456、457 は半隆起線による区画をもつ深鉢の胴部である。456 は逆Ｕ字状に区画内に縦位の沈線が施文される。457 は横位に区画され、区画内は縄文地と斜行沈線がみられる。458 は深鉢の胴部である。Ｙ字状の半隆起線が連続し、下部に細い沈線による格子目文が施される。459 はミニチュア土器の口縁部である。細い沈線による抽象的な意匠をもつ。

石器　460 は砂岩製の凹石である。表裏左右４面に凹みと磨り面が認められる。

ＳＫ 4042（第 57 図、PL40）

土器　461 は口縁から胴部が接合し、ほぼ完形に復元できる。口縁から口頸部にかけて橋状把手が付く。口径部文様帯は半隆起線で弧状に区画され、区画内は格子目文が施文される。胴部文様帯は半隆起線により上下に区画され、上段は格子目文、下段は方形と弧状に区画され、区画内は格子目文で構成される。462 は口縁から胴部が接合し、ほぼ完形に復元できる。口縁部文様帯は隆線による区画内に格子目文が、口頸部文様帯は縄文地に等間隔垂下文が施文される。胴部上半は隆線による区画内に格子目文が施文され、下半は縄文を地文とする。

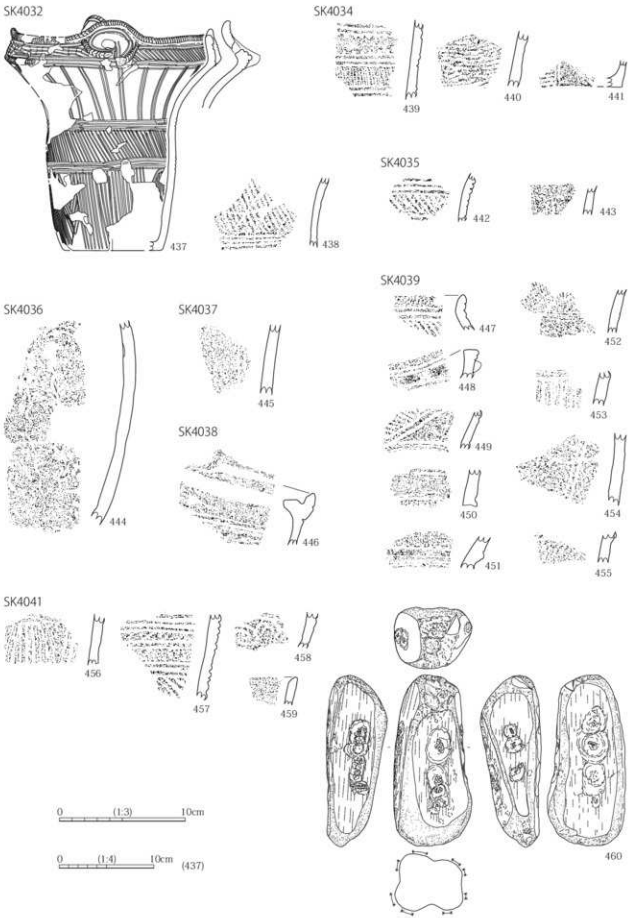
石器　463 は砂岩製の砥石である。表面と右側面に磨り面が認められる。

ＳＫ 4043（第 57 図、PL40）

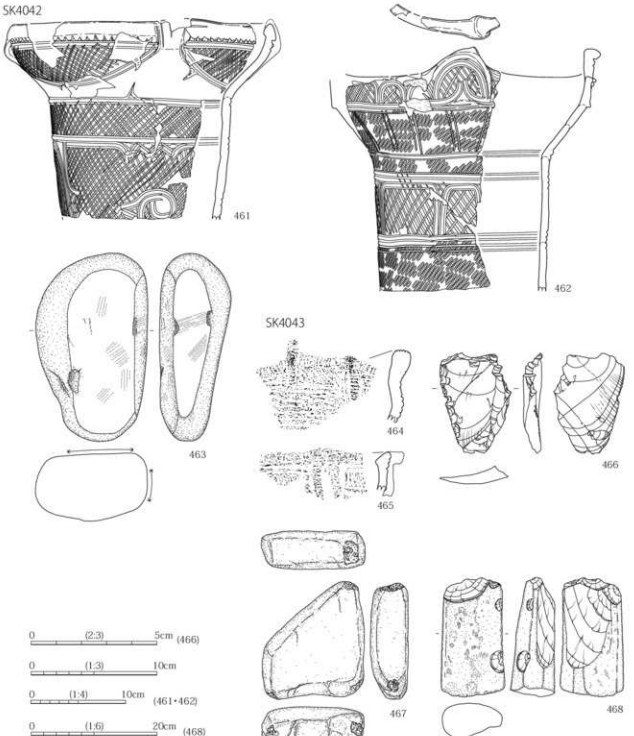
土器　464、465 は口縁部である。464 は口唇部に押引文を、口縁部文様帯に斜行沈線を施文する。口唇部から押引文をもつ隆線を垂下させ、口頸部文様帯は瓦状押引文を施文する。465 は口唇部に押引文を施文し、口縁部文様帯は口唇部から垂下する押引文をもつ隆線と半隆起線による方形区画内に細い沈線による格子目文が施文される。北陸系の土器と推定する。

石器　467 は砂岩製の敲石である。自然の角部に敲打痕が集中して残る。466 は黒曜石製で二次加工ある剥片である。背面左側辺に二次加工が施され、背面右側辺には微細剥離が認められる。

石製品　468 は砂岩製の石棒である。上下を欠損する。特に上部は表裏両側に剥離面が認められ、故意に壊したようにも思える。



第 56 図　縄文時代の遺物図（30）　４トレンチＳＫ（２）



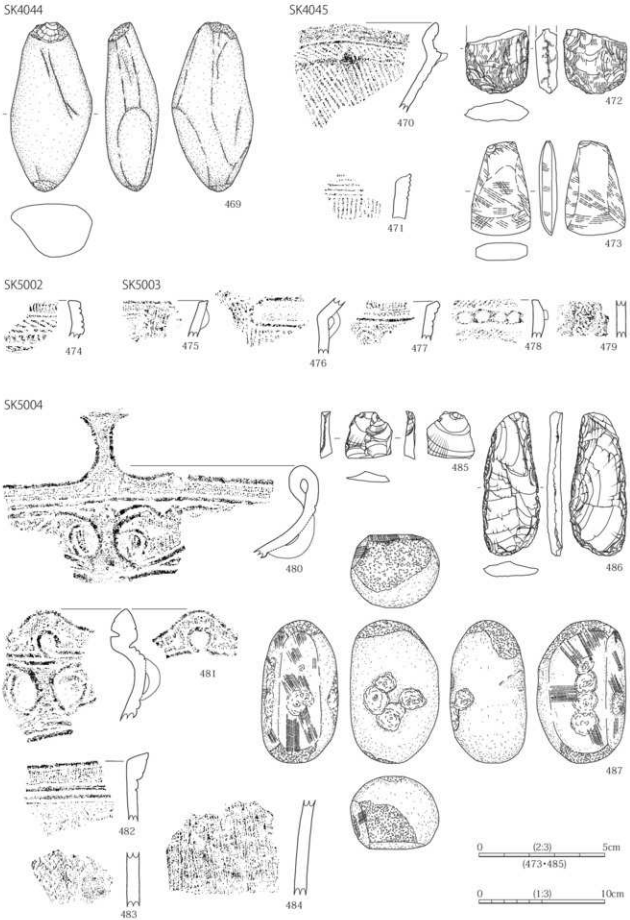
第 57 図　縄文時代の遺物図（31）　４トレンチＳＫ（３）

ＳＫ 4044（第 58 図、PL41）

石器　469 は砂岩製の敲石である。上下両端に敲打痕が認められ、上端に敲打による剝離がみられる。

ＳＫ 4045（第 58 図、PL41）

土器　470 は口縁部である。口縁部文様帯は半隆起線下に沈線による格子目文が、胴部は沈線による格子目文が施文される。器形は口縁部文様帯と胴部の境界で屈曲する。471 は深鉢の胴部である。横位と縦位の沈線による施文される。



第58図　縄文時代の遺物図（32）　４トレンチＳＫ（４）、５トレンチＳＫ（１）

石器　472 は泥岩製の打製石斧である。刃部および器体に摩耗が認められる。上半を欠損する。473 は透閃石岩製の磨製石斧である。全面がよく研磨された小形の定角式石斧である。刃部は片刃である。

５トレンチ

ＳＫ 5002（第 58 図、PL41）

土器　474 は深鉢の口縁である。口唇部に押引文が、口縁部文様帯は半隆起線で区画し、斜行沈線が施される。

ＳＫ 5003（第 58 図、PL41）

土器　475 ～ 478 は深鉢の口縁である。475、476 は橋状把手をもつ五領ヶ台式である。477 は波状口縁で、口唇部に刻みと半隆起線が施され、口縁部文様帯は斜行沈線を地文とし、波状の半隆起線が横位に施文される。478 は縄文地文に、指頭圧痕をもつ隆線が貼り付けられる。479 は結節回転縄文が施文される、深鉢の胴部である。

ＳＫ 5004（第 58 図、PL41）

土器　480 ～ 482 は深鉢の口縁である。480、481 は橋状把手をもつ五領ヶ台式である。480 は口唇部にも橋状突起が付く。481 は口唇部に突起が付き、480 と文様がよく似る。482 は口唇部に縦位の沈線、口縁部文様帯は２条の半隆起線下に結節回転縄文が施文される。483、484 は深鉢の胴部である。483 は結節回転縄文、484 は縦位の沈線が施文される。

石器　485 は黒曜石製のピエス・エスキーユである。上下方向からの剥離痕をもち、背面左側辺には微細剥離が連続する。486 は安山岩製の打製石斧である。板状の剥片を素材とする。487 は砂岩製の凹石である。表裏面と左側面に凹みを有し、上下両端には敲打痕も認められる。さらに裏面と左側面には磨り面も確認でき、凹石の他、敲石、砥石としても利用されたと判断する。

ＳＫ 5005（第 59 図、PL42）

土器　488 ～ 490 は深鉢の口縁である。488 の口縁部文様帯には橋状把手が付き、胴部は弧状の沈線が施される。489 は口縁部文様帯に半隆起線による区画内に斜行沈線が、口頸部は縄文地に等間隔垂下文が施文される。490 は沈線を垂下し、半隆起線を横位に１条施す。491、492 は深鉢の胴部である。491 は沈線を縦位に施し、492 は無文である。

石器　493 は砂岩製の打製石斧である。背面右側面は折面で、器体の右側を大きく欠損していると推定する。494 は黒曜石製の石核である。「ズリ」面を打面に、剥片が複数枚剥離されている。

ＳＫ 5006（第 59 図、PL42）

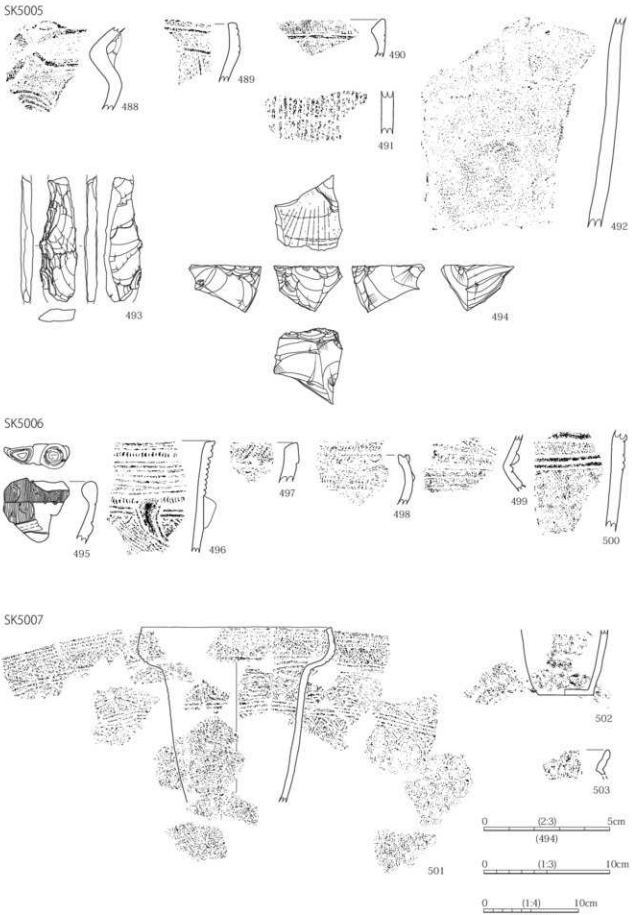
土器　495 ～ 498 は深鉢の口縁である。495 は五領ヶ台式土器で、口唇部に隆線を渦巻状に付け、口縁部文様帯は沈線に沿い三角形の刻みが連続する。496は口縁部文様帯に押引文をもつ半隆起線間に横位の半隆起線を巡らす。胴部は縄文地に平行沈線を蛇行させ、隆線による意匠が付く。497 は口唇部の外面が肥厚する。地文は縄文である。498 は関西系の鷹島式土器である。地紋は縄文で、特殊凸帯文を施文する。499 は鉢の口頸部である。口頸部文様帯は半隆起線が１条巡り、その上は条線地に平行沈線による意匠が施される。胴部は条線地に三角印刻文が連続する。500 は深鉢の胴部である。上半は半隆起線による区画内に縦位の沈線が、下半は結節回転縄文が施文される。

ＳＫ 5007（第 59 図、PL42）

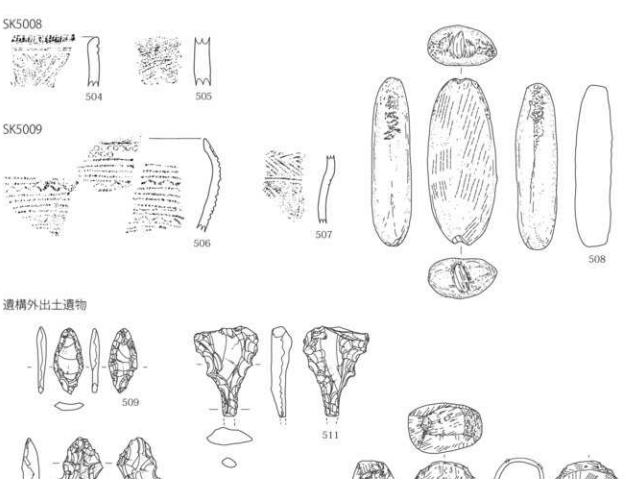
土器　501 は口縁から胴部が接合し、ほぼ完形に復元できる。口縁部文様帯は押引文をもつ半隆起線による山形と蕨手の意匠が、口頸部は縦位の条線地に半隆起線による菱形と渦巻の意匠が施される。胴部は結節回転縄文を地文とし、平行沈線をＹ字状に施す。502 は縦位の沈線を地文とする深鉢の底部である。503 はミニチュア土器の口縁部で、口唇部に刻みをもつ。

ＳＫ 5008（第 60 図、PL43）

土器　504 は深鉢の口縁である。口唇部は押引文が施文される。口縁部文様帯は条線地に沈線による意匠と三角印刻文が施される。505 は縄文を地文とする深鉢の胴部である。



第 59 図　縄文時代の遺物図（33）　５トレンチＳＫ（２）



第 60 図　縄文時代の遺物図（34）　５トレンチＳＫ（３）、遺構外出土遺物

ＳＫ 5009（第 60 図、PL43）

土器　506 は鉢の口縁である。押引文をもつ浮線が上下に認められ、その間を小円貼付文が充填する。北陸地方の縄文前期末に見られる朝日下層系統と推定する。507 は口縁部から口頸部である。口縁部文様帯は矢羽状に沈線が、口頸部は縄文地に平行沈線が垂下する。

石器　508 は砂岩製の石錘である。上下両端に研磨によって作成された溝をもつ。上部の両側辺に敲打痕が認められる。敲石を転用した可能性がある。

（３）遺構外出土遺物（第 60 図、PL43）

遺構外出土遺物は、検出面や壁面精査時に出土したほか、平安時代の遺構や表採、かく乱から出土した縄文時代の遺物を含む。土器が 669 点（6,588g）、石器が 169 点（4,356.5g）出土した。石器の詳細は第 14 表のとおりである。土器、石器ともに竪穴建物跡及び土坑から出土したものと時期や器種がほぼ同一である。そのため、本項では遺構出土遺物では確認できない器種の石器を報告する。509、510 はチャート製の尖頭器である。周辺が調整される。510 は両面調整の尖頭器を製作中に右側辺および下部を大きく欠損した失敗品と推定する。511 は凝灰岩製の石錐である。素材剥片を両面を調整し、断面は菱形を呈する。端部を欠損する。512 は安山岩製の磨石である。表裏両面がに磨り面が認められる。磨り面は非常に平滑である。

第14表 SK出土石器出現表

遺構No.	石材	石鏃	尖頭器	石槍	石錐	スクレイパー	スポールコア	打製石斧	磨製石斧	敲石	凹石	磨石	台石	石皿	砥石	石錘	石篦	石棒	剥片	二次加工ある剥片	微細剥離のある剥片	砕片	砕片	礫片	黒石	計
SK003	砂岩																		3 119.9							3 119.9
SK013	黒曜石																					1 1.6				1 1.6
SK014	頁岩							1 244.3																		1 244.3
SK016	安山岩						1 101.1																			1 101.1
SK017	黒曜石																		1 1.4							1 1.4
SK018	黒曜石							1 3.9										1 29.9	1 1.2							3 35.0
SK019	黒曜石	1 0.1																				1 0.1				2 0.1
	黒曜石	1 0.7						1 5.6											18 16.4		2 5.5	6 0.3				28 28.0
SK021	砂岩							1 15.1																		1 15.1
	計	1 0.7						2 5.6											18 16.4		2 5.5	6 0.3				31 43.4
SK022	黒曜石	2 5.7																								2 5.7
SK023	黒曜石																	3 24.3	3 6.4							6 24.8
	黒曜石																				1 15.0					1 15.0
SK030	砂岩														3 111.6											3 111.6
	計														3 111.6						1 15.0					4 126.6
	黒曜石																		1 1.3							1 1.3
SK031	砂岩												3 610.0													3 610.0
	計												3 610.0						1 1.3							4 611.3
SK034	黒曜石							1 5.1											1 3.7							2 8.8
	安山岩										2 286.5															2 286.5
	チャート																		1 33.6							1 33.6
	計							1 5.1			2 286.5								2 36.3							5 328.9
SK036	黒曜石																		1 2.4							1 2.4
	黒曜石																	3 6.4								3 6.4
SK003	砂岩									1 66.1									3 118.1							4 184.2
	計									1 66.1								3 6.4	3 118.1							7 190.6
SK007	黒曜石																		1 0.7							1 0.7
	砂岩																		3 1495.0							3 1495.0
	計																		4 1495.7							4 1495.7
SK009	黒曜石																		3 3.7	1 5.0						4 8.7
	砂岩																		4 169.3							4 169.3
	計																		7 173.0	1 5.0						8 178.0
SK011	黒曜石																		1 6.9							1 6.9
SK017	砂岩																		3 96.3							3 96.3
	黒曜石																	3 6.3	3 4.3							6 10.6
SK022	砂岩									2 213.6																2 213.6
	計									2 213.6								3 6.3	3 4.3							8 224.4
SK023	黒曜石																				1 4.3					1 4.3
SK024	黒曜石	70 6.6																	55 38.4		32 8.0	52 0.4				209 53.4
	頁岩																		1 4.0							1 4.0
	砂岩									35 320.4				4 4590.0					8 359.0					82.4		16 5861.8
	安山岩													4 4590.0					1 14.8							5 4604.8
	計	70 6.6								35 320.4				4 4590.0					64 435.9		32 8.0	52 0.4		82.4		226 7464.3
SK025	黒曜石																		18 30.9							18 30.9
	安山岩																		3 83.8							3 83.8
	下呂石																		3 23.7							3 23.7
	砂岩									3 309.6			2579.3						3 546.6					4 778.6		10 4209.5
	頁岩																		3 26.9					298.3		3 325.2
	計									3 309.6			2579.3						23 732.7					4 076.9		30 4399.4
SK029	砂岩										1 640.1															1 640.1
SK033	黒曜石																		1 0.8							1 0.8
SK034	黒曜石																	3 6.3	3 5.4	2 2.1						8 13.8
SK035	黒曜石	1 1.7																	3 6.9	2 6.6						6 15.1
	チャート						1 10.3																			1 10.3
	砂岩													4485.6												4485.6
	計	1 1.7					1 10.3							4485.6					6 6.9	2 6.6						10 7511.3

左側：個数、右側：重量（g）

遺構名	石材	石鏃	尖頭器	石錐	石匙	スクレイパー	スポールコア	打製石斧	敲製石斧	磨石	凹石	敲石	台石	石皿	砥石	石錘	石棒	石核	剥片	二次加工ある剥片	微小剥離ある剥片	剥片	砕片	礫片	黒石	計
SK038	黒曜石																	1 / 21.7	1 / 6.8							2 / 28.5
SK037	黒曜石																		1 / 2.8							1 / 2.8
	黒曜石			1 / 1.7															1 / 5.6							2 / 7.3
SK028	砂岩									1 / 364.5									1 / 299.8							2 / 664.3
	計			1 / 1.7						1 / 364.5									2 / 305.2							4 / 669.4
SK029	砂岩									1 / 110.9																1 / 110.9
SK032	黒曜石																		1 / 1.8							1 / 1.8
SK034	黒曜石																		1 / 1.7							1 / 1.7
SK035	黒曜石																		1 / 9.6							1 / 9.6
SK037	砂岩												1 / 2660.9											1 / 495.9		2 / 3456.8
SK038	黒曜石																		1 / 2.8							1 / 2.8
	黒曜石																	1 / 6.9	1 / 1.8							2 / 8.7
SK039	砂岩									1 / 155.3																1 / 155.3
	粘板岩																		1 / 13.9							1 / 13.9
	計									1 / 155.3								1 / 6.9	2 / 15.7							4 / 185.9
SK041	砂岩										1 / 407.6															1 / 407.6
SK042	砂岩										1		1 / 232.9		1 / 909.3				1 / 75.8							4 / 1217.9
SK043	黒曜石																				1 / 5.9					1 / 5.9
	砂岩									1 / 268.1			1 / 1447.0				1 / 1730.8									3 / 3445.9
	計									1 / 268.1			1 / 1447.0				1 / 1730.8				1 / 5.9					4 / 3451.8
SK044	頁岩片																									1 / 0.1
	砂岩									1 / 356.1	1 / 316.9		1 / 4260.0	1 / 420.0										1 / 360.0		5 / 5713.0
	計									1 / 356.1	1 / 316.9		1 / 4260.0	1 / 420.0										1 / 360.0		6 / 6613.1
SK045	黒曜石																		1 / 3.6							1 / 3.6
	砂岩												1 / 1360.9											1 / 73.1		2 / 1433.9
	頁岩							1 / 32.3																		1 / 32.3
	凝灰石岩								1 / 10.2																	1 / 10.2
	計							1 / 32.3	1 / 10.2				1 / 1360.9						1 / 3.6					1 / 73.1		6 / 1479.1
SK002	黒曜石																		1 / 1.9							1 / 1.9
	黒曜石					1 / 1.0													1 / 2.9							2 / 3.9
SK004	頁岩片							1 / 71.9																		1 / 71.9
	砂岩										1 / 628.2															1 / 628.2
	計					1 / 1.0		1 / 71.9			1 / 628.2								1 / 4.8							4 / 704.9
SK005	黒曜石																	1 / 9.4	1 / 10.8							2 / 19.2
	砂岩							1 / 31.7																		1 / 31.7
	計							1 / 31.7										1 / 9.4	1 / 10.8							2 / 51.0
SK008	黒曜石																		1 / 6.3							1 / 6.3
SK009	砂岩															1 / 69.1										1 / 69.1
	黒曜石																		1 / 8.9							1 / 8.9
T3001	砂岩																							1 / 1340.0		1 / 1340.0
	石英																								1 / 33.1	1 / 33.1
	計																		1 / 8.9					1 / 1340.0	1 / 33.1	3 / 1382.0
T3002	黒曜石																		1 / 9.3							1 / 9.3
	砂岩												1 / 435.0											1 / 325.9		2 / 755.9
	計												1 / 435.0						1 / 9.3					1 / 325.9		3 / 768.2
遺構外	黒曜石	27 / 5.6		2 / 2.9														12 / 85.9	102 / 144.2	4 / 11.9			1 / 1.0			138 / 245.5
	頁岩片												1 / 110.1													1 / 110.1
	チャート		2 / 5.6															3 / 14.8								5 / 20.3
	凝灰石岩			1 / 5.6																						1 / 5.6
	砂岩							2 / 90.4		2 / 330.0									1 / 564.1					1 / 86.4		6 / 1050.9
	頁岩							3 / 334.9											2 / 160.9							5 / 495.8
	石英																								1 / 3.1	1 / 3.1
	計	27 / 5.6	2 / 5.6	3 / 8.5				5 / 424.9		2 / 330.0		1 / 110.1						15 / 100.8	104 / 899.1	4 / 11.9			1 / 1.0	1 / 490.4	1 / 33.1	162 / 2017.6
計		27 / 5.6	2 / 7.3	6 / 10.2		20 / 1.0	1 / 10.1	9 / 896.1	1 / 10.2	4 / 2440.7	2 / 2616.8	1 / 110.1	7 / 10439.9	2 / 3004.3	1 / 1021	1 / 69.1	1 / 1730.8	17 / 200.6	120 / 1095.1	4 / 11.9	1 / 5.9	1 / 2.8	1 / 1.0	4 / 1211.1	1 / 33.1	260 / 20577.3

左側：個数、右側：重量（g）

第14表　SK出土石器組成表

掲載番号	図版番号	出土Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	
38	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	(17.4)	(13.5)	2.8	0.6	122
39	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	21.7	13.8	6.4	1.4	123
40	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	21.6	10.1	5.5	0.8	124
41	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	19.0	12.0	3.5	0.4	127
42	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	24.5	16.2	3.5	0.8	129
43	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	23.1	(16.2)	2.4	0.7	134
44	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	18.5	(14.8)	2.6	0.5	125
45	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	(17.6)	17.3	3.1	0.8	126
46	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	13.8	13.4	2.9	0.3	130
47	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	14.9	20.5	3.1	0.6	133
48	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	20.5	17.2	5.0	1.7	131
49	32	1	SB1001	石錐	黒曜石	(19.5)	6.0	4.0	0.5	128
50	32	1	SB1001	石錐	黒曜石	26.9	11.0	6.9	1.6	149
51	32	1	SB1001	スクレイパー	黒曜石	23.4	21.1	8.5	3.4	140
52	32	1	SB1001	スクレイパー	安山岩	100.9	102.0	31.5	271.3	103
53	33	1	SB1001	スクレイパー	砂岩	51.2	80.4	13.7	57.8	118
54	33	1	SB1001	ピエス・エスキーユ	黒曜石	15.5	10.4	4.2	1.0	102
55	33	1	SB1001	ピエス・エスキーユ	黒曜石	16.1	11.1	4.1	0.9	147
56	33	1	SB1001	打製石斧	泥岩	135.9	53.8	9.6	93.4	104
57	33	1	SB1001	打製石斧	凝灰岩	117.5	37.8	20.0	98.0	106
58	33	1	SB1001	打製石斧	安山岩	121.0	43.3	16.6	104.0	107
59	33	1	SB1001	打製石斧	凝灰岩	104.9	49.1	17.2	113.9	109
60	33	1	SB1001	打製石斧	砂岩	(66.0)	(47.1)	8.5	36.5	113
61	33	1	SB1001	凹石	砂岩	133.3	84.4	37.0	599.4	105
62	33	1	SB1001	凹石	砂岩	100.7	86.0	44.5	540.9	117
63	34	1	SB1002	砥石	砂岩	350.0	193.0	100.0	6800.0	168
64	34	1	SB1001	石錘	砂岩	42.8	31.7	19.4	37.6	121
65	34	1	SB1001	二次加工ある剥片	黒曜石	28.0	27.0	7.0	3.1	120
66	34	1	SB1001	二次加工ある剥片	黒曜石	37.0	14.5	7.5	3.0	141
67	34	1	SB1001	微細剥離ある剥片	黒曜石	43.8	21.0	6.0	2.5	132
68	34	1	SB1001	削片	黒曜石	38.0	9.0	9.0	1.1	138
106	36	3	SB3002	石鏃	黒曜石	16.4	12.2	4.3	0.5	303
107	36	3	SB3002	石鏃	黒曜石	15.5	16.4	3.2	0.7	304
108	36	3	SB3002	石鏃	黒曜石	24.5	17.2	4.2	1.3	306
109	36	3	SB3002	石鏃	黒曜石	19.6	15.0	3.5	0.6	307

第 15 表　掲載石器一覧表

掲載番号	図版番号	出土Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	
110	36	3	SB3002	石錐	黒曜石	27.7	9.8	9.3	2.0	310
111	36	3	SB3002	石錐	黒曜石	20.1	8.7	7.7	0.8	311
112	36	3	SB3002	スクレイパー	砂岩	63.6	41.0	11.4	36.5	323
113	36	3	SB3002	ピエス・エスキーユ	黒曜石	24.5	29.8	9.4	6.5	315
114	36	3	SB3002	打製石斧	泥岩	91.7	38.3	13.5	48.9	308
115	36	3	SB3002	敲石	砂岩	54.9	52.9	48.5	181.5	321
116	36	3	SB3002	敲石	砂岩	78.8	47.6	21.7	86.8	301
117	37	3	SB3002	敲石	砂岩	117.4	47.3	33.0	256.5	326
118	37	3	SB3002	台石	砂岩	273.0	203.0	86.0	5950.0	325
119	37	3	SB3002	石皿	安山岩	(300.0)	(156.0)	109.0	6320.0	327
120	37	3	SB3002	砥石	砂岩	96.3	56.8	23.5	182.7	322
121	37	3	SB3002	石錘	砂岩	27.6	22.4	6.9	5.3	302
122	37	3	SB3002	石錘	凝灰岩	38.9	27.5	11.0	17.6	309
123	37	3	SB3002	二次加工ある剥片	下呂石	44.0	60.0	17.0	34.3	324
124	37	3	SB3002	剥片	下呂石	22.5	32.7	9.5	5.4	305
183	39	3	SB3003・3004	石鏃	黒曜石	21.5	13.0	4.9	13.0	360
184	39	3	SB3003・3004	ピエス・エスキーユ	黒曜石	19.5	16.6	3.6	1.2	351
185	39	3	SB3003・3004	ピエス・エスキーユ	黒曜石	42.0	33.0	10.9	14.4	358
186	39	3	SB3003・3004	打製石斧	凝灰岩	129.8	47.0	13.5	75.6	328
187	40	3	SB3003・3004	打製石斧	泥岩	105.8	54.4	14.5	99.5	340
188	40	3	SB3003・3004	打製石斧	凝灰岩	129.0	53.1	15.6	145.8	363
189	40	3	SB3003・3004	打製石斧	砂岩	(85.5)	42.9	14.0	58.7	380
190	40	3	SB3003・3004	敲石	砂岩	76.0	55.4	27.6	143.9	364
191	40	3	SB3003・3004	敲石	砂岩	71.0	77.0	37.7	264.3	365
192	40	3	SB3003・3004	凹石	砂岩	(74.0)	100.4	32.0	266.1	335
193	40	3	SB3003・3004	凹石	砂岩	61.5	77.9	66.0	354.1	338
194	40	3	SB3003・3004	凹石	砂岩	111.6	77.8	55.0	542.6	339
195	40	3	SB3003・3004	台石	砂岩	407.0	302.0	97.0	14550.0	330
196	41	3	SB3003・3004	石核	黒曜石	33.7	30.8	15.1	12.5	343

第15表　掲載石器一覧表

掲載番号	図版番号	出土Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
197	41	3	SB3003・3004	石核	黒曜石	27.6	30.2	11.1	8.3	354
198	41	3	SB3003・3004	二次加工ある剥片	黒曜石	17.9	17.6	5.2	1.5	346
199	41	3	SB3003・3004	二次加工ある剥片	黒曜石	29.8	18.6	5.7	2.1	355
200	41	3	SB3003・3004	微細剥離ある剥片	黒曜石	29.9	25.0	7.1	3.4	345
315	46	4	SB4001	石鏃	黒曜石	(15.0)	15.0	3.0	4.2	424
316	46	4	SB4001	石錐	黒曜石	34.9	12.2	7.5	3.7	417
317	46	4	SB4001	石匙	チャート	36.1	43.0	9.5	15.2	423
318	46	4	SB4001	石匙	頁岩	36.0	41.0	8.0	104.0	440
319	46	4	SB4001	石匙	チャート	52.0	57.0	10.0	25.5	443
320	46	4	SB4001	スクレイパー	砂岩	53.0	85.3	12.5	53.1	406
321	47	4	SB4001	スクレイパー	砂岩	65.1	71.3	12.5	60.3	430
322	47	4	SB4001	スクレイパー	花崗岩	61.3	107.2	30.0	168.3	431
323	47	4	SB4001	スクレイパー	泥岩	56.4	104.9	12.9	66.6	437
324	47	4	SB4001	ピエス・エスキーユ	黒曜石	19.8	10.1	9.6	3.2	416
325	47	4	SB4001	打製石斧	砂岩	97.5	55.4	11.2	67.7	411
326	47	4	SB4001	打製石斧	砂岩	96.6	49.5	14.8	79.9	412
327	48	4	SB4001	打製石斧	粘板岩	102.5	34.9	7.7	29.6	413
328	48	4	SB4001	打製石斧	砂岩	91.0	52.4	16.6	83.2	422
329	48	4	SB4001	打製石斧	砂岩	94.0	39.0	14.0	66.6	428
330	48	4	SB4001	打製石斧	泥岩	(110.0)	60.0	23.0	165.2	429
331	48	4	SB4001	打製石斧	流紋岩	88.8	32.4	14.4	38.2	436
332	48	4	SB4001	打製石斧	砂岩	114.0	48.4	12.0	85.9	444
333	48	4	SB4001	敲石	砂岩	(59.5)	27.5	14.5	26.6	403
334	48	4	SB4001	敲石	砂岩	(65.0)	74.6	54.0	274.6	407
336	48	4	SB4001	台石	砂岩	183.0	69.0	60.0	1280.7	464
335	48	4	SB4001	凹石	砂岩	129.0	12.0	(68.0)	1042.8	401
337	48	4	SB4001	石皿	砂岩	(207.0)	271.0	97.0	3550.0	402
338	49	4	SB4001	微細剥離ある剥片	黒曜石	34.5	18.4	8.5	3.6	419
339	49	4	SB4001	削片	黒曜石	42.5	13.7	18.3	7.6	445
340	50	1	SK1013	削片	黒曜石	34.1	9.4	8.2	1.4	169
341	50	1	SK1014	打製石斧	凝灰岩	136.7	55.5	28.0	244.7	170
343	50	1	SK1016	スクレイパー	安山岩	81.4	64.7	29.0	101.1	171
344	50	1	SK1018	ピエス・エスキーユ	黒曜石	17.5	23.3	6.8	2.5	173

第15表　掲載石器一覧表

掲載番号	図版番号	出土Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	
345	50	1	SK1018	石核	黒曜石	40.0	32.0	22.0	29.9	172
346	51	1	SK1019	石鏃	黒曜石	(8.2)	10.4	2.1	0.1	174
347	51	1	SK1021	石鏃	黒曜石	19.7	11.5	3.1	0.7	178
348	51	1	SK1021	ピエス・エスキーユ	黒曜石	24.5	22.2	8.0	3.8	179
349	51	1	SK1021	打製石斧	砂岩	(80.4)	45.9	16.3	75.7	175
350	51	1	SK1021	微細剥離ある剥片	黒曜石	31.6	16.8	9.2	2.8	176
354	51	1	SK1031	台石	砂岩	305.0	169.0	65.0	5600.0	181
356	51	1	SK1034	ピエス・エスキーユ	黒曜石	27.8	17.5	5.7	2.1	184
361	52	3	SK3009	二次加工ある剥片	黒曜石	39.0	26.0	8.0	5.5	367
365	52	3	SK3022	敲石	砂岩	136.5	32.3	34.1	213.6	368
386	53	3	SK3024	石鏃	黒曜石	18.9	12.8	2.8	0.5	373
387	53	3	SK3024	石鏃	黒曜石	18.2	17.5	5.7	1.1	374
388	53	3	SK3024	微細剥離ある剥片	黒曜石	33.5	11.4	8.3	1.7	375
414	54	3	SK3025	敲石	砂岩	125.9	31.0	43.0	219.2	377
415	54	3	SK3025	石皿	砂岩	(220.0)	215.0	57.0	2579.2	378
416	54	3	SK3025	剥片	下呂石	55.1	34.5	18.0	21.7	376
427	55	4	SK4025	尖頭器	黒曜石	(26.9)	(18.3)	5.0	1.7	450
428	55	4	SK4025	石匙	チャート	34.0	57.0	11.0	20.2	449
433	55	4	SK4028	石錐	黒曜石	31.7	8.0	6.8	1.7	452
434	55	4	SK4028	敲石	砂岩	62.0	62.2	41.4	164.5	451
436	55	4	SK4029	敲石	砂岩	56.8	45.5	32.6	110.9	453
460	56	4	SK4041	凹石	砂岩	133.4	59.6	46.6	487.6	455
463	57	4	SK4042	砥石	砂岩	146.3	86.9	52.0	909.7	456
466	57	4	SK4043	二次加工ある剥片	黒曜石	39.0	25.5	6.5	5.0	459
467	57	4	SK4043	敲石	砂岩	109.6	79.7	29.3	288.1	457
469	58	4	SK4044	敲石	砂岩	131.0	62.0	41.2	356.3	460
472	58	4	SK4045	打製石斧	泥岩	(51.0)	50.4	17.0	57.3	462
473	58	4	SK4045	磨製石斧	透閃石岩	36.7	23.5	7.3	10.3	463
485	58	5	SK5004	ピエス・エスキーユ	黒曜石	17.2	17.6	3.8	1.2	504
486	58	5	SK5004	打製石斧	安山岩	114.0	46.0	12.0	71.9	503
487	58	5	SK5004	凹石	砂岩	113.0	70.0	58.0	619.2	502
493	59	5	SK5005	打製石斧	砂岩	(98.0)	(29.9)	10.2	31.7	505
494	59	5	SK5005	石核	黒曜石	18.3	28.8	29.9	9.4	506
508	60	5	SK5009	石錘	砂岩	65.7	26.6	15.8	49.1	507
509	60	1	かく乱	尖頭器	チャート	26.1	12.0	3.8	1.4	186

第 15 表　掲載石器一覧表

掲載番号	図版番号	出土Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	
510	60	1	遺構外	尖頭器	チャート	35.9	(19.8)	7.1	4.2	187
511	60	5	遺構外	石錐	凝灰岩	(35.0)	25.6	7.9	5.6	508
512	60	5	遺構外	磨石	安山岩	(48.4)	55.9	39.1	118.4	509

第 15 表　掲載石器一覧表

掲載番号	図版番号	出土Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	
468	57	4	SK4043	石棒	砂岩	189.0	101.0	70.0	1730.8	458

第 16 表　掲載石製品一覧表

４　科学分析

氏神遺跡の縄文時代遺構及び遺物に係る科学分析は、放射性炭素年代測定と黒曜石産地推定を実施した。放射線炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社、黒曜石産地推定は株式会社パレオ・ラボに業務委託して実施した。本項では分析結果の概要について記述し、詳細は付録のＤＶＤに収録した。

（１）放射性炭素年代測定

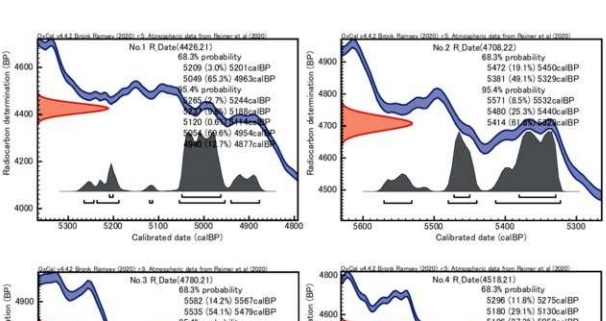
氏神遺跡の縄文時代に属する竪穴建物跡からは、縄文時代中期初頭に位置づけられる土器群及び中期中葉に位置付けられる土器群が出土した。これらの土器群の編年的位置を明らかにするためには、土器の絶対年代を把握して型式組列を検討する必要がある。これらの基礎データを提示するため年代測定を行った。年代測定で放射性炭素年代測定を用いた理由は、試料が得やすく測定精度が高い等を考慮したためである。

土器群の編年や、集落研究に資する年代測定結果を得るためには、出土した土器群や遺構に伴う炭化物を測定試料としなければならない。そこで、今回は竪穴建物跡から出土した土器に付着した炭化物及び炉跡から出土した炭化物を測定試料とした。

測定結果は第 17 表である。№１は藤内Ⅰ式期に属する土器片付着の炭化物、№２は五領ヶ台Ⅱａ式並行期に属する竪穴建物跡の炉跡出土炭化物、№３・４は五領ヶ台Ⅱａ式並行期に属する土器片付着の炭化物である。同位体補正を行った値は、No. 1 が 4,425 ± 20BP、No. 2 が 4,710 ± 20BP、No. 3 が 4,780 ± 20BP、No. 4 が 4,520 ± 20BP である。第 61 図は IntCal20（Reimer et al.2020）を用いた暦年較正結果である。暦年較正値（２σ）は、No. 1 が 5,265 ～ 4,877calBP、No. 2 が 5,571 ～ 5,323calBP、No. 3 が 5,584 ～ 5,476calBP、No. 4 が 5,306 ～ 5,051calBP である。小林謙一氏は当該期の絶対年代値を勝坂２式（藤内１式）を 5,280 ～ 5,220 年前 calBP、五領ヶ台２式を 5,440 ～ 5,380 年前 calBP と指摘する（小林 2008）。小林氏の暦年較正値は IntCal04 を用いており、若干較正値に相違があると考えられるが、№１～３は概ね想定通りの年代値が得られた。№４は想定よりもわずかに新しい年代値となった。

No.	試料名	方法	補正年代（暦年較正用）BP	$\delta^{13}C$（‰）	暦年較正年代			Code No.	
						年代値	確率%		
1	SB1001 1層出土 土器（管理No.1021）付着炭化物	AaA（0.05M）	4425±20（4426±21）	-28.80 ±0.16	σ	cal BC 3260 - cal BC 3252	5209 - 5201 calBP	3.0	PLD-42236	pal-12929
						cal BC 3100 - cal BC 3014	5049 - 4963 calBP	65.3		
					2σ	cal BC 3316 - cal BC 3295	5265 - 5244 calBP	2.7		
						cal BC 3288 - cal BC 3239	5237 - 5188 calBP	9.9		
						cal BC 3171 - cal BC 3165	5120 - 5114 calBP	0.6		
						cal BC 3105 - cal BC 3005	5054 - 4954 calBP	69.6		
						cal BC 2991 - cal BC 2928	4940 - 4877 calBP	12.7		
2	SB3002 炉 炭化材（クルミ属）	AAA（1M）	4710±20（4708±22）	-31.68 ±0.17	σ	cal BC 3523 - cal BC 3501	5472 - 5450 calBP	19.1	PLD-42237	pal-12930
						cal BC 3432 - cal BC 3380	5381 - 5329 calBP	49.1		
					2σ	cal BC 3622 - cal BC 3583	5571 - 5532 calBP	8.5		
						cal BC 3531 - cal BC 3491	5480 - 5440 calBP	25.3		
						cal BC 3465 - cal BC 3374	5414 - 5323 calBP	61.6		
3	SB3003 2区5層出土土器（管理No.3150）付着炭化物	AaA（0.05M）	4780±20（4780±21）	-26.48 ±0.19	σ	cal BC 3633 - cal BC 3618	5582 - 5567 calBP	14.2	PLD-42238	pal-12931
						cal BC 3586 - cal BC 3530	5535 - 5479 calBP	54.1		
					2σ	cal BC 3635 - cal BC 3527	5584 - 5476 calBP	95.4		
4	SB4001 埋土出土土器（管理No.4143）付着炭化物	AaA（0.05M）	4520±20（4518±21）	-27.70 ±0.18	σ	cal BC 3347 - cal BC 3326	5296 - 5275 calBP	11.8	PLD-42239	pal-12932
						cal BC 3231 - cal BC 3181	5180 - 5130 calBP	29.1		
						cal BC 3157 - cal BC 3109	5106 - 5058 calBP	27.3		
					2σ	cal BC 3357 - cal BC 3282	5306 - 5231 calBP	24.8		
						cal BC 3276 - cal BC 3266	5225 - 5215 calBP	2.0		
						cal BC 3244 - cal BC 3102	5193 - 5051 calBP	68.7		

第 17 表　放射性炭素年代測定結果（１）



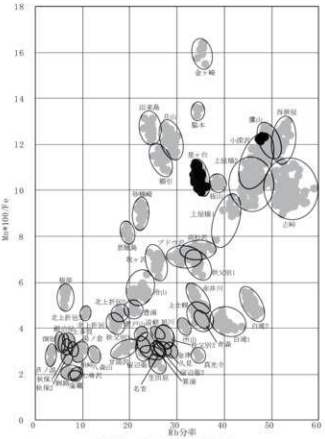
第 61 図　IntCal20 による暦年較正結果（１）

（２）黒曜石産地推定

氏神遺跡の縄文時代人における黒曜石の産地別利用形態を理解し、資源獲得領域や他集団との交流圏を推測するための基礎データを得ることを目的に、黒曜石の産地推定を実施した。

本遺跡の縄文時代集落は出土土器や放射性炭素年代測定の結果から、中期初頭と中葉の二時期に分かれる。そのため、今回は遺構出土の黒曜石製石器を、共伴する土器と同時代の所産であると仮定して分析を実施した。遺構の中でも竪穴建物跡は出土土器の同時期性が高いと判断したため、中期初頭の竪穴建物跡（ＳＢ 3002、ＳＢ 3003・3004、ＳＢ 4001）、中葉の竪穴建物跡（ＳＢ 1001 Ａ・Ｂ）からそれぞれ 50 点（合計 100 点）について、石鏃等の器種を中心に、一部剥片を含めて分析試料とした。分析試料の一覧は第 18 表である。

第 19・20 表は測定値と、それをもとに算出した指標値、第 62 図は指標値を黒曜石原石判別図にプロットしたものである。指標値の算出方法は 1)Rb 分率 =Rb 強度× 100/（Rb 強度 +Sr 強度 +Y 強度 +Zr 強度）、2）Sr 分率 =Sr 強度× 100/（Rb 強度 +Sr 強度 +Y 強度 +Zr 強度）、3）Mn 強度× 100/Fe 強度、4）log（Fe 強度 /K 強度）である。結果、5 点が鷹山群と小深沢群（ともに長野県、和田エリア）の重複域、83 点が星ヶ台群（長野県、諏訪エリア）の範囲にプロットされた。残りの 12 点は、第 62 図 -1 では星ヶ台群の範囲にプロットされたが、第 62 図 -2 では星ヶ台群の範囲の下方にプロットされた。これは、遺物の風化による影響と考えられ、産地は星ヶ台群に属する可能性が高い。第 21 表は、遺構および器種別の産地を示したものである。今回分析した石器は、100 点中 95 点が諏訪エリア産であり、和田エリア産が 5 点含まれる程度であった。氏神遺跡における黒曜石の産地別利用形態は、縄文時代中期初頭及び中葉ともに、諏訪エリア産を主体的に用い、和田エリア産が少量利用され、器種による産地の使い分けは認められないことが分かった。


Mn*100/Fe
Sr分率
金ヶ崎
出来島
西野屋
鶴ヶ
小深沢
星ヶ台
上猿橋
柳沢
砂場崎
上加橋
三崎
豊ヶ丘
鉄父沢(1)
板屋
北上野
上野
鉄父沢(2)
北上野原
豊浦
石鹿土
深沢
鶴ヶ
鶴ヶ
鶴ヶ

分析No.	管理No.	地区	出土遺構	出土位置	器種	時期
1	102			Ⅳ層	ピエス・エスキーユ	
2	101			ピット3　1層	剥片	
3	112			サブトレ2	微細剥離ある剥片	
4	120			ピット7　1層	二次加工ある剥片	
5	122			北壁　2層	石鏃	
6	123			壁際溝	石鏃	
7	124			5区　1層	石鏃失敗品	
8	125			サブトレ1　西	石鏃	
9	126			サブトレ1　西	石鏃	
10	127			3区　床面直上	石鏃	
11	128			5区　1層②	石錐	
12	129			5区　1層①	石鏃	
13	130			3層	石鏃	
14	131			サブトレ1　東①	石鏃失敗品	
15	132			3層	微細剥離ある剥片	
16	133			2層	石鏃	
17	134			7区　床面直上	石鏃	
18	135			3区　1層	二次加工ある剥片	
19	136			3区　1層	微細剥離ある剥片	
20	137			6区	二次加工ある剥片	
21	138			1層	削片	
22	139			4区	微細剥離ある剥片	
23	140			5区　1層	スクレイパー	
24	141			5区　1層	二次加工ある剥片	
25	142			6区	ピエス・エスキーユ	
26	143	1Tr	SB1001	サブトレ1	微細剥離ある剥片	縄文時代中期中葉
27	144			サブトレ1	微細剥離ある剥片	
28	145			3層下部	微細剥離ある剥片	
29	146			サブトレ1　西	石核	
30	147			サブトレ1　西	ピエス・エスキーユ	
31	148			サブトレ1　西	微細剥離ある剥片	
32	149			サブトレ2	石鏃失敗品	
33	150			サブトレ2	微細剥離ある剥片	
34	151			3区　1層	微細剥離ある剥片	
35	152			3区　1層	剥片	
36	153			3区　1層	剥片	
37	154			3区　1層	剥片	
38	155			3区　1層	剥片	
39	156			3区　1層	剥片	
40	157			3層	剥片	
41	158			5区　3層	剥片	
42	159			3層	剥片	
43	160			2層	剥片	
44	161			5区　3層	剥片	
45	162			3層	剥片	
46	163			3区　3層	剥片	
47	164			3区　3層	剥片	
48	165			3層	剥片	
49	166			3層	剥片	
50	167			3層	剥片	

分析No.	管理No.	地区	出土遺構	出土位置	器種	時期
51	415			P5	ピエス・エスキーユ	
52	416			2区　2層	ピエス・エスキーユ	
53	417			2区　2層	二次加工ある剥片	
54	418			3・4区　3層	ピエス・エスキーユ	
55	419			3・4区　3層	微細剥離ある剥片	
56	421			サブトレ1	微細剥離ある剥片	
57	420			3・4区　3層	剥片	
58	424	4Tr	SB4001	サブトレ2	二次加工ある剥片	
59	425			サブトレ2	微細剥離ある剥片	
60	426			サブトレ2	微細剥離ある剥片	
61	439			1区　2層	二次加工ある剥片	
62	441			サブトレ1　2層	石核	
63	442			サブトレ2	微細剥離ある剥片	
64	445			東壁　2層	削片	
65	303			北西　2層	石鏃	
66	304			北西　2層	石鏃	
67	306			石器№1　床直	石鏃	
68	307			石器№2　床直	石鏃	
69	310			南東サブトレ	石錐	
70	311			2層	二次加工ある剥片	
71	312		SB3002	SPA-Bベルト　5個1層	微細剥離ある剥片	
72	313			北西　2層	二次加工ある剥片	
73	314			北西　1層	微細剥離ある剥片	
74	315			南東　1層	ピエス・エスキーユ	
75	316			南東　2層	微細剥離ある剥片	
76	317			ピット7　35K　2層	剥片	縄文時代中期初頭
77	318			南東区　2層	剥片	
78	342			サブトレ1西	石鏃失敗品	
79	343			サブトレ1西	石核	
80	344			サブトレ1　東	石鏃失敗品	
81	345			サブトレ1東	微細剥離ある剥片	
82	346			サブトレ2	二次加工ある剥片	
83	347	3Tr		サブトレ3	微細剥離ある剥片	
84	348			1区　1層	微細剥離ある剥片	
85	349			1区　4層	二次加工ある剥片	
86	350		SB3003・3004	2区　1層	石核	
87	351			2区　1層	ピエス・エスキーユ	
88	353			2区　2層	微細剥離ある剥片	
89	354			2区　3層	石核	
90	355			3区　6層	二次加工ある剥片	
91	356			P85	二次加工ある剥片	
92	357			P77	二次加工ある剥片	
93	358			周溝1	ピエス・エスキーユ	
94	359			ピット6	二次加工ある剥片	
95	331		SB3003	ベルト1　2層	微細剥離ある剥片	
96	360		SB3003・3004	ベルト1　1層	石鏃失敗品	
97	332		SB3003	ベルト2　5層	微細剥離ある剥片	
98	361		SB3003・3004	2区　3層	剥片	
99	362			3区　4層	剥片	
100	333		SB3003	1区　3層	剥片	

第18表　黒曜石産地分析試料一覧

分析No.	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア	分析No.
1	174.2	66.2	649.9	480.6	181.7	237.5	470.7	35.07	10.19	13.26	0.57	星ヶ台	諏訪	1
2	337.4	158.7	1301.3	1770.8	143.4	765.1	1034.6	47.68	12.19	3.86	0.59	黒曜石小深沢	和田	2
3	284.7	110.9	1022.0	777.6	302.1	404.6	811.6	33.87	10.85	13.16	0.56	星ヶ台	諏訪	3
4	223.1	84.9	767.1	620.1	236.8	330.0	652.1	33.72	11.06	12.88	0.54	星ヶ台	諏訪	4
5	335.3	90.4	889.5	700.8	263.4	353.8	722.2	34.35	10.16	12.91	0.42	星ヶ台?	諏訪?	5
6	252.6	94.9	908.2	662.6	254.1	341.9	683.4	34.12	10.45	13.09	0.56	星ヶ台	諏訪	6
7	151.4	54.6	513.7	385.1	148.2	197.1	397.1	34.16	10.63	13.14	0.53	星ヶ台	諏訪	7
8	199.0	79.4	750.9	590.6	226.4	305.3	609.9	34.09	10.57	13.07	0.58	星ヶ台	諏訪	8
9	293.1	113.8	1094.0	837.1	319.7	425.8	840.4	34.55	10.40	13.20	0.57	星ヶ台	諏訪	9
10	136.9	44.2	420.0	340.6	133.2	180.1	349.5	33.95	10.53	13.27	0.49	星ヶ台?	諏訪?	10
11	234.3	92.5	883.2	677.6	260.2	352.1	677.5	34.44	10.47	13.23	0.58	星ヶ台	諏訪	11
12	197.5	97.9	791.3	1152.1	74.8	501.9	678.1	47.87	12.38	3.11	0.60	黒曜石小深沢	和田	12
13	198.2	56.0	550.7	408.9	145.5	191.2	379.6	36.34	10.17	12.93	0.44	星ヶ台?	諏訪?	13
14	300.1	115.3	1045.0	834.8	325.0	438.6	875.0	33.75	11.03	13.14	0.54	星ヶ台	諏訪	14
15	298.7	114.4	1113.6	876.4	333.5	448.5	891.7	34.37	10.27	13.08	0.57	星ヶ台	諏訪	15
16	232.4	89.5	846.9	676.5	260.5	354.3	710.7	33.79	10.57	13.01	0.56	星ヶ台	諏訪	16
17	298.7	116.4	1150.6	833.5	312.7	415.0	813.1	35.10	10.12	13.17	0.59	星ヶ台	諏訪	17
18	172.7	62.6	620.7	440.8	169.7	225.7	451.3	34.24	10.09	13.18	0.56	星ヶ台	諏訪	18
19	214.0	82.3	770.5	629.3	243.5	337.3	670.7	33.46	10.68	12.95	0.56	星ヶ台	諏訪	19
20	270.1	104.1	941.8	760.0	293.8	393.4	804.1	33.76	11.05	13.05	0.54	星ヶ台	諏訪	20
21	61.6	32.3	220.3	134.0	50.7	63.7	125.7	35.81	10.11	13.56	0.55	星ヶ台	諏訪	21
22	234.6	88.3	877.8	667.8	253.5	342.5	671.3	34.51	10.06	13.10	0.57	星ヶ台	諏訪	22
23	411.5	118.1	1095.3	891.8	326.2	441.8	876.6	35.16	10.78	12.86	0.43	星ヶ台?	諏訪?	23
24	242.4	81.6	776.6	607.4	235.2	318.9	630.2	33.90	10.51	13.13	0.51	星ヶ台?	諏訪?	24
25	321.0	124.4	1134.5	899.8	344.6	469.7	927.4	34.07	10.96	13.05	0.55	星ヶ台	諏訪	25
26	283.8	109.1	1026.0	824.6	317.9	425.5	850.6	34.10	10.63	13.15	0.56	星ヶ台	諏訪	26
27	299.8	114.1	1067.3	843.4	325.0	432.5	868.7	34.15	10.69	13.16	0.55	星ヶ台	諏訪	27
28	360.6	105.8	1005.3	819.4	309.6	418.0	827.7	34.51	10.52	13.04	0.45	星ヶ台?	諏訪?	28
29	285.1	109.5	1023.5	799.4	312.0	421.0	820.2	33.98	10.70	13.26	0.56	星ヶ台	諏訪	29
30	256.3	98.9	921.0	726.7	278.9	382.7	773.9	33.61	10.74	12.90	0.56	星ヶ台	諏訪	30
31	225.1	68.2	638.0	546.5	206.3	281.5	546.4	34.57	10.69	13.05	0.45	星ヶ台?	諏訪?	31
32	306.2	118.2	1104.1	848.6	312.5	433.0	855.6	34.64	10.70	12.76	0.56	星ヶ台	諏訪	32
33	310.0	123.5	1144.4	886.8	345.0	460.3	912.3	34.05	10.79	13.25	0.57	星ヶ台	諏訪	33
34	146.2	58.8	556.2	405.7	154.8	202.5	394.4	35.05	10.57	13.37	0.58	星ヶ台	諏訪	34
35	257.3	99.8	955.8	710.1	269.6	360.8	717.2	34.51	10.44	13.10	0.57	星ヶ台	諏訪	35
36	295.9	107.8	1039.5	780.8	297.9	395.7	773.0	34.74	10.37	13.25	0.55	星ヶ台	諏訪	36
37	214.1	79.7	804.1	576.2	216.3	287.5	563.8	35.05	9.91	13.16	0.57	星ヶ台	諏訪	37
38	261.6	98.6	942.4	743.4	275.9	379.7	750.3	34.59	10.46	12.84	0.56	星ヶ台	諏訪	38
39	257.7	96.4	951.3	672.4	246.4	335.6	655.2	35.21	10.13	12.90	0.57	星ヶ台	諏訪	39
40	315.4	121.1	1170.7	882.4	341.4	454.4	892.9	34.32	10.35	13.28	0.57	星ヶ台	諏訪	40
41	297.4	114.0	1095.2	842.0	325.7	432.2	856.5	34.28	10.41	13.26	0.57	星ヶ台	諏訪	41
42	359.8	103.7	983.4	799.7	303.1	414.6	806.0	34.42	10.55	13.05	0.44	星ヶ台?	諏訪?	42
43	226.7	86.4	871.2	612.3	229.8	299.3	602.6	35.11	9.92	13.18	0.58	星ヶ台	諏訪	43
44	190.7	74.1	714.6	572.8	219.9	298.0	593.0	34.02	10.37	13.06	0.57	星ヶ台	諏訪	44
45	230.0	85.4	847.2	601.6	226.0	300.7	582.0	35.18	10.08	13.21	0.57	星ヶ台	諏訪	45
46	288.7	140.1	1138.3	1519.2	100.0	651.7	858.6	48.55	12.30	3.20	0.60	黒曜石小深沢	和田	46
47	276.7	100.3	971.8	756.5	289.3	384.5	766.5	34.44	10.32	13.17	0.55	星ヶ台	諏訪	47
48	278.6	104.1	998.8	739.5	275.9	367.4	739.0	34.85	10.42	13.00	0.55	星ヶ台	諏訪	48
49	272.5	86.3	777.1	641.1	240.5	325.7	648.7	34.54	11.10	12.96	0.46	星ヶ台?	諏訪?	49
50	190.2	71.6	682.2	527.7	202.8	269.8	532.4	34.43	10.50	13.23	0.55	星ヶ台	諏訪	50

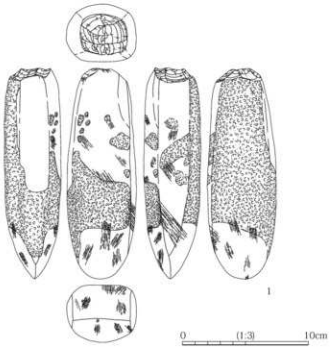
第 19 表　測定値、指数値及び産地推定結果（1）

分析No.	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア	分析No.
51	258.0	100.9	907.0	695.9	266.9	367.2	729.4	33.79	11.13	12.96	0.55	星ヶ台	諏訪	51
52	310.1	120.7	1083.2	848.5	323.8	439.0	857.2	34.37	11.14	13.12	0.54	星ヶ台	諏訪	52
53	325.4	126.0	1159.2	906.4	347.2	466.0	934.7	34.15	10.87	13.08	0.55	星ヶ台	諏訪	53
54	273.6	104.6	978.4	773.2	298.2	402.1	829.1	33.58	10.69	12.95	0.55	星ヶ台	諏訪	54
55	196.8	74.8	715.9	548.5	212.2	287.9	575.1	33.78	10.45	13.07	0.56	星ヶ台	諏訪	55
56	211.1	77.9	752.2	590.7	230.6	307.1	623.7	33.71	10.36	13.16	0.55	星ヶ台	諏訪	56
57	301.6	112.8	1040.8	792.9	304.5	405.3	798.2	34.46	10.84	13.24	0.54	星ヶ台	諏訪	57
58	267.3	99.7	988.1	743.6	283.1	381.5	756.7	34.35	10.09	13.08	0.57	星ヶ台	諏訪	58
59	288.9	112.3	1080.1	857.5	330.3	448.5	902.7	33.77	10.40	13.01	0.57	星ヶ台	諏訪	59
60	340.6	132.1	1221.0	909.9	347.7	468.5	924.8	34.32	10.82	13.12	0.55	星ヶ台	諏訪	60
61	241.1	92.6	912.6	662.3	249.8	329.4	643.3	35.14	10.14	13.25	0.58	星ヶ台	諏訪	61
62	286.6	109.1	985.9	770.1	295.6	404.9	797.2	33.96	11.06	13.04	0.54	星ヶ台	諏訪	62
63	326.5	85.7	790.1	634.2	248.1	334.0	662.9	33.75	10.85	13.20	0.54	星ヶ台	諏訪	63
64	335.9	127.8	1190.4	906.6	348.1	469.8	924.0	34.23	10.74	13.14	0.55	星ヶ台	諏訪	64
65	285.2	97.4	899.7	727.0	279.5	378.7	740.7	34.20	10.83	13.15	0.50	星ヶ台?	諏訪?	65
66	196.4	77.2	769.7	554.3	213.2	285.6	555.9	34.45	10.03	13.25	0.59	星ヶ台	諏訪	66
67	294.5	112.3	1061.3	825.3	311.9	429.9	843.3	34.24	10.58	12.94	0.56	星ヶ台	諏訪	67
68	273.4	106.8	1012.9	804.1	306.5	418.0	841.0	33.94	10.54	12.93	0.57	星ヶ台	諏訪	68
69	306.7	108.4	1048.1	779.5	290.0	391.7	756.5	35.15	10.34	13.08	0.53	星ヶ台	諏訪	69
70	282.9	101.0	958.3	752.9	288.5	390.6	783.5	33.98	10.54	13.02	0.53	星ヶ台	諏訪	70
71	258.2	100.9	977.4	739.7	284.9	379.9	750.7	34.32	10.32	13.22	0.58	星ヶ台	諏訪	71
72	318.5	122.6	1112.1	894.1	345.4	464.0	913.5	34.17	11.02	13.20	0.54	星ヶ台	諏訪	72
73	339.3	130.0	1205.1	919.6	353.7	471.2	937.2	34.29	10.79	13.19	0.55	星ヶ台	諏訪	73
74	305.4	115.5	1061.4	821.0	313.5	431.1	848.2	34.01	10.88	12.99	0.54	星ヶ台	諏訪	74
75	247.7	93.0	890.9	688.4	264.8	359.4	712.4	33.99	10.44	13.08	0.56	星ヶ台	諏訪	75
76	218.0	104.7	856.4	1118.0	96.3	487.7	659.8	47.34	12.23	4.08	0.59	黒曜石小深沢	和田	76
77	308.5	118.9	1102.5	820.1	314.9	421.2	834.2	34.31	10.79	13.17	0.55	星ヶ台	諏訪	77
78	286.3	110.1	1063.3	805.5	305.9	409.1	841.9	34.10	10.35	12.95	0.57	星ヶ台	諏訪	78
79	327.3	127.0	1153.5	876.2	335.3	453.6	891.5	34.27	11.01	13.11	0.55	星ヶ台	諏訪	79
80	186.8	71.3	682.2	546.3	201.2	278.0	546.3	34.76	10.44	12.80	0.56	星ヶ台	諏訪	80
81	414.7	109.0	990.0	812.7	307.5	420.0	822.9	34.39	11.01	13.01	0.38	星ヶ台?	諏訪?	81
82	293.3	143.0	1178.8	1646.5	131.4	717.4	959.4	47.66	12.13	3.80	0.60	黒曜石小深沢	和田	82
83	314.2	120.9	1169.9	894.4	341.5	452.6	885.2	34.75	10.34	13.27	0.57	星ヶ台	諏訪	83
84	206.4	80.6	760.3	549.2	217.4	286.2	576.3	33.72	10.60	13.34	0.57	星ヶ台	諏訪	84
85	301.5	116.9	1095.1	865.3	334.9	450.5	888.2	34.08	10.68	13.19	0.56	星ヶ台	諏訪	85
86	348.4	132.2	1248.0	871.6	325.5	435.1	846.3	35.17	10.60	13.13	0.55	星ヶ台	諏訪	86
87	257.1	99.6	953.0	755.0	294.5	397.9	780.0	33.89	10.45	13.22	0.57	星ヶ台	諏訪	87
88	120.1	43.7	408.5	284.1	103.8	140.3	275.3	35.36	10.70	12.92	0.53	星ヶ台	諏訪	88
89	281.2	106.7	1007.1	782.8	301.8	412.3	818.9	33.80	10.59	13.03	0.55	星ヶ台	諏訪	89
90	182.2	70.5	672.2	506.3	197.9	269.3	528.4	33.71	10.49	13.17	0.57	星ヶ台	諏訪	90
91	301.5	116.9	1061.3	869.7	338.9	453.8	909.1	33.82	11.02	13.18	0.55	星ヶ台	諏訪	91
92	288.0	109.5	1000.7	807.6	309.9	419.6	841.4	33.95	10.94	13.03	0.54	星ヶ台	諏訪	92
93	303.7	114.2	1039.7	766.0	295.1	396.6	794.1	34.02	10.98	13.10	0.53	星ヶ台	諏訪	93
94	304.5	119.1	1072.5	863.5	335.1	448.2	898.1	33.93	11.11	13.17	0.55	星ヶ台	諏訪	94
95	350.5	133.4	1238.9	917.8	347.4	462.5	912.0	34.77	10.77	13.16	0.55	星ヶ台	諏訪	95
96	335.0	111.3	1027.6	843.3	320.8	432.0	856.9	34.38	10.83	13.08	0.49	星ヶ台?	諏訪?	96
97	305.8	116.6	1061.2	846.2	324.4	440.3	871.8	34.08	10.98	13.07	0.54	星ヶ台	諏訪	97
98	229.5	88.7	853.3	681.9	265.9	354.7	710.1	33.88	10.39	13.21	0.57	星ヶ台	諏訪	98
99	271.1	101.0	957.5	741.7	288.8	386.9	767.0	33.96	10.55	13.22	0.55	星ヶ台	諏訪	99
100	264.3	102.5	914.9	744.6	290.9	393.8	773.7	33.80	11.20	13.21	0.54	星ヶ台	諏訪	100

第 20 表　測定値、指数値及び産地推定結果（２）

第３節　弥生時代

弥生時代の遺構は検出できなかったが、かく乱から磨製の両刃石斧が１点出土した（第 63 図、PL43）。石材は安山岩で、重量は 727.54 ｇである。刃部はよく研磨され、曲刃を呈する。最大幅及び最大厚は器体中央に位置し、基部と刃部に向かいやや窄まる。器体中央や側面の一部には敲打調整痕が残る。類例としては、条痕文土器が出土した弥生時代前期末から中期初頭の塩尻市下境沢遺跡に認められる（塩尻市教育委員会 1998）。また、朝日村内においては、熊久保遺跡と東電南遺跡で前期末または中期初頭の条痕文土器を表採したとの報告がある（朝日村村誌刊行会 1991）。周辺遺跡の類例や、朝日村内で確認されている弥生時代遺物の状況から、氏神遺跡で出土した両刃石斧は弥生時代前期末から中期初頭の可能性を指摘できよう。



第 63 図　弥生時代の遺物図

第４節　平安時代

１　概要

氏神遺跡では、平安時代の遺物として灰釉陶器と羽釜の鍔部分の表採が報告されている（朝日村村誌刊行会 1991）。今回の発掘調査により、竪穴建物跡１軒、掘立柱建物跡２棟、杭列１列、墓坑１基、土坑14基を確認した。

遺構群の立地や軸方向を観察すると、軸方向が直交もしくは直行するＳＢ3001とＳＴ3002のＡグループ、墓坑（ＳＫ4007）のＢグループ、これらとは軸方向が異なるＳＴ3001は、それぞれ別個のグループであったとみなすことができる。それぞれが時期差なのか、それ以外の要素を示しているのかは、ＳＢ3001以外の遺構に伴う遺物が少ないため明らかにしがたいが、相互に若干の時間差を含みながら平安時代中期という短時期に存続した集落の姿を示していると推定する。

平安時代の遺物はＳＢ3001から、土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、鉄製刀子が出土した。土器の年代は10世紀中葉から後葉に比定できる（長野県埋文センター 1990 a）また、墓坑（ＳＫ4007）からは人骨が出土した。竪穴建物跡出土遺物の絶対年代は、ＳＢ3001のカマド構築礫に付着した炭化物及び、同竪穴建物跡から出土した甑（21）に付着する炭化物の放射性炭素年代測定の結果、前者は408～537calAD、後者は776～991calADの暦年較正値（２σ）が得られた。前者の結果は土器群の編年と相違するが、これは放射性炭素年代測定に用いた試料の状態に起因するものと推定する。後者の結果は、土器群の編年から推定される絶対年代に、概ね近い値となる。

２　遺構（第８･64･69図）

氏神遺跡で確認した平安時代の遺構は、竪穴建物跡１軒、掘立柱建物跡２棟、杭列１列、土坑14基である。整理作業における遺構の検討で、土坑を２基追加した。竪穴建物跡と掘立柱建物跡は、いずれも３トレンチにあり、墓坑は４トレンチにある。一方、１・２・５トレンチでは遺構が確認できない。４トレンチの標高809.6ｍ付近にあるＳＫ4007が最も高く、３トレンチの805.8ｍ付近にあるＳＫ3019が最も低い。全体として、土坑は調査範囲の中心付近に分布する。トレンチごとの遺構数は、以下のとおりである。

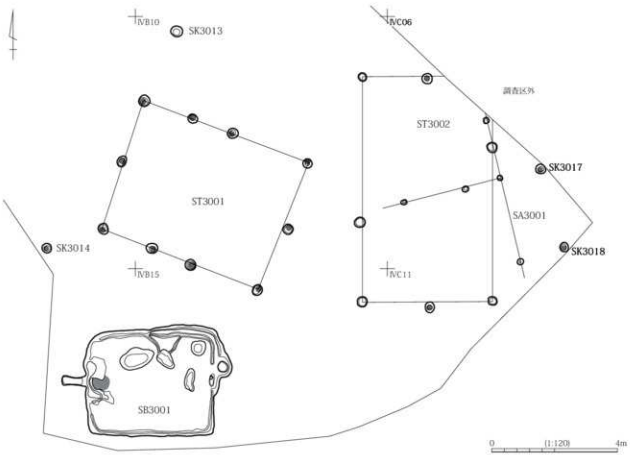
トレンチ３：竪穴建物跡１軒
　　掘立柱建物跡２棟
　　杭列１列
　　土坑４基
トレンチ４：土坑10基
　　墓坑１基

（１）竪穴建物跡

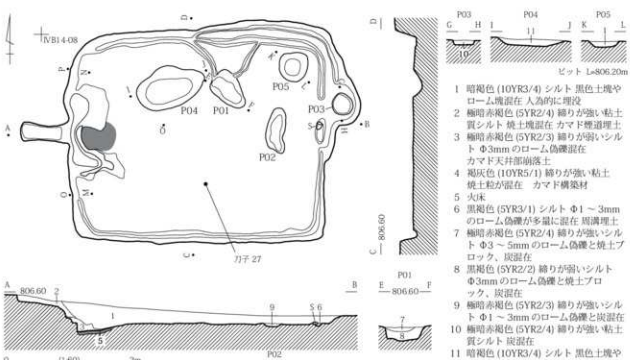
ＳＢ3001（第64～66図、写真図版８）

検出位置　Ⅳ Ｂ14・Ｂ15（３トレンチ）

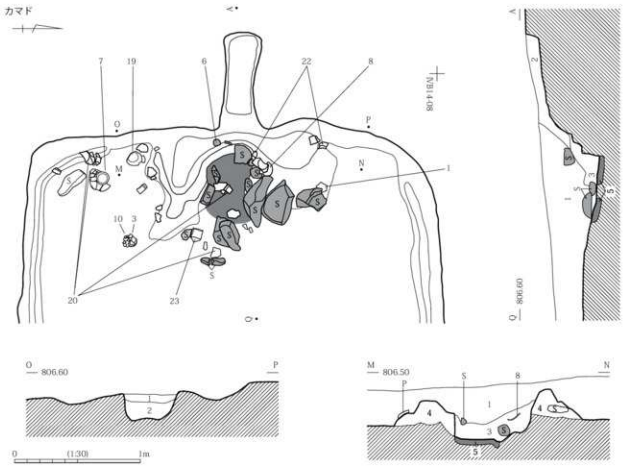
調査経過　３トレンチの東端から重機で掘削したところ、３トレンチの南壁付近から古代の土器が比較的多く出土した。３トレンチの東側と南側を拡張したところ、当該箇所付近から黒褐色土の方形の落ち込みと、落ち込みの西壁中央外側に焼土を確認し、古代の竪穴建物跡の存在を想定した。Ⅴ層上面で遺構検出を行い、平面プランを確定してＳＢ3001とする。西壁中央外側の焼土は、カマドの煙道、対向する東壁の中央やや北寄りにある張り出しを出入口部と想定した。



第 64 図　平安時代の遺構分布拡大図　３トレンチ



第 65 図　平安時代の遺構図（１）　SB3001（１）



第66図　平安時代の遺構図（２）　SB3001（２）

煙道の中軸を通る南北セクションポイント（以下「ＳＰ」という。）Ａ-Ｂと、これに直交する東西ＳＰＣ-Ｄにベルトを設定し、ベルトに沿う形で先行トレンチを掘削する。なお、ＳＢ3001内はカマドに向かって右側から時計回りに１～４区（カマドに向かって右側が１区、左側が４区）を設定し埋土を掘削した。ＳＰＡ-Ｂの西側検出面及びＳＰＣ-Ｄの南側検出面下20㎝で、極めて硬い床面を検出する。また、ＳＰＣ-Ｄベルトに沿った先行トレンチで床面直上から刀子が出土した。ベルトとカマド周辺の埋土を残して、壁面及び床面の検出を行う。埋土は３層に分かれ、黒色土偽礫やローム偽礫が混在する１層は、人為的に埋め戻したものと判断した。埋土内の遺物は１～４区ごと一括で取り上げる。埋土２層上から１層にかけて、土器片や扁平石が比較的多量に出土した。床面の壁際で溝跡を、東壁で張出部の落ち込みを検出した。

ＳＢ 3001 検出状況（南東より）

ＳＢ 3001 土層堆積状況（東より）

ＳＢ 3001 ２層上面遺物出土状況（東より）

壁溝から延びる溝跡と連結したＰ 01（東より）

ＳＰＡ－Ｂベルト及びＳＰＣ－Ｄベルトの断面を記録後、ベルトを除去し、壁面及び床面全体を精査する。２区床面で不整形の落ち込みを検出し、Ｐ 01 とする。Ｐ 01 の埋土には焼土ブロックが混じっていたため、小鍛冶関連遺構と想定し、発掘後に埋土をすべて 3㎜メッシュのフルイにかけたが、鉄関連遺物は見出せなかった。東壁張出部の落ち込みをＰ 03 とした。Ｐ 01･03 を完掘し､その後、床面で検出したＰ 02 及び壁溝を掘削した。Ｐ 02 は半裁し、断面の記録後に完掘した。

ＳＢ 3001 カマド完掘状況（南東より）

カマド周辺にＳＰＡ - Ｂベルトと直交するＳＰＭ - Ｎ、ＳＰＯ - Ｐを設定し、掘削した。天井部は崩落しており、天井部の土を埋土３層とした。礫や遺物の出土状況とカマドの状態を記録した。なお､礫や遺物は番号を付けて取り上げた。カマド袖部分（４層）には構築礫の抜取り痕が確認できたため、その状況を記録した。カマド平面図には火床の範囲を記録した。煙道部は焼土ブロックが混じり、締まりが弱い粘土質シルト極暗赤褐色土により埋没していた。最終的にカマドはすべて解体した。

ＳＢ 3001 の床面再精査で、Ｐ 04・05 を検出した。

遺構の構造　長軸 4.00 m、短軸 3.35 m の規模で方形を呈する。東壁に、出入口部と想定する 50㎝程の半円形の張出部が認められ、そこに直径 30㎝、深さ 10㎝のＰ 03 がある。煙道部は西壁に認められ、長さ 70㎝、幅 20㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁に沿って溝が巡る。２区側の壁溝は二重になるため、若干拡張したものと考える。壁溝は東側中央付近の出入口部とカマド周辺で途切れる。東側の途切れ部分は、出入口に起因するものと推定する。

床面は、Ⅴ層を基調とし極めて硬く、若干の凹凸がある。床面積は、約 11㎡（東西約 3.8m ×南北 2.9m）である。床面の中央やや北寄りにＰ 01、中央東寄りにＰ 02、東壁張出部にＰ 03、Ｐ 01 の西隣にＰ 04、北東コーナーにＰ 05 がある。Ｐ 01 には、北側の壁溝から延びる溝２条が連結する。埋土には、焼土塊が比較的多量に混じっており、床面からの深さは 20㎝程度である。底面に近いところからは土師器の坏と盤が出土した。Ｐ 02・04 は、平面形、段面形ともに不整形であり浅いため、床面の凹凸を落ち込みと誤認した可能性もある。北東隅のＰ 05 の平面形は正円形で、位置から柱穴と考える。Ｐ 03 は出入口のピットと想定できるが、ほかのピットの機能・用途は不明である。

カマドは、西壁の中央に位置する。礫が混じる灰白色粘土で構築されたカマド袖と、被熱を受け明瞭に赤化硬化した火床、ススが付着した礫が多数出土した。これらの礫は内山沢や鎖川で採集できる亜円礫の砂岩である。崩落した天井部と見ることができる埋土３層からは、土師器坏や埦、甑、羽釜の破片が多く出土した。土器片を投棄しながら、カマドを意図的に壊したと推測する。また、カマド袖部分では構造礫の一部の抜取り痕を確認した。煙道部は焼土塊が混じり、締まりが弱い粘土質シルト極暗赤褐色土により埋没する。

遺物出土状況等　カマドとその周辺、１区、４区の床面近くから羽釜や甕、甑と土師器坏や埦、盤、灰釉陶器埦が集中し（1･3･5 ～ 7･9･10･17･19 ～ 25）、２区埋土から土師器坏、黒色土器坏、灰釉陶器埦（4･12 ～ 14･18）がまとまって出土した。４区床面から刀子（27）が、Ｐ01 から土師器盤と坏（非掲載遺物）、Ｐ04 から灰釉陶器小埦（15）が出土した。

調査所見　ＳＢ3001 は、西側にカマドを構築し、対面する東側に出入口がある。柱穴は、Ｐ05 が該当するであろう。埋土から扁平の石が比較的多量に出土したが、礎板石とは認定できない。床面中央やや北寄りから、埋土に焼土ブロックが比較的多量に混じったピットがあるため、本遺構に小鍛治的要素があると推定する。本遺構とその北東にあるＳＴ3002 と軸方向が同じである。

カマド周辺から出土した礫に炭化物が付着しており、その放射性炭素年代測定では、暦年較正年代で 408 ～ 537calAD（2 σ）という結果を得た。カマド内および周辺の出土遺物からみて、本遺構の年代は 10 世紀中葉から後葉と想定していたため、再度、本遺構の埋土から出土した甑（21）に付着した炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代で 776 ～ 991calAD（２σ）の年代値を得られ、出土遺物から想定する年代観とも概ね整合した。この結果を本遺構の絶対年代と判断した。

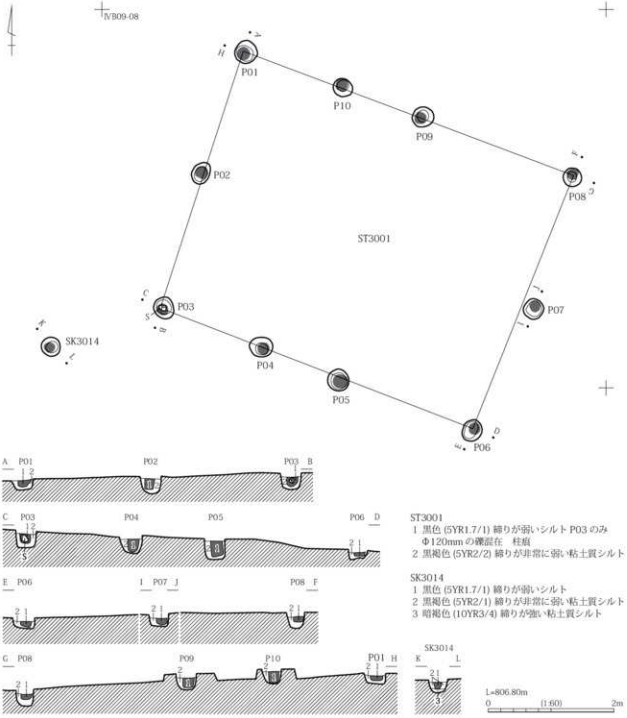
（２）掘立柱建物跡

ＳＴ 3001（第 64･67 図、写真図版９）

検出位置　Ⅳ B09･10･15（３トレンチ）

調査経過　３トレンチの東部で検出作業を行ったところ、ローム偽礫を含む締まりが強い黒褐色土の縄文土器片が多量に混じる落ち込みを広範囲に確認したため、縄文時代の竪穴建物跡の存在を想定した（ＳＢ3002）。この竪穴建物跡の埋土上面から、ＳＢ3001 の埋土と酷似する締まりが弱い黒色土の円形の落ち込みを複数検出した。検討の結果、これらを古代の掘立柱建物跡の柱穴と想定し、部分的にⅣ層（あるいはＳＢ3002 の埋土１層）を残す。さらに西側を検出すると、同様の埋土の落ち込みが連続してみつかり、２間×３間の掘立柱建物跡と判明した。本遺構の柱穴は北西隅の落ち込みから反時計回りにＰ01 ～ Ｐ10 と番号を付けた。柱穴は、直径 20 ～ 30cm程度の正円形で、中央には、直径 10 ～ 20cmの黒色土の落ち込みがあり、これの内側を柱痕、外側を掘方と考えた。柱穴は、直交する二方向の断面図を作成する予定だったが、柱穴の径が小さいため、地山とともに掘削を行う方針に変更した。柱穴は柱痕を段下げし、完掘状況の撮影、平面図を作成した。柱穴は、Ｐ01- Ｐ03、Ｐ03- Ｐ06、Ｐ06- Ｐ08、Ｐ08- Ｐ01 を通るＳＰを設定するとともに、各柱穴を４分割するように、通しのＳＰラインと直交するＳＰラインを設定して対向する埋土の掘削を開始した。断面写真と断面図を記録して、残りの埋土を掘削した。

ＳＴ 3001 検出状況（北東より）



第 67 図　平安時代の遺構図（３） ST3001

ＳＴ 3001 P03の断面（北東より）

ＳＴ 3001 完掘状況（南西より）

遺構の構造　長軸 5.30 m、短軸 4.10 mの長方形を呈する。10 基の柱穴で構成される側柱の掘立柱建物跡である。長軸方向の軸線は、北から 69 度西に振る。柱穴の検出面からの深さは、西側がやや深く、東側がわずかに浅くなるが、おおむね 30㎝前後である。柱間は２間×３間、柱間寸法は以下のとおりで、短軸の柱間の方が長軸方向より広い。また長軸のＰ 05-06、Ｐ 08-09 の間隔も、他よりも広い。

長軸　Ｐ 01-10：1.60 m　Ｐ 10-09：1.30 m　Ｐ 09-08：2.40 m
　　Ｐ 03-04：1.65 m　Ｐ 04-05：1.25 m　Ｐ 05-06：2.20 m
短軸　Ｐ 01-02：1.95 m　Ｐ 02-03：2.15 m　Ｐ 06-07：2.05 m　Ｐ 07-08：2.05 m

遺物出土状況　Ｐ 03 ～ 05･07･08･10 の埋土から土師器片が出土したが、図化できるものはなかった。

調査所見　隣接するＳＢ 3001 やＳＴ 3002 とは軸方向が異なるため、これらとは共存しないと推定する。

ＳＴ 3002（第 64･68 図、写真図版 10）

検出位置　Ⅳ B10･B15･ Ｃ 06･ Ｃ 11（３トレンチ）

調査経過　３トレンチ北東隅のⅤ層上面で検出及び精査を行ったところ、締まりが弱い黒褐色の落ち込みが５か所あり、落ち込みは、方形に配置することを確認したため、ＳＴ 3002 とした。この時点では１間×２間の掘立柱建物跡と想定した。落ち込みの段下げを行ったところ、Ｐ 02・08 の中央に直径 18㎝の黒色土が円形に残存していたため、柱痕と判断し、この部分を段下げした。

柱穴の掘削は４分割して行った。Ｐ 01･03･06･07 は検出面からの掘込みが 10㎝足らずと非常に浅く、底部が平坦な柱穴で共通していたのに対し、Ｐ 02 は深さが 40㎝程で、Ｐ 05 は 31㎝程で断面が筒形の柱穴である。Ｐ 05 は締まりがやや強い黒褐色の粘土質シルトで、縄文時代の土坑の埋土と酷似するため、本遺構を構成する柱穴ではなく、縄文時代の土坑と判断し、ＳＫ 3028 の遺構番号を付けて、本遺構から除外した。また、平面形、断面形、埋土の特徴、配置から、ＳＫ 3015 をＰ 07 に、ＳＫ 3021 をＰ 08 として、本遺構を構成する柱穴と判断した。

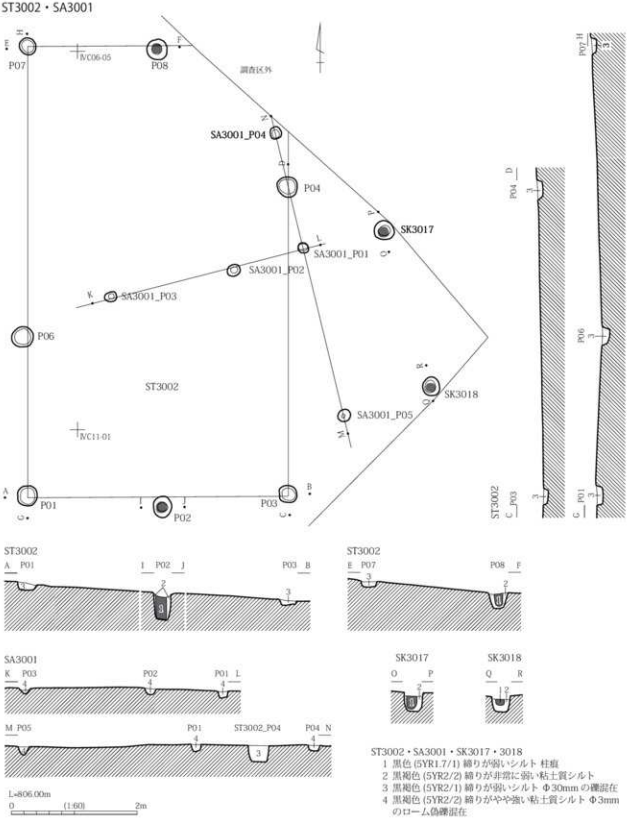
Ｐ 01・03・06 は、２方向の断面図を作成し、Ｐ 02・04 とＰ 08 は１方向のみの断面図を記録した。

遺構の構造　長軸 6.80 m、短軸 3.90 mの規模を有し長方形を呈する。北東隅は調査区外になるため検出できなかったが、７基の柱穴を検出した。長軸方向の軸線は、ほぼ北を向く。Ｐ 04 やＰ 06 に対向する柱穴は確認できず、柱穴の掘り込みが検出面まで達していなかった可能性がある。柱間は２間×３間、柱間寸法は以下のとおりである。

長軸　Ｐ 01-06：2.45 m　Ｐ 06-07：4.35 m　Ｐ 03-04：4.70 m
短軸　Ｐ 01-02：2.00 m　Ｐ 02-03：2.90 m　Ｐ 07-08：1.95 m

遺物出土状況　Ｐ 02 ～ 04 の埋土から土師器片が出土したが、図化できるものはない。

ST3002・SA3001



ST3002・SA3001・SK3017・3018
1 黒色 (5YR1.7/1) 締りが弱いシルト 柱痕
2 黒褐色 (5YR2/2) 締りが非常に強い粘土質シルト
3 黒褐色 (5YR2/1) 締りが弱いシルト Φ30mm の礫混在
4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ3mm のローム偽礫混在

第 68 図　平安時代の遺構図（４）　ＳＴ 3002、ＳＡ 3001、ＳＫ 3017・3018

調査所見　隣接するＳＢ 3001 と軸がほぼ直交するため、共存していた可能性がある。

（３）杭列

ＳＡ 3001（第 64･68 図、写真図版９）

検出位置　Ⅳ C 06（３トレンチ）

調査経過　ＳＴ 3002 調査時の精査で、Ⅴ層上面で直径 10㎝ほどの黒褐色土の落ち込みがＴ字形に配置されている状況を確認し、ＳＡ 3001 の遺構番号を付けた。落ち込みを段下げし、平面図と写真記録後、断ち割りを行い断面写真及び断面図を記録した。Ｐ 05 は、断面形がＶ字形を呈するため、杭が打ち込まれたものと考えた。

ＳＴ 3002　P02 の断面（南より）

遺構の構造　ピットはＴ字形に並び、P05 の断面形がＶ字形を呈するため、杭を打ち込んだ痕跡と想定し、杭列と推定した。Ｐ 01 ～ 03 の軸は、北から 75 度東に振っており、Ｐ 04･05 はこれに直交する。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

調査所見　Ｐ 01･04･05 の軸線は、ＳＫ 3017･3018 を通る軸と並行する。

（２）墓坑・土坑（第 64･69 図）

調査経過　土坑は、３トレンチの一部では、Ⅳ層中ないしＳＢ 3002 の埋土上面で確認できたものもあるが、４トレンチを含めて、大半はⅤ層上面で検出した。縄文時代の遺構の多くはⅣ層基調の極暗赤褐色土が埋土であるが、平安時代の遺構は、Ⅲ層基調の黒色ないし黒褐色の埋土であるため、両者の区別は比較的容易だった。ＳＫ 3014、3017、3018、4004、4008、4046、4047 は、土坑の規模と配置から掘立柱建物跡の柱穴の可能性もあるが、建物跡として明瞭な配置を確認できなかったため、土坑と捉えた。

なお、４トレンチの北壁で検出した落ち込みは、整理作業時に平安時代の土坑と認定し、ＳＫ 4046･4047 の遺構番号を付けた。

墓坑であるＳＫ 4007 は、Ⅴ層上面での検出中に人骨（頭蓋骨および大腿骨）が出土したため、付近を精査したところ、ＳＢ 3001 の埋土と同じⅢ層基調の黒褐色シルトの落ち込みを確認した。落ち込みは長方形を呈した。人骨が出土したことから、土坑の上面はすでに削平されたと判断した。ＳＫ 4007 は、４分割して埋土を観察したが、大腿骨部分を削平したため、平面図は記録できなかった。西壁寄り中央部から長幹骨の一部が出土したが、骨は脆弱なため取り上げることはできなかった。墓坑内における出土位置から考えて、おそらく上腕ないし前腕の骨と推定する。骨以外に遺物の出土はない。頭蓋骨は記録後、発泡ウレタンで梱包して取り上げた。

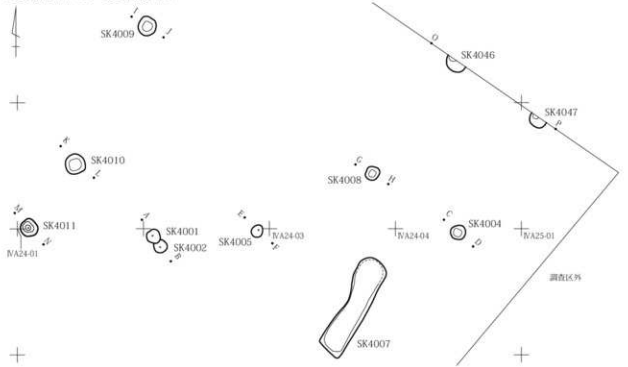
ＳＫ 3014･3017･3018　直径 30㎝程度の円形を呈している。掘方の埋土はいずれも締まりが弱い黒褐色シルトで、黒色土の柱痕がある。土質はＳＴ 3001 の柱穴と同じである。ＳＫ 3017 の埋土から灰釉陶器片が出土したが、図化できるものはない。

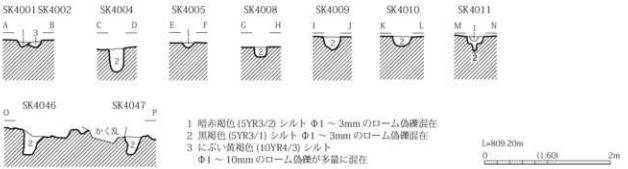
ＳＫ 3014 は３トレンチの南側へ、ＳＫ 3017･3018 はトレンチ東側へのびる掘立柱建物跡の柱穴の可能性がある。

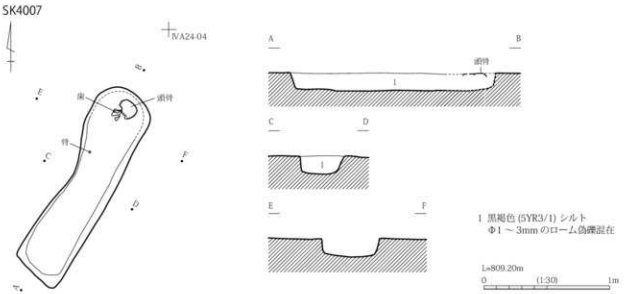
ＳＫ 4004･4008･4046･4047　直径は 27㎝～ 45㎝で、平面形は円形を呈する。埋土はいずれも黒褐色シルトで、柱痕はない。ＳＫ 4004・4006・4007・4008 は方形に並んでおり、埋土が共通するため掘立柱建物跡の柱穴と考えることができるが、発掘時に認定することはできなかった。

ＳＫ 4007（第Ｚ図、写真図版 10）　墓坑は、長さ 162㎝、幅 34 ～ 45㎝、深さ 14㎝、平面形は不整長方形

平安時代４トレンチ遺構配置図







第 69 図　平安時代の遺構図（５）　４トレンチ墓坑、SK

ＳＫ 4046（左）と 4047 の断面（南西より）

ＳＫ 4007　頭蓋骨出土状況（南より）

を呈する。主軸は北から東へ 35 度振れる。東西の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は外傾している。底面はほぼ水平で、長さは 156cmである。墓坑の形状と大腿骨の位置からみて、仰臥伸展葬と推定するが、木棺等の痕跡は確認できない。人骨の頭位は、土坑の主軸と同じで、顔面は西を向く。本遺構は、ＳＫ 4004 とＳＫ 4008 とを結ぶ軸と直交する。土器が出土していないため時期を確定することはできないが、埋土がＳＢ 3001 と同じであることから、平安時代に帰属すると推定する。

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	規模			形	柱穴	カマドの位置	その他の施設	時期
		遺構	遺物	遺構	遺物		長軸 cm	短軸 cm	深さ cm					
SB3001	Ⅳ B08・14	8 64 65 66	70 71	8	44 45	E-W	400	335	22	方形	P05	西壁中央	P01 ～ 04 壁溝	10C 中～後

第 22 表　平安時代竪穴建物跡一覧表

遺構番号	中地区	図番号		図版番号		柱穴	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
ST3001	Ⅳ B09・10・15	8 64 67		9		P01	37	37	円	21	15	A	柱痕有
						P02	38	27	楕円	25	27	B	柱痕有
						P03	35	30	卵	20	25	A	柱痕有
						P04	37	33	卵	28	0	F	柱痕有
						P05	35	34	円	32	26	B	柱痕有
						P06	36	31	楕円	19	0	F	柱痕有
						P07	30	30	隅丸方	20	23	A	柱痕有
						P08	30	30	円	25	0	F	柱痕有
						P09	34	32	円	25	0	F	柱痕有
						P10	32	27	楕円	22	16	B	柱痕有

第 23 表　平安時代掘立柱建物跡　杭列一覧表

遺構番号	中地区	図番号		図版番号		柱穴	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径cm	短径cm	形	深さcm	底長cm	形	
ST3002	Ⅳ B10・15 Ⅳ C06・11	8 64 68				P01	30	30	円	10	28	B	
						P02	34	28	楕円	43	22	C	柱痕有
						P03	28	28	隅丸方	8	22	B	
						P04	30	30	円	5	25	B	
						P06	34	33	円	10	28	B	
						P07	27	26	円	8	23	B	旧SK3015
						P08	33	32	円	27	23	C	旧SK3021 柱痕有
SA3001	Ⅳ C06	8 64 68		9		P01	21	17	楕円	10	15	B	
						P02	21	18	楕円	9	12	A	
						P03	19	15	楕円	5	0	D	
						P04	20	17	卵	8	15	B	
						P05	20	19	円	14	0	F	

第23表　平安時代掘立柱建物跡　杭列一覧表

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径cm	短径cm	形	深さcm	底長cm	形	
SK3007	Ⅳ B04-09・13	8				—	55	54	円	20	28	A	
SK3013	Ⅳ B10-01	8 64				—	37	35	円	17	0	E	
SK3014	Ⅳ B09-15	8 64 67				—	30	30	円	20	0	F	柱痕有
SK3017	Ⅳ C06-11	8 64 68				—	32	32	円	32	0	F	柱痕有
SK3018	Ⅳ C06-15	8 64 68				—	30	27	円	22	0	F	柱痕有
SK4001	Ⅳ A24-02	8 69				—	21	20	円	12	0	F	
SK4002	Ⅳ A24-02	8 69				—	(22)	21	円	12	0	F	
SK4004	Ⅳ A19-16・A24-04	8 69				—	25	23	円	37	0	F	
SK4005	Ⅳ A19-14・A24-02	8 69				—	19	18	円	7	0	E	
SK4007	Ⅳ A24-03・07	8 70				NE-SW	162	35	不整長方	14	(156)	B	人骨出土
SK4008	Ⅳ A19-15	8 70				—	23	22	円	15	13	A	
SK4009	Ⅳ A19-09・10	8 70				—	31	29	円	20	20	A 底面段差	
SK4010	Ⅳ A19-13	8 70				—	32	32	円	14	0	E	
SK4011	Ⅳ A19-13・A24-01	8 70				—	28	28	不整円	24	18	A 底面段差	
SK4016	Ⅳ A13-10	8 70				—	45	42	円	12	0	D	

第24表　平安時代土坑一覧表

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径cm	短径cm	形	深さcm	底長cm	形	
SK4017	Ⅳ A13-10	8 70				—	38	38	円	22	0	F	
SK4046	Ⅳ A19-12	8 70				—	32	—	円	38	14	C	整理作業時に認定
SK4047	Ⅳ A20-13	8 70				—	27	—	円	30	9	C	整理作業時に認定

第24表　平安時代土坑一覧表

3　遺物

平安時代の遺物は、ＳＢ3001、ＳＴ3001、3002から土器が1,348片（総重量10,158ｇ）、ＳＢ3001から鉄製刀子が１点、SK4007から人骨が出土した。種類は土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器が認められ、須恵器は出土しない。器種は食膳具（坏・埦・皿・盤）、煮炊具（甑、小型甕）、貯蔵具（甕）である（土器の分類は、長野県埋文センター1990ａに従う）。これらの土器の99％はＳＢ3001から出土した。ＳＴ3001、3002出土土器は土師器や黒色土器Ａの食膳具、甕の破片が出土しているが、図化できるものはない。

ＳＢ3001（第70・71図、PL44・45）

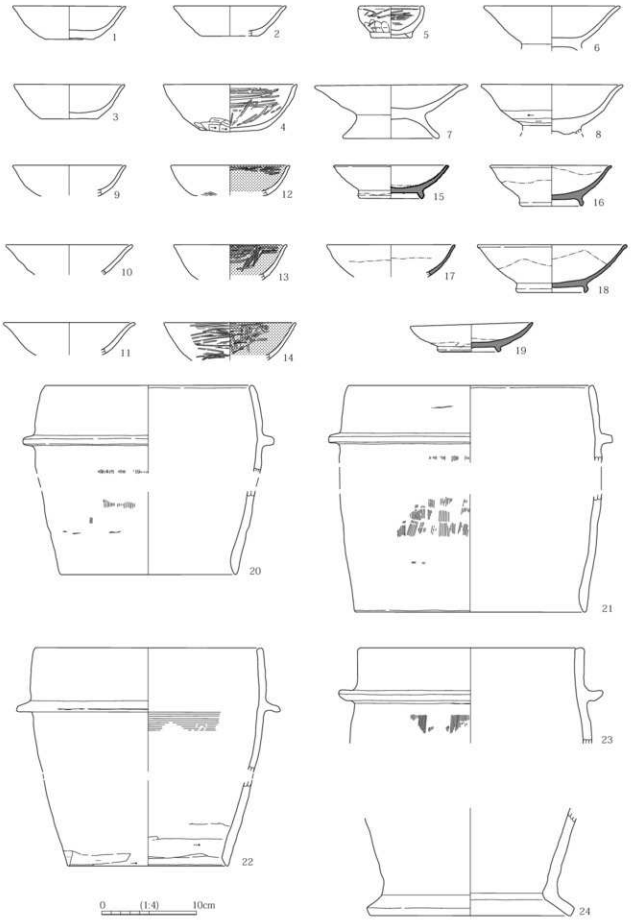
土器　ＳＢ3001からは1,336点（総重量10,136ｇ）出土した。食膳具は土師器の坏（１～４）、埦（５、６）、盤（７、８）、底部を欠損する食膳具（９～11）、黒色土器Ａの底部を欠損する食膳具（12～14）、灰釉陶器の埦（15～18）、皿（19）がある。土師器の盤を除き、食膳具において大小の法量分化が認められる。灰釉陶器は漬け掛けである。煮炊具は土師器の甑（20～24）、小形甕（25、26）がみられる。甑は鍔をもつ。甑、小形甕ともにカキメにより調整される。これらの特徴から、ＳＢ3001出土の土器群は松本編年10～11期に並行すると推定でき、10世紀中葉から後葉に相当する。

金属製品　鉄製刀子１点が出土した（27）。切先は先細りし、茎部に対し刀身部のラインは並行する。関は背関のみ作り出される片関で、茎部および刀身部のラインから直角に立ち上がる。

SK4007（第71図、PL45）

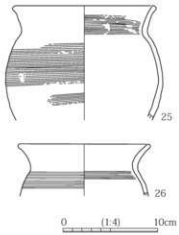
人骨　頭骨が１個体分出土した。頭位軸は北から東に30度傾き、顔面は北西方向を向く。遺存状態は非常に悪いが、検出状態で頭蓋骨、眼窩、上顎、脛骨を確認した。また、頭骨に伴い歯を採取した。

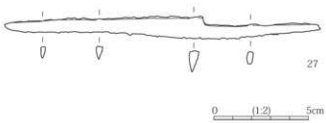
出土骨を鑑定した茂原信夫氏の所見は以下のとおりである。歯は咬耗がややすすんでおり、咬頭頂と思われる部分のエナメル質が磨耗し、穴が空いている。近遠心径と思われる大きさは8.4㎜である（計測は藤田1949に従った）。形態的には上顎小臼歯の舌側半か、第３大臼歯の舌側咬頭部半のどちらかと思われるが、近遠心経の大きさを現代日本人の平均値（権田1959）と比較すると、上顎第３大臼歯（男性で8.94㎜、女性で8.86㎜）が最も近く、第３大臼歯の舌側咬頭部半と判断することが妥当である。この歯を形態および近遠心経の大きさから総合的に推定すると、３咬頭性の上顎左第３大臼歯の舌側咬頭を含む舌側半の可能性が高い。歯の状態から、頭骨の年齢層は壮年から熟年程度と思われる。性別は不明である。



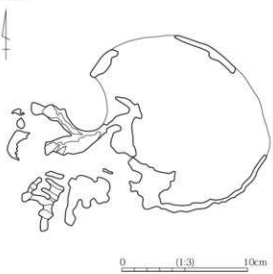
第70図　平安時代の遺物図（1）　ＳＢ3001（1）

SB3001





SK4007



頭骨出土状況

咬合面

舌側面

上顎左M3（模型歯）

第71図　平安時代の遺物図（２）　ＳＢ 3001（２）、墓坑

４　科学分析

氏神遺跡の平安時代遺構及び遺物に係る科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社パレオ・ラボに業務委託して放射性炭素年代測定を実施した。以下に科学分析結果の概要を記述する。詳細は付録のＤＶＤに収録した。

（１）放射性炭素年代測定

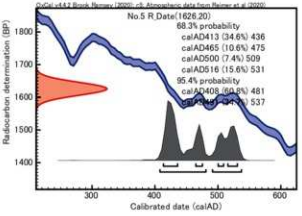
平安時代の竪穴建物跡（SB3001）と出土した土器群の絶対年代を把握し、出土土器群の編年的位置を明らかにするための基礎データを得ることを目的に、年代測定を実施した。年代測定で放射性炭素年代測定を選択した理由は、試料が得やすく測定精度が高いためである。

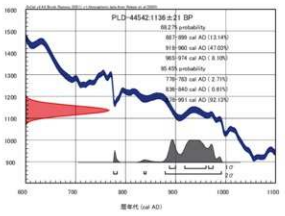
今回はＳＢ 3001 のカマド構築材である礫に付着した炭化物及び同遺構出土の甑（21）に付着した炭化物の年代を測定した。

測定結果は第 25 表である。第 72 図は IntCal20（Reimer et al.,2020）を用いた暦年較正結果である。カマド構築礫付着炭化物の同位体補正を行った値は、1,625 ± 20BP である。暦年較正値（２σ）は、408 ～ 537calAD である。ＳＢ 3001 の年代は出土土器群から 10 世紀中葉から後葉と推定していたが、測定結果は５世紀であり、推定年代よりも古い。これは試料が少なく、かつ脆弱であったので、酸やアルカリ処理をしていないことから、不純物を除去できなかった可能性がある。この結果を受け、同遺構から出土した甑（21）に付着する炭化物を採取し、年代測定を実施した。同位体補正値は 1136 ± 21BP である。暦年較正値（２σ）は、776 ～ 991calAD である。そのうち 92.1%は 878 ～ 991calAD の年代値となり、９世紀後半から 10 世紀後半の年代を示した。この年代観は出土土器群による推定年代に近いものであり、遺構及び出土土器群の絶対年代値と考えてよいと判断できる。

No.	試料名	方法	補正年代（暦年較正用）BP	δ13C（‰）	暦年較正年代																Code No.	
						年代値														確率%		
5	SB3001 カマド構築石付着炭化物	－	1625±20（1626±20）	-23.82 ±0.26	σ	cal	AD	413	-	cal	AD	436	1537	-	1515	calBP	34.6	PLD-42240	pal-12933
						cal	AD	465	-	cal	AD	475	1486	-	1475	calBP	10.6		
						cal	AD	500	-	cal	AD	509	1450	-	1442	calBP	7.4		
						cal	AD	516	-	cal	AD	531	1435	-	1420	calBP	15.6		
					2σ	cal	AD	408	-	cal	AD	481	1543	-	1470	calBP	60.8		
						cal	AD	491	-	cal	AD	537	1459	-	1413	calBP	34.7		
6	SB3001 カマド出土甑　№31（掲載番号 21）	－	1136±21（1135±20）	-23.96 ±0.15	σ	cal	AD	887	-	cal	AD	899	1063	-	1051	calBP	13.1	PLD-44542	
						cal	AD	918	-	cal	AD	960	1033	-	990	calBP	47.0		
						cal	AD	965	-	cal	AD	974	985	-	976	calBP	8.1		
					2σ	cal	AD	776	-	cal	AD	783	1174	-	1167	calBP	2.7		
						cal	AD	836	-	cal	AD	840	1114	-	1110	calBP	0.6		
						cal	AD	878	-	cal	AD	991	1072	-	960	calBP	92.1		

第 25 表　放射性炭素年代測定結果（２）





第 72 図　IntCal20 による暦年較正結果（２）

第６章　調査の総括

第１節　氏神遺跡及び周辺遺跡における縄文時代前期末から中期の動向

１　縄文時代前期末から中期中葉の土器変遷

氏神遺跡の土器群は、縄文時代前期末、中期初頭、中期中葉の３時期が認められる。ここでは、松本盆地南西部の遺跡から出土した土器と比較することで、本遺跡の編年的位置を明らかにしたい。当該期、特に前期末から中期初頭の土器群は、多系統の土器が共存し、複雑な様相を呈する。長野県においては、「久兵衛尾根Ⅰ・Ⅱ式（藤森編1965）」や「籠畑Ⅰ・Ⅱ式（武藤1968）」、「晴ヶ峰式、梨久保式（三上1987a・ｂ）」等、多数の土器型式が設定され、研究史的な位置付けがなされている。前期末から中期初頭の土器群を整理するために、山本典幸氏はＡ～Ｋの型式系統（型式組列）を示し、それらが地域ごとに異なった組み合わせをもつ様相を示し、これらを五領ヶ台式土器様式と呼称した（山本2000）。今村啓爾氏は当該期の土器群を「系統の束」として理解することを提案した。器形や文様帯の配置等、連続的に変化する要素を重視した系統分けを行い、当該期の中部高地の土器群は、五領ヶ台式系統の土器と、松原式からの系譜を引く踊場系の２系統が共存する状況を示した（今村2010）。

本報告では、系統の理解は今村氏の研究を基本とし、土器群の系統とそれらの組み合わせを、同一時期のアッセンブリッジ（assemblage）として把握する必要があると考え、第26表のような概念規定をした。また、本報告では、本遺跡の資料が含まれる十三菩提式新段階から藤内Ⅰ式（日本考古学協会長野大会の編年（以下、「協会編年」）の１～５期）までを検討対象とする。

前期末　前期末は、十三菩提式古段階に位置づけられる諸磯Ｃ式からの系譜を引く池田系、十三菩提式古段階に位置づけられる鍋屋町式からの系譜を引く鍋屋町系、池田系が北白川系の影響を受けて成立した中空口縁系の３つの系統が組み合わさり、これらの他十三菩提式系統や朝日下層系統が客体的にみられる。

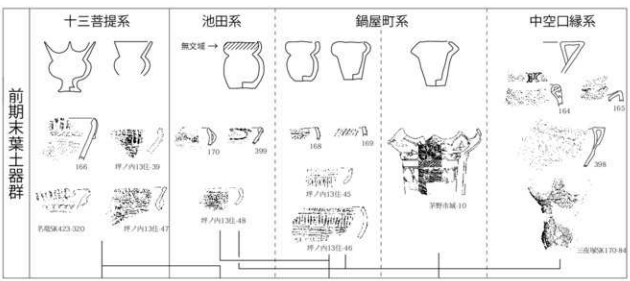
十三菩提系統は器形全体がわかるものが少なく、破片から推定せざるを得ないが、口縁は外側に開き、鍋屋町系や池田系のように内湾するものや「く」の字状に屈曲するものはみられない。胴中部が球形に膨らむものが少なく、低い台を付けたような形の底部として認められる。いわゆるトロフィー形土器は、このような器形の代表例である。本遺跡ＳＢ3003から出土した166や山形村名竜遺跡ＳＫ423から出土した320、松本市坪ノ内遺跡13号住から出土した47は十三菩提系統にあたると推定する。

池田系の器形は、口縁は内湾し、胴部が膨れるものが基本である。小形と大形に分かれ、大形は胴部の膨れがより顕著である。文様は集合沈線により施文され、口唇部には幅広の無文帯を有する。当遺跡ＳＢ3003から出土した170や、ＳＫ3025から出土した399は大形にあたると推定する。坪ノ内遺跡13号住から出土した48が池田系にあたると推定する。

鍋屋町系の器形は、口縁は内湾、または「く」の字状に内側に屈曲し、胴下部がずんぐり膨らんだものと底部に向かい直線的に窄まるものがある。文様は、北白川系の影響を受けソーメン状浮線文を多用するものと、集合沈線を施すものの２種に分かれる。本遺跡の資料はＳＢ3003から出土した168、169、ＳＢ4001から出土した301、ＳＫ3025から出土した404が鍋屋町系にあたる。茅野市城遺跡出土土器や坪ノ内遺跡13号住から出土した45、46が鍋屋町系である。

時期	型式・土器群と系統				氏神	協会編年
前期末	十三菩提	池田	鍋屋町	中空口縁	Ⅰ期	
中期初頭	五領ヶ台		踊場		Ⅱ期	１・２期
中期中葉	口縁外開形	折衷形	口縁屈曲形	円筒形	Ⅲ期	３～５期

第 26 表　型式・土器群と系統の組み合わせ



第 73 図　松本盆地における縄文時代前期末葉土器群

中空口縁系は、口縁部の器壁を内側に２回折り曲げ、中空部分を包み込む形の特殊な口縁部をもつ一群である。当遺跡ＳＢ 3003 から出土した 164、165、ＳＫ 3025 から出土した 398、山形村三夜塚遺跡ＳＫ 170 から出土した 84 が中空口縁系にあたる。

そのほか、ＳＫ 3024 から出土した 384、ＳＫ 5009 から出土した 506 にみられる小円貼付文や刻みを有する浮線文は、北陸の朝日下層系統のものと考える。

特に、本遺跡で中空口縁系が出土したことは注視できる。鍋屋町系や池田系の周辺遺跡における出土例は、多くないながらも度々報告されており、「籠畑Ⅱ式」等に分類される。また、長野市松原遺跡では、この２つの系統が組み合わさり共存する様相が、今村氏により「松原式土器」として認識されている。ただし、松原遺跡には中空口縁系は認められない。中空口縁系は北陸や南関東で出土しているにもかかわらず、中間地点の松原遺跡や千曲川流域で認められない事実を、今村氏は千曲川流域の遺跡が前期末における北陸―南関東間の情報交換ネットワークから外れていた結果と解釈しており、その時期の交流路は北陸から糸魚川沿いに、諏訪から甲府盆地を抜けたものであったと想定している（今村 2010）。

本遺跡が所在する松本盆地は、まさに今村氏が想定した交流路に位置しており、中空口縁系の出土及び、

それを有する土器群の組み合わせの認識は、松本盆地に千曲川流域とは異なる土器群の組み合わせを保有する集団がいたことを示す重要な事象と考える。ただし、本遺跡から出土した前期末の土器は、中期初頭の土器に混じる形で出土しており、名篭遺跡、三夜塚遺跡、坪ノ内遺跡においても、同一遺構からすべての系統が伴って出土する状況ではない。そのため、ここで指摘する前期末の土器群の組み合わせは仮説の段階であり、今後の類例が待たれる。

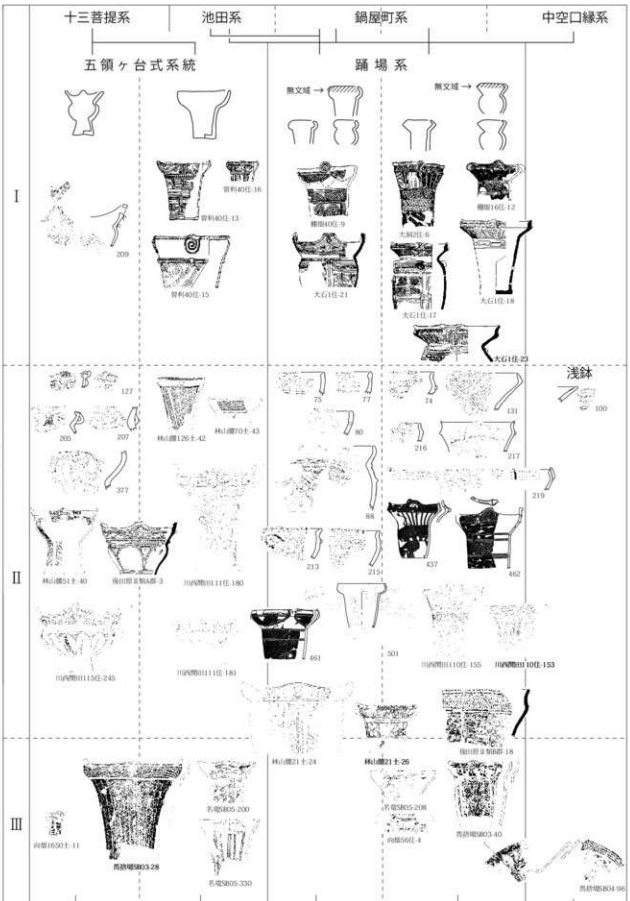
中期初頭　中期初頭は、十三菩提式系統からの系譜を引く五領ヶ台式系統と、池田系、鍋屋町系、中空口縁系の系譜を引く踊場系が組み合わさり共存する土器群に、北陸や関西等の遠隔地の土器が客体的にみられる。

五領ヶ台式系統の器形は２つに大別できる。一つは口縁部が大きく外側に開き、口頸部は球形に膨らみ、胴部は外反する。これは十三菩提系の器形における、低い台のような底部が胴部となったものと考えられる。本遺跡では、ＳＢ 3003 から出土した 127、ＳＢ 4001 から出土した 205、207、209、ＳＫ 3024 から出土した 377 がある。松本市林山腰遺跡 51 号土坑出土の 40、松本市川西開田遺跡 115 号住出土の 245、岡谷市後田原遺跡Ⅱ類Ａ群の３、松本市向畑遺跡 1650 号土坑出土の 11 がみられる。もう一つは口縁部が内湾気味に外に開き、胴部は外反する。大きく外に開く十三菩提式系の口縁部が縮小または省略され、球形に膨らむ口頸部が口縁となった形態で、胴部は十三菩提系の底の形を引き継ぐ。本遺跡では、明確にこの器形を有する土器は認められないが、富士見町曽利遺跡 40 号住出土の 13、15、16、林山腰遺跡 70 号土坑出土の 43、126 号土坑出土の 42、川西開田遺跡遺跡 111 号住出土の 180、181、名篭遺跡ＳＢ 05 から出土した 200、330、茅野市馬捨場遺跡ＳＢ 03 出土の 28 がみられる。

踊場系の器形も２つに大別できる。１つは口縁部が内湾し、胴部が底部に向かい直線的に僅かに窄まるまたは膨らむもので、これは前期末の池田系および鍋屋町系の口縁が内湾する器形のもに系譜を辿ることが可能と思われる。口唇部の無文域を池田系から引き継ぐものもある。もう一つは口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部は直線的に底部に向かい僅かに窄まるものと膨らむものがある。これは鍋屋町系の口縁が「く」の字状に屈曲するもの、中空口縁系に系譜を辿ることが可能と思われる。また池田系にみられる口唇部の無文域をもつものも認められる。前者にあたる土器は、本遺跡ＳＢ 3002 から出土した 75、77、80、88、ＳＢ 4001 から出土した 213、214、ＳＫ 4042 から出土した 461、ＳＫ 5007 から出土した 501 がみられる。茅野市棚畑遺跡 40 号住から出土した土器、茅野市大石遺跡１号住出土の 21、林山腰遺跡 21 号土坑出土の 24、26 がある。後者にあたる土器は、本遺跡ＳＢ 3002 から出土した 74、ＳＢ 3003 から出土した 131、ＳＢ 4001 から出土した 216、217、219、ＳＫ 4032 から出土した 437、ＳＫ 4042 から出土した 462 がある。岡谷市大洞遺跡２号住出土の６、棚畑遺跡 16 号住出土の 12、大石遺跡１号住出土の 17、18、23、川西開田遺跡 110 号住出土の 153、155、111 号住出土の 187、後田原遺跡Ⅱ類Ｂ群の 18、名篭遺跡ＳＢ 05 から出土した 208、向畑遺跡 56 号住から出土した 4、馬捨場遺跡ＳＢ 03 から出土した 40 がみられる。

これらの系統は器形によって認識しているが、文様要素とも無関係ではなく、例外はあるものの五領ヶ台式系統の地文は縄文が多く、踊場系は沈線文が中心である。

これら中期初頭の土器群の組み合わせは、五領ヶ台式系統の土器における編年に基づきⅠ～Ⅲに細分できる。Ⅰは松本盆地では類例がほとんどみられず、諏訪周辺の遺跡にみられる。五領ヶ台Ⅰ式を伴う曽利遺跡 40 号住、それに並行すると推定する大石遺跡１号住、棚畑遺跡 40 号住、大洞２号住が属する。長野県では「久兵衛尾根Ⅰ式」や「梨久保式」に分類されるもので、「協会編年」Ⅰ期に相当する。Ⅱは、これまで長野県においてほぼ類例がみられなかった、五領ヶ台Ⅱａ式を伴う。また、本遺跡ＳＢ 3002 出土の 100 や馬捨場遺跡ＳＢ 04 出土の 96 口唇部内面に押引文が施される浅鉢がみられるようになる。これらの浅鉢は、系譜を遡ることができるものが周辺には見当たらないため、外来の系統が新たに中期初頭土器



第 74 図　松本盆地における縄文時代中期初頭土器群

群の組み合わせに加わったものと理解した方がよいと思われる。当遺跡ＳＢ3002、3003、4001のほか、林山腰遺跡、川西開田遺跡110、111号住、後田原遺跡が属する。「協会編年」では明確に位置付けられておらず、１期と２期の中間のような土器である。氏神遺跡には五領ヶ台Ⅰ式に近い細線文が施されるＳＢ3003出土の128やＳＫ5006出土の495がみられる。そのため１期により近い様相を示すと考えられる。Ⅲは五領ヶ台Ⅱｂ、ｃ式土器を伴う。松本盆地での類例は名篭遺跡と向畑遺跡の一部にみられるのみで、馬拾場遺跡や岡谷市船霊社遺跡、岡谷市梨久保遺跡、原村長峰遺跡等諏訪周辺の遺跡にいくつか認められる。長野県では「久兵衛尾根Ⅱ式」や「深沢式」と呼ばれ、「協会編年」２期に相当する。

中期中葉　中期中葉の土器群の組み合わせにおける各系統は、中期初頭にみとめられた五領ヶ台式系統、踊場系の各系統を引き継ぐもの、踊場系と五領ヶ台式系統の２つが折衷したと思われるもの、中期初頭から出現した口唇部内面に押引文をもつ浅鉢の系統に、円筒形や胴部から口縁に向かい直線的に外に開く器形等の新たな系統と考えられるものが共存する。

中期初頭における五領ヶ台式系統の口縁部が大きく外側に開き、口頸部は球形に膨らみ、胴部は外反する器形を引き継ぐものが認められる。本遺跡ＳＢ1001から出土した16、川西開田遺跡20号住から出土した１、山形村淀の内遺跡東７号住から出土した33、塩尻市剣ノ宮遺跡24号住から出土した109等をあげることができる。

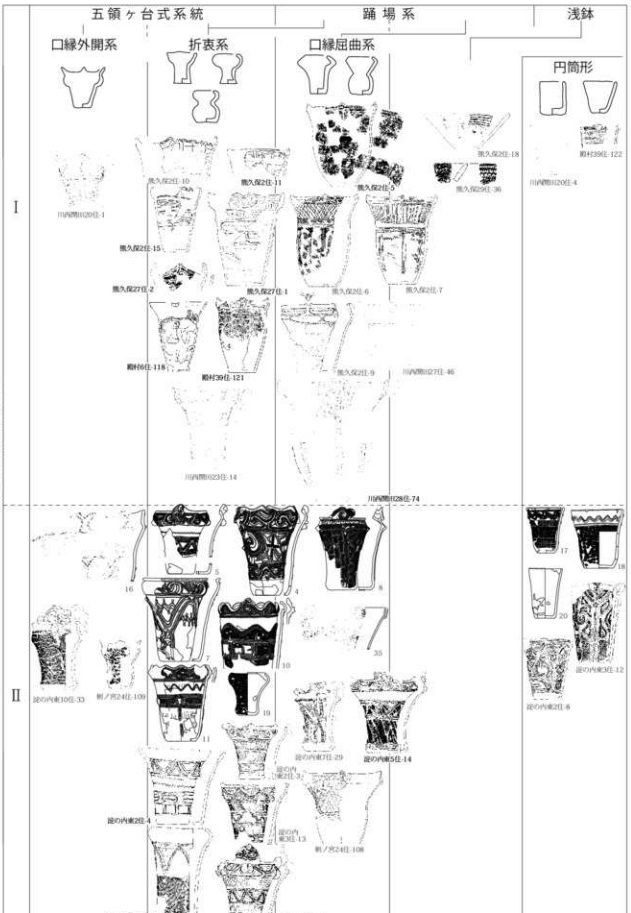
踊場系の系統を引き継ぐものは、口縁が「く」の字状に屈曲する。口頸部が外に開くものと、縮小または省略され胴部の一部となるものがある。胴部は外反または垂直ぎみに立ち上がるものと、膨らむものが認められる。「平出第Ⅲ類Ａ土器」の多くはこの系統に組み込まれる。本遺跡ではＳＢ1001から出土した８、35、朝日村熊久保遺跡２号住から出土した４、５、６、９、27号住から出土した８、川西開田遺跡27号住から出土した46、28号住から出土した74が認められる。淀の内遺跡東５号住から出土した14、東７号住から出土した29、剣ノ宮遺跡24号住から出土した108がみられる。

踊場系と五領ヶ台式系統が折衷した土器は、口縁部は踊場系からの系譜を引く内湾する口縁に、胴部は外反して立ち上がるものと、膨らんだものが認められる。外反して立ち上がる胴部は五領ヶ台式系統の胴部の形を引き継いだものと思われる。これらの土器には口縁の内湾が緩いものも多く、これは五領ヶ台式系統の外に開く口縁の形態が影響したものと想定する。本遺跡ＳＢ1001から出土した４、５、７、10、11、15、19、熊久保遺跡２号住から出土した10、11、15、27号住から出土した１、２、川西開田遺跡23号住から出土した14、山形村殿村遺跡６号住から出土した118、39号住から出土した121、淀の内遺跡東２号住から出土した３、４、東３号住から出土した13、東５号住から出土した18、東７号住から出土した30がみられる。

口唇部内面に押引文をもつ浅鉢は熊久保遺跡２号住から出土した18や29号住から出土した36が認められるほか、口唇部内面の押引文が消え、口唇部外面に鎖状隆帯や押引文を施文するものが、川西開田遺跡20号住から出土した５や剣ノ宮遺跡24号住から出土した117にみられる。この２種の浅鉢は異系統の可能性が高いと考える。

円筒形や胴部から口縁に向かい直線的に外に開く器形は当遺跡ＳＢ1001から出土した17、18、20、周辺遺跡では川西開田遺跡20号住から出土した４、殿村遺跡39号住から出土した122、淀の内遺跡東２号住から出土した８、東３号住から出土した12等をあげることができる。これらの土器の器形は、中期初頭の周辺遺跡にみられた各系統に系譜を遡ることが難しく、外来の系統が新たに中期中葉土器群の組み合わせに加わったものと理解した方がよいと思われる。

中期初頭同様、器形と文様要素は関連しており、踊場系を引き継ぐ器形は沈線文が中心であり、五領ヶ台式系統を引き継ぐ器形は縄文を地文とするものが多い。



第75図　松本盆地における縄文時代中期中葉土器群

これら中期中葉の土器群の組み合わせは貉沢式期から新道式期のⅠと、藤内Ⅰ式期のⅡに細分することができる。Ⅰは熊久保遺跡２号住、27号住、川西開田遺跡20号住、27号住、28号住、殿村遺跡６号住、39号住等が認められる。「協会編年」３・４期に該当する。Ⅱは当遺跡ＳＢ1001のほか、淀の内遺跡東２号住、３号住、５号住、７号住、剣ノ宮遺跡24号住が認められる。「協会編年」５期に該当する。基本的にこれらの土器群の組み合わせにおける各系統は、これ以降の藤内Ⅱ式期や井戸尻式期において存続すると考えるが、口縁部内面に押引文をもつ浅鉢がⅡではみられなくなる等、消滅する系統もある。また、口縁部外面に鎖状隆帯や押引文を施文する浅鉢、円筒形や胴部から口縁に向かい直線的に外に開く器形等、新たに組み込まれる系統もある。中期中葉は器形以外も、文様において前期末や中期初頭に中心であった縄文系と沈線文系のほかに、隆帯による施文や区画文、焼町土器に代表される曲隆帯等、新たな文様要素が取り入れられるようになる。中期初頭から引き継がれる系統に、新たな系統が組み込まれ、中期中葉の土器群の組み合わせが成立したのであろう。

２　縄文時代における氏神遺跡の石器群

氏神遺跡から出土した縄文時代の石器は、1,423点、総重量134,489.8ｇである。その内、1,254点、重量130,133.3ｇは縄文時代に属する遺構から出土し、そのほかは平安時代の遺構に混入したものと、遺構外から出土したものである。

縄文時代の石器を分析する際の視点と方法は、阿部朝衛氏により示されている（阿部1985）。石器の分類、石器組成、石器製作技術の３視点を構造的に把握することで、その変化を現象的に把握可能であると説明している。この３視点は縄文時代に限らず、石器群を分析する視点としてすべての時代に適応可能なものであるが、特に縄文時代石器を対象とする際、旧石器時代の石器よりも把握がしやすい要素として、①それぞれのまとまりの石器における属性間の距離が大きい場合が多く、分類が行いやすい点、②共伴する土器によって詳細な年代的位置付けが可能であり、より精緻に通時的・共時的な分析と理解ができる点があげられる。本節では、阿部氏の指摘する３視点および分析上の利点に留意し、本遺跡の石器群を整理する。年代的位置付けは同一遺構から共伴する土器をもとに行い、年代的位置付けが可能な石器1,163点、重量111,110.6ｇを分析対象とする。中期初頭の（五領ヶ台Ⅱａ式に伴う）石器は947点、重量96,783.3ｇ、中期中葉の（藤内Ⅰ式に伴う）石器は216点、重量14,327.3ｇである。点数、重量いずれも出土石器全体の８割以上が対象となり、石器群全体の特徴を把握するために十分な数量であると考える。

石器の分類　石器を分類する際に基準となる属性は、多くの場合「形」である。形を作り出す際には、素材に対する加工の部位や方法、それを実施するための道具、加工の順序等の石器製作技術が駆使されることになる。その時に大きさや重量等もコントロールされる。したがって、石器の分類は、石器製作技術も加味したものとなる。

本遺跡の石器は、剥片や分割礫を素材とする剥片石器（打製石器：石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、打製石斧　磨製石器：磨製石斧）と礫をそのまま利用する礫石器（敲石、凹石、磨石、台石、石皿、砥石、石錘）、剥片石器の素材や残滓類（石核、剥片、砕片）、僅かな加工や使用の痕跡を見いだせる剥片（二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片）に大別できる。カッコ内は、細別であり、石器の分類や器種は、このレベルで認識されることが多い。

剥片石器の場合、最終加工が打製によるものか、磨製によるものかの中分類を経て、細別に至る。また、剥片石器の多くは、それぞれの石器に施される加工および、それによって作り出される形の属性差が大きい定形的な石器であるため、分類上問題となることはあまりないと考えられる。

分類上問題となるものは、不定形で属性差の小さい一部の剥片石器や礫石器、僅かな加工や使用の痕跡

を見いだせる剥片である。これらは礫や剥片をそのまま、または僅かな加工を施し道具として用いたものであり、その分類基準は、肉眼で観察される痕跡の種類（敲打痕、凹み痕、磨痕、加工痕、刃こぼれ等）と、それらが残される箇所である。これらの認定基準は問題が指摘されて久しいが、本報告では筆者の主観的な観察にもとづいている。また、これらの痕跡が１つの石器に複数認められる場合もある。その場合、本報告では痕跡の切り合いを観察し、最後に残されたと判断した痕跡をもとに分類した。

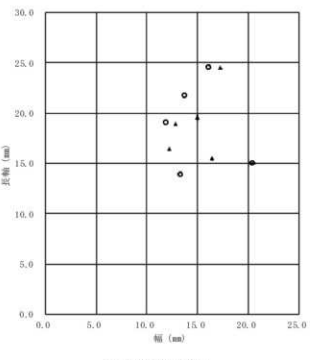
以下、分類別に各石器の特徴を記述する。

石鏃　27点出土した。すべて黒曜石の剥片、またはズリ[1]を素材とする。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭が10点（完形品５点、失敗品３点、欠損品２点）、中期中葉が11点（完形品５点、失敗品２点、欠損品４点）である。完形品よりも大形なものや、左右非対称のもの、厚みが減じられていないものを失敗品と位置付けた。欠損品は先端や茎部の一部を欠損する。完形品を見ると、中期初頭は、長軸が幅よりも1.3倍ほど長いもの（106、108、109、386）とほぼ正三角形を呈するもの（107）が認められる。すべて凹基無茎鏃であるが、108は殆ど内湾しない。中期中葉は、長軸が幅よりも1.3倍ほど長いもの（38、39、41、42）とほぼ正三角形を呈するもの（45、46）、幅が長軸よりも1.3倍ほど幅広のもの（47）が認められる。すべて凹基無茎鏃であるが、内湾が浅いもの（38、39）と殆ど内湾しないもの（45）がある。第76図は完形品の長幅比を示したものである。中期中葉に幅広のものが認められる以外は、目的とする規格にほぼ変わりがないことがわかる。

石錐　11点出土した。10点が黒曜石製、１点が凝灰岩製である。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭が５点、中期中葉が２点で、いずれも黒曜石製である。本遺跡では、断面形が菱形を呈する定形的な石錐は、遺構外から出土した凝灰岩製１点のみである。その他は黒曜石の剥片（50、110、111）、またはズリ（49、316、433）を素材とし、両側辺に部分的な加工を施して先端を細らせ、断面形が三角形を呈する不定形なものである。素材の選択や加工の方法等に時期差はみいだせない。

石匙　４点出土した。３点がチャート製、１点が頁岩製である。すべて中期初頭に位置づけられ、剥片を素材とする横型の石匙である。317は制作が途中で停止していると判断したため、失敗品と考える。

スクレイパー　10点出土した。内９点を図示した。小形品と大形品に細分できる。小形品は51のみである。黒曜石製の剥片の端部に、平面形が曲線状、断面形がＤ字形となる片刃の刃部を作り出す。中期中葉に位置づけられる。そのほかは大形品である。いずれも大形の剥片を素材とし、剥片の縁辺に平面形が直線状の片刃の刃部を作り出す。石材は黒曜石に比較し粒子が粗く、衝撃に強いものが選択される。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭が５点（花崗岩１点、砂岩３点、泥岩１点）、中期中葉が

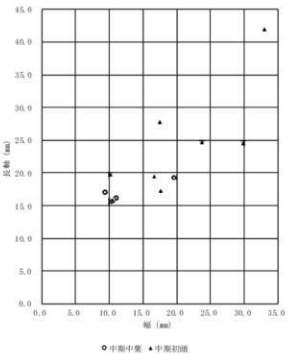


第76図　石鏃完形品長幅比

註1　板状または角柱状を呈する小形の黒曜石原石

4点（安山岩3点、砂岩1点）である。小形品が定形的な石器である一方、大形品は石材、加工の部位や頻度、形状に規格性が乏しい不定形な石器である。また、石材は遺跡近隣で採取可能なものであり、砥石の破片を転用したものもみられる（343）。このことから、大形品は、一部の二次加工ある剥片や微細剥離ある剥片と同様に、阿子島香氏の指摘する「使えればそれでよい」石器と位置付けることができる（阿子島1984）。

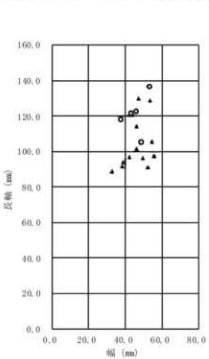
ビエス・エスキーユ　15点出土した。すべて黒曜石の剥片を素材とする。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭が9点、中期中葉が4点である。この石器は、向かい合う縁辺に、両極打撃による階段状剥離がみられるものが分類される。加工がほぼ行われないため、剥片の形状、大きさがそのまま反映される、不定形な石器である。第77図は、完形品の長幅比を示したものである。中期初頭に比べ、中期中葉は大きさにまとまりがあるようにもみえるが、規則性はみいだせない。これは、この石器の道具としての性格の他に、剥片剥離技術に両極打撃が用いられ、結果として道具としてのビエス・エスキーユと、剥片としてのビエス・エスキーユが分離できないために起こる現象の可能性がある。



第77図　ビエス・エスキーユ完形品長幅比

打製石斧　44点出土し、その内24点を図示した。剥片両面の周辺に加工を施し、短冊形や撥形に成形する。石材は流紋岩4点、安山岩2点、凝灰岩5点、砂岩17点、泥岩12点、粘板岩4点である。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭が25点（流紋岩2点、安山岩1点、凝灰岩2点、砂岩10点、泥岩6点、粘板岩4点）、中期中葉が13点（流紋岩2点、安山岩1点、凝灰岩2点、砂岩5点、泥岩3点）である。いずれも遺跡近隣で採取できる、硬質な岩石を石材とする。この傾向に年代的な違いはみいだせない。完形品は中期初頭が12点、中期中葉が5点で、いずれの時期も半数以上が欠損する。

完形品を対象とし、第78図は長幅比、第79図は長厚比を示した。幅に変化はみられないが、長軸は100㎜前後のものと、120㎜前後のものが認められ、前者は中期初頭に多く、後者は中期中葉に多い傾向がある。また、厚さは中期初頭が10㎜～15㎜に集中するのに対し、中期中葉では厚さが10㎜以下の薄形のもの（56）と、20㎜前後の厚形のもの（57～59）が認められる。

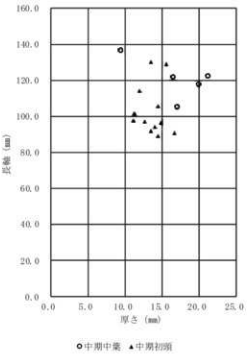


第78図　打製石斧完形品長幅比

磨製石斧　1点出土した（473）。透閃石岩製の小形品である。全面研磨されており、平面形は撥型、断

面形はＤ字形を呈する、片刃の石斧である。当遺跡において、透閃石岩の加工の痕跡はみいだせないため、搬入品であると考える。中期初頭に位置付けられる。

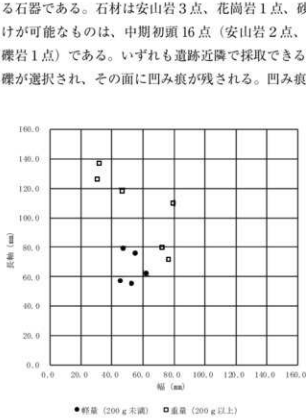
敲石　30点出土し、13点を図示した。片手で保持できる重量、大きさの礫に敲打痕が観察される石器である。すべて遺跡近隣で採取できる砂岩を石材とする。年代的位置付けができるものは26点あり、いずれも中期初頭である。これらを中心にみると、形態は円形（115、434、436）、楕円形（116）、棒形（365、414）、多角形（467）を呈する。形態により敲打痕が残される部位が異なり、円形は周縁、楕円形と棒形は端部、多角形は角部に残される傾向が強い。また、凹み痕が合わせて観察されるものもある（117）。完形品の大きさや重量をみると、重量200ｇ未満の一群と200ｇ以上の一群に分けられそうである。



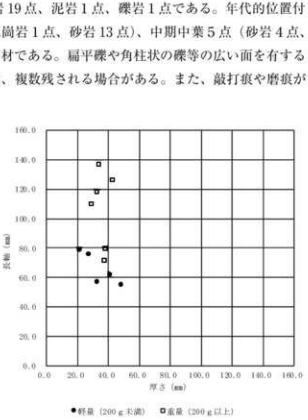
第79図　打製石斧完形品長厚比

第80図は長幅比、第81図は長厚比、第82図は幅厚比をそれぞれ示したものである。幅や厚みは重量による違いは認められず、30～50㎜に集中する。一方、長軸は、重量200ｇ未満の一群が50～80㎜に、200ｇ以上の一群が110～140㎜に集中する傾向がある。これは握りやすさの関係で、手に保持する部位である幅および厚さは、強い規制を受けるのに対し、長軸の長さを調整することで、必要な重量を担保していたためと推定する。

凹石　25点出土し、８点を図示した。片手に保持できる重量、大きさの礫に敲打による凹み痕が観察される石器である。石材は安山岩３点、花崗岩１点、砂岩19点、泥岩１点、礫岩１点である。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭16点（安山岩２点、花崗岩１点、砂岩13点）、中期中葉５点（砂岩４点、礫岩１点）である。いずれも遺跡近隣で採取できる石材である。扁平礫や角柱状の礫等の広い面を有する礫が選択され、その面に凹み痕が残される。凹み痕は、複数残される場合がある。また、敲打痕や磨痕が



第80図　敲石完形品長幅比

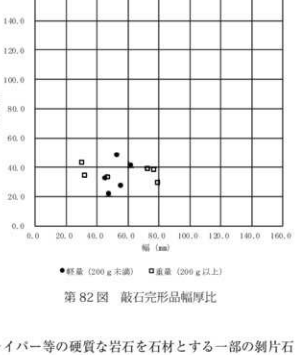


第81図　敲石完形品長厚比

合わせて観察されるものもある（194、335、460、487）。

磨石　２点出土し、１点を図示した。片手に保持できる重量、大きさの礫の表裏面に明瞭な磨痕が観察される石器である。年代的位置付けが可能なものは中期初頭に位置づけられる砂岩製１点のみであるが、欠損が酷く図示できなかった。典型的なものは遺構外から出土した安山岩製の512である。

台石　25点出土し、４点を図示した。片手で保持することが難しい重量、大きさの礫の表裏面や側面に敲打痕が観察される石器である。すべて遺跡近隣で採取できる硬質な砂岩を石材とする。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭20点、中期中葉２点である。ほぼすべての台石に欠損や剥離面が認められる。この時に生じた剥片を、大形スクレイパー等の硬質な岩石を石材とする一部の剥片石器の素材に用いられた可能性がある。



第82図　敲石完形品幅厚比

石皿　６点出土し、３点を図示した。片手で保持することが難しい重量、大きさの礫の表面に摩耗痕による、大きな凹みが観察される石器である。石材は安山岩２点、砂岩４点であり、いずれも遺跡近隣で採取できる石材である。すべての石皿が半分以上を欠損していると推定する。年代的位置付けが可能なものは５点あり、いずれも中期初頭である。

砥石　８点出土し、３点を図示した。礫の表裏面や側面に磨痕が観察される石器である。磨石とは片手で保持することが難しい重量、大きさであること（63）や、磨痕が面全体に及ばないこと（120、463）などの違いがある。すべて、遺跡近隣で採取できる砂岩を石材とする。台石や石皿同様、欠損や剥離面が認められるものが多い。この時に生じた剥片を大形スクレイパー等の硬質な岩石を石材とする一部の剥片石器の素材に用いたようであり、343の背面に砥石として利用されたときに残されたと推定する磨痕が認められる。

石錘　５点出土し、４点を図示した。礫の片側、または両側の端部に、剥離により抉りや、磨り切りにより溝を作り出す石器である。抉りや溝は紐等を結ぶための部分と推定する。４点（凝灰岩１点、砂岩２点、泥岩１点）が中期初頭、１点（砂岩）が中期中葉である。形態は楕円形（64、121、122）と長楕円形（508）がある。長さは27.4～65.7㎜、幅は22.4～31.7㎜で、大きさには、ばらつきが認められるが、特に幅に比べ長さのばらつきが大きい。重量は5.3～49.1ｇあり、こちらもばらつきが大きい。石錘は、その重量が機能上重要な要素であると思われる。その重量にばらつきが認められるということは、石錘にはいくつかの用途が想定され、用途ごとに適切な重量のものを選択していたと推定する。

石核　70点出土し、黒曜石製のもの４点を図示した。剥片石器の素材剥片を剥離した残核が中心である。石材は黒曜石51点、安山岩２点、チャート１点、砂岩15点、粘板岩１点である。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭50点（黒曜石33点、安山岩２点、砂岩14点、粘板岩１点）、中期中葉４点（黒曜石３点、砂岩１点）である。時期別に重量の平均値を見ると、中期初頭は黒曜石8.6ｇ、安山岩400.0ｇ、砂岩691.8ｇ、粘板岩84.4ｇ、中期中葉は7.3ｇ、砂岩1440.0ｇである。

黒曜石は、かなり小形になるまで消費するのに対して、その他の石材は、比較的大形の状態で廃棄して

いると考える。これは遺跡に搬入される黒曜石が小さいこと、黒曜石を石材とする剥片石器が概して小形であること、遺跡近隣で採取可能な石材よりも入手にコストがかかるため、限界まで消費する傾向が強いこと等が考える。そのほかの石材は、遺跡に搬入された状態が、かなり大きく、重い岩石であったこと、これらを石材とする剥片石器が、黒曜石製のものに比べ大形であること、遺跡近隣で採取できる岩石であり、入手が比較的しやすいため、限界まで消費する必要がないと考える。

剥片、削片、砕片　合わせて1054点出土した。この数は、出土した石器全体の74％にあたる。石材は黒曜石911点、流紋岩１点、安山岩３点、下呂石、２点、チャート９点、砂岩96点、泥岩20点、粘板岩８点、凝灰岩２点、石英１点、結晶片岩１点である。剥離の際に稜の形成を行っているものを削片とした。２点確認でき（138、445）、いずれも黒曜石である。大きさが１㎝四方以下のものは砕片とした。砕片の重量は0.1 g以下が殆どである。

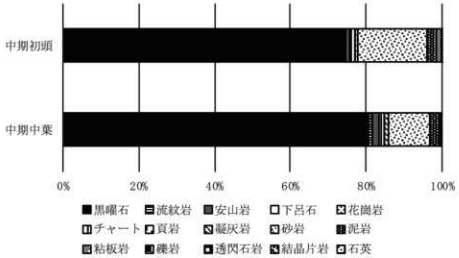
年代的位置付けが可能なものは、中期初頭728点（黒曜石615点、流紋岩１点、安山岩３点、下呂石２点、チャート６点、凝灰岩２点、砂岩74点、泥岩16点、粘板岩８点、石英１点）、中期中葉154点（黒曜石140点、チャート３点、砂岩８点、泥岩２点、結晶片岩１点）である。いずれの時期も黒曜石の点数が群を抜いて多く、ついで遺跡近隣で採取できる砂岩が多い。中期初頭には遠隔地の石材である下呂石（124、416）が認められることが注目される。

二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片　合わせて53点出土した。石材は黒曜石52点、下呂石１点である。石鏃や石錐、剥片、削片、砕片同様に黒曜石が中心である。加工によるものと思われる剥離が観察されるものを二次加工ある剥片、刃こぼれ等と思われる微細な剥離が観察されるものを微細剥離ある剥片とした。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭33点（黒曜石32点、下呂石１点）、中期中葉14点（すべて黒曜石）である。剥片と同様に中期初頭に遠隔地の石材である下呂石（123）が認められる。

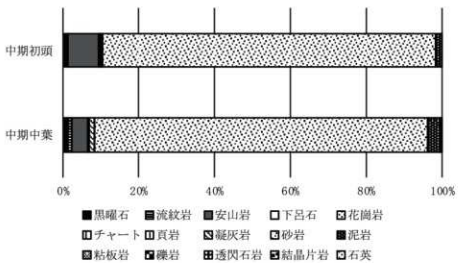
石材　時期別に本遺跡における縄文時代石器の石材数比を第83図に、石材重量比を第84図に示した。石材の選択に時期による違いはみいだせない。数比でみると黒曜石が全体の80％近くを占めるが、重量比を見ると１％ほどである。これは、黒曜石を石材とする石器が、小形の剥片石器に集中しており、大きな原石を必要としないこと。また、これら黒曜石の産地は、いずれの時期も約95％が諏訪エリア、５％が和田エリアと判明しており（第５章第２節４参照）、入手において移動コストがかかること。その対策として運搬コストを低減するために、もともと小さい原石や、原産地で原石を加工し、大きさや重量を減じて当遺跡に持ち込んだと推定する。逆の在り方を示すのが砂岩である。砂岩は、数比では15％ほどであるが、重量比では90％近くを占める。これは、砂岩を石材とする石器が大形で重量のあるものに集中するため、大きな原石が遺跡に持ち込まれたことを示している。大きな原石を遺跡に搬入するため、運搬コストが増大する。その対策として遺跡近隣に産する砂岩を利用し、移動コストを減じたものと推定する。安山岩や泥岩、粘板岩も砂岩と同様の性格をもつ石材であると考える。

時期によって、主体的に用いる石材の利用形態に差はないが、下呂石（岐阜県産）や透閃石岩（新潟県または富山県産か）等の遠方の石材は、中期初頭にのみ確認できる。これは、資源獲得領域の違いが反映される場合と他集団との交流圏の違いが反映される場合の、主に２つが想定されるが、本遺跡の場合を考えてみたい。本遺跡では、主体的に利用する石材に、時期による違いはみいだせないため、資源獲得領域の大幅な変化を読み取ることは困難である。中期初頭の土器に関西系や北陸系、東海系の遠隔地の土器が認められる一方、中期中葉にはそれらが確認できない状況を合わせて考えれば、中期初頭は中期中葉に比べ、他集団との交流圏が非常に広域であったことが推定できる。

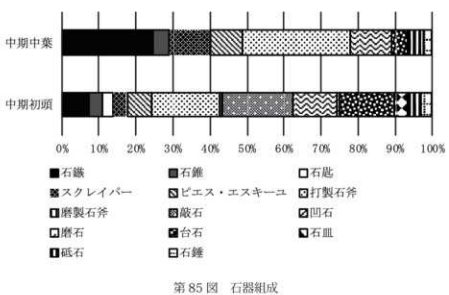
石器組成　第85図は年代的位置付けが可能な石器の時期別の分類組成を示したものである。なお、全体の８割近くを占める石核や剥片等の剥片石器における素材や残滓類、二次加工ある剥片や微細剥離ある剥



第 83 図　石材数比率



第 84 図　石材重量比率

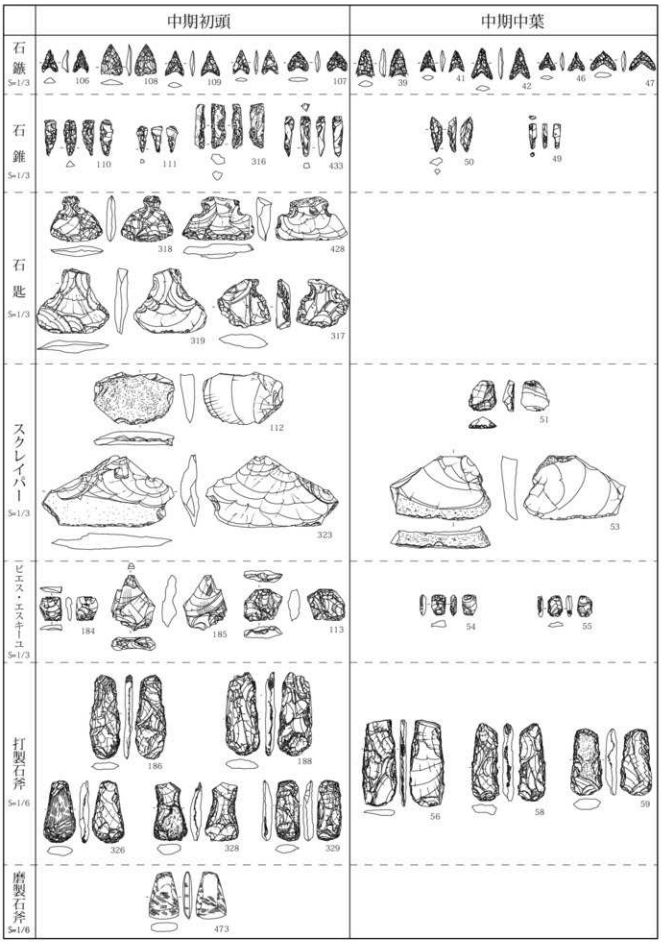


第 85 図　石器組成

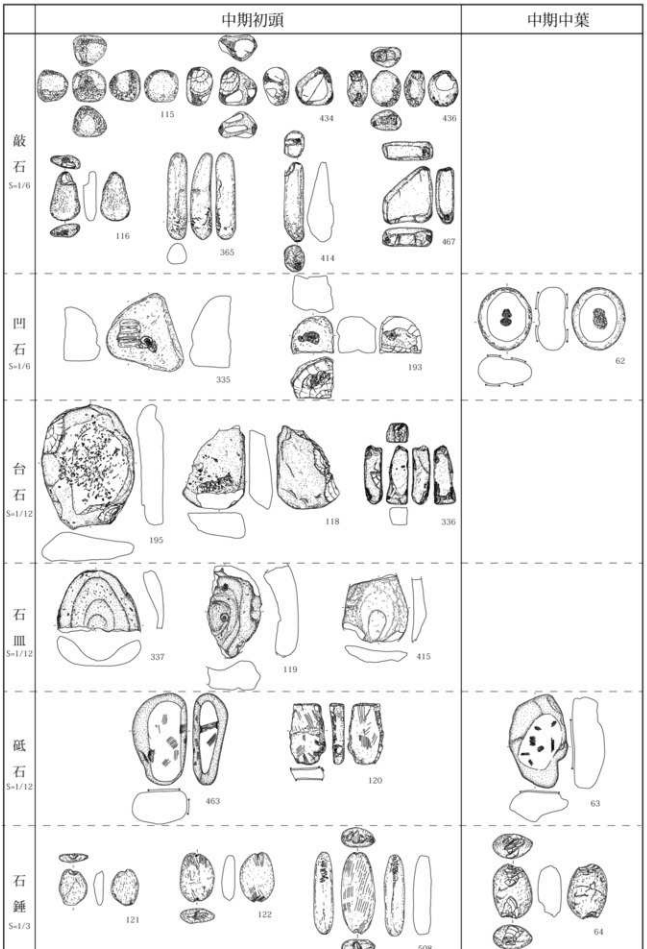
片は、組成表に含めていない。

中期初頭と中期中葉を比較すると、石鏃の比率が中期中葉の方が高いこと、礫をそのまま利用する礫石器全体の割合が中期初頭の方が高いこと、石匙、磨製石斧、敲石、磨石、石皿が中期中葉に認められないことが挙げられる。石器組成は、当時の社会集団における生活様態のほか、遺跡や遺構の機能や性格によって変化する。本遺跡の場合、この石器組成の違いがいかなる意味を持つのか考えてみたい。生活様態については、個々の石器において時期ごとの変化が僅かであること、石材選択において時期差がみいだせないこと、土器において中期初頭からの系統を引き継いだものを中期中葉で使用していること等から、文化伝統につながりをもつ社会集団であった蓋然性が高いと考えられる。また同一遺跡のため、地形や環境条件もほぼ同じであったと推定できることから、大きな変化は想定しがたい。本遺跡は、集落跡と考えられるため、機能および性格の違いも見出しがたい。また、遺構をみると、遺物の出土状況が注目される。本遺跡における中期初頭の遺物出土状況は、特筆するものではないが、中期中葉の竪穴建物跡における遺物の出土状況は、いわゆる「吹上パターン」[2]という特殊なものである。「吹上パターン」の解釈は様々であるが、竪穴建物の廃絶過程において、中期初頭と中期中葉に大きな違いがあったことは間違いないであろう。中期中葉において竪穴建物が廃絶される際に、そこに残す石器と残さない石器をそれぞれ選択していたのではないかと考える。具体的には、中期初頭は通常の竪穴建物が廃絶される過程で残される一般的な石器組成であるのに対し、中期中葉における「吹上パターン」を呈する竪穴建物跡は、廃絶の過程で石鏃を多く残す一方、敲石や磨石、石皿等の礫石器はほとんど残さず、それが石器組成に反映されていると考える。このような仮説は、本遺跡の状況のみで言及できるものではないため、ここではその可能性を指摘することにとどめる。

註2　竪穴建物廃棄後に埋没過程で土器が一括遺棄される状況。炉跡などの埋設土器と遺構埋土から出土した土器に時期差が想定される。



第 86 図　氏神遺跡の石器群（1）



第87図　氏神遺跡の石器群（2）

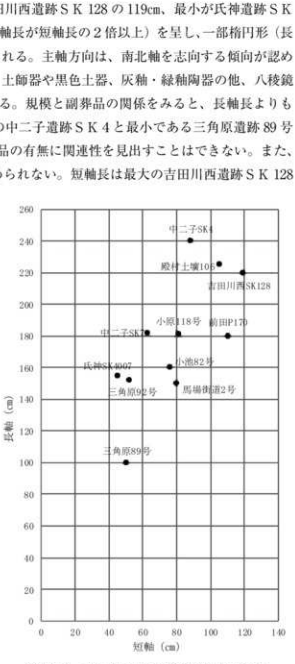
第２節　氏神遺跡の平安時代における墓坑と集落

氏神遺跡では、平安時代に属する竪穴建物跡１軒、掘立柱建物跡２棟、杭列１列、墓坑１基、土坑 14 基を確認した。竪穴建物跡から出土した遺物から、10 世紀中葉から後葉に位置づけられる。この中で、墓坑については、発見例は希少である。氏神遺跡の場合、本該期の集落の中心は調査範囲の東側にあると推定するが、調査範囲が狭いため、集落の全体像を捉えることは難しい。そのため本節では、墓坑と集落の関係を中心に、周辺遺跡の事例と比較する。

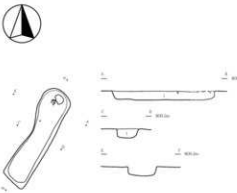
長野県における、平安時代の墓坑については、原明芳氏の詳細な分析がある（原 1998）。原氏の集成を参考として、松本盆地における 10 世紀中葉から後葉の墓坑をみると、氏神遺跡を含め９遺跡 11 例（第 89 図、第 27 表）が確認できる。

第 88 図は墓坑の長短比を示したものである。長軸長は、最大が中二子遺跡ＳＫ４の 240cm、最小が三角原遺跡 89 号土坑の 100cmである。短軸長は、最大が吉田川西遺跡ＳＫ 128 の 119cm、最小が氏神遺跡ＳＫ 4007 の 45cmである。平面形は、ほとんどが長楕円形（長軸長が短軸長の２倍以上）を呈し、一部楕円形（長軸長が短軸長よりも長く２倍未満）や不正楕円形もみられる。主軸方向は、南北軸を志向する傾向が認められよう。氏神遺跡以外の墓坑では副葬品が認められ、土師器や黒色土器、灰釉・緑釉陶器の他、八稜鏡や漆椀（吉田川西遺跡）、鉄鐸（小原遺跡）が副葬される。規模と副葬品の関係をみると、長軸長よりも短軸長との相関を指摘できそうである。長軸長が最大の中二子遺跡ＳＫ４と最小である三角原遺跡 89 号土坑も副葬品が認められ、墓坑の規模（長軸長）と副葬品の有無に関連性を見出すことはできない。また、長軸長としては平均的な氏神遺跡において副葬品は認められない。短軸長は最大の吉田川西遺跡ＳＫ 128 に、土師器のほか、希少な八稜鏡や漆椀、緑釉・灰釉陶器が出土し、最小の氏神遺跡ＳＫ 4007 では副葬品はない。また、短軸長 60cm以上の墓坑には、土師器や黒色土器のほか、緑釉・灰釉陶器が副葬されるが、それよりも小さい例に緑釉・灰釉陶器は副葬されない。短軸長 110cmの前田遺跡Ｐ 170 に緑釉・灰釉陶器が認められないが、墓坑の平面形は不整楕円形を呈しており、平面形も副葬品と多少の相関があると想定する。

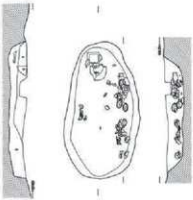
これらの墓坑において、木棺の存在が確認できた例はないが、松本市石行遺跡では木棺に伴うと推定する釘が出土している。また、原氏は、吉田川西遺跡等における副葬品が、重なるようして出土した状況から、多くの墓坑には木棺が伴っていたと推定している。また、原氏の集成によれば、釘の出土が確認できる例は、短軸長が60cm以上の墓坑に認められ、原氏が指摘する副葬品の出土状況を呈する例も、一部例外はあるものの、短軸長 60cm以上のものに多くみられる。木棺を墓坑内に設定するためには、短軸長を遺体の幅よりも大きくする必要があると考えるが、本節では木棺構築の限界値が短軸長 60cmほ



第 88 図　10 世紀中葉から後葉の墓坑長短比

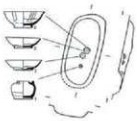


No.１　氏神遺跡　ＳＫ4007

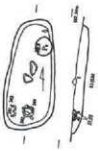


No.２　吉田川西遺跡　ＳＫ128

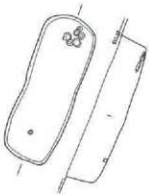
No.３　殿村遺跡　土壙106



No.４　小池遺跡
第82号土坑



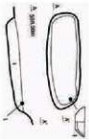
No.５　小原遺跡
118号土坑



No.６　中二子遺跡　ＳＫ４

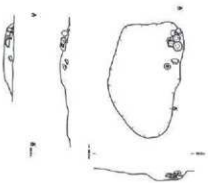
No.７　中二子遺跡　ＳＫ7

No.８　三角原遺跡
89号土坑



No.９　三角原遺跡
92号土坑

No.10　馬場街道遺跡
２号土壙



No.11　前田遺跡　P170

0　(1:60)　2m

第89図　10世紀中葉から後葉における松本盆地出土の墓坑

No.	遺跡	遺構名	所在地	平面形	軸方向	規模			副葬品	土坑の種類	同時期の最も近くに分布する建物跡からの距離	墓と集落の関係
						長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)				
1	氏神遺跡	SK4007	朝日村	長楕円形	N-35°-E	155	45	14	なし	④	SB3001から西に44m	B
2	吉田川西遺跡	SK128	塩尻市	楕円形	N	220	119	30	鏡、漆、灰、緑、土	①	SB209から南に18m	A
3	殿村遺跡	土壙106	山形村	長楕円形	N-21°-W	225	105	12	灰、土	①	周辺に同時代の建物跡は未確認	B
4	小池遺跡	第82号土坑	松本市	長楕円形	N-12°-E	160	76	20	灰	①	近隣に多数の建物跡があるが詳細な時期は不明	－
5	小原遺跡	118号土坑	松本市	長楕円形	N-5°-E	181	81	15	鐸、鉄器、灰、土	①	57号住居址から北西に46m	B
6	中二子遺跡	SK4	松本市	長楕円形	N-21°-E	240	88	54	灰、土	①	周辺に同時期の建物跡は未確認	B
7		SK7	松本市	長楕円形	N-9°-E	182	63	25	緑	①	周辺に同時期の建物跡は未確認	B
8	三角原遺跡	89号土坑	安曇野市	長楕円形	N-15°-W	100	50	15	土、黒	③	38号住居跡から南に10m	A
9		92号土坑	安曇野市	長楕円形	N	152	52	16	土	③	42号住居址から北に18m	A
10	馬場街道遺跡	2号土壙	安曇野市	楕円形	N	150	80	28	灰、頭	①	4号住居址から東に4m	A
11	前田遺跡	P170	大町市	不正楕円形	N	180	110	16	土、黒	②	6号住居址から北東に18m	A

鏡：八稜鏡　鐸：鈴鐸　漆：漆椀　灰：灰釉陶器　緑：緑釉陶器　土：土師器　黒：黒色土器　頭：須恵器

第27表　10世紀中葉から後葉の墓坑一覧

どと推定する。したがって、短軸長60cm以上の墓坑に木棺の存在を想定し、それ以下の墓坑に木棺は構築されなかったと考える。これをもとに、木棺の有無と副葬品の関係から、墓坑は、被葬者の階層に応じて、以下の４種が作り分けられていた可能性を指摘する。①木棺を構築し、希少な副葬品を伴う例、②木棺を構築し、日常の食膳具を副葬品に伴う例、③木棺はなく、日常の食膳具を副葬品に伴う例、④木棺と副葬品を伴わない例である。①～④は被葬者の社会的地位のほか、墓を造営した集落の社会的地位や財力が影響し、作り分けられたと推定する。

最後に、これらの墓坑と「人間集団としての集落」（以下、集落と略称する）の関係をみたい。同時期と判断する竪穴建物跡と墓坑の距離をみると、Ａ．墓坑の20ｍ以内に竪穴建物跡が存在し、墓坑は集落の内部に分布する例、Ｂ．墓坑から40ｍ以上離れたところに竪穴建物跡が存在し、墓坑は集落から離れて分布する例の２タイプが認められる。

原氏は、９世紀後半以降にみられる、「伝統的集落」の崩壊や縮小、新たな地での集落形成等の、集落の変動、墓坑の在り方を捉え、古墳時代以来の集落同士の結びつきの崩壊に対応し、集落ごとに葬地をもつ状況や被葬者の後継者が、デモンストレーションとして集落の中心で葬儀を行った結果、集落内に墓が造営されたと指摘した。合わせて集落から離れた場所に葬地を形成する思想は継続した可能性も言及している。

Ａタイプの墓坑は、被葬者の後継者が集落の中心で葬儀を行った結果と考えるが、それぞれの集落の力関係によって、木棺の有無や副葬品の内容は大きく異なっていたと考える。しかし、必ずしも後継者が集落の中心地でデモンストレーション的な葬儀を行う必要はなく、その場合にＢタイプの墓坑が残されたのであろう。この場合も集落の力関係により、木棺の有無と副葬品の内容には大きな変化があったと推定する。本遺跡ＳＫ4007の場合、墓坑と集落の関係はＢタイプに属し、木棺や副葬品を伴わない墓坑であることを考慮すれば、ＳＫ4007の被葬者の埋葬時には、デモンストレーション的な儀式は実施されず、墓坑を造営した集落に有力者は存在したものの、周辺地域に影響を与えるような集落ではなかったと想定する。

第３節　まとめ

朝日村内には、氏神遺跡を含め縄文時代の遺跡が22ヶ所、平安時代の遺跡が９ヶ所ある（朝日村村誌刊行会　1991）が、内容が明らかなものは少ない。縄文時代遺跡の発掘調査により、遺跡の内容が明らかになったものは鎖川流域や、氏神遺跡が立地する内山沢流域に集中している。これら地域の縄文時代遺跡は中期中葉から後葉を中心とするものが主体であり、そのほかの時期については、表採遺物からその存在を認識できる程度であった。

今回の発掘調査では、朝日村内はもとより、松本盆地全体を見渡しても類例が少ない、縄文時代中期初頭（五領ヶ台Ⅱａ式期）と、中期中葉（藤内Ⅰ式期）の遺構や、土器及び石器などの遺物が量的にまとまって確認した。これらは、松本盆地における縄文時代中期の編年研究や社会像の復元に資する、重要な資料と考える。

松本盆地の平安時代集落における調査例の多くは松本市や塩尻市の低地に集中しており、山麓の段丘面に位置する遺跡の調査例は貴重である。また、氏神遺跡では集落に伴う墓坑を確認できた点も注目される。今回の調査例が、平安時代における墓坑と集落の関係をさらに解明する資料となれば幸いである。

末筆ながら、発掘調査に御協力いただいた朝日村の皆様、発掘調査から報告書刊行に至るまで、貴重な御教示を頂いた皆様に感謝申し上げる次第である。

参考文献

赤塩　仁 2008「十三菩提式土器」『総覧　縄文土器』
阿子島香　1984「不定形石器分析の視点」『文化』第47巻第3・4号
朝日村 2020『朝日村第6次総合計画』
朝日村村誌刊行会 1991『朝日村誌』下巻　歴史・地区誌・年表編
朝日村教委 2003「熊久保遺跡第10次発掘調査報告書」
朝日村教委 2006『三ヶ組遺跡第Ⅰ次発掘調査報告書』
阿部朝衛 1985「縄文時代石器研究の視点と方法」『法政考古学』第10集
泉　拓良 2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧　縄文土器』
今福利恵 2008「勝坂式土器」『総覧　縄文土器』
今村啓爾 2010「土器から見る縄文人の生態」
織笠幸雄 1977「平出第三類A土器の編年的位置付けとその社会的背景」『信濃』第29巻第4号
大町市教委 1981『長野県大町市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　借馬遺跡Ⅲ 追分遺跡 前田遺跡 南原遺跡』
岡谷市教委 1970『後田原遺跡』
小口　高 1988「松本盆地周辺の流域における最終氷期末期以降の地形発達を規定した要因」『地理学評論』61巻12号
加藤三千雄 2008「新保・新崎式土器」『総覧　縄文土器』
北見一弘 2003「刀子小考Ⅰ」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅳ
小林国夫 1961「いわゆる信州ローム」『地質学雑誌』67巻784号
小林国夫 1963「中部地方の洪積世火山灰層」『第四紀研究』第3巻第1～2号
小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学2　歴史のものさし -縄文時代研究の編年体系-』
小杉　康 2008「土器型式編年の基礎概念」『縄文時代の考古学2　歴史のものさし -縄文時代研究の編年体系-』
塩尻市教委 1979『小段遺跡 - 長野県塩尻市小段遺跡調査報告』
塩尻市教委 1987『史跡　平出遺跡』
塩尻市教委 1992『上竹・云光』
塩尻市教委 1993『小段遺跡発掘調査概報』
塩尻市誌編纂委員会 1995『塩尻市誌 第二巻 歴史』
塩尻市教委 1999『北原遺跡』
塩尻市教委 2001『剱ノ宮・峯畑北遺跡』
塩尻市教委 2008『小段遺跡』
静岡県考古学会・シンポジウム実行委員会 1998『縄文時代中期前半の東海系土器群 - 北屋敷式土器の成立と展開 -』予稿集
信濃史料刊行会 1956『信濃史料』第1巻　考古資料篇 上
下田　力・大塚　勉 2008「松本盆地西方山地の地形と地質構造」『信州大学環境科学年報』30号
縄文セミナーの会 1989『第3回縄文セミナー　縄文中期の諸問題』
縄文セミナーの会 1993『第6回縄文セミナー　前期終末の諸様相』
縄文セミナーの会 1995『第8回縄文セミナー　中期初頭の諸様相』
縄文セミナーの会 2009『第22回縄文セミナー　中期初頭の再検討』
縄文セミナーの会 2013『第26回縄文セミナー　縄文中期中葉土器研究の現状と課題』
杉本有紗 2019「朝日村山鳥場遺跡の石材利用 - 剥片石器編 -」『長野県埋蔵文化財センター年報』35
鈴木康二 2008「特殊凸帯系土器（北白川Ⅲ式・大歳山式土器）」『総覧　縄文土器』
茅野市教委 1990『棚畑』

茅野市教委 1992『城遺跡』
寺内隆夫 1987「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ―型式変遷における一視点」『長野県埋蔵文化財センター紀要』１
寺内隆夫 1996「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』
寺内隆夫 2002「後沖式土器への系譜 - 千曲川流域における中期前葉（初頭）、斜行沈線文系の土器について -」『長野県の考古学』Ⅱ
長崎元廣 1997「中部地方の縄文時代前期末・中期初頭における土器型式編年論の系譜と展望（１）」『長野県考古学会誌』83 号
長崎元廣 1998「中部地方の縄文時代前期末・中期初頭における土器型式編年論の系譜と展望（２）」『長野県考古学会誌』84・85 号
長野県教委 1977『長野県指定文化財調査報告』第８集
長野県考古学会 1965『長野県考古学会誌』3 号
長野県豊科建設事務所・穂高町教委 1987『矢原遺跡群（馬場街道遺跡）』
長野県埋文センター 1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書５- 松本市内その２-　神戸遺跡 上二子遺跡 中二子遺跡』
長野県埋文センター 1990 a『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４- 松本市内その１-　総論編』
長野県埋文センター 1990 b『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書８- 松本市内その５-　北栗遺跡』
長野県埋文センター 1991『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３- 塩尻市内その２- 吉田川西遺跡』
長野県埋文センター 2002『広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書 - 茅野市内 -　馬捨場遺跡』
長野県埋文センター 2005『安曇野農業利水事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書　三角原遺跡』
長野県埋文センター 2010『国道 474（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書　川路大明神原遺跡』
長野県埋文センター 2019『山鳥場遺跡・三ヶ組遺跡』
波田村教委 1972『長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡緊急発掘調査報告書』
波田村教委 1973『長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡第２次緊急発掘調査報告書』
波田町教委 1984『長野県波田町中下原遺跡踏査報告』
波田町誌編纂委員会 1987『波田町誌 歴史現代編』
波田町教委 2005『若沢寺跡』
波田町教委 2007『若沢寺跡２』
原　明芳 1998「信濃の古代墳墓」『長野県考古学会誌』86 号
原　明芳 2003「灰釉陶器考 - 松本平の平安時代の食膳具様式の関連で -」『長野県考古学会誌』103・104 号
東筑摩郡教育会 1919『東筑摩郡誌』
東筑摩郡誌編纂委員会 1951『東筑摩郡郷土資料文化部中間報告　考古其の一』
東筑摩郡・松本市・塩尻市誌編纂委員会 1973『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上
樋口昇一・小松虔・横山正 1963「長野県東筑摩郡朝日村熊久保遺跡調査概報（１）（２）」『信濃』16-4･7
藤沢宗平 1952「松本平に於ける弥生式文化」『信濃』第４巻第 12 号
藤森栄一編 1965『井戸尻 - 長野県富士見町における中期縄文時代遺跡群の研究 -』
増子康眞 2008「北裏Ｃ～北屋敷Ⅱ式土器」『総覧　縄文土器』
松本市教委 1974『長野県松本市今井こぶし畑遺跡　緊急発掘調査概報』
松本市教委 1987『松本市　神林川西遺跡緊急発掘調査報告書』
松本市 1993『松本市史 第四巻 旧市町村編Ⅲ』
松本市 1994『松本市史 第四巻 旧市町村編Ⅱ』
松本市 1996『松本市史 第二巻 歴史編Ⅰ 原始・古代・中世』
松本市教委『松本市内田雨堀遺跡　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 1987『松本市神林川西遺跡　緊急発掘調査報告書』

松本市教委 1988『松本市林山腰遺跡　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 1989『松本市向畑遺跡Ⅱ　ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書』
松本市教委 1990『松本市坪ノ内遺跡　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 1990『松本市向畑遺跡Ⅲ　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 1991『小池遺跡 - 平安時代集落址の発掘調査 -』
松本市教委 1993『松本市小原遺跡Ⅱ　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 1997『小池遺跡Ⅱ 一ツ家遺跡　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 1998『長野県松本市 今井北耕地遺跡Ⅱ　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 1998『長野県松本市 境窪遺跡 川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 2001『長野県松本市 川西開田遺跡Ⅴ 三間沢川左岸遺跡Ⅲ　緊急発掘調査報告書』
松本市教委 2002『長野県松本市 川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ古代・中世編　松本市新臨空産業団地造成に伴う緊急発掘調査報告書』
松本市教委 2003『長野県松本市 川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ縄文編　松本市新臨空産業団地造成に伴う緊急発掘調査報告書』
松本市教委 2015『長野県松本市 波田下原遺跡２・３ 和田中西原遺跡２』
松本市教委 2017『長野県松本市 三間沢川左岸遺跡 発掘調査報告書』
松本市教委 2020『長野県松本市　麻神遺跡第３次発掘調査報告書』
三上徹也 1987「大洞遺跡・縄文時代前期末～中期初頭の分類と検討」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書１- 岡谷市内 -　大久保Ｂ、下り林、西林Ａ、大洞、勝棚Ａ、勝棚Ｂ（白山）、勝棚Ｂ、中島Ａ、中島Ｂ、柳海途」
三上徹也 1987「梨久保式土器再考」「長野県埋蔵文化財センター紀要」１
三島正之 2013「武居城」『長野の山城 ベスト 50 を歩く』
水沢教子 2014『縄文社会における土器の移動と交流』
宮崎朝雄・綿田弘実 2013「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」「一般財団法人日本考古学協会 2013 年度長野大会発表資料集　文化の十字路信州」
三村邦雄 1966「長野県東筑摩郡朝日村西洗馬五社神社の鉄鉾と鉄鐸」『信濃』第 18 巻第３号
三村邦雄 1975「東筑摩郡朝日村西洗馬出土古銭調査報告」「中信史学」第２巻第１号
武藤雄六 1975「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」「考古学集刊」第４巻上
村井大海 2021「縄文時代中期の松本盆地における下呂石製石器」「長野県埋蔵文化財センター年報」37
矢野健一 2008「縄文時代の編年」「縄文時代の考古学２　歴史のものさし - 縄文時代研究の編年体系 -」
山形村誌編纂会 1980『村誌やまがた』
山形村教委 1971『長野県東筑摩郡山形村唐沢遺跡　洞遺跡　緊急発掘調査報告書』
山形村教委 1971『唐沢・洞遺跡』
山形村教委 1981『三夜塚遺跡』
山形村教委 1982『神明遺跡　三夜塚遺跡』
山形村教委 1983『堀ノ内遺跡　北唐沢遺跡』
山形村教委 1987『殿村遺跡』
山形村教委 1997『淀の内遺跡』
山形村教委 1998a『山形村埋蔵文化財調査年報（平成９年度国庫補助事業）』
山形村教委 1998b『中町立道西遺跡　第１次発掘調査報告書』
山形村教委 1999『山形村埋蔵文化財調査年報（平成 10 年度国庫補助事業）』
山形村教委 2000『本郷遺跡』
山形村教委 2001a『淀の内遺跡Ⅳ』

山形村教委 2001b『境窪遺跡Ⅱ －三間沢川河川改修工事に伴う緊急発掘調査報告書－』
山形村教委 2002『三夜塚遺跡Ⅲ』
山形村教委 2007『名篭遺跡』
山形村教委 2008『中島遺跡』
山形村教委 2009a『清水寺遺跡Ⅱ』
山形村教委 2009b『下原遺跡　三夜塚遺跡Ⅳ』
山形村教委 2010a『淀の内遺跡Ⅵ』
山形村教委 2010b『三夜塚遺跡Ⅴ』
山形村教委 2012『ヨシバタ遺跡』
山口　明 1984「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」『長野県考古学会誌』48 号
山本典幸 2000『縄文時代の地域生活史』
山本典幸 2008「五領ヶ台式土器」『総覧　縄文土器』

写 真 図 版

調査範囲　全景（北東より）

調査範囲　全景　1トレンチ（右）から5トレンチ（真上より）

SB1001A・B 完掘状況（西より）

SB1001A・B（上空より）

SB1002 完掘状況（南東より）

SB1001A・B 遺物出土状況（南より）

SB1001A・B、1002 1トレンチ北側検出状況（東より）

SB3002 完掘状況（西より）

SB3002（上空より）

SB3002 P03 埋土断面（南西より）

SB3002 P05 埋土断面（東より）

SB3002 P07 埋土断面（南東より）

SB3003・3004 完掘状況（北西より）

SB3003・3004（上空より）

SB3003・3004 完掘状況（南東より）

SB3003・3004 埋土断面（南西より）

SB4001 完掘状況（南西より）

SB4001 及び周辺の土坑（上空より）

SB4001 完掘状況（北西より）

SB4001 埋土断面（北西より）

SB4001 埋土断面（南西より）

1トレンチ土坑群（上空より）

SK1003 完掘状況（南西より）

SK1031（奥）・1034 遺物出土状況（北西より）

SF1001 埋土堆積状況（南東より）

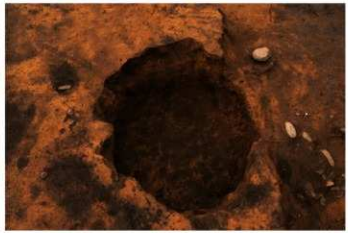
3トレンチ土坑群（上空より）

SK3008 埋土堆積状況（南西より）

SK3003 上半部完掘状況（南西より）

SK3001 完掘状況（南西より）

4 トレンチ土坑群（上空より）


SK4041 完掘状況（南より）

SK4044 完掘状況（北東より）

SK4032 遺物出土状況（北西より）

5 トレンチ土坑群（上空より）

SK5005 完掘状況（南西より）

SK5002 上半部埋土堆積状況（南西より）

SK5002 下半部完掘状況（南西より）

SB3001 完掘状況（東より）

SB3001（上空より）

SB3001 施設検出状況（東より）

SB3001 カマド周辺遺物等出土状況

SB3001 カマド完掘状況（東より）

ST3001 完掘状況（北東より）

ST3001 と SB3001（東より）

ST3001 P07 埋土堆積状況（東より）

SA3001 完掘状況（西より）

SA3001 P01 埋土堆積状況（南より）

ST3002（部分）完掘状況（西より）

SK4007 検出状況（西より）

1

2

3

4

5

6

SB1001A・B、1002（1）

SB1001A・B、1002（2）

14

15

16

17

18

19

SB1001A・B、1002（3）

20

21
22

23

24

25

26

27

28

29

30

SB1001A・B、1002（4）

31

32

33

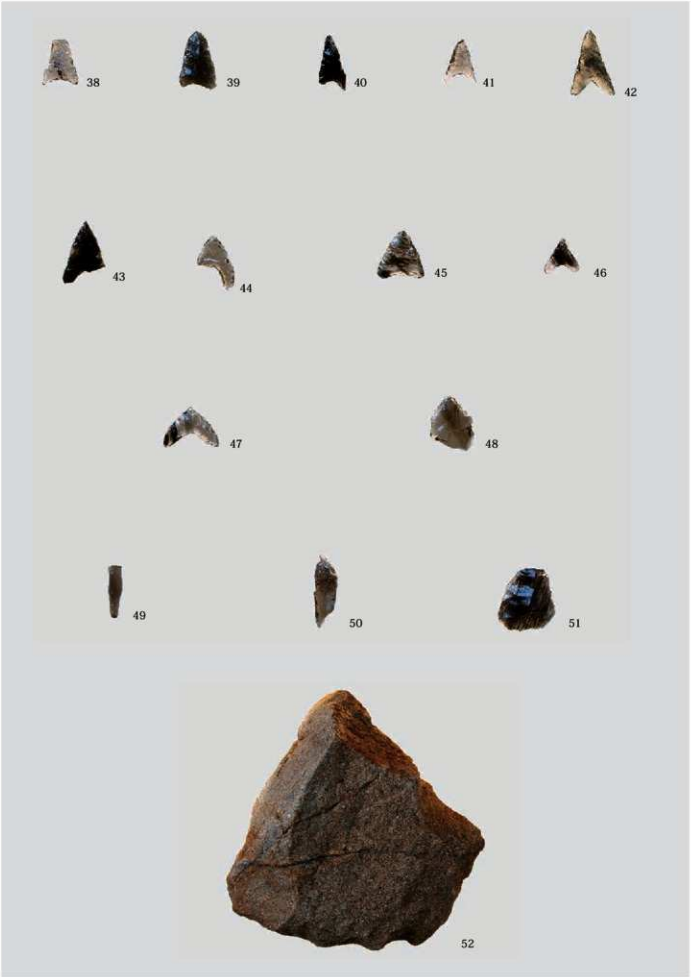
34

35

36

37

SB1001A・B、1002（5）



SB1001A・B、1002（6）

53

54

55

56

57

58

59

61

60

62

63

64

65

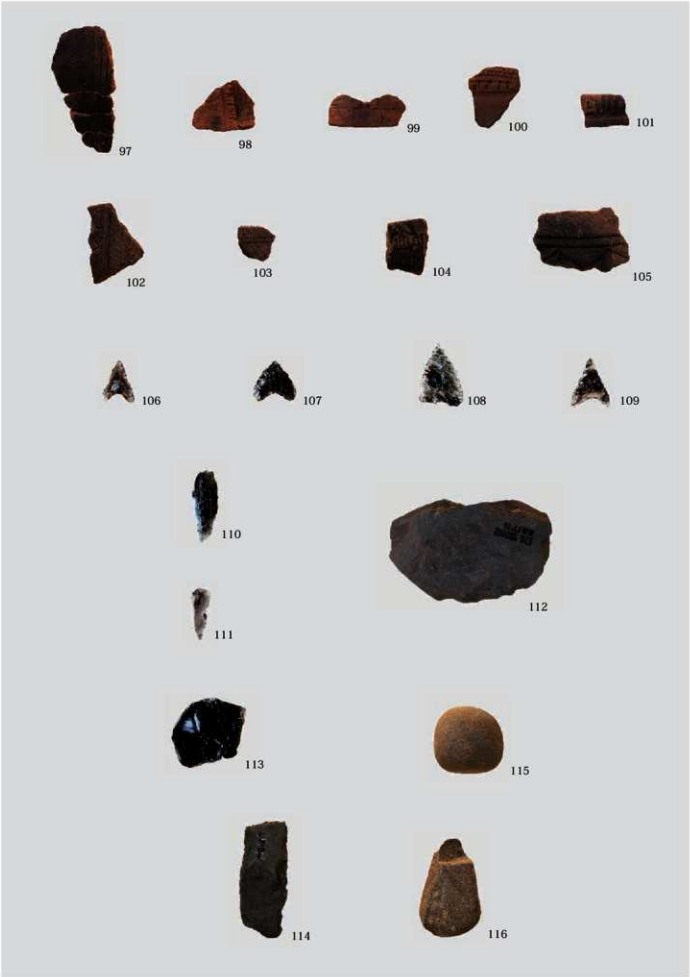
66

67

68

69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96

SB3002（1）


97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116

117

120

121

123

122

118

124

119

125

SB3003・3004（1）

SB3003・3004（2）

187

188

189

190

191

192

195

193

194

196

197

198

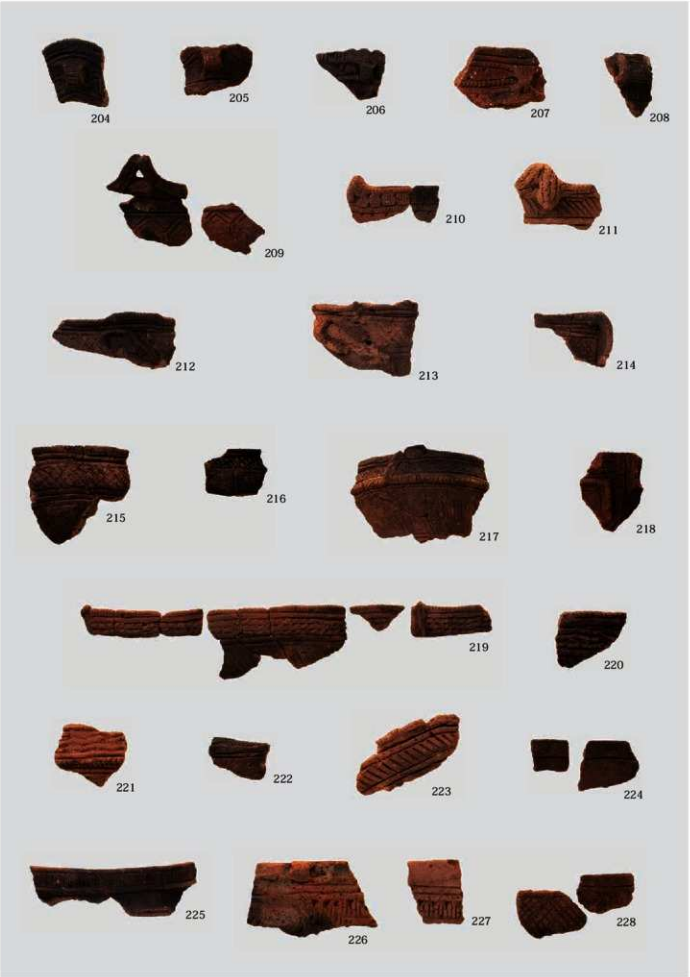
199

200

201

202

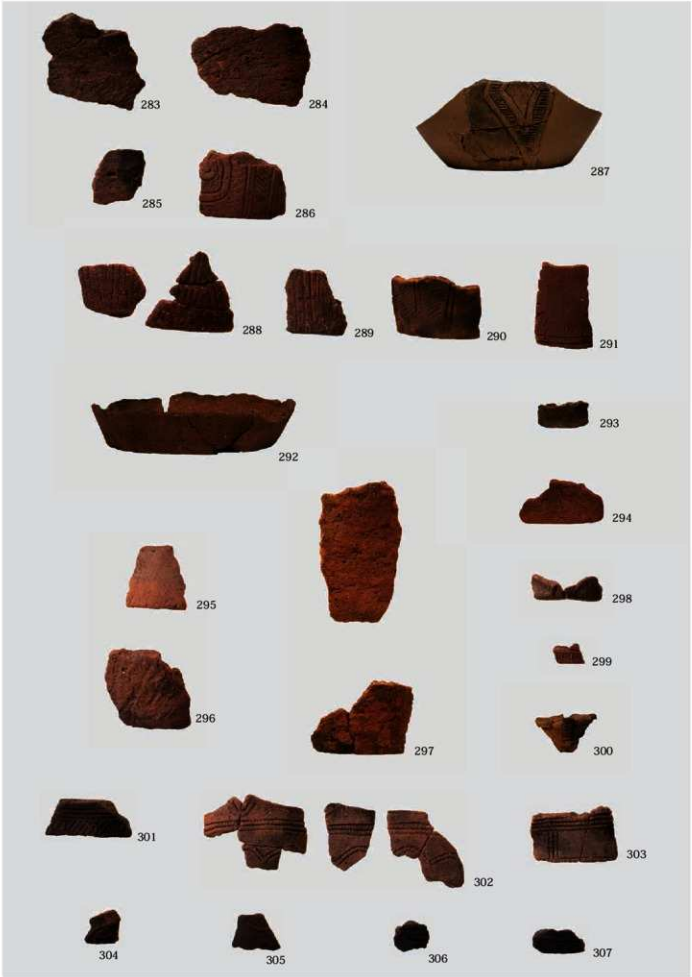
203


204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228

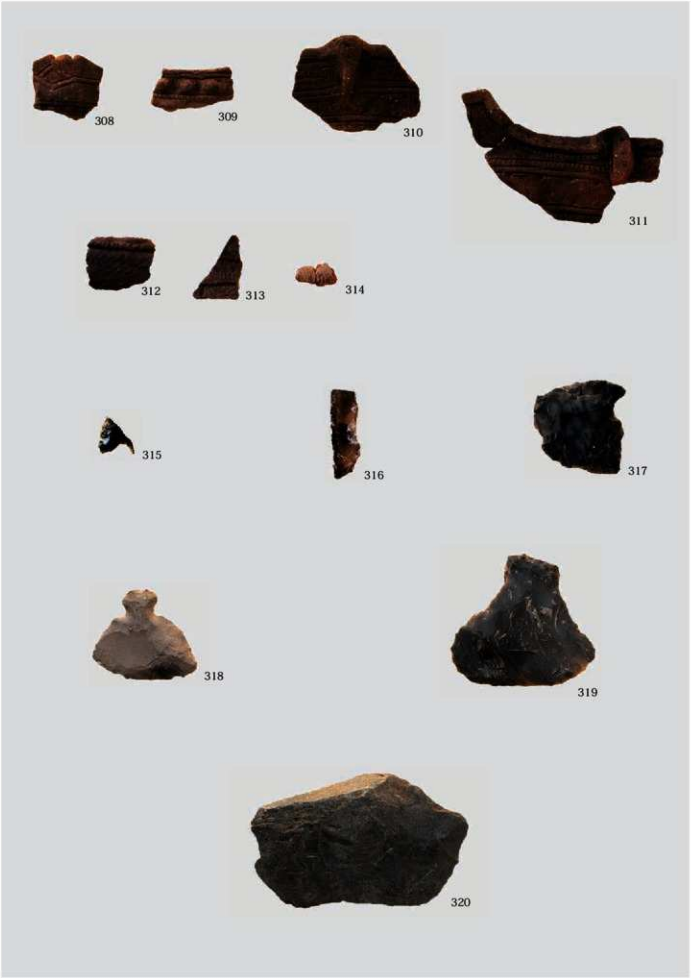
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248

SB4001（2）

249
250
251
253
252
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282


283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307

SB4001（4）


308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320

321

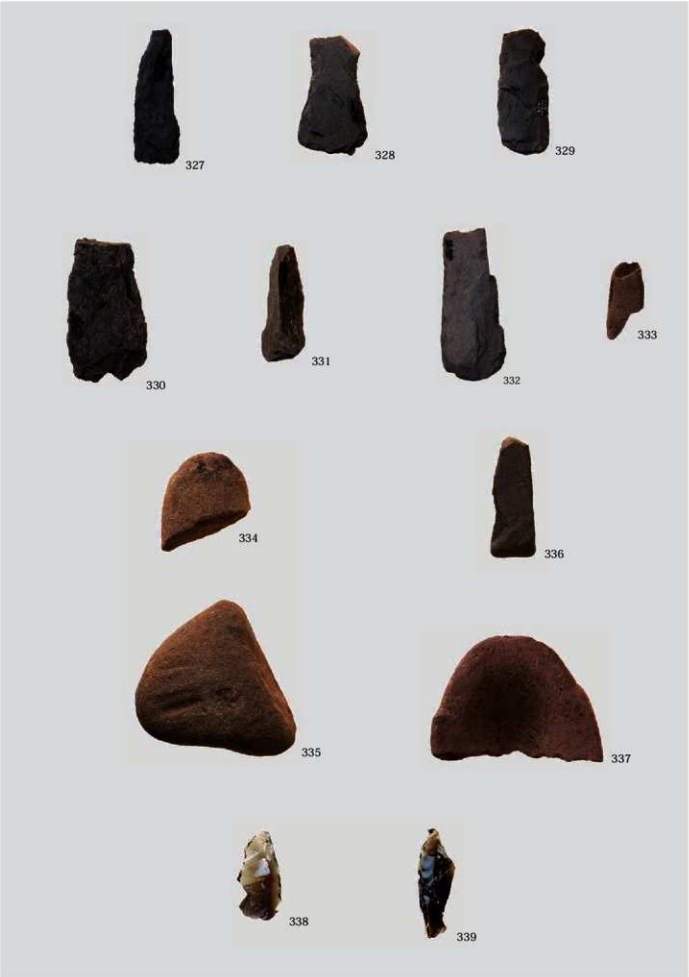
322

323

324

325

326


327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339

340

341

342

343

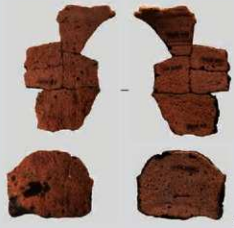
344

345

1 トレンチ SK（1）

1トレンチ SK（2）

357


358

359

360

361

362

363

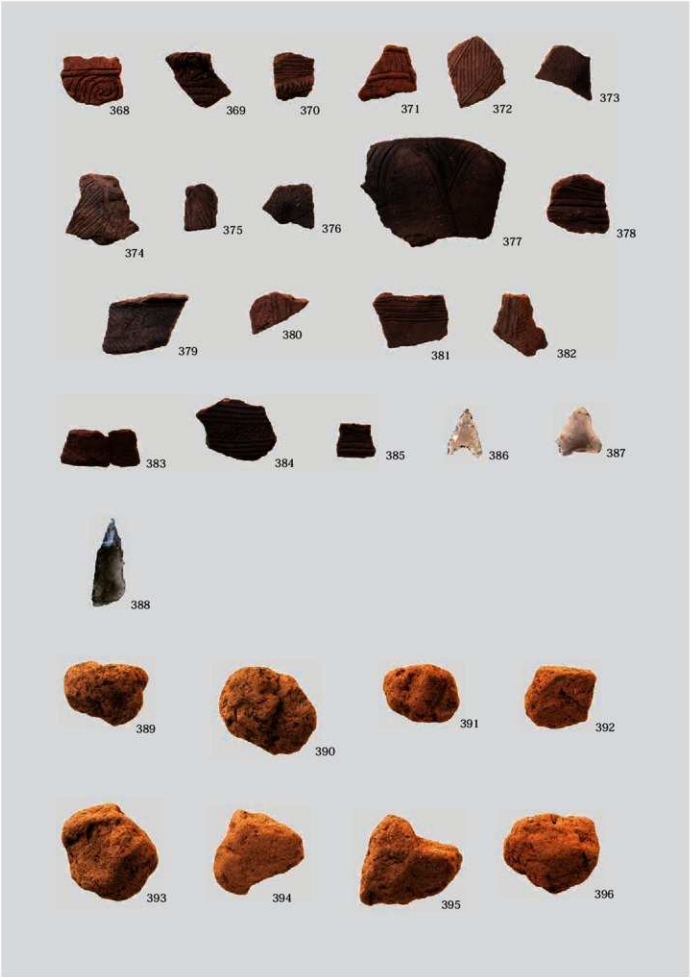
365

364

366

367

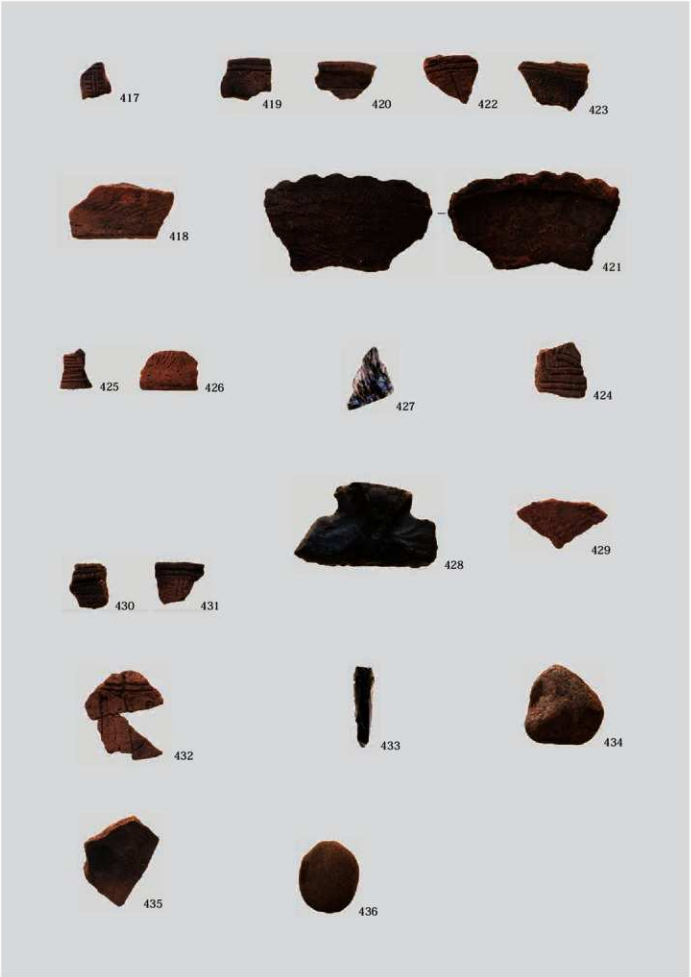
3 トレンチ SK（1）


368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396

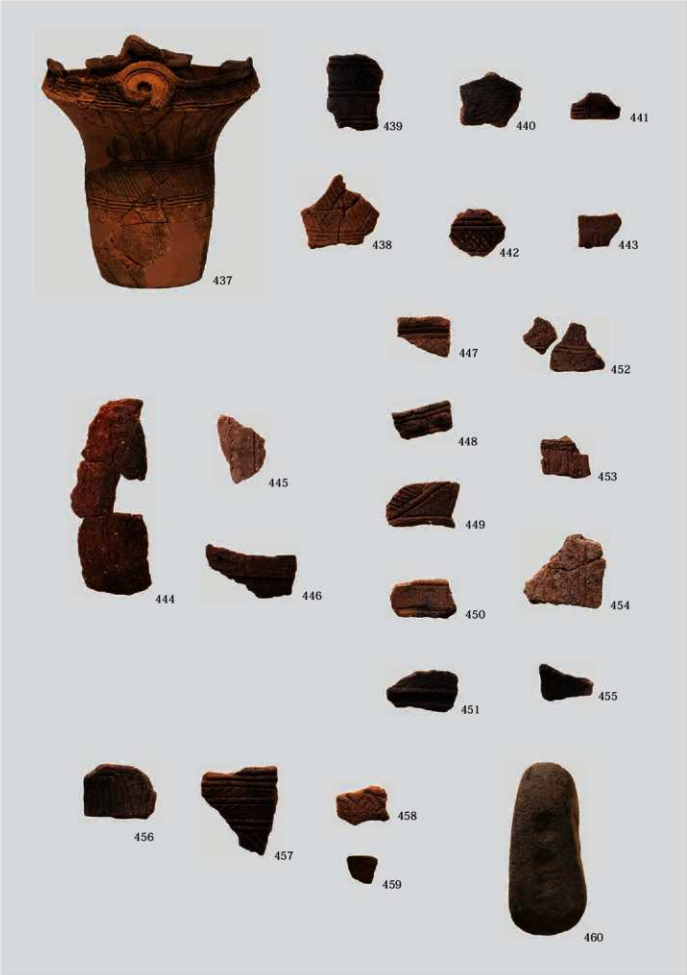
3 トレンチ SK（2）

397
398
399
401
400
402
403
405
406
404
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416

3 トレンチ SK（3）


417
419
420
422
423
418
421
425
426
427
424
428
429
430
431
432
433
434
435
436

4 トレンチ SK（1）


437
439
440
441
438
442
443
447
452
445
448
453
449
444
446
450
454
451
455
456
457
458
459
460

4 トレンチ SK（2）

461

462

463

464

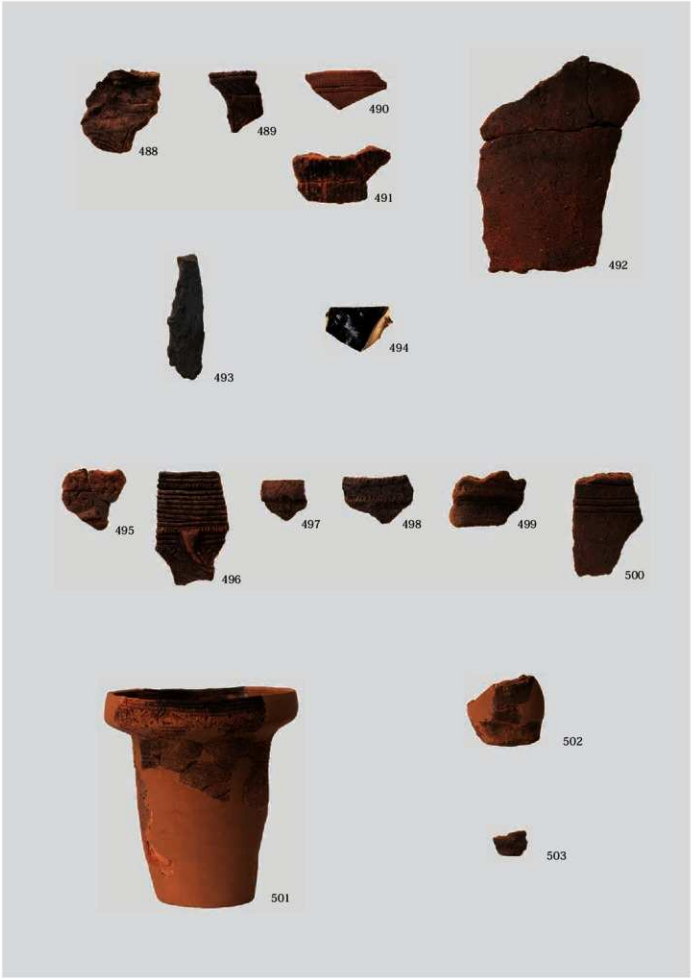
466

465

467

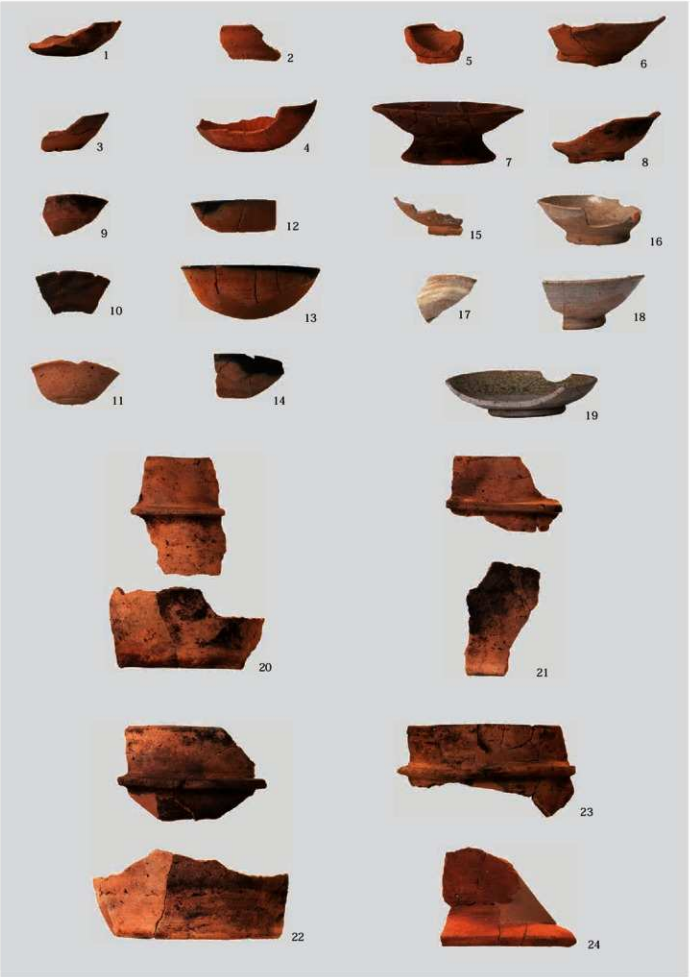
468

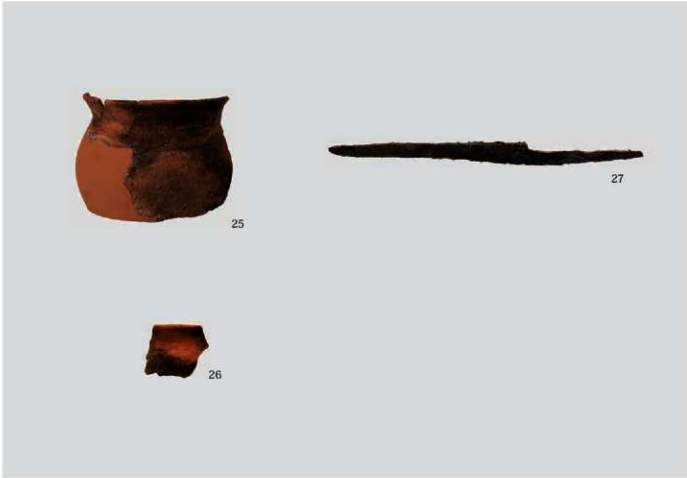
4トレンチSK（4）、5トレンチSK（1）



5 トレンチ SK（2）

5トレンチSK（3）、遺構外出土遺物


1
2
5
6
3
4
7
8
9
12
15
16
10
13
17
18
11
14
19
20
21
23
22
24



SB3001（2）

発掘調査集合写真

報告書抄録

ふ り が な	うじがみいせき
書　　名	氏神遺跡
副　書　名	朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	133
編 著 者 名	村井大海　平林　彰
編 集 機 関	（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒388－8007　長野市篠ノ井布施高田963－4　TEL:026-293-5926　FAX:026-293-8157
発 行 年 月 日	2022年（令和4年）3月11日

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯 ° ′ ″	東　経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
氏神遺跡（うじがみいせき）	長野県（ながのけん）東筑摩郡（ひがしちくまぐん）朝日村（あさひむら）西洗馬（にしせば）向原（むかはら）1845-1ほか	204510	17	36° 11′ 90″ 世界測地系	137° 87′ 60″ 世界測地系	20200406 ～20200803	2,000㎡	村道改築事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
氏神遺跡	集落跡	縄文時代	縄文時代中期初頭：竪穴建物跡3軒、陥し穴1基、土坑32基 中期中葉:竪穴建物跡2軒、焼土跡1基、土坑3基 後期後葉：陥し穴1基	縄文土器（前期末、中期初頭、中期中葉）、ミニチュア土器、焼成粘土塊、石器	縄文時代中期初頭、中期中葉、10世紀中葉から後葉の集落遺跡。中期初頭は五領ヶ台Ⅱａ式と踊場系の土器群が、中期中葉は藤内Ⅰ式及び平出Ⅲ Ａの土器群が主体を占める。
		平安時代	竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、杭列1列、墓坑1基、土坑14基 時期不明：土坑44基	灰釉陶器、土師器、鉄製刀子	

要　　約	鎖川支流の内山沢川左岸の南東向き緩斜面の段丘上（淺田面）に立地する。縄文時代中期初頭は、竪穴建物跡4軒、陥し穴1基、土坑32基を調査した。遺構の集中範囲は調査区外の南側に広がる可能性がある。遺物は、五領ヶ台Ⅱａ式と踊場系が主体を占める土器群が出土した他、関西系や北陸系の土器、下呂石の剥片等、遠隔地との交流を示す資料が出土した。中期中葉は、竪穴建物跡2軒、焼土跡1基、土坑3基を調査した。遺構の集中範囲は調査区外の北東側に広がる可能性がある。竪穴建物跡から、藤内Ⅰ式と平出第Ⅲ類Ａ土器が主体を占める土器群が、いわゆる「吹上パターン」の様相を呈して出土した。平安時代は竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、墓坑1基を調査した。遺構の集中範囲は調査区外の南側に広がる可能性があり、集落の規模を明確にできないが、各種遺構が複合して構成される集落であり、今後、当該期の集落における構造分析に資する資料と考える。出土した遺物及び放射性炭素年代測定の結果から、10世紀中葉から後葉の集落と判断できる。 氏神遺跡から出土した五領ヶ台Ⅱａ式土器は長野県内では希少であり、また、松本盆地における山側の段丘面に位置する平安時代遺跡の調査例は少なく、縄文時代、平安時代ともに貴重な事例となった。

令和４（2022）年３月11日　　発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　133

氏神遺跡

朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行者　朝日村
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926　FAX 026-293-8157
E-Mail maibun@naganobunka.or.jp

印刷者　髙友印刷株式会社
〒381-8511　長野県長野市平林一丁目 34-43
TEL 026-243-2351　FAX 026-251-0001